



KODAK Color Control Patches

© 2001 Kodak. All rights reserved. No other text.

Blue

Cyan

Green

Yellow

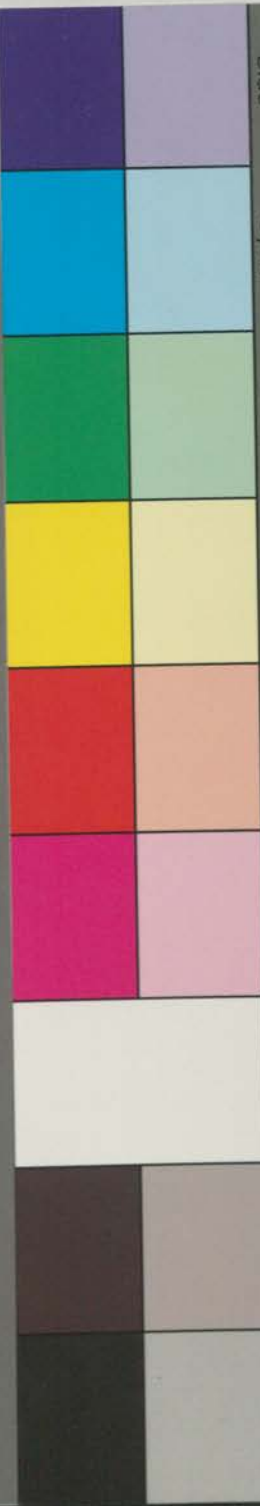
Red

Magenta

White

3/Color

Black



KODAK Gray Scale

© 2001 Kodak. All rights reserved. TM Kodak. KODAK



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

書庫

2280.1
琦玉縣教育會編纂

德育資料

第壹編

高檢校詳傳

2280.1人
埼玉縣教育會編纂

德育資料

第壹編

塙檢校詳傳



編纂の趣旨

光圀卿は感を夷齊に發して、かの尊皇の心を成し、その一世の事業をなした。ベスタロッチはルッソーの説に感を起して、當時の教育の弊を悟り、教育改良家の一人となつた。凡そ他の嘉言善行に感發して立志奮勵した例は少くない。否少く無いのみでない、一體、人の一切の行動云爲が、その動機は、父母祖先兄弟鄰人朋友、凡そ社會周圍から見聞刺衝する所に由つて起るものかも知れない。

然り。人は他の言動風俗習慣に由つて、それに摸倣し、それに激勵せられ、それに感化せらるゝものである。して、その摸範示例が我に近く、我に切に、我ご土地を同じくし、我ご年代を遠ざからぬ杯の場合に、その摸倣激勵感化の効は、一層顯著なるものである。

我が會はこの見地から、茲に本縣に於ける古來の人士の、傳記功德遺業を集めて、以て縣人の爲に、子弟教育の資料ともし、自己修養の龜鑑ともしようといふので、德育資料といふ書を編纂する事になつた。

思ふに、我が縣地は濶く人は衆い。我等の祖先は、古來幾多の活動を、此の土に演じ、以て其の成果を吾人に遺してくれた。或は文名天下に轟けるもあり、或は武勇一世に冠たるもあり、或は堤塘を修治し、溝渠を疏通し、産業を經始し、或は飢民を救ひ、孤寡を憐み、教化を施し、習俗を矯め、或は慷慨王事に奔走し、忠勇國事に殉し、其餘孝貞信順の事蹟、凡そ人といひ、事といひ、吾人の教化の資料、修養の龜鑑、其の數蓋し乏しく無からう。之を調査し之を編纂するは、祖先の德業を表彰する所以、子孫の當に務むべき所で

あり、且又縣下のみならず、廣く江湖の爲に良好の材料を供するといふものである。

抑關八州は以て天下を制すべく、武藏一國は以て關八州を制すべしと、昔は嘗て、うたはれた武藏の國、我が埼玉縣は、而も、その武藏の半分を持つて居る。然るに、輓近、若し我が縣にしてこの名に當り得ざるものがありとすれば、其は時勢の變遷の爲か、はた習俗の推移か、何はともかくも、我が縣人の發奮興勵せねばならぬ時である、教育の實績を普及振作せねばならぬ時である。これ本會が本書を編纂して、教化の一資料とせんの微意である。

こたび、其の第一篇が出来上つて、瑯撯校大人を傳した。これは我が兒玉郡の人で、盲人としてえらいのみならず、誠に學界の偉人である、事業界の豪傑である。尙其餘の人物事蹟を調査編纂

する計劃で、今著々進行しつつある。

この第一篇を編纂するについては、小泉秀之助君が依囑を受けて、専らその事に従はれた。茲に德育資料編纂の趣旨を述べ、第一篇に序し、併せて小泉君の勞を謝する次第である。

明治四十一年十月

埼玉縣教育會

▲我を知らざるもの之を痴といふ。

▲自ら悔りて人之を悔る。

報告書

貴會の企なりとて、瑣檢校の傳をものすることを、大久保前會長から依囑されて、不肖をも顧みずお受けをしたのは、たしか昨秋九月の半頃と覺えて居る。爾來孜々として材料の蒐集に従事し、かつ集め且筆したが、何分遺卷殘帙所々に散在して居るため、容易にまとまらない。徒らに荏苒曠日の譏を受けんを恐れつゝ、精々力を盡くして居た。こたび、まづ脱稿して之を奉呈し、貴下はじめ一般會員諸賢の劉覽に供するの榮を獲た。そこで此に至つた事業の大概をのべよう。まづ

第一に材料の蒐集

に就いては、實地調査、名家訪問、圖書閱覽の三つを爲した。

▲實地調査

には、(一) 檢校の墓所なる東京四谷區寺町二十二番地愛染院に詣でた。(二) 麴町區番町に和學講談所の跡をたづねた。(三) 大久保前會長の紹介で、郡長東郷重清郡視學田島紋次郎兩氏の案内で、埼玉縣兒玉郡保木野村荻原茂十郎氏を訪ひ、檢校の墓所に詣で、且寶物を借りた。

▲名家訪問

には、(一) 文學博士井上賴圀翁に前後數回面會、種々の疑問をはらし、且材料を借る。(二) 檢校大人の孫にあたる、忠韶翁にも、あまたたび逢ひ、疑を質し、且材料を借る。また曾孫なる忠雄君の厚意をも受けた。(三) 藏書家の聞えある松井簡治氏よりも資料を借る。(四) 芳賀三上の兩博士、横山文部視學官、小西盲啞學校長等からも、懇なる指導と種々の便宜とを受けた。

▲圖書閱覽

には、(一) 帝國圖書館 (二) 大學圖書館 (三) 文部省圖書館 (四) 大橋圖書館 等にそなへてある關係圖書類は大やう眼を通し、寫字生に謄寫させた。又 (五) 淺草の淺倉屋、不忍池畔の琳琅閣、大阪の鹿田等の如き、名高い古本書肆に問合せ、關係書類をさがし出した。さて

第一に、編著の困難

といふ事實に遭遇した。これは記錄の缺けて居るばかりではない。材料の間に虚實打混りて、孰れを正と容易に判じがたいのである。現に門人中山信名の書かれた檢校傳にも、又檢校の男次郎氏の幕府に納めたといふ檢校年譜にも矛盾もあるし、思ひあやまりもあるやうである。他のものに至つては推して知るべしで

あるたとへば

▲生地

についても、(甲説) 武州秩父郡保己村 (乙説) 上野の人 (丙説) 信州の人

▲失明年月

についても、(甲説) 五歳 (乙説) 六歳 (丙説) 七歳

▲出府年月

に就いても、(甲説) 十三歳 (乙説) 十四歳 (丙説) 十五歳
こんな類で、今、この雲や霧をなぎ拂ひ、正しい史傳をものする
は、事易きに似て、決して易くない。

第三に文體並に體裁等

は如何にすべきかの問題が起つた。よつて考ふるに、本傳は

可成多數の人に理解し易きものにする、こと。
可成多數の人に興味を與へ、而も感奮興起せしめる、こと。

この二つの主義は是非大切である。従つて、

▲文體は言文一致體を採り

▲體裁は事實をむねとし、まゝ論評をまじへ、努めて脈絡貫通
を失はぬやうにすることとした。

かくて、集めては書き、書きては集め、いくたびか稿を更へて、此
に本書を見るに至つた。海中に突堤を築くに棄石といふがある
が、こゝに本書が出来上つたのを見ると、格別な事もないが、其の
こゝに至つた目に見えぬ棄石はいくらあるか知れぬ。而も猶不
文杜撰の咎を免れないであらうを恐れる。併し其は貴會並に大
方の批正を乞ひ、おのれも、平素この偉人に景仰する所の一人で

ある以上、尙この先も研究を怠らぬ考へ、責任は十分に負ふ積りである。

右謹んで過去の経路を叙して、本書に附して奉呈す。幸に微衷を諒せられよ。恐懼々々。

明治四十一年九月

於東京 小泉秀之助

埼玉縣教育會長島田剛太郎殿

德育資料 第壹編

塙檢校詳傳

總目次

- ▲檢校の年譜
- ▲男忠實略歴
- ▲孫忠韶略歴
- ▲塙氏系譜
- ▲塙檢校學統
- ▲塙檢校本傳
- ▲附錄

塙檢校本傳目次

叙論

一

第一章 延享文政の國學

四

第二章 郷里に於ける檢校

一七

第一節 檢校の祖先

一七

第二節 檢校の一家及幼時

二一

第三章 江戸に於ける檢校

三八

第一節 技藝と讀書

三八

第二節 師恩と信念

五二

第三節 清廉淡泊

六九

第四章 群書類從の出版

八〇

第一節 本書編纂の素因

八一

第二節 本書の解題并批評

九四

第五章 和學講談所と溫古堂

一〇八

第一節 檢校時代の修史概観

一〇八

第二節 和學講談所の創設并其舊地

一一一

第三節 檢校在世中の和學講談所

一一八

第四節 檢校歿後の和學講談所

一二九

第五節 溫古堂の由來并檢校の成功

一五〇

第六章 檢校の著書

一六三

第一節 彼の編著

一六三

第二節 彼の學殖

一八〇

第七章 檢校の和歌

一九一

第一節 歌材の上より

一九二

第二節 歌體の上より

二〇〇

第八章 檢校の性行

二一一

第一節 長所より

二一一

第二節 短所より……………	二三一
第九章 檢校の墳墓……………	二三七
第十章 塙門の諸名家……………	二五〇
第一節 直接の門人……………	二五一
第二節 間接の門人……………	二七九
餘論……………	二八六

附 録 目 次

第一 歌文集……………	一
▲松 山 集（檢校の歌集）……………	一
▲水母文集（檢校の文集）……………	八八
▲溫古詠艸抄（次郎の歌集）……………	九八
第二 檢校に關する名家の談話……………	一一四
▲主として事實の上より……………	文學博士 井上頼圀氏……………一五
▲同……………	上……………孫 塙 忠韶氏……………二六
▲主として書冊について……………	藏書家 松井簡治氏……………三三
▲主として教育の上より……………	文部省視學官 榎山榮次氏……………四七



塙 捨 掎 の 像

の掎捨總るためしか描てしを定廣記内吉住が氏寶忠平編
る成てし圖差に細仔が子せと姉の氏寶忠りな像會の折

塙 捨 掎 詳 傳 目 次 畢

偉人とは鞏固なる決心を以て正道を固守する人である。内外から起る猛烈なる誘惑に抵抗し得る人である。重任を負うて愉々然たる人である。威迫批難の間にあつて少しも恐怖しない人である。艱難の中に立つて泰然たる人である。篤く正理や徳や神を信じて居る人である。……セ
ネ
カ



堀 掾 の 肖像

の掾掾總るためしか描てしを定廣記内吉住が氏寶忠子嗣
る成てし圖差に細仔が子せと姉の氏寶忠りな肖像の折

堀 掾 詳 傳 目 次 畢

偉人とは業間なる決心を以て正道を固守する人である。内外から起る猛烈なる誘惑に抵抗し得る人である。重任を負うて愉々然たる人である。威風凛々の間にあつて少しも恐怖しない人である。艱難の中に立つて泰然たる人である。篤く正義や徳を信じて居る人である。

セ
ネ
カ

胡弓の音はさるる
 子よふし向ふふ
 保と
 云の葉は及ふぬ
 名ふとぬもふもふ
 雲ふもふの糸

吟名の技檢稿
 リあに家野萩村野木保に現筆代翁代屋入門

程以東(字一爲)
納加(中同松書院)

明世日

南見中書

府

新城(系書)

官書檢後

馬檢校

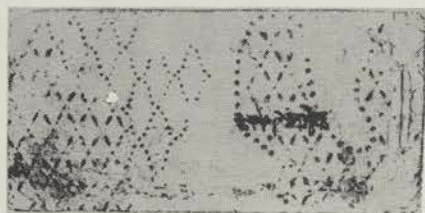
明七日

新城(系書)

官

官書檢後

馬檢校



安永六年正月
 二月
 拾万
 三万
 九月
 九月
 九月

百九十四
 四月廿
 一百三
 八十八
 九月
 七月
 六月
 五月
 四月
 三月
 二月
 一月

(分一寸二巾分三寸四長) 帳數卷御經心
 ることるたき開は下中紙表は上

○
△
卷第百八

清辯眼抄

○
△
卷第百九 上下

除秘抄

○
△
卷第百十

輝晃翼抄

○
△
卷第百十一 上中下

江家流傳抄

裝束部 五十二種

卷第百十二 上下

大丈尉義経世申記

保元四年大間

羣書類從古板目錄

溫故文庫 內藤忠良 村上家藏 松井藏書の印あり

續羣書類從目錄上

總檢校保己一集

神祇部 九百六十六種

卷第一

神皇雜用先規錄

卷第二

二所皇太神宮御鎮座傳記

同御鎮座次第記

卷第三

倭姬命世記

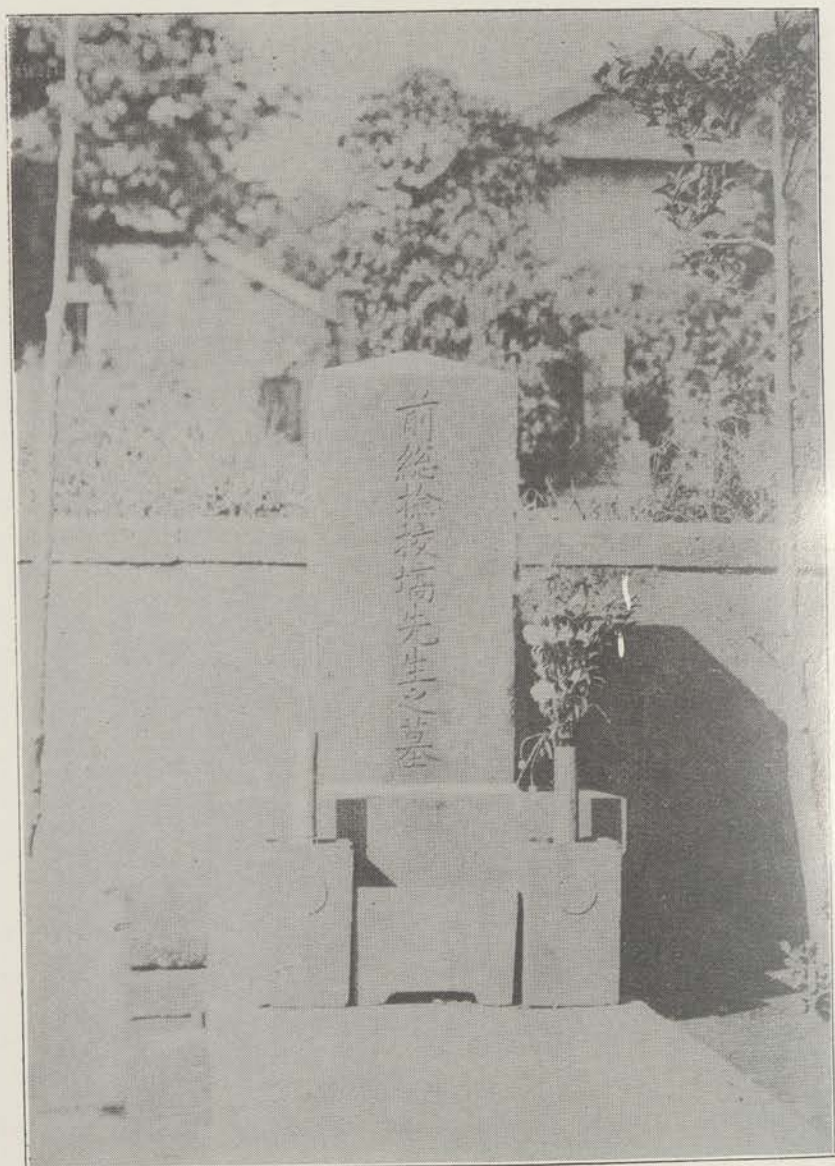
二所太神宮寶基本記

堂

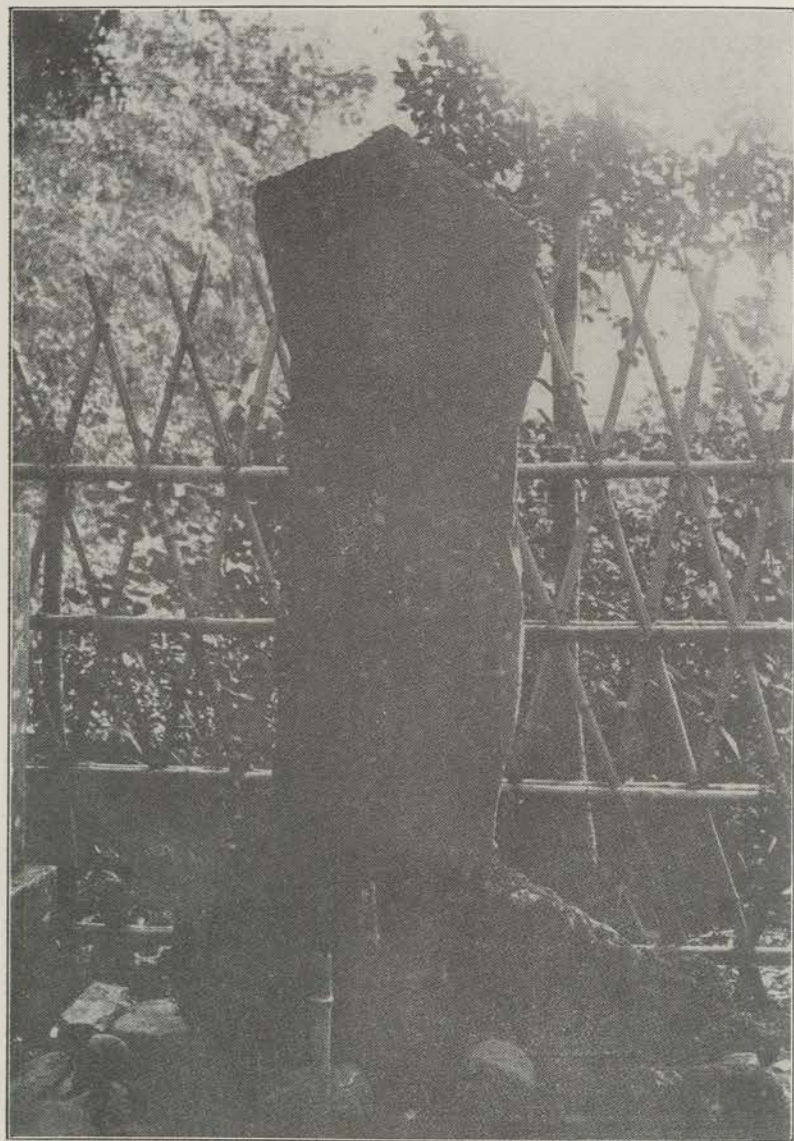
寛政六年甲寅十二月

刻
賢弘

温古

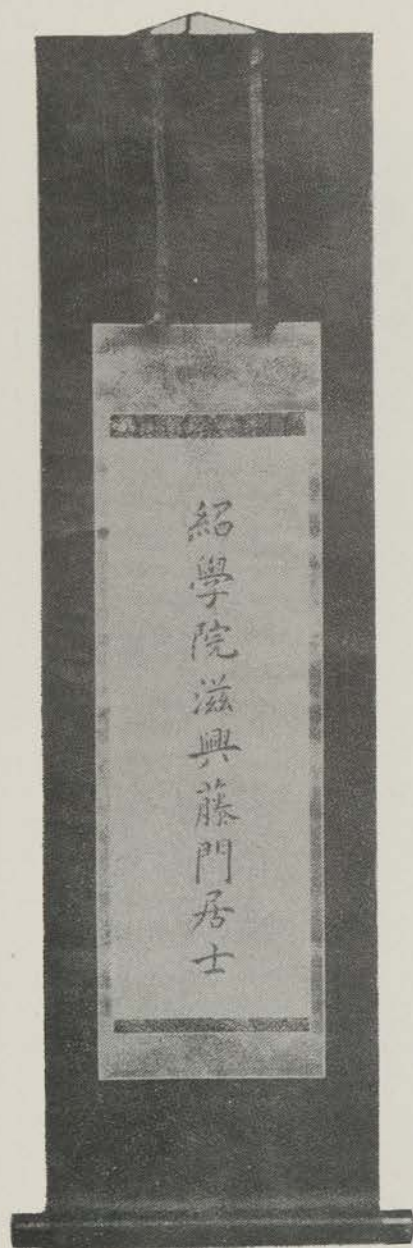


(一 其) 墓 の 檢 校 堀
りおに院染愛地番二廿町寺區谷ッ四市京東

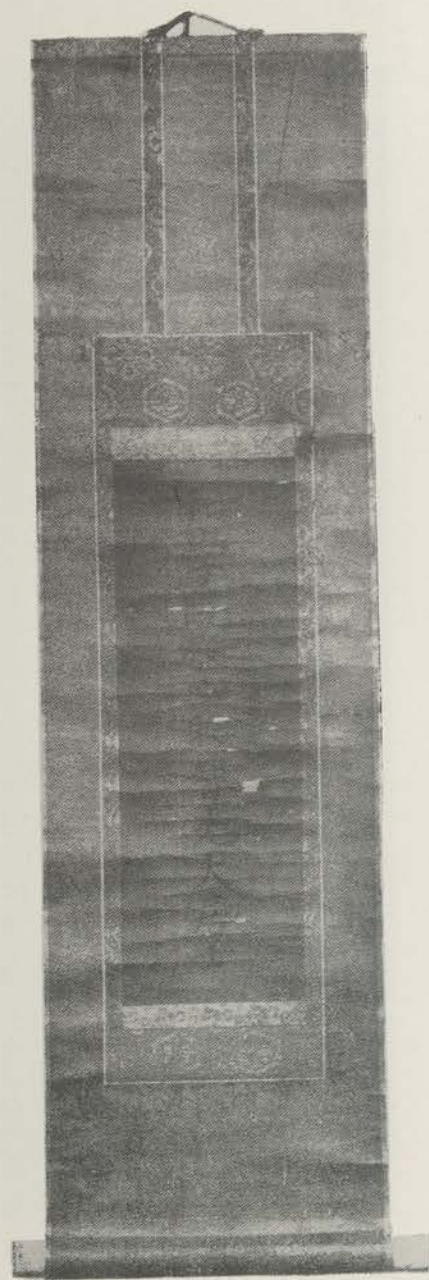


(二 其) 墓 の 技 検 塙

す刻を吟名の「葉の言」び及號法りあに村野木保郡玉兒縣玉埼



號法の寶忠耶次塙



(書翁代屋)號法の技檢塙

天保十五年

社以仁

二り日

有

有

有

有

有

有

有

有

有

あつたてきくはせつとつるまは

帰る路

有

あつたてきくはせつとつるまは

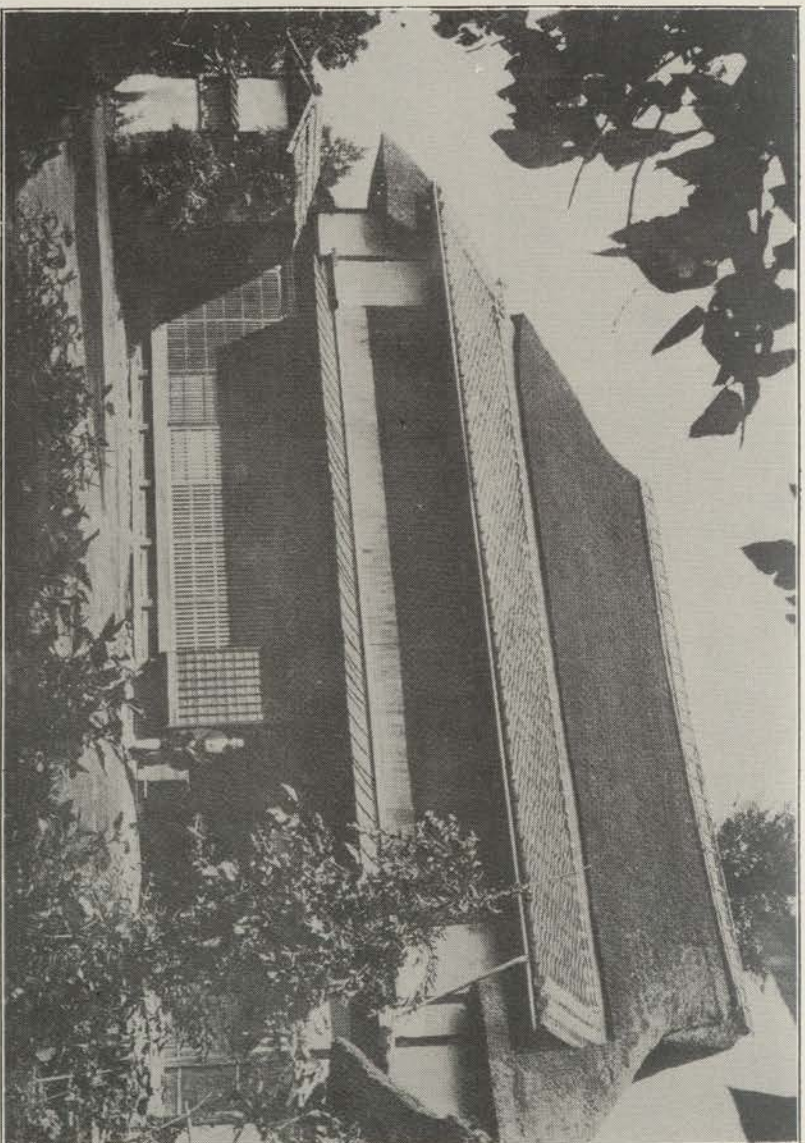
有

有

あつたてきくはせつとつるまは

有

あつたてきくはせつとつるまは



(宅邸十茂野族に現)家生の校検場

塙前總檢校年譜

編者曰く、この年譜は男次郎忠實の録せるものにて、曾て舊幕府へ差出せる
寫なり。今一切改めず其儘此に掲ぐ。

延享三
辰丙

一 歲

武州兒玉郡保木野村に出生、稱寅之助、父者同村百姓萩野宇兵衛
母者同國加美郡藤木戸村百姓齋藤理左衛門女。

寛延元
辰戊

三

肝の病をうれふ。

同 三
午庚

五

春、肝の病のために、盲目となる。故ありて辰之助と改む。一名を多
門房となづく。

寶曆八
寅戊

一三

八月、父に請うて、東都に出て、雨富檢校須賀一の門人となり、名を
千彌と改む。

同 九
卯己

一四

萩原宗固門に入り、歌書物語の類を學び、又川嶋源八郎貴林に隨
ひて、小學、近思錄等を學び、並神道の教を受け、其後山岡妙阿につ

同 一三 未癸
明 和 三 戌丙

一八
二一

きて、律令の類を學び、又品川東禪寺の僧、孝首坐によりて、難經素門の醫書を學ぶ。

衆分にすゝみ、保木野一と改む。

常に多病なりとて、保養のために、雨富須賀、一旅行をすゝむ。手當金五兩を投じて、伊勢の神宮へ詣でさす。よりて父宇兵衛と同道を乞うて、伊勢にまうで、終に京攝、須磨、明石、大和、紀伊、高野山などをめぐりて、東都にかへる。病果して平癒す。

(日數六十日程といへり)

吉野山にのぼりて、西行庵に暫し休らひしに、或人の當坐の

歌よめと勧めければ、

さかりにはいづれをそれとしら雲の

かゝるも匂ふみよしのゝ花

同 六 丑己

二四

宗固のすゝめによりて加茂真淵の門に入り六國史等を學ぶといへども、この冬真淵死去す。よりてたゞ半年ばかり、教を受く。真

淵に入門したる比、よめる歌

すかるなす腰細未通女えましかば

朝よひさけすなづさはましを

みやぎのゝはぎの露原わかぬ夜も

ひとりしぬればぬるゝ袖かな

安 永 三 午甲

二九

雨富須賀、一語りていふ、當時一坐のものゝさまを見るに、席をすゝむるに、金をむねとして、術藝にかゝはらず、斯くあらば、一坐のうち、藝を學ぶものたえなん。汝は學業人にてえたり。然れども財寶を持えず。されば席をすゝむることあたはず。我是を思ひて、百兩の金をたくはへたり。是もて席をすゝめよとて、即百兩をさづく。(此年牛込原町、經王寺に於て、寶合の催あり。)

同 四 未乙

三〇

正月元日、勾當にすゝみ、塙勾當と稱す。名保木野一を改めて、保己一とす。(文選に保己安百年。)

此年雨富の家をはなれて、番町厩谷高井大隅守の家にうつりす

同 八 亥己 三四

む。

叢書を編集して開板成就せんことを、天満宮に祈誓す。千日の間、毎日心經百卷を讀誦して、檢校の職にすゝまんことをねがひ、かつは叢書の成らんことをねがふ。先是、勾當にすゝまんことを願ひしも、右のこと、千日の誓をたてゝ、心經百卷づゝをよめり。然るに九百日にして、勾當にすゝむことを得たり。これより終身、朝四つまで、心經百卷づゝをよめり。此年、居を東條信濃守の宅地に移す。

天明二 寅壬 三七

紀伊家の醫師、東條清民の女を娶りて、妻とす。

同 三 卯癸 三八

三月、檢校の官にすゝむ。同月、一女出生す。母は清民女。此年、宗固のすゝめによりて、日野資枝卿の門に入りて和歌を學ぶ。資枝卿薨去後、閑院宮の門に入り、又後に、外山光實卿の門に入る。▲古處軒の記する所によれば、天明四年に資枝卿に入門せるやうなり。本文可考。云ふ。信名

同 五 巳乙 四〇

此年、水戸文公にまみえて、盛衰記の校正にあづかり、月俸五人分

をたまふ。盛衰記の校正畢りて後、日本史校正にあづかる。其功あるを賞したまひて、月俸をまして、十人分をたまふ。此年、荆婦を離別す。

同 六 午丙 四一

今物語刻成、淨書は屋代詮賢

寛政二 戌庚 四五

男子誕生す。名を寅之助といふ。八才にして死す。母は西文次郎の女。これより先に、婚姻とゝのふといへども、其年を詳にせず。

同 四 子壬 四七

口月、麻布笄橋より、火燃出、東都過半焼失す。此時、四番町の家も、灰燼となる。よりてしばらく、御茶水大屋四郎兵衛の居宅に假住す。

寛政五 丑癸 四八

舊友上野國人、常照院來りていふ。當時文明の漢書よむかたはさならなり。神道歌道につきても、其家定まりおれども、たゞ本朝の歴史律令など、よむかたなきは、いぶかしき事となげきて、歴史律令の講談せんところを定めんことを、公に願ひ出でんはいかにとすゝむ。

二月、國學講談所、并文庫取立候地所、拜借の儀、寺社奉行、脇坂淡路

守殿へ奉願候處、四月御同所に於て、願之通被仰付、場所見立候様、被仰渡。

五月廿八日、裏六番町、小普請組、近藤左京支配、小泉新三郎上地六百坪の地所の内、三百坪拜借奉願候處、七月廿三日、願の通被仰付。閏十一月、普請出來に付、會讀相始む。

盲人一座取締役被仰付、寺社奉行よりなるべし、月日を詳にせず。秋九月、一座取締用向に付上京。

父宇兵衛死去。九月六日、和學講談所、永續爲御手當、小傳馬町三町目、馬喰町三町目、龜井町橋、本町壹丁目、川通り上納地、壹ヶ所被下尤地面の儀は、町年寄方にて預り罷在、壹ヶ年取立金五拾兩宛町奉行所より御渡に相成候旨、松平伊豆守殿、以御書付被仰付候段、青山下野守殿被仰渡。○同日和學講談所之儀は、以來林大學頭御支配に相成、和學御用筋も、有之候筋は、御同人御指揮に隨ひ、相辨候様、是又伊豆守殿、以御書付、被仰付候旨、下野守殿被仰付。○同月

同 六 寅甲 四九

同 七 卯乙 五〇

○日、群書類從、開板出來之分、四十三冊献上。○同十二月、編集之群書類從、差上候ニ付、白銀十枚、御褒美として、被下候趣、林大學頭殿被仰渡。

同 九 巳丁 五二

二月、群書類從之板木、入置候土藏、取立候場所、拜借仕度段、願書差出、願濟之儀、留書無之後日調ふべし。○同月、國史律令、是迄有來之本、誤字脱文、有之候ニ付、校正之上、追而者開板も仕度心願に付、公儀御文庫の國史等、拜借仕度段、奉願候處、八月、林大學頭殿御書物拜借之節、一同拜借被致置、御同人御宅にて校合仕候様、堀田攝津守殿被仰渡候旨、林大學頭被申渡、此後拜借書籍度々有之略之。○十二月、板木藏、取立場所、品川御殿山下土取場、外二ヶ所、見立候而願差出。

同 一〇 午戊 五三

五月、板木藏、取立場所として、御殿山下、土取場、外空地とも、千六十坪餘、願之通、拜借被仰付候赴、堀田攝津守殿、被仰渡候旨、林大學頭被申渡。○七月、品川御殿山下土取場、板木置場地所、地代、金二兩二

分并林錢、是迄之通り、上納仕候様、地所拜借之節、被仰渡有之處、地代金は上納に不及、右地所に附候、御年貢并三役高掛り物等、是迄仕來之通り差出候様、堀田攝津守殿、被仰渡候旨、林大學頭被申渡。○十月、國史律令開板之儀に付、拜借金奉願候處、十二月、願の通り、金五百兩、拜借被仰付候旨、堀田攝津守殿、被仰渡候旨、林大學頭殿被申渡。

同 一 一 己 未 五四

五月、盲人一座取締、御免奉願候處、願之通被仰付、御褒美として白銀二拾枚被下。○十一月、開枚之國史、献上之儀奉伺候處、開板次第献上可仕旨、堀田攝津守殿、被仰渡候由、林大學頭殿より御達、後に開板出來之國史等、献上可有之といへども、無書記。○十二月、孝義錄校正、並淨書被仰渡。○同月、堂上家記類校正書寫、調進仕度段、願書差出、伺濟之儀、書留無之。○此年、日本後記八卷刻成。

同 一 二 庚 申 五五

五月、昌平坂聖堂、釋奠之儀、裝束心得候門人、定式差出候儀、出來可仕哉之段、御尋に付、差支無御座趣、御受仕、此後、春秋釋奠之節、爲裝

束付、門人三人づゝ差出す。○六月、堂上家記十部調進。○同月、家記寫取爲入用、寫料之内へ金五十兩、堀田攝津守殿へ御伺濟之趣を以て、前拜借被仰付。○九月、孝義錄校正之儀、備中守殿御下知之旨、林大學頭殿被仰渡。○十月、右板木淨書仕立候様、前同斷被仰渡。○此年、令義解開板成。

享和元 辛酉 五六

六月、家記二十八部調進、十二月、同斷二十五部調進。○日本後記二卷刻成。○史料取立御入用積、内々林大學頭殿迄差出す。

同 二 壬 戌 五七

六月、家記廿八部調進。○九月、於講談所、和書類開板有之候趣、御沙汰被成下候様、願書差出。○十二月、家記十七部調進。○次男道之助生、翌年死、母家女。

同 三 癸 亥 五八

正月、和學講談所、勤學場所、手狭に相成、御用書寫物等にて、講席差支候儀も有之候に付、地所替之内、願書差出、伺濟書記無之。○六月、一座總錄職に相成、本所一ツ目、總錄屋敷へ轉居、文化二丑年、退職拜借地にうつる。○十一月、史料調御取立相成候様、内願書差出。○

文化元 子甲 五九

百練抄刻成。

十月、和學所替地、場所見立候に付、願書差出、○十一月家記十部調進、同月家記御入用、前拜借相願、十二月願之通被仰渡、○十二月荆妻死。

同 二 丑乙 六〇

正月、裏六番町拜借地御用に付差上、替地表六番町、小林權太夫拜領地八百四十坪餘、拜借被仰付候趣、寺社奉行水野出羽守殿被仰渡、○三月、三男熊太郎生、後に五味忠次郎養子に相成、五味和三郎と改名、母家女、○五月、家記一部調進、○十二月、同斷十六部調進、○一坐十老に入る。

同 三 寅丙 六一

四月、昨年十老入に付上京、七月頃歸府、○十月廿九日、史料御取立之儀、先御試仕候様、林大學頭殿被申渡、當分御手當として、當節金五十兩御渡被下候旨、御同人、是亦被申渡、○十一月、武家名目抄、史料取立之節、是又編立候様、林大學頭殿被申渡、同月、表六番町拜借地、東之方なだれ之場所、二十四坪餘、石垣代として、増拜借仕度段、

奉願候處、十二月廿九日、願之通被仰付候旨、寺社御奉行脇坂中務

大輔殿被仰渡、○同月、家記三十五部調進。

同 四 卯丁 六二

家記類調進、寫料之内金百兩、前拜借奉願候處、願之通被仰渡、○十二月、四男次郎生、母家女、和學講談所相續す。

同 五 辰戊 六三

六月十七日、史料彌御取立被仰付、御用中御手當として、年々金五十兩、被下候旨、堀田攝津守殿被仰候旨、林大學頭殿被申渡、○同日史料御用、助筆七八人も出來候筈に付、御家人並塾生、相撰び可申上段、御同人被申渡、○同月、御用出役三人、手傳四人名前申上候處、七月出役手傳等、願之通被仰付、御賄料、筆墨代、銘々被下候趣、林大學頭殿被申渡、出役并手傳之事、さまゝの次第あれども多端によりて、こゝに畧す、別に録すべし。

同 六 巳己 六四

十一月、大納言様御婚禮、御祝儀御能、開口文句、相考候様被仰渡。

同 七 午庚 六五

二月、伊勢林崎、豊受宮崎、兩文庫之書籍之内、史料御用、見合に可相成類寫取度、依之其筋へ、御沙汰之段奉願、願濟之事無留記、○十二

同 八 辛 六六

月廿七日、史料宇多天皇事記、二十二部調進。

口月、和學所別手當として、來申年より、十ヶ年の間、學問所書籍、御開刻御用、御貸附利金の内より、百五十兩宛被下候趣、堀田攝津守殿へ、御伺濟に付、林大學頭殿被申渡。○此年、編集之螢蠅抄六卷、献上之處、御褒美として、白銀五枚被下置。

十二月、史料醍醐天皇事記、五十七冊調進。

同 九 壬 六七

同 一〇 癸 六八

同 一一 甲 六九

四月、京都本國寺、靈寶物之内、史料御用に可相成文書等、開帳中、淺草法恩寺にて開帳有之、差支に不相成様、寫取仕度、依之、本國寺へ御達之儀、奉願候處、松平右京亮殿より、御達有之、右靈寶物、五月中書寫之。○八月、群書類從、開板之儀に付、拜借金奉願候處、同九月、格別之譯を以て、金三百五十兩、願之通、拜借被仰付候趣、堀田攝津守殿、以御書付、被仰渡候様、林大學頭被申渡。

同 一二 乙 七〇

正月、多年御用相勤候に付、御目見被仰付、被下候様仕度段、内願書

同 一三 丙 七一

同 一四 丁 七二

差出申候處、四月七日、多年御用向相勤書物類校正差上、骨折候に付、御序之節、御目見可被仰付趣、於躰躰の間、土井大炊頭殿被仰渡。○同月廿八日、御目見被仰付。○七月、身分之儀、御目見醫師之振合に心得候様、被仰渡。○十二月、鹿島香取兩社之古文書、爲寫取、中山平四郎、中津金十郎、願之上罷越、平四郎へは、旅御手當被下置。○此年日光御神忌に付、御能開口文句、相考候様被仰渡。

二月、史料見合に、可相成書籍、爲取出上京、五月歸着。

十一月廿四日、和學所開板入用のため、大坂町人、増本屋安兵衛、差出金千兩、御貸附被成下候趣、被仰渡。○十二月、朱雀事記、三十七冊調進。○同月、大坂町人、増本屋安兵衛、差出金用向相兼、史料見合書籍取出之爲上京、翌年春歸着。

文同元 戊 七三

正月、二老に相進、在京可仕、座主之處、和學所御用も有之候に付、其儘在府可仕旨、寺社奉行、松平和泉守殿、總錄野田檢校へ被仰渡。三月、大坂町人、増本屋安兵衛、差出金御貸付に相成候、内金二百兩、

拜借仕度段願之通、御下被下候趣、堀田攝津守殿、被仰渡旨、林大學頭殿被申渡、○十月、御書物奉行、宅寄合之節、出席之儀、申來候事も、可有之段、林大學頭殿被申達。

同 二 巳 七 四

四月、梶井妙法院御門跡、並東寺智積院、叡山大原等之古書文書等、爲寫取上京、六月歸着、此時尾州名古屋へ立寄、眞福寺之古書等書寫。

同 三 庚 七 五

官板扶桑略記、校正淨寫成、此年刻成。○類聚符宣抄校正淨寫成、(二年を経て刻成)

同 四 辛 七 六

正月上京、二月總檢校續目之儀、所司代松平和泉守殿被仰渡、○五月出府、繼目爲御禮、御目見仕、同月、御暇被下候に付、金二枚時服二、拜領被仰付、上京すべき所、病によりて、江戸にとゞまる、○八月二十三日、病氣に付、總檢校辭職、隱居奉願候處、願之通、所司代松平和泉守殿、被仰渡、○八月十八日、俄に臥病、九月十二日、差重、古處軒云ふ、實際はこの時死没、内葬せりとのことなり。

同 五 壬 七 七

三月、村上事記五十冊、名目抄草稿十八冊、家記八部調進、○同月、群書類從、献上残り分、百六十九冊、並續群書類從目錄献上、已前之類從献上留記無之、○同月、御買上分群書類從、殘冊差上、(此代料、先年御觸流之時、全部見込代金三十五兩、御下けに相成、此度殘金十三兩餘、御下けに相成、代金頂戴之儀に付、猶可記事あり)

○六月、編集之群書類從全部、差上候に付、白銀三十枚、御褒美として被下候旨、内藤紀伊守殿、被仰渡候趣、林大學頭殿被申渡、○七月三日、病氣に付、跡目願書差出、○同九月死去。

男塙次郎忠寶氏畧歴

一六

和學講談所附保己一實子惣領

塙 次郎(忠寶)

文化四年十二月生文久二年十二月廿二日歿享年五十六才

一 文政五年九月八日、父前總檢校年來和學御用筋出精相勤候に付、御扶持方五人扶持被下、御用筋引續可相初旨、父前總檢校拜借地町屋敷共、其儘に被成下候段被仰渡。

一 弘化四年八月廿二日和學筋御用來出精相勤候に付、御扶持方五人扶持御増被下旨被仰渡。

一 嘉永元年六月廿七日拜領町屋敷地代金向後一ヶ年五十兩相増、都合百兩宛御渡之旨被仰渡。

一 同四年十一月十四日和學筋御用來出年精相勤候に付御序の節御目見被仰

付候旨被仰渡、同年十二月朔日初而 御目見仕。

一 同五年閏二月六日史料調出精相勤候に付、爲御褒美銀三拾枚被下候旨被仰渡。

一 安政五年十一月晦日和學筋御用來出精相勤候に付、被召出、小十人格被仰付、御切米百俵被下候旨被仰渡。

一 萬延元年十二月廿六日執次詰所記載献上候に付時服貳拜領被仰付。

一 文久二年三月六日御婚禮御賀文献上候に付、卷物三拜領被仰付候旨被仰渡。
一 同年十二月廿一日夜於途中、不慮の手疵相請、翌廿二日死去。

孫塙敬太郎忠詔氏畧歴

一八

次郎實子惣領

現住所東京市下谷區入谷町三三二

塙 敬太郎(忠詔)

天保三年四月廿八日生本年
(明治四十二年)七十七才

- 一 弘化四年十一月廿三日和學筋致出精候に付、父勤見習被仰渡。
- 一 嘉永五年閏二月十七日史料取調之儀骨折相勤候に付、爲御褒美銀七枚被下置候旨被仰渡。
- 一 安政三辰年十二月廿五日年來出精相勤候に付、見習相勤候内、御扶持方五人扶持被下候旨被仰渡。
- 一 同五年十月廿五日學問所南御二階世話心得佐被申渡。
- 一 萬延元年十一月和學所御用多に付、世話心得佐被免。
- 一 文久二戌年八月廿三日和學講談所附見習被仰付勤候内、拾人扶持被下置候旨

被仰渡。席之儀者小十人格父次郎次と可相心得旨被仰渡。

一 同年十二月廿一日夜父次郎於途中不慮之手疵相受、翌廿二日相果候に付、差扣之儀伺候處先不及其儀旨被申渡、其後自分愼罷在候所、同四亥年十二月廿一日父次郎及横死候に付、跡式者不被下候旨被仰渡、同月廿六日被召出、御勘定格和學所附被仰付新規貳拾人扶持被下置候旨被仰渡。

一 慶應三年五月十三日

將軍宣下御祝儀和歌献上仕候に付銀五枚拜領

一 同四辰年六月二十日御人減に付勤仕並小普請入被仰付。

按に、いにしへ座頭檢校の號なし。帝宮は異人を禁ず。盲者官をゆるさる可き儀なし。鹿苑院の相國の頃に盲者を愛せらる。明石建業、覺一等出頭せり。此頃より建業を檢校と書きあらため、次坐の者を勾當と號しけり。下な座頭と呼びしとなり……天野信景鹽尻卷十四

一九

塙氏系譜

110

小野篁

(七世孫)
孝泰

義孝

資孝

時資

季兼

盛兼

(小野を改めて村
上源氏となる)
季兼 季定

季時
(荻野五郎)

皆鎌倉殿に仕ふこの中

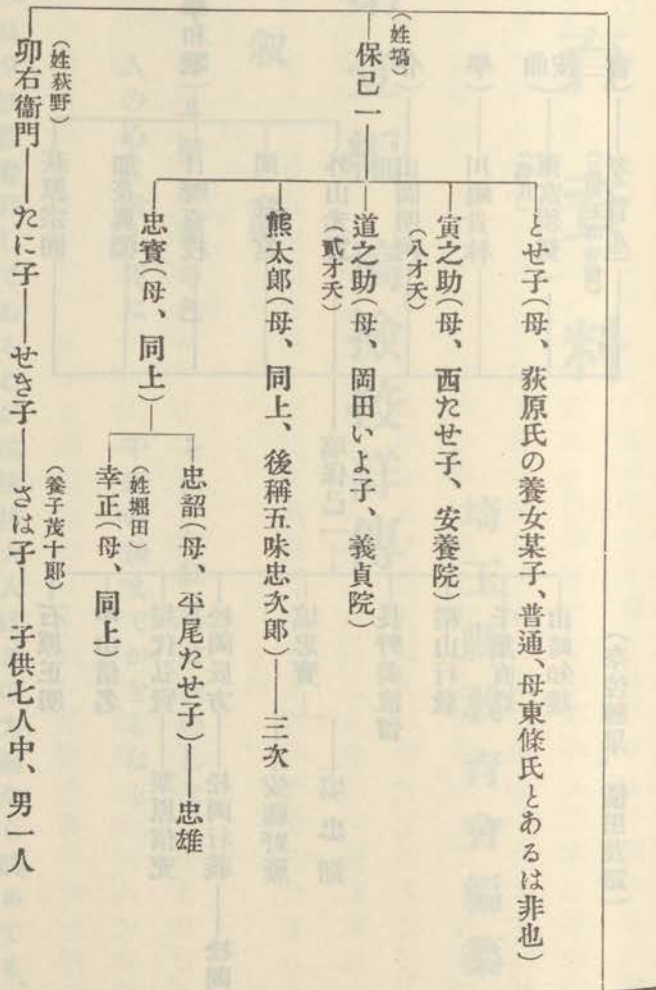
武州に移住せるものあり

荻野某

宇右衛門

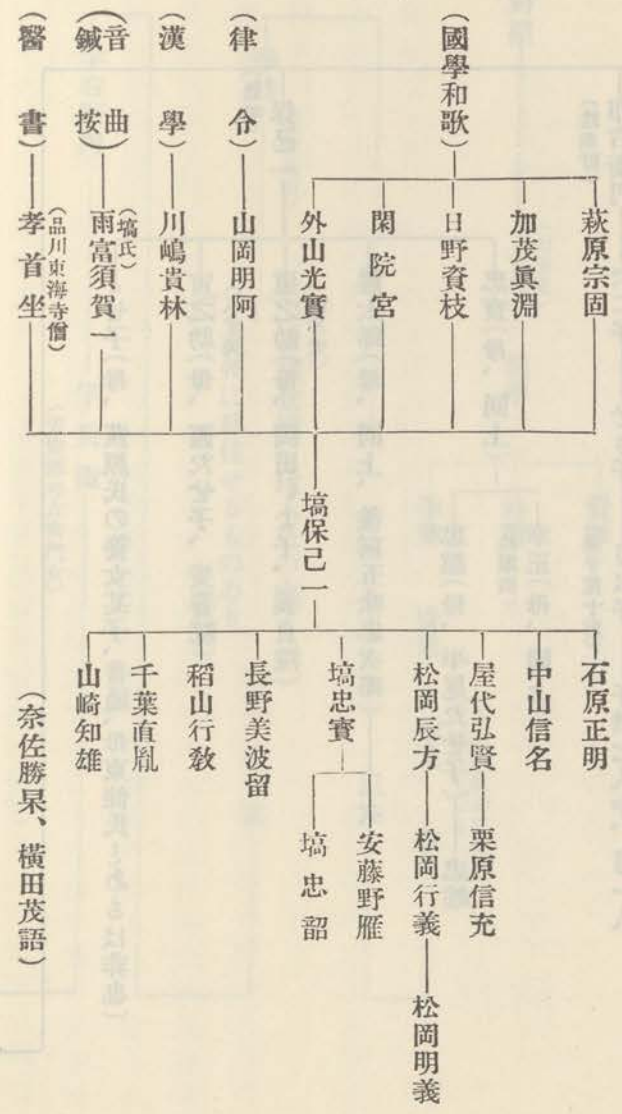
宇兵衛

(妻齋藤理左衛門女)



111

埧檢校學統



德育資料

埼玉縣教育會編纂

第壹編 埧檢校詳傳

叙論

匂ふ櫻は春の色
 人の心に咲く花は
 そめし紅葉は秋のしな
 千歳の後までかをるなり

吾人の日夕欽慕瞻仰してゐるわが埧檢校大人は、この方面から眺めても、勁い、大
 きい、たくましい、そして律々しい超凡の性格を有つてゐる。たしかに千古の龜のか
 いみである。假に彼を五官を具へた足りとしてのうた人と観ても、葉山しげ山を擢で

二
て超然雲表に髻を表してゐる見えがある。まして視覚を缺いてさへあれ丈の事業をと懐へば、いさゝか戀の情に耐へない。

英の詩宗ミルトンは盲目詩人として天下の同情を惹いた人である。されど詩人は晩年その明を失うた。フオーセットも亦盲人にして克く學理に秀てたが、學成りて後に瞽者の類に入つた。之をわが檢校のをさなき時より兩眼を失ひ、一に聽覺や觸覺にて、ももちの智識を吸収し、以て後に燈し前を燭するの心眼に比すれば、もとより天淵のけぢめがある。

斯く云へばとて、吾人は彼を指して超人間界の偉才となし、神さびたものにとりなし、到底人力の企及すべからざるものとあきらめ、吾人と彼との脉絡貫通を斷つのはあやまりである。然かも大なるあやまりである。彼といへど、そのもとく普通通の佃兒である。農童である。その母、巨人の跡を蹈んで孕んだのでもなく、日輪懷に入りて産れたのでもない。されど家庭、社會、師傅はた、また彼の意志のつよさは、轉輾ころがりくつて、いみじい雪圍となるが如く、白皚々たる芙蓉峰と化成したのである。されば、吾人は心のしめ様、氣のもち方で、千里を駛り得ないとも限らない、眼なく

とも芙蓉峰と仰がれ、眼ありても蟻垤とさげしまる。そも流れて白帆を浮ぶるも、涸れて頑石を累ぬるも、そのもと一寸の差である。おそれて怖るべきは心の源ではないか。

今の人はいにしへをたづね可し、またふるき人は昔
を能く傳ふべし、物語は失するものなり、記したるも
のは失せず候、

蓮如上人御一代聞書

第一章 延享文政の國學

四

わが塙檢校は延享に生れて文政に没した學者である、さればその間に起伏浮沈せる國學の眞粹を尋ね、併せて時代時勢の梗概を描き、それが畛域に孵化薰陶された彼を知るのたづきとしよう。人と時、個人と社會とは吻合密接して離る可らざるものである。言はゞ彼は生れて延享文政といふ大きい慈母の懷に包まれ、羽ぐくまれたと見做すべきである。

そもこの時代の趨向はどんなものであつたらうか、事はるかにして眼之を把へがたし、たゞ古記録の語るところに依り、彼此綜合一括してその一斑を示さん乎。

かの紅紫紛々いと華やかであつた元祿は早や昔の夢、小判を召し黄金を穿いた贅こきは、たゞ古物語として巷間に傳はる而已。されどその名殘のいまだ全く消え失せぬにや、美風良俗の面影のないのは慨れたきことである。まづ儒士は俳優藝人の如く遇され、宿直の夜、少年之を圍んで孔子の妻の醜美を質して之を嘲弄するに至る。あまつさへ士人の多くは、聖堂の何たるを知らず、之を無用の長物として廢棄

しようとするが如き、言語の沙汰である。され世の驕奢侈靡と來てはなか／＼大したもの、たゞ／＼舌を卷くばかりである。某侯田沼に一の石臺を贈る、臺の長さ約九尺、之を穿つて内に一室を作り、屋を掩ふに小判金を以てし、室内の裝飾皆金銀貨を用ひ、屋前の座は豆銀を以て砂石に擬したとのことである。一櫛やがて全鼎をトするに足るであらう。

松平定信いたく之を憂へ、まづ之が禍根を茹るには儉勤質素を勧めるにありとなし、すべてのものゝ贅を禁じた。二三を云はゞ、諸國より幕府に上書し、若くは幕府の帳簿を作るに善良なる紙質を用ふるを禁じ、つゞいて、羽子板、破魔弓、雛道具、小兒の翫具に金銀箔を用ふるを禁じ、また女子の小袖、代銀三百匁に過ぎてはならぬ、人形の大さは八寸以上を超えぬことなど、瑣末なことに至るまで、その制限をまうけ以て統一整頓しようとした。

されど一代の風潮は、この禁止局促の埒内に淀んで居ない。生活の進歩は洪波の如くに士人を卷き去り、かの高價なる菓子、禁めた法令の下に煉羊羹は生じ、三百五十目以上の女服を禁めたかたはらに、金糸繡取の服は商家の子女にまごはれ、富

の勢力のもとに隠れて居た平民の勢力は、海嘯の如く封建制度を呑まうとしてゐる。

斯く世は搖ぎ出した、人の心もやゝ自由奔放のくつろぎを得た。さればにや備前の文學井上蘭台の如きは、別に一旗幟を立て、孟子朱子を排し、伊物二氏を嘲り、古今の學者を歴詆して憚るところがない。江戸の人井上金峨その門に遊び、遂に漢宋の學派を折衷して一派を立て、名けて折衷學派といふに至り、山本北山等其門に遊びて徂徠派を罵り盡し、京都に在りては柳澤淇園崛起して一世をさわがし、石田手島の徒、別に心學の一派を起し、天子百姓皆同一心性を有し、尊卑貴賤は位にあらずして心を悟るの明暗に存すとなし、通邑大都に呼號するに至つた。この他、考證の學、東西に起り、論語の一書のみで二十餘種の註を見る。要するに徂徠仁齋の一たび已が説を立つるや、われも／＼とひしめき噪ぎ、新案奇説を弄して、己が功名を表さうとし、延いて放蕩疎磊の氣習、黨同伐異の風、その盛を極め勢收拾することの出来ぬやうになつたのである。

これ偏狹にして曲謹なる朱子學派の耐へ得るところでない。恰も好し、定信公も

深く天下人心の歸嚮するところなきを憂へ、いつがな之を統一整頓し、百川のおもむくところを定めようとせるをりから、その内議も早くまとまり、遂に朱子學を以て正學となし、他學派の出仕を禁じ、一令の下に天下を圓めようとした。寛政の改革について異學の禁を斷行す、かれ定信公もなか／＼の經綸家ではない乎。

於是、柴野、古賀、尾藤の三博士は、幕府にすわりて盛んに朱子學の扶植に努め、下には西山拙齋、菅茶山、中井竹山、賴春水等ありて之に聲援し、其勢侮る可らざるものがある。太田錦城、龜田鵬齋、細井二洲、龜井南溟等の出たのもこの頃のことである。中には賴山陽の詩文、菅茶山の詩、拙堂一齋の文章の如き亦一世の珍であつた。

殊に奇とすべきは、漢學は元祿の初期まではおごそかな哲學、若しくは道德律として遵奉されてあつたが、この頃に至りては専ら文學の方面より之を檢討するもの、の出て來たとである。又詩文の如き都鄙至るところに盛行し、詩社を結んで騷客を集ふるものも多い、即ち京には龍草廬の幽蘭社、服蘇門の長嘯社、江村北海の賜杖堂あり。江戸には服南郭が芙蕖社、安清河が市隱社ありて、はるかに之に對峙し、大阪にも江村北海の混沌社といふものおこりて、詩文の研鑽日に／＼盛んに、遂に岡島

冠山の通俗水滸傳や、岡白駒の支那小説俗譯の如きや、毛色の變つたものを看るに至つたのである。

斯く世の中は自由奔放の空氣にゆるぎを固くるしい道學先生でも、漢學を單に道德律として遵奉したのみではない、純粹の文學眼を以て研究するやうになり、従つて世の一角ではあるが支那の小説俗曲にもそろ／＼手を伸ばすといふ氣運を呈露するに至つた。

さはれ、一方の國學奈何と願るに、これ亦悔る可らざるの勢である。これよりさな契沖、東滿の荒田を鋤きかへしてより、眞淵、宣長と、げに冲天の勢を以て進んで來た。中にも眞淵の高弟鈴屋翁を中心として千蔭、春海、宇萬伎、久老、魚彦等の縣門の逸足は、よく師翁の學を祖述して殘すところなく、また和訓栞に名を轟かした谷川士清の伊勢より起るあれば、あゆひ抄、かざし抄に宣長を駭かした富士谷成章の京に出づるあり、濟々たる俊才、さながら雨後の筍子の如くである。

前に藤井や伊勢の考證に長けたものがあれば、後には八衢や男信に一代を驚倒した春庭、義門などがある。一方には蘆庵や景樹などの和歌者流あり、錦心繡腸、咳

唾珠をつゞるかと思へば、他の一方にはひたすらかんなから惟神の道にうき身を寢し、

鶯をわれもあはれと見てあれど哀と歌ふ暇なかりけり

と丹心を絞るの大功の如きもある。三大家、四天王などの稱號いかめしく泊々舎の文名東にとゞろき、松の舎の藻思、西にきらめく、げに應接にいとまがない。

これ等國學に志すものは、かたはら漢學者を歴詆し、建國の大本を探りて、只管尊王愛國の念を鼓吹したことや、又は桂園の一派や、平民的に傾き、濱臣の著書の如き小説との橋梁をなしたことなどは忘れてはならぬ。

かく漢學にまれ、和學にまれ、奇古艱澁の畛域を脱し、通俗平易となり了せるは、種々の素因もあるであらうが、平民の漸く勢力を得て來たことも、たしかにその一因である。

平民の色めき來るに連れ、奢侈放逸をさ／＼前古を壓し、むかしは飯田町の市人にして小紋染の羽織を有するもの唯一人であつたが、今は江戸の市民にして紋様の羽織を有するもの濱の眞砂もたゞならぬ、足半を穿いた武士の子孫は一足一兩の下駄、印天皮の雪駄を穿ち、其妻は引出ありて内に銅壺を設けて湯を煮、歩行しつ

ゝ足を暖める下駄をはくに至る。人口の増加と共に生活の進歩は殆んど走馬の勢を以て進んで來た然れども不幸にして封建の社會は、市民をしてこの富と勢力とを用ふることの出来ないやうにしてある。彼等は若し擊劔を學ばうとすれば、武士から睨みつけられる。彼等は家居を莊麗にせば、冥加金、國役金を課する標準とされた。彼等は止むを得ないで、その富を烟草入の細工、金具に費し、火鉢、屏風につひやした。がために、纖巧にして華麗なる美術工藝の道や、盛んになつたが、是等はまだまだ彼等を飽かしめない。彼等は更に輕妙飄逸なる軟文學を需めておのが鬱憤をばらし、かねて慰安の具に供した。於是乎俳諧狂句のをかしきあり、狂歌狂文のしやれたるあり、悲喜こももゝ人の肺腑を刺すの戯曲小説、曰く何、曰く何と、げに儂指に耐へぬ、平民文學の勃興、蔚然雲を焦し地を撼かすに至つた。

まづ俳諧狂句の埒内を一瞥しようか。芭蕉歿後、はふ焉のおのがむきゝゝに發展し、餘弊あげて不可言の有様、とうゝ安永天明の刷新となつた。この新俳風の驍將として現れたは、蕪村と曉臺とである。

元祿のさび句、ひはまた嗅ぐことは出來ないが、蕪村が清楚の姿、曉臺の綺麗の趣

に至りては、他の得て模しがたいところがある。且つやこの新俳風は、蕉風の高調と、種林の豪放横溢の佳所を容れて、二者の間に圓滿な調和を試みようとしたあとがある。

この二名將のもとに凡、童、士朗の高足弟子をはじめ、蓼太、白雄、樗良、蘭更の徒むらゝと起り、元祿以來別に一新境を築いてあつたが、文政に至りてはその調やうやく賤しく、遂に蒼虬、梅室の俗俳が天保の俳壇を代表するの傾向を生じて來た。この間に立つて獨り異彩を放つたのは一茶である。一茶はこの時代に於ける掉尾の傑物であらう。

また寶曆の比から狂句、即ち川柳がおこりはじめた。俳風柳樽の名やかましく賤山奴のやからまで之を弄ぶに至る。これは社會百般の事柄を材料とし、社會の瑕疵、人間の弱點を、警句に詠み込んで粹を見せたのは、とりえである。

次に狂歌狂文の方面を見渡すに、これまた盛んなもので、未得や貞柳時代はいまだ見る可きものはなかつたが、安永の比、朱樂管江、唐衣橘州、四方赤良等の名手輩出するに及んで、滑稽諷刺の文辭、奇警放恣の語句、捧腹絶倒のをかしさを極め、諷刺愚

弄の快を盡し、狂文辭こゝに至りてよく俳壇戲作界と並んで、わが文界に一異彩を添へるに至つた。

この比から狂歌が俳諧師などの片手わざになりしに引き換へて、全く専門の手に屬した。素より狂歌の如きは機敏で、而して俠な江戸ッ子の膚合によく折合つたものと見えて、その中心はとう／＼江戸に移るやうになつたのである。これより文政の終りまでは狂歌の全盛時代で、手柄岡持、宿屋飯盛、大屋裏住、平秩東作、芍藥亭長根、鹿都部眞顔、奇々羅金雞などの輩出したのも皆この時代のことである。

狂歌狂文の梗概は之に盡きた。次いで物す可きは戯曲小説の模様である。さて各種の文學殆んど滔天の勢を以て進んで來たのに、獨り戯曲の微々として振はなかつたのは、奈何なる原因の伏在して居たことだらうか。然かし幸に福内鬼外の如きありて神靈矢口渡をものし、明和七年外記座に興行して沈衰混沌の夢を醒ました。貫四馬、徳三等の手並も單に前代の影を追ふに止まつたのは、かへす／＼も口惜しいことである。

而して脚本はいかにと看るに、鶴屋南北の出づるありて、やゝ生氣を恢復した。こ

れよりさき、櫻田次助世話物に心を碎いたが、荒唐無稽の元祿の餘臭は離れない。並木五瓶の如きも上方狂言の理に落ちて、眞に江戸の社會を描き得なかつた。獨り南北に至りて是等の缺を補ひ、よくその眞粹を把へ得たのは、その功多とすべきである。

小説に至りては文化文政度を以てその最とすべく、その翹楚として三馬あり、一九あり、春水あり、京傳あり、馬琴出づるに及んで、漢土の演義を翻案して之を遣るに流麗雅健の和文を以てせる故、歴史はやがて小説となり、八犬傳出て、日本國民をして歴史的題目を悦ばしめるやうになつた。今、馬琴の物した二百餘種の長篇大作を觀るに、何れも琅々のひゞきがある。而してその師、京傳にまさつて居る特異の點は結構の才である。京傳は短篇の中にも甚しくその脚色の糸を錯雜混亂せしめるの失がある。さるに馬琴は好んで長篇を作るけれども、條理整然一糸亂れず、照應歴々として掌を指すの觀がある。而して斯く多作し速成して尙且京傳の如く類似重複の點少く、變化を生み、波瀾を重ね、層々疊み來りて人をして案を拍たしめるの手腕に至りては、流石に大家である。その抱有してゐる倫理觀に多少の獨斷褊狹の議

があるにもせよ、余輩は馬琴を推して江戸三百年間に於ける小説家の泰斗と仰ぐのである。

十返舎の膝栗毛、式亭の浮世風呂、浮世床、春水の梅暦等太平の逸民を描いて筆々人の顔を解き、解語の花をうつして言々眞に逼るの手際に至りては、これまた俄かに卑猥汚俗を以て排してはならぬ。要するに是等の文學は希望もなく悲愁もなく而して喜劇的にして、宗教の感化を脱してゐる點にその特色はこもりてゐる。

獨り國文小説のみ長足の進歩をなしたのではない、前にも叙せる如く平民の贊をもてあそべるより、美術工藝に觀る可きものを出したは事實である、然かもたしかな事實である。さればにや池無名、圓山應舉の如き曠古の名家あり、その門下には松村月侯別に四條派を創め、谷文晁は殊に定信公の知遇を受けて文晁派をおこし、書家には市川米庵、卷菱湖など唐様の大家を出し、蔚然として文化文政の太平を飾つた。そして一方には吉宗が洋書の禁を解いてから蘭學も發達し、中津の前野蘭化はその中興の祖とも云ふ可く、之に次いで杉田玄白、桂川甫周、大槻玄澤等輩出して、醫學の上に別に新境を築いたのである。

以上叙述せる如く世はやゝ自由研究の新傾向を帶び來ると共に、その弊も多少伴隨してゐるは勢の然らしめるところ、亦奈何ともするところが出來ない。然かし硬文學にまれ、軟文學にまれ、乃至書畫の道に至るまで、清新の氣をおびるに至つたのは確かである。之をものに喩へんか、さながら松柏の綠色濃きなかに、或は目覺めるやうな櫻の入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこめるが如く、千姿萬樣、眞に文學極盛の時代と云つても誣言にあらじ。

中にも和學の研究は冲天の勢を以て進み、餘勢天下を撼かし、遂にわが塙檢校の出づるに及んで、和學講談所の設立、叢書編纂の壯舉を觀るに至つたのである。流風遺韻永へに世人を薰化する檢校大人は、げに時代の産兒である。平民といへど胸一ツは大事である。

而して檢校等の孜孜として修めた和文學に潛伏せる古精神は、今人をして王朝時代の往事を追懷せしめるに至つた。國史を讀むものは固より藤原氏以下、源平武臣の争闘に依りて、皇室が風濤の外に流竄せらるゝを悲まねばならぬ。加之和歌和文は人をして自ら王朝貴族の優美閑雅にして風情に富めるを追想せしめた。その

結果、貴族的王朝政事は固有の國體にして、武臣の執政は一時の權道であるといふの觀念を惹起せしめ、夫の一派の漢學者に刻まれた王霸の説と相合し、勃然として發達した。

鶯去り杜鵑來り、歲月梭の如く遂に明治の維新を看るに至る。而してその根原は一に繋りて檢校等の生けるは、たゞきに在りと言はねばならぬ。げに心眼の名に背かぬと云ふべきである。

エルヴキング曰く、小人の精神は不幸に遇へば軋ち

屈伏す、大人の精神は之を凌駕して上る。

ナボレオン曰く、境遇か、我れ境遇を作る。

第二章 郷里に於ける檢校

第一節 檢校の祖先

溫古堂塙檢校は、名は保己ほのい、氏は荻野、その塙とよべるは師雨富檢校の本姓を冒されたからである。水母みづもとは、その雅號で、楞嚴經などにある水母以蝦爲目といふを採つたとの事である。たどりて遠い祖先に洊れば、白樂天と肩を並べた參議小野朝臣篁卿の末流で、世々武藏國兒玉郡保木野村にすまはれた。

篁は人の知る如く參議岑守の子にして、少年時代には、一に騎馬に耽り、また學業を事としない、一朝悟るところあり、乾々自強、年僅に十三才にして文章生に及弟し、居常母に仕へて至孝、家は素より清貧であつたが、俸入はことごとく親友に施して毫も吝む氣がない。詩文草隸はた佛畫のはてに至るまで、巧を極め、幾多世人の膽を寒からしめた。されど人となり不羈にして直情徑行、この世に容れられず、時には隠岐に流され、また野狂の評を受けたこともあつたとの事である。

これは是れ檢校の遠祖の略歴である。文學に堪能なことや、定省を缺かぬことや、

何くれと檢校の面影を偲ばれる。殊に十三才にして文章生に及第したる如き、檢校の意を決し江戸に上つた齡とである。簗と檢校、時を異にし處を異にして居るから、符節を合すが如くその契合を見ることは出来ないが、一畝に播いた種子は、風雨多年、やがて纖維となり筋肉となりて、その古昔むかしを忍ばせると同じく、施しの厚いことなどはよくも似通うてゐる。

この簗卿から丁度七世の孫に孝泰或隆泰といふものがある。武藏守となつて任に赴いたが、この頃のならばして、任果て、後も多く、の莊園を占領し、留り住まつて居た。その子義孝(義隆)も父君の後を嗣いで、同國多摩郡横山の里に家屋を構へ、遂に國人となつたが、財産も相當にあつたと見えて、武藏權守に請しなりて五位の位をさへ賜はつた故、野大夫または横山大夫とも稱へた。この野大夫なるものに子供が十人ありて、横山黨の始祖は太郎資孝(資隆)、猪俣黨の始祖は三郎時資である。孰れも一族多く共に世に聞えた名門である。中に就いて八郎義兼は横山野八と呼ばれたが、その子の新大夫盛兼といふもの、相模守源有兼の女を娶りて三郎季兼を生んだ。然るにこの季兼といふもの、外戚の祖父有兼が養子となりて、かの國に移住し、字を

海老名の源太と改め、永く彼處の國人となつた。是時から小野氏を改めて村上源氏の姓を冒したとのことである。

その子季定(或季貞)もまた海老名源八と呼ばれ(或源太、源三)後に相模權守となり、横山新大夫季兼(資孝の孫、一説に隆兼が女を娶りて數多の子をまうけた。海老名とか、本間とか、國府とかいふのは、皆この末裔である。

その五郎に季時(或季重、俊重)といふもの、初めて荻野五郎といひて所謂荻野家の始祖である。この人は伯叔にあたる小倉二郎經孝(孝兼が子、或經隆)の女を娶りて數多の子があつたが、惜しいことには、治承の亂に平家の方人して右兵衛佐主を射た罪に依りて終に殺された。されど、うからやから打もそろうて、鎌倉殿の家人となつたがために、季時が子供も皆その員に加はりて、同じく永く鎌倉に仕へることが出来た。

この中には、武州とは素より因縁の淺くない族も多かつたと見え、ボツ／＼その方に移住するものもあつたが、是れやがて彼の先祖とも云ふべきであらう。

それより幾多の星霜を経、元和の亂に荻野某、難波の城にこもり、事果て、後、郷里

なれば武藏に飯り、保木野村に隠れ、永くこの地に住むてさゝした腰にたばさんだ
 兩刀も、いつのまにか鋤犂と化し、矢咄びの音にうたゝねを醒ました身も、謾々たる
 松風に鼻唄うたうて、牛や馬を引く氣樂な境遇と變つた。門人中山信名の記載に依
 れば、

この人編者云、荻野某を指す持たりし太刀は、胃割と名つけて、難波の役に、敵
 を胃ながらに切りたるものなりとて、家に傳へたりしが、中頃故ありて他の
 手に渡りき、又そのをり用ひられたる釜なりとて、いと古き釜一口あり、今に
 大人の家に藏す、太刀は三尺ばかりありしと云ふ。

右に依りて荻野某なるものを觀るに、武勇の衆に勝れて居たことは、粗々推想する
 ことは出来る。斯くして文道に長けた參議篁卿の後に、武道に秀でた荻野某を出し
 た、而して胃割の名刀は今傳つて居ないらしい。

第二節 檢校の一家及幼時

胃割のことありてより數代、事なく一襲一笠の閑生涯をおくり、遂に宇右衛門と
 いふに至つた。この人宇兵衛を生む、この宇兵衛こそ、所謂温古堂塙檢校大人の父上
 である。性、陰德を好み、他人の爲には寸毫も私利を營まず、己がいたづきをも忘れて
 いそしみつとめるといふ性質で、かの遠祖篁卿の家の貧しきにも拘らず俸祿を友
 人に頒つたと酷似してゐる。人若し疫疾病など病むものがあれば、現在血を分け
 た親戚でさへ、病の傳染するのをおそれ、ためらふならはしなるに、毫も厭嫌の色
 なく、自らその家に行つて看護みとどり至らぬくまもないと云ふ位であつたから、
 宇兵衛の骨折で生命を拾つたものも少くない。して、村人からも宇兵衛とあが
 められ、いつくしまれて、誰一人その陰德をはめたゝへぬものがなかつたとのこと
 である。その他の行ひも皆このすが／＼しい心根より湧き出た泉、いかで濁波をあ
 げて人の面魂を汚すやうなところのあるべき。爲る事、なす事、皆規にかなひ矩にあ
 うて、いさゝかも足らはぬところがない。この人、加美郡藤木戸村の父老齋藤理左衛門
 の女を娶つたが、この理左衛門も信名の描くところに依れば、

この人編者云、理左衛門を指す親に孝行なりければ、公より祿たまはりて賞せられき。孝義錄に載せらる。これ大人の叔父なり。

とあれば、その至孝仁慈、世にいふなだけ深い方であつたことは分かる。而してその女に就いては語りてないから奈何なる性質であつたか判じがたいが、孝義錄に載せられる位の人の血脉を傳へてゐるから、たしかにたしなみのあつた淑女であることは考へられる。この二人の間に呱呱の聲をあげたは、即ち替學者として一世をゆり動かした温古堂嫡大人である。時は延享三年(二四〇六)五月五日で、家々吹流を樹て、柏餅や粽に舌うちし、あるはやめなど貰いて節句を祝へる時であつた。之を大きく云へば、丁度九代將軍家重公が巡察使を諸國に遣り、風俗を査察させた年で、波斯革命の前年に當りてゐる。夫の庶物類纂一千五十四巻の表れたのもその翌年と覺えてゐる。而して延享三を以て生れた名たる二三の學者を擧ぐれば、文章を以て江戸三百年間に鳴りひいた村田春海を初として、荒木田久老の如き、また漢文界に一旗幟をあげた頼春水、村瀬栲亭などの諸名家である。なほ佐々木琴臺などもたしか延享三の生かとおもふ。是等の諸員は琴臺の五十五才を短とし、栲亭の七

十三才を長とし、皆檢校の生存中に死没された。

さて檢校の生國武州は、仁俠を尙び、樸素の中にかよわいもの、貧しいものを助けてやるといふ風であつた。能く物に引かれる最明寺殿の人國記といふがある。その文體より察すれば、恐くは足利の末に成れるものであらう。その書に武州の俗を評して、

武藏國の風俗、潤達にいて氣廣い。例へば秘藏の道具を過によりて損ふ時は、そのもの、恐れ悲しむは最もなるに、その主曾て後悔の色なくて、結句それに恩を與へて情を深うする類の心なり。子細は秘藏の器をたくみて割るべき様なし。我も人も過するは無念なりと雖も、咎むるは又この方の過なりと思案而名人の風俗なり。因茲軍に合うて敗軍すると雖も、敢てその氣を屈せずして能く氣を改め、敗軍の士を集めて出陣するの類なり。凡そ氣に乗ると氣に後るゝとは雲泥萬里なりと雖も、乗るゝも後るゝも亦強ひて可なりとしがたし。只道理による時は氣に乘じ、不可なる時は己が非を知りて承而制するを上とす。然れども是國風尤もいさぎよき風俗なり。次に氣廣きを以て驕る氣強し、口傳、

斯く言つてある、同じ武州といへど、今では東京府もある、埼玉もある、神奈川もあるから、單に埼玉のみを指せるものでもないが、概して潤達にして氣廣く、仁俠にし

て弱者を扶くるの美風あるは、江戸時代以前よりの遺風であつたかのやうである。殊に「草より出で、草に入る」夫の武藏野の曠原を控へ、武甲、三峯、兩神等の高峯聳え立ち、荒川、中川、利根、江戸、入間、多摩川等大小河川のたてよこに貫流するありて、吹きおろす嵐に胸塵を濺ひ、渦巻く巨濤に磊塊の氣を遣り、自然の風物凝りて偉人傑士を出すの趣がある。前には奥貫友山、後には權田直助を見る。余輩は奥貫氏の慈善家の譽れの高きを知ると共に、權田氏の常に

「神にも人にも我が心にも耻ぢざるを以て心とす」

と言へる敬虔の念を忘れてはならぬ。是等は一にこのけやけき山川の靈氣に化されたのでなからう乎。

檢校の生れた兒玉郡保木野村といふは、この州の一隅で、嵯峨たる御嶽陣見の諸山を眺め、濛々たる神流のながれを耳にせる彼は、偶々三才にして肝の病を患へ、五才といふに全く盲目となつた。當人の切なさば云はずもがな、かぞいの悲嘆げに例ふるに物がな。失明の年月に關しては古來三説に分れて居る。

第一、五才説……中山信名、塙次郎、

第二、六才説……典藉秦鏡、生家口碑、一話一言(蜀山人)

第三、七才説……温古先生傳、人名辭書、久保宮司、

の三説であるが、初めの五才、失明説は正しい。尙、生家の口碑に依るに保木野村から三十町ばかりのところ、藤岡といふ所がある、そこに桐淵といふ醫師があつたが、その許に治療を受けさせて居たが、或時、歸途藤岡河原のほとりに來た時、背なる彼があまりに泣く故、よく／＼見たところが、早や兩眼はつぶれて居たとのことである。斯く幼少にて明を失せる故、色彩の觀念も至りて淺く、たゞ柚の色と、はほづき提灯の色のみは知つて居たと傳へてある。

この時代のことであらう、農童牧兒と連れ立つて草を摘めば、よく芹と蓬とのけちめをあやまたず、又栗拾ひにさそはれ山の奥に放たれても、獨りもと來し道をたどり來るに、毫も迷ふことなどなかつたとか聽いて居る。

兩眼を失うた當人よりも、それを朝夕見てくらす父母の嘆きは一方でない。或時しるべのものが來て、兩親に勸めて曰く、

「寅之助(編者云、檢校の幼名)が歳星恐くはその身にかなふまい。早く歳星の次

を轉じたら可からう」

と云つたものだから、やがて承けひき、生年二歳を減じて、戊辰の生に準へ、辰之助と改めた。又同郡池田村なる驗者正覺房が名になぞらへて一名を多門房といひ、只管その子の利益を祈つたのである。子の爲には親をさなくなりぬべし」ともあれば、單に迷信とのみ蹴なしたまふな。

また彼は幼少より百千の草花を愛でたことは、信名の筆に明かである、曰く、

幼少より木草の花を好みて、いまだ盲目ならざりし時、野邊に出て、莖數種を求めて前栽に植ゑられしことありき。もの見すなりて後も何にまれ花咲く木草を數多植ゑおきて、人の見喜ぶことあれば、みづからも並ならず樂しみめづること常の業なり。されば人もし物の色目を語らんとする時に、花の色につきて云へばいと悦びて語られき。

とある。彼が幽雅の念、優美の情、この數句にあふれてゐる。花の色につきて云へばいと悦びて語られき」とあるが如きは、その俤を推想することは出来る、彼の望を詠める哥二首あり。

▲一夜ねし名殘あかすも朝露にぬれて莖の床ぞまちかき。

▲眞萩原散りし草葉と見るまでに莖花咲く野邊の春かせ。

の如き景樹の「わが屍」の詠も偲ばれてをかしい感じがする。

斯くて六七年の間は、まとまつた教育こそ受けねなさけ深き父母の膝下に起臥しつゝ種々の物語を聴いた。總て明所は快活、向上、勤勉の念をおこすに反し、暗所は陰忍、退嬰、懶惰の情を誘ふは世の常であるが、彼が暗に居て然かも屈せず、乾々、疆めて息まぬ精神は、その個性の然らしめたるころもあらうが、亦父母の教へ草の便りにからみついて、修養に怠らなかつた結果でもあらう。

寶曆七年六月十三日、彼が丁度十二才といふに慈愛にこもる母上は、清室妙蓮大姉の法名をなごりとして草葉の陰にかくれた。隻手を失うた彼のあはれさ、げに形容に堪へない。是より斷然東都に出て名を揚げ身を顯はし、以てこの風樹の嘆を償うとした。想へばおのれ呱呱の聲をあけてから、一日片時も父母の御心を休めたとはない、襁褓の中は云はすもあれ、六つ七つ——世の常ならば、母懷を離れ、獨り遊びする比も、長のいたつきに盲目となり、客の上下、帶のしめ様に至るまで、一々母上

の手を煩はし、何一つ恩がへしもせぬ中に、早や幽明處を異にした。泣けど叫けべど、た、ち、ねは、飯り來まさぬ、せめて墳墓なりとも拜みたしと、一杯の土を手まさぐるにつれ、ただ、腸の九廻するを覺えるばかりである。信名、當時の小話を傳して曰く、

當時某とかいふもの、太平記一部を暗誦し、東都に在りて諸家に出で入り、名を顯すと聞きて、大人心におもはく、太平記は全部四十卷に過ぎず、之を知るを以て名を顯し、妻子を養ふことを得難かる可きことかは、こゝに至りて東都に出づるの志いと切なり。

彼の把住力に富んで居たことは、吾も人も許すところ、太平記の背誦位は彼にとりていと易きことである。これで父母の名をあらはすは掌を反すよりやすい。焉んぞ槽櫪の間にくよくよして、あたら日陰の葛羅とならうぞやと意氣軒昂、いよ、臍を固めた。

筆の序に、江戸に於ける太平記讀の現状を描くも趣味なきことでもあるまい。さて太平記讀と云つても、單に太平記のみ談するものではない、主として太平記を講

するより太平記讀と云つたもので、事の初めは、元祿の比、清左衛門や青龍軒などおこり、享保中神田白龍子と稱するものあり、太平記の如き軍書を講釋するを以て大名旗本の居館に出入す。同時に靈全、瑞龍軒、志道軒などの名人あり。寶曆年間馬場文耕、江戸采女が原にて聲譽を博し、次いて天明寛政の交、森川馬谷、笹井燕尉など講釋に妙を得、文化中、伊東燕晉、將軍家齊の前にて之を講じてこよなき譽れを得た。

太平記讀の由來變遷の一斑斯くの如し。江戸にては元祿のむかしよりはやりしものなれば、彼が十一二才の比には盛んにもてあそんだものと見える。してこの業は匹夫の身で、大名旗本のや、か、たに恣に出入し、以て綺羅星の如く居並ぶ大名小名を驚かすことを得たものである。

諺に、鳩は射られてその矢を蔽ふといふことがある。彼は兩眼を失し、剩へ母上を喪ひ、いと勇みたつたのである。超えて寶曆八年十三才といふに江戸に上り、音曲、鉦鼓等に手を染め、遂に轉じて漢文、和歌、律令の方面に心を潜め、幕府や水戸家の恩顧をも受け、遂に空前曠古の大編纂、群書類從を完成されたことは、章を逐うて叙述することゝし、こゝには單に家系の梗概に止めよう。

檢校の弟、卯右衛門のことも一寸挿入しておく。卯右衛門は、どういふものか、兄とは反對の性質を有し、とかく放蕩がちにて不真面目なるより、彼も呆れはて金銭では救助しなかつたが、地面を買うて與へたことは前後數回、今も檢校面といひて残つて居る。やがて不動産になれば浪費しにくきより斯様にしたものであらう。明和二年十一月廿三日、丁度檢校が二十才の頃夭折された。臨雲道般木居士とは、卯右衛門の法號である。

こえて天明二年(三十七才)紀伊家の醫師東條清民の女を娶り、翌年一女トセ子を生んだ。このトセ子といふは、表面は東條氏の出であるが、實は信州上田の人に萩原玄慶といふものがある、その養女某の出である。萩原の養女といふは彼の妾であつたらしい。トセ子は文化元年八月廿一日、中津、廣、昵を養子婿としてもらつてあつたが、故ありて離縁となる。廣昵は中津三左衛門廣多(舊幕の旗下の士、高百五十俵)の三男で、その離縁となつた月日は未詳なれども、堀氏留記に文化十二年廣島香取に古文書取調として中山平四郎と共に同行したとあるから、多分文政の初年頃であらう。没年は安政五年である。

天明五年、彼四十才の時、故ありて妻東條氏を離縁し、二三年後にいたり、徳川氏御鳥見西文九郎の女タセ子を娶りて四十五才(寛政二年)で長男寅之助を生んだが、わづか八才で夭折した。タセ子は文化元年彼五十九才の時病死された。現に四谷安樂寺に安養院往利淨生大姉の石碑が建つてゐる。

それから彼は妾イヨ子をもらうた。イヨ子は山形藩岡田惣次郎の女で、もとはイシ子と呼んだ。義貞院梅雲妙香大姉とは法號で、天明元年の産、丁度彼の三十六才の時生れたわけである。結婚の年月は分らぬが、とにかく彼の五十七才といふに、このイヨ子の腹に道之助は生れたが翌年没した。六十才の頃、熊太郎を生んだ。この人は後に五味和三郎といへるは五味忠次郎の養子となつたからである。井上頼園翁の談に、

總領に和、三郎といふがりましたが、極愚かなもので家を嗣がせるわけにも行かず、他に養子にやりましたけれども、頼と御話にならぬ様なことで離縁になつてしまひましたが、版木をすることが妙に上手で、他の事は兎に角、群書類從中に載つて居ることならば、僅か二三行のもので、整と何巻の何

枚目にあるといふことまで記憶して居りました。その子息に、三次といふが
ありましたけれども、これも無學で亡せてしまひましたから、總領の血統は
これで絶えた理でございまして……(讀書新聞明治三十六七年頃の五月十
八日刊)

と云ふに依りて見れば、熊太郎も三次もはか／＼しからぬものと見える。

次いで六十二才で次郎忠實を生んだ。次郎の子に忠詔、幸正、孫に忠雄といふがあ
る。斯くして妾イヨ子に、彼が六十八才の文化十年二月十一日に暇を遣つたが、丁度
その時イヨ子は三十二才のみづ／＼しい時である。後、徳川家御先手與力の渥美惣
次郎へ嫁し、橘藏、セイ子、惣之助を生む。橘藏以下身長六尺餘とか傳へてある。萬延元
年閏三月十三日、享年八十才で没した。淺草森下松應寺に葬る。萬延といへば、檢校よ
り四十年程生きのびたわけである。

年譜に家女とあるはイヨ子のことである。妾のあることは石原正明の年々隨筆
にも見えてゐる。今の小石川區小日向の服部坂に居つたとのことである。相應に文
字も書いて群書類從の假字書きのところは、彼の本妻の安養院と二人で書いたの

は多く現に井上頼園翁などは幾度も面談されたさうである。

次には順序として次郎と敬太郎との事を物せねばならぬ。然れど略歴は巻頭に
掲げてあるから、單に二三の事を添加しておく。

次郎忠實(二四六七―二五二二)の經歷については、附録なる井上博士談にもつば
らに述べてあるから、ホンの面影だけを描かう。さて、その頃淡路の生れで、江戸に鈴
木重胤(二四七二―二五二三)といふ國學者があつた。この人は大國や平田の傳統を
承けて幕府の家來分となつた人で、日本書紀傳寫本四十一卷、百四十七冊を著し、そ
の中に老中安藤信正(二四七九―二五二四)の内命で次郎と前田夏蔭(二四五三―二
五二四)の兩人は、廢帝の典故を按ずと書いたものだから、浪士等の狙ふところとな
つた。次郎一日歌筵につらなるため、駿河臺の中坊陽之助の家に赴いたが、浪士等歸
途を要して次郎の門前に暗殺した。享年五十六才、丁度文久二年十二月廿一日の夜
であつたが、翌廿二日亡き數に入つた。大日本人名辭書(經濟雜誌社)などには文久三
年とありて次郎の年を四十九としてあるはひがことである。尙次郎は佛國軍艦の
内を借りて典故を調べたなどとの説もあるが、大なるあやまりで、元來次郎といふ

人は風流人で、歌や茶湯に心を潜め、たえてソナナあらくししい事に當る性質ではない。而して斯く嫌疑を受けたといふものは、數々信正の邸宅に召されて、寛永以前幕府が外人を遇せる式例等を取調べたのをあやまり傳へたものと見える。夏蔭も信正と同年に亡くなつたが、夫の蝦夷志料の編纂で名を賣り、貴顯のひいきで、常に門前鞍馬市をなすといふ有様、殊に烈公などの恩顧を受け、英米露等へ贈る書簡の撰文をなした位のことである。次郎も父檢校の後を嗣いで、國史和歌の道に長けてゐたがため、老中信正の知遇を受けたことはたしかである。若しも樞廻家の一筆がなかつたなら、こんな横死を遂げなくともよい。而して應報とでも云はうか、重胤も文久三年兇徒のために本所小梅の僑居に殺された。

次郎の惣領敬太郎忠詔(二四九二)もまた國史和歌の方面に眼を注ぎ、史料取調のためには少からず力を添へた人である。慶應三年五月十三日、將軍宣下御祝儀の和歌を献上し銀五枚を賜はつた。現に下谷區入谷町三三二に住まはれ、本年七十七才の高齡である。妻は幕府の醫師安東宗益の女で、その子忠雄も三十一文字に精を出してゐる。

檢校の子孫は之に盡きた。轉じて保木野村なる弟卯右衛門の血統を尋ぬるに左の如き順序である。



右に依りて觀るに、卯右衛門より今は四代目にあたるわけで、何れも女系を以て嗣いて來たのは奇である。編者云、卯右衛門の卯は字であらうとおもへど、石碑に卯とあるから假りにそれに從うた。

尙こゝに附加しておきたいのは、養子彌七のことである。彌七は同郡上真下村片貝莊七の男で、萩野家のタニ子に嫁入したが、八十六才で天年を了へた。寶譽淨光信士はその法號である。タニ子は享年四十九才で、たしか安政三年三月廿二日來雲妙迎信女の法名を残して亡くなつた。丁度この時代のことである。保木野の領主永嶋永之亟の厚意に依り、彼の生家を郷士に取り立て、苗字帶刀を許されたことがある。その免許狀は萩野家に傳はつてある。

申渡之覺

武州兒玉郡保木野村

百姓

彌七

其方家之儀者古來より郷士にて有之候處中興[△]流落に及候得共總檢校保已
一は其家にて出生追々昇進子孫御旗本に被成候に付公邊向御差出の家譜
には古來の格を以て郷士の趣書上被置候就ては其方家の儀苗字帶刀の家
格と可心得候此段申渡候也

地頭所内

元治元子年十二月

松田 宜[㊦]

右 保木野村

彌七江

前書之通相違無之候以上

永門直之丞[㊦]

右の免許狀に徴するも、荻野家は百姓ではあるが、なか／＼御おぼえの厚かつた
ことが分る。

これで塙家の畧系を叙し盡した。かへり見るに、その昔、參議篁より脉々として流
れ來た風流詞人の血統は、時に顯はれ時に隠れ、出沒奇變、一以て律することは出來
ないが、要之、堇となり棘となり麟となり鳳となりて人を駭かし、世を益したことは、
如上の事實に見ても、粗々推想せられる。

盲人の十六文字

曉月しばらくありて船の數……………	西郷	吾涼
おもむるに若葉の中を白帆哉……………	同	人
咲く花の兄は兄ほど色香かな……………	杉田	望一
心にて見るが見るなり月の色……………	白馬	山人

第三章 江戸に於ける檢校

第一節 技藝と讀書

坂谷朗廬曾て保巳一傳に叙して

曠世偉人四字、保巳一外、恐皆有愧色、可敬可欽、

と云つてある。げにや彼は曠世の偉人である。ひとり盲人界で異彩を放つたばかりではない、廣き國史國文界に於て諸名家をして舌を吐かしめた。彼の記性の強いことや、彼の判斷力の確かなことなど、何とも喩ふるに物がない。之を史に觀るホメロスは生時市中を謠ひて錢を乞うた盲人であつたが、後には英雄中の英雄とも云はれる奈翁の眼には、無上の師として映じたとか傳へてある。如何に寒素の家に生れ落ちて、一種の信念を保持し、直き道をたどりて只管努めんには、なごか家の風を吹かせ得ぬことがあらう。殊に彼は

人と爲り温和にしてつねに酒色を好まず、世の人の爲に信せらる(温古先生傳、寫本蜂須賀侯爵所藏)

とあるから、極、穩やかな、云はゞ人から愛でられる、性質であつたらしい。

前にも述べし如く、彼は十三才といふに、いよゝ江戸に上ることを決心した。當時のことを大日本人名辭書には十才失母とあるは僻事である、また中山信名の温古堂塙先生傳に、

十三といふ年の春(寶曆十年庚申三月)父に請うて絹商と共に東都に至り云々

とあるが、寶曆十年は八年のあやまりであらう。若し十年とすれば彼は丁度十五才になるわけである。尙江戸に上つた年月にも異説がある。試みに左に駢記せんに、

第一、十三才説——中山信名、温古先生傳、古學小傳、

第二、十四才説——伊東宗益、久保宮司、

第三、十五才説——石川二三造、本朝善人傳、

かの典籍秦鏡などには單に十餘才、江戸に出づとして明かにその年數を示さない。以上の諸説いづれを正とするかは、今から俄かに判じがたいが、檢討調査の末、第一説の十三才説を採ることゝした。

されは家は不如意である、垂乳根には訣れた、あとに残れる父上のみを煩して、あたら一生を蟹や猿の仲間におくるも、暗甲斐ないと、父のゆるしを受け、頃は寶曆八年三月、彌生の花々もりといふ空に、わづか十三の盲小僧は、かよいい一身を草鞋脚絆に踏みかため、素麵箱のむくつけきに、いさゝか着換など入れて、涙にかすむ父上と分れ、遠く東の空に旅立した。母と訣れて一年もたぬに、又々父と分るゝ切なき、眞に腸もちぎれるばかりである。されど未來の運命を思へば、なにこれ式のこと、氣を屈すべきと心の駒に鞭ちて、本庄熊谷、吹上とたどり、鴻巣、桶川、上尾とよぎつた。丁度同行したは同じく江戸に上る一人の絹商であつたから、道々かたみに抱負を述べて、他日の功名に勇み立つた。この絹商は出府の後、與力の株を買ひ、とう／＼町奉行までに昇進し、根岸肥前守と云つた人である。そして江戸で落ち着いたところは、土手四番町の東條源右衛門(大御番)の家である。

この頃四ッ谷西念寺横町に雨富須賀一といふがあつて、なか／＼巾を利かして居つた。ほどなく彼もその門徒となり、その家に移り住み、辰之助を千彌と改め、いよ／＼盲人一坐のならばしに一身を投じようとした。さてこの須賀一と云ふは、本姓

は塙と云ひ、常陸國茨城郡市原村の人で、雨富といふは盲目の坐のならひに在、名といふもので、云はゞ別稱である。この時代の風として、本氏をそのまゝに在名に用ふるものもあるし、また殊に設けて稱ふるものもあつたらしい。

それはさておき、茲に一の挿入談がある。それは斯うである。

第一の異説：中山信名は十三才で江戸に上り、直に雨富に入門せる如くものしてあるが、不忍文庫の温古先生傳には、

十三のとし、江戸へ出て、鍼術を學びけるに、頗る其妙を得たり、寶曆十辰のとし、十五才、三月雨富檢校須賀一の弟子となり云々。

とあるを以て見れば、江戸に出て二三年間鍼術を學び、それより更に入門せるやうに思はれる。初めから雨富に弟子入したとは見えない。

第二の異説：また、絹商と共に江戸に上り、彼は東條源右衛門方に落付いたといふのは通説であるのに、五月雨草紙にある伊東宗益の談によれば、同行せるはやはり替者で、江戸に着いてからたよるべきたづきもないので、九段坂上でさめ／＼と泣いてゐたとある。

この伊東といふ人は幕府の醫師で、廣く學者に交り、塙家とも茂く往來し、忠詔の妻もその女であるより見れば、架空の謬傳とばかりも消されない。曰く、

この人も信州の産にて、編者云、檢校の生地を信州と云へるは彼の妾荻原氏の養女は信州上田の産なるより斯く謬つたものと思ふ。年十四の時、替者兩人にて江戸に來りしか、手寄る所もなかりしと見え、三番町九段坂の上にてさめくと泣き居たり。折節小雨降る日にて、其體甚だ憐に見えしが、彼内藤安房守といふ人、御殿より退出の折柄、この様子を見て甚だ怪しみ、駕籠脇の侍に命じて如何なる譯ありや尋ね來る可しと申しつけた。因りて侍は彼者の側に來り、子細を聞けば、答へていふ様、我々兩人は遠國のものにて遙々江戸へ修業のため出てたるが、本銀町にかねて知る人ありて尋ねたるに、その人は今行方知らずなりぬれば、頼む木陰に雨漏りて詮方なければ、またまた國許に戻る可くやと談合中なりと云ひしかば、その由、つぶさに安房守に申したるに、安房守それは如何にも不憫の至りなり、ともかくも屋敷へ伴ひ來れとて連れて歸り、遂に長屋に入れおき扶助されたるが、その一人は琴を

習はせて終に名士と呼べるゝ上手になりき。其名は忘れき。塙は極不器用に
して云々

とある。この内藤安房守と云へるは、次郎と入魂で、學才もあり和歌も詠まれ、屋代弘賢の門人であるから何かのゆかりはあるらしい。かの桂園香川氏のごときも上京當時は毎夜、按摩の笛吹いて日を暮らしてゐたことである。思ひあはされてをかしい。

第三の異説：信名の筆には彼の江戸に上れるを以て、父に請うてといひて、彼自身の發意で江戸に上りもし、又一身の落着もつけたやうに見えるが、生家の口碑に依れば保木野村の領主永島直之丞は、内外一方ならぬ心盡をされたりしい。この永島といふ人は彼を凡兒でないと見てとり、いろ／＼心を碎いて江戸に出したものと想はれる。この永島の荻野家に對する厚意は長く續き、養子彌七の代に彼が生家を郷土に取り立て、苗字帶刀を許可されたことは前章に已に述べた如くである。

かやうな異説の出てくるのは他にも例がある。たとへばかの桂園景樹は因

幡の故郷を出て上京したのは二十才前後のころであつたが、彼が自筆には「忍びに故郷を出てたり」とあるから、たしかに出奔したものである。然かし野史の説には父母に請うて出たやうにある。是等の事は、事小に似たれど、彼是似かようであるから一寸附加しておく。

是等異説の數ある中で、孰れを正、孰れを僞と俄かに斷じかたい。彼此參酌商量して彼を悉ぶの資料に供しておかう。

さて彼が一たび雨富の門人となりて、盲人御定りの琵琶、琴、三絃などをはじめ鍼治、導引等のなりはひ草を學べど、なか／＼上達しない、大樣盲人の常習として聴覺や觸覺の鋭きことは勿論、延いて音曲針按には殊に妙を極めて居るものだが、如何なることわりか、彼は至りて無器用で、琴、三絃は云ふも更なり、手業の果に至るまで盲人のなりはひとなるものは一も能くしない。去れど歌詞だけは一度聴けばいつまでも忘れずに諷誦したと傳へてある。斯くかんの鈍いのは、あまりに記性の發達しすぎて、他に力の及ばなかつた爲であらうか、將又、より以上の大きい律々しい文學の大道に意を專にし、こんな小技末葉にうき身をやつすは詰らんと考へを有

して居つたものだらうか、一女トセ子の所傳に依れば、

多くの替者は、かんのよきものなるに、大人は然らず、つね／＼路ゆく折には曲り角、或は橋梁などのほ／＼困じなやめるやうにてありける。又食事の折にはいはゆる握箸もて椀の向うの端より口に搔いこみ食せり云々

と、以ていかに無器用であつたかは推想される。また二十才前のことか、精限り魂限り盡しても音曲按摩の術に拙くて、師匠からも責められ、同僚にもひげを取る、斯くては世渡るすべもなし、徒に長らへても何かせん、如かず身を亡きものにしてこの苦悶を遣らんと、九段坂のはとりなる牛ヶ淵に投せんと、そこまで辿りついたが、さてさて、これでは餘りに女々しい、且つ初志にも背く、成らざるは爲さぬからだ、と我自ら我を責めて引返したこともあつたとか云つてある。又曰く、

大人性來至りて無器用にて按摩鍼術にも拙なかりけり。殊にかん、甚だ悪しく琴三絃の藝など三年が程習へども／＼かんど、こも分らず調子もあはず。果ては音曲のことには心も染まず、只管、文の道に勵まれたり。

と、またその條を忍ぶことは出来る。

斯くて雨富に入門した翌年、即ち寶曆元年々十四才にして百華庵萩原宗固(二三六三—二四四四)の弟子となり、物語やうの文をも讀み、かたはら和歌も學ばれた。この宗固といふは武者小路實岳や冷泉爲村の門派で、四ッ谷本村町に生れ、同じく左衛門町に住まつて居られた和學者で、歌集志野の葉草は刊本になり、今も残つてゐる。

夢なれや枕ならべてねし人も聽かぬ初音の山ほとゝぎす (夢中郭公)

もりかぬる木の間のかげのよひ——に出ても月をまつの下菴 (松宿月)

いつよりか鳴きならひけん片言に今朝春告ぐるひなの鶯 (早春)

としくれて春のいそぎはさく梅のさかりをいつと待つばかりなり (閑居歲暮)

などいふ風の歌を詠んだ人である。また蜻蛉日記の注釋は一寸面白い本である。

それから川島貴林といふ儒者は、その頃山崎の流派を酌みて、神道にも造詣の深い人である。彼はこの儒者について小學近思錄などの手近いところから、異朝の文籍をなにくれと習うた。折節には神道の教をも受けて、わが惟神の道のまめやかなことも味ひ得た。

又雨富の隣家に松平乗尹(織部正)といふ人が住まはれて居つたが、至りて文讀むわざに執心し、彼の學才の超然群羊を抜いてゐるのを見てとり、いと懇にして劇務のひま——には物讀み教へなごしたところ、彼もいと喜びいさみ、繁くその家に往來したとのことである。信名は、

はげしき務のひまには物よみ教へければ、大人もいと嬉しきことに思ひ、其家に行き通ひて契約を立て、あしたの寅の刻より卯の刻に至りて、一時がはごは必ず文よみならはれけり。乗尹は公の務いとまなき人なれば、一日を隔てつゝも斯くはせられけり。

とあり。又山岡明阿俊明(二三七二—二四四〇)は博覽強記、洵に學才絶倫のきこえ高かつたがため、この人に就いて律令の學ををさめられた。明阿一代の編著は夫の本朝類聚名物考四百餘卷で、傍搜博引當時を踏みならしたものだ。彼の羣書類從などもこのわたりの影響はあつたかも知れぬ。明阿の歌風を見るため左に狂詠と取りませて二三首を示さう。

今日からはころり坊主になりひさご人にかゝりて世を渡らばや

白壁が遊女の書に

書にかける女でからがいたづらに動くといふはあゝおはづかし

竹もといふところに假の宿をもとめて

いざさらばいざゝむらたけ門さして一よ二よのかりねをやせん

辭世

もゝとせの半もなんのうつゝかはおもへば蝶のゆめさへもなし

等の詠歌でその一斑は分る。

この他、彼は難經素問などいふ醫書をば、品川東禪寺の僧孝首坐に學んだ。斯くの如く音曲鍼按を修めるかたはら、漢學、神道、和文、和歌、律令、醫書等の道々に手を染めたは、如何にその好學心に富めるかは偲ばれる。伊東宗益の談に、

埒は極不器用にして遊藝種々習はせても何一つ覺えず、唯晝寐のみして甚た懦弱なりしが、たゞ百人一首を能く覺え、其外書物を讀むを好んで終日倦まず、安房守之を聽いて、さては彼には書を聞かせ、且つ歌を詠ます可しとて、

師を撰み歌を覺えさせしに、果して上達せり。廿一二の時か、既に著述の書ありしといふ。

單に雨富の世話ばかりではない、この安房守の庇陰を蒙つたことは前にも述べた如くである。溫古先生傳にも、

數年高井大隅守に宿居いたして、晝は出て、鍼術を學び、夜は飯りて高井の側に侍りて、かの妾の百人一首の歌讀み侍るを聽けるが、後は歌の道に心とまり夜毎に聽き侍りけるとなん。

高井大隅守も亦彼の恩人と云ふべきである。いかに和漢はた神道に心を寄せたとして、己がなりはひは音曲である、按摩である、鍼治である。如何で無下に打棄ておく可きと、折々くやしさを噛みしめゝをちこちへ治療に出あるいた、笹山攝津へも往つた、高井山城へも往つた、而して家人に愛ではやされた事は記録に載つて居る。傳ふ、曰く、笹山攝津守(御作事奉行、番町に住す)の妻、常に彼を愛され、その方は疳あしくして食事のさま甚だ見苦し。他家にては食事をひかへて、途中之を食せよとて煮豆を包みて與へらるゝこと常のことなりき」と。

又、高井山城守の妾からも和書を読み聴かされた。高井といふ人は曾て大阪町奉行の時、大鹽平八郎を任用して識見高明也と東瀛に評された方である。その人の妾某はいつも彼を喚んで按摩させたが、その療治代として和書を読み聴かされた。妾某夏日は蚊帳の中に在りて本を読み、彼は獨りツクネンとその外に端坐し、兩手を縛りて之を聴かれた。これは蚊を攘ふために氣を散らし、一言半句でも聴きおとしのあることを恐れたからである。或時妾某は古本榮華物語を購ひ求めて彼に與へた。彼の本を持つ第一着のきざしは、そもこれがおこりとの事である。他日數萬卷の書籍中、珍本秘冊も少くなかつたが、たゞこの本のみはいと大切にひめおかれ、晩年その評註らしいものをこしらへたは思出の記念であらう。評註と云うてもたゞ門人等の書入本）

さはれ、彼、年十八寶曆十三年といふに一座の衆分となり、千彌を保木野一と改めた。さて盲人の官職には檢校、勾當、衆分とありて、檢校とは長官、勾當は次官、衆分は平盲人の座上にあるもので、在名を稱へることが出来るものである。彼は江戸に上つてから六年の修業を積んで、この衆分の階段に一步を踏みつけたのである。信名傳

して曰く、

千日の間、一日に百卷讀まば、この力に依りて衆分となることを得んと、果して期日にして是を得たり、こゝに至りてよく／＼つとめて物よむことを旨とす。もとより記臆すぐれしかば、やうやくその名を知るものあるに至る云々。

と、その意志の強固なる、げに舌を巻くばかりである。一日に百卷讀まばの一句、世の儒夫をして戰慄せしめるの概がある。

公卿といふ膳あり、三方四方の如きものなり、公卿に
する膳といふことにて、公卿といふ。信長記にも、朝
倉義景、淺井久政、同長政と首を薄瀧にして公卿にす
ゑ、隣國の大名在岐阜にて、酒の肴に出し、こそあり、
これ堀檢校の脱なり、蜀山人、一話一言

第二節 師恩と信念

初め師雨富、彼の無器用にて、三年が程に一曲だに覚えぬのみか、調子さへ合はせることを知らぬに、獨り書讀むわざは、駭々として眼に見えるばかりの進歩であつたから、一日彼を前に居ゑて責めて曰く、

凡、人の郷里を去りて他邦に赴くことは、爲すことあらんとての意なり。汝、父母の家を出て、こゝに來るも然かなる可し。されども産業となすべきこと一つも習ひ得るものなし。且、朝夕汝がなすところ露ばかりも我心にかなはず。さはあれど門人の祿となる術、教ふるは師の職分なり。汝が好まざることをなせと云ふに、あらず、賊と博とを除きての外は、何にまれ、心にかなひたらん、ものを、つとむ可し。これよりして三才が間、汝を養ふ可し。三年經て爲すことなくば速に郷里に送りやる可しと云ふ。(溫古堂塙先生傳)

余は讀んで、玆に至り、覺えず案を拍つて快哉を呼ぶもの再度、雨富もまた翻々たる俗人でない。月や花を見るの眼は持たぬが、人を鑑識するの明はある、個性を知るの心眼はチャンと具へてゐる。「朝夕汝がなす所、露ばかりも我心にかなはず」と激勵

し、やがて「汝が好まざる事をなせと云ふに、あらず」といひ、三とせが間、汝を養ふ可し」と慰藉せる如き、抑へては揚げ、急にしては緩やかにせる如きその呼吸といふものは、凡庸瞽者の能くし得るところではない。この師匠ありてこの弟子がある。

して、彼も師の涙ごもれる訓戒にいたく感じ、深く肝に銘した。それからといふものは晝夜のけぢめなく讀書に努め、思索に耽り、意國史國文を以て名を擧げんと勵んだが、とうとうその意を遂げたのである。されば彼は意を得た後も、常に、

我素より讀書を好まざるにあらず、然れども業をなし名を顯はすものは皆師のたまものなり。たれ憾むる所は師、在世の程、かばかりの幸を聽かしむることなきのみなり。(同上)

と云はれたは、彼の真情よりこぼれおちた甘露だらう。これ雨富檢校の師恩に就いて、第一に、數ふべきである。第二に、數ふべきは、能く彼の多病なことを知り、开をいたはつたことである。前にも叙せる如く彼は三才より肝の病に罹り、兩眼を失うたのみかは、とかくやまひがちにて心地もすぐれぬ所から、雨富はなにくれと勞はりかして貰つてくれた。一日雨富、彼にさとして曰く、

爲すことあらんと思ふもの、病多ければ果すこと能はず、病ある人、旅に赴く時は、まゝ癒ゆることあり、思ふに汝が病もまた然かることあらん、我、金五兩を與ふ可し、我に代りて伊勢の神宮に詣てよ、雨降らん日は行くことなかれ、必ずあしき氣を受けぬ可し、費餘りあらばなほ他方に行き、盡くるに従ひて歸り來る可しといふ(同上)

彼は寸陰を惜むの人である、従つて運動は伴はない、暫らく黄塵の巷をさりてろやびやかな五十三驛を旅させるも一の健康増進法に違ひない、伊勢の神宮に詣てゝ五十鈴の清き流れに嗽がせるも、いたつきを癒やすの方法であると、師は斯く極めたのである、しとやかな心根の程おし測られてゆかしともゆかし、わけても雨降らん日は行くことなかれの一言、惻切周到媿々として盡きざるの趣がある、丁度この時は明和三年丙戌、彼二十一才の時だから保木野なる弟卯右衛門の病没された翌年である。

保木野なる父宇兵衛も、荻野家のあとつぎと頼める卯右衛門を喪うたがため、あらすきかへす小田の實りにさへ心いさまず、あぢきなき世をくらしてゐたが、こた

びの伊勢詣に久しく遇はない保木野一と互に手を取りかはして旅立するは、一は保木野一のいたつきをいやし、一はおのがうさはらしにもならう、奈良や京都にめぐりあはせたら死にし卯右衛門の冥福も祈らうものをと、頃は彌生の花ざかり飛ぶは蝶々春をあやなし、霞に罩める水郭山村をたどりて、あるは小邑古驛をよぎり、名所舊蹟に史料のかす／＼を得、けやけき山水のけはひに詩囊をこやし、今日と往き明日と進んで、とう／＼海道を上りつめ、目指した伊勢の神宮に詣て、兩宮を拜しては師より初め、さる人々の平かならんことを只管祈ぎまつた、神道に指を染めたる彼國史律令に手を觸れし彼は、このかう／＼しい嚴かな千古の昔を眼の前に語るやうな大社に詣て、奈何の感想を抱いたらう、千木高知る棟のすがたこそ眼に見えねど、辱さにたゝ／＼兩袖を絞るのみである。

それから朝熊、二見などを巡りあるいて、父上の説明にてよなき風趣を味ひ、詩苗歌種のかす／＼を心田に植ゑつけ、夜になりてやう／＼、旅宿に飯つたが、宇兵衛は不圖彼の脱ぎおいた脚半を看るに、その裏の赤いこと丁度蘇芳もて染めぬいた布片そのまゝである、怪みながら水もて濯きみるに水さへ共に赤くなる、さてはて妙

なこともあるもの哉と懸念に堪へねど、旅路で彼の心を痛めるやうなことがあつてはと、そ知らぬ風してをつたが程、歴て初めて事の由を明した、彼もどういふ祥であらうと想うたが、江戸に皈つてからよく／＼聞けば、その日は恰も雨富の師であつた雨谷といふ檢校の事に當りて總録の職となられた日であつたさうだ、神も大人の誠をいたして、このみけるにめで／＼かゝる神異をも示されしなる可しとは門人信名の賛辭である。

それから伊勢より更に京都に上りて、寺社佛寺など詣であるいたが、北野に参りて殊に貴く思はれたから、永くおのが一身の守護神とされたのである。柳洲の筆はこの間の真相を描いて、

これよりさき、大人思はく、凡人は神明をたのみて心を決むるにあらざれば、業をなすことを得ず、抑々皇國の神明の内にては伊勢、石清水はいふもかしこし。人臣の分にては北野か若くは豊臣太閤か。北野はもと文筆の家より起り、官は大臣を極め、死にては神となり、上は公卿よりはじめて下は凡民にいたるまで、歸敬事の常ならず。太閤はもと尾張の賤民也。一たび起るに及

びて天下悉く服従つき、威風異邦におはへり。本朝文武の名を揚げられたる鏡なり。この二人を除きては、又よるべき神なしと。然れども心未だ定まらず、或はおもはく太閤をいのらん、又おもはく北野をたのまん。こゝに至りて定めて北野をいのる。この後は百度詣千度詣など年毎に絶ゆることなし。

と、かれが文學の神たる菅公(一五〇五—一五六三)を守護神とたのまれたことは、如上の文に依りて分ることである。されど蜂須賀家に傳へてある傳記によれば、

先生、常に天満宮を信じ、晝夜となく心經怠りなく讀まれ侍りけり。或時衆分(座頭初官)にならんとおもひけるに、先づ天満宮に祈り奉らんとて千日心經讀みしかば、その満つる日、衆分にはなりぬ。先生ははじめ、太閤秀吉は賤しき身なれど、後には關白にいたれば、この人を信じ侍らんとせしが、故ありてこの事やみぬ。

とあるに依れば、菅公を信じてゐたことは、とくの昔からで、こたび躬ら北野に詣で、いよ／＼その念をおし堅めたと見る方がたしかだらう。

まづ、京都のものまうでも大様終つたから、やがて難波にいたり住吉、天王寺を拜

し、播磨に渡つて、須摩、明石の浦に光源氏のむかしを偲び、再び難波にかへり、堺の浦に旅の夢路を破り、紀の國に高野山、粉河寺、三井寺を訪ひ、大和にかへり、南都を巡禮して若草山や猿澤池や、なにくれと社寺をたづねまはり、更に吉野山をとむらひて一目千本に南朝の俤を浮べ、たま／＼西行庵に花をめでつゝ、やすらひけるに、藤門秀齋といひて法隆寺町住人の老人、又外に龍田と、難波の人と、合せて三人、これも花見にとて來かゝつた旅のつれ／＼なるまゝに、氏はいづくぞ、名は何となど互に睦みかはして、さて花の本に一句やらぬも腹ふくるゝとて秀齋老をはじめとし、皆々三十一文字をひねり出した、彼も、

盛りにはいつれをそれとしら雲のかゝるもにはふみよしの花

と詠んだところが、皆人愛でよろこんで別れたとのことである。一樹の陰またこれ何かのゆかりでせう。げにや、鰻魚海に浮び、焚鳥林に翔るとても云はう。

花未飽

花にあくときもありやと吉野の山わけいる袖に、はふ春風（松山集）

月前花

あひにあひて月も盛りの吉野山花によころを重ねてを見る（同）

斯くて、かれこれ六十日の日數を歴て、やうやく江戸に戻り、雨宮の手厚いもてなしに父子二人、旅の草鞋をといたが、案の定、病いたつきは全く癒えて、それよりは打つて變つて丈夫になられたとのことである。おもへば廿一才の花盛り、東海の五十三次、伊勢、大和、紀伊、難波、京都、南都、はては須摩、明石の松風に耳をすまし、吉野の櫻に大和魂をきたへた。彼の史學に對する趣味、文學に關する素地、いかばかり鋤きかへされたことだらう。

さて茲に附説として添加したきは、當時に於ける菅公崇拜の有様並に彼の豊公を採らずして菅公に歸依した徑路の梗概である。

海ならすたゝよふ水のそこまでもきよき心は月をてらさむ（大鏡）

とうたうて世人の同情をひいた菅公の至誠は、一木一草の微にいたるまで感化したことは、當時の史蹟をさぐるものゝ知るところである。薨後神威亡靈として世を震懼させたことは言ふまでもないが、文學の神、詞人の祖として崇拜したことの文書中に顯れたのは華山、一條の頃、即ち公の死后凡そ八十年後程の後のことである。

本朝文粹卷十三に、

就天滿天神廟會文士獻詩篇以其天神爲文道之祖詩境之主也

とあるが、是れは寛和二年七月の願文で、華山帝の第二年に當つてゐる。寛弘九年の
大江匡房の奉幣文にも、

右天滿自在天神或鹽梅於天下轉導一人或日月於天上照臨萬民就中文道之
大祖風月之本主也。

文道の大祖風月の本主と仰がれた菅公の没してから殆んど一千年後のことな
れど神化し詩化し盡して世の崇拜のすべてを萃めたるは粗推測するに難くない。近
くは契沖の母並に契沖阿闍梨なども菅神を信仰した。安藤爲章の行實に、

契沖七歳患疫巫醫不驗在牀密書天滿天神號每日百遍至三七日夜夢異人來
現曰吾是菅神憐汝至誠除病延命他日爲僧自勗。

を證とすれば七才疫を患ふといひ天滿天神の號を書くこと毎日百遍といふ彼ど
いひこれといひ能く閱歷の相似かよへるにはあらざるか。而して契沖の歌に菅神
に上る歌の中に、

紅葉

取りあへず紅葉を幣と手向山神の心をかみやうくらん（契沖）
彼をめでし樂翁公も曾て

天滿宮の御略傳をつくりて

天みつる神の恵みをいまこゝにうつして遠き世にも傳へむ
とうたうてある。菅神崇拜の念は當時文學にたつさはるものゝなべてのならはし
であつたかも知れない。然して豊公は、そのもとあまさかる中村より起りて、一代の
榮華を極めたは、彼の保木野の邊陲より屈起して文學の秘奥を捉へるに酷似すれ
ど、豊公は武神である。文神ではない。それよりは、おのが一生を委ねる文神菅公は何
となう欽慕される。ことに足その地を踏むにいたりては、尙更畏敬の念は禁じ得な
い。

寄神祝

深みとりかはらぬ色に幾とせかたのむ北野の松のことは（松山集雜部）

立春

わが頼む北野の森にひくしめの長き日影のはるは來にけり（松山集春部）

野行幸

宮ひとのそてふりはへて狩衣北野のみゆきめつらしと見ん（同上）

の三十一文字に、真情の流露點々轉じてゐるではないか。言短く意が長い。

要するに、彼は晩年にいたるまで、深く菅公を信仰し崇拜し、事ある毎に常に之をねぎまつり、己が生命とも頼んだ程で、菅公の御魂は、彼にとりては、いかに力になり杖になつたか分らない。こも一に師雨富のわざ／＼旅費まで支給しての勧めに依り、やがて北野に詣てたからの結果である。師恩の高き、げに轡も低い、淵も浅い、これ余輩の師恩に對する、第二の感想である。

以上第一第二の感想は、雨富檢校の彼に對する師恩の一斑である。第三に數ふ可きは、和歌の師萩原宗固の指導である。彼れ京阪地方を巡禮した後四年目、即ち明和六年三月、彼齡二十四才といふに、宗固一日彼と横田茂語字は孫兵衛といふものとを前に招いて云ふには、

汝等この年頃讀書詠歌にまめなること餘人に過ぎたり、後には皆業なりぬ

べし。然れども人各々得るところあり、彼を學び此を習はんとすれば、人に優れんこと難かりなん。これよりの後、茂語は歌をむねとし、讀書は之に次げよ。

保木は歌よむことをやめて、専ら文よむ可し。（溫古堂塙先生傳）

と、余輩はかつて論語を讀んで孔子の個性教育に重きをおきしを見て、轉た嘆美に堪へなかつた。今以上の數行の中、宗固ぬしの二人の門人の特質を見抜き、その長所の發揮に努めたこと、歷々指點するに足るものがある。是れより彼は和歌を第二次におき、一意書讀む業に一身を委ねた。又云はく、

されど、殊に勝れたらん人によらずばことゆく可らず。當今加茂眞淵は國學の才名世に知られたり。保木は彼につきて學べよ。但吾に習ひしこと、かたくなに語る可らず。もの學の流れ異なれば、かの人もしくは隔心ありなん。

と、宗固も冷泉家の歌人としてその時代を鳴らしたものだ。が、今いさぎよくその株を眞淵（二三五七―二四二九）にゆづりて、彼の未來に異彩を放たしめたのは、たしかに宗固の手柄である。わけても當時は門流の睨みあひ、歌人仲間のねたみそしり、今から考へられぬ程であるのに、光風淡淡々一點の私心を挾まず、契沖春滿以來の俊才

眞淵を推薦したのは、かへす／＼も欽すべきである。但吾に習ひしこと語る可らず。云々の一句の如き、彼の未來をおもへる至情躍然として楮上に溢れる。

遮莫彼は師宗固のすゝめに従ひ、縣居の大人に贊を執ることになつた。彼は江戸に上つてから年月梭の如く、はや十二年目である。その間不得手な、そして嫌ひな、音曲や按摩に、あたら月日を費した。されど雨富や宗固の深き情によりて、當代に鳴りはためく縣居大人にも物學することが出来た。菅神の冥助であらう、北野の御利益ではないかと、獨り小躍りしたのである。信名當時の状況を叙して、

初めて行かれし折、縣居、これまでは、何書讀まれしやなど問はれければ、文讀むすべをもわきかねしまゝには、宗祇季吟などやうの人のかゝれたりける書のみよみて侍れば、あたらいとまをむなくし候と答へられしに、縣居いたくめで、そはよき業をしつる人かな。今の世の學者は、大方、人の云ひ、けん言まなびをのみして、書の善惡を己とさとする人は、少ない。おのれとわきまへ知るものならねば、業成り難しとなんいひける。

右の言草に二個の忘れてはならぬことがある。

(イ) 宗祇二〇八一—二一六二季吟二二七八—二三六五のものせる本をよめるを眞淵のいたくほめたるは、元來縣居の本志は、復古を以て國文學界の任とした故、花の本や拾穂軒ものを學べるは、本意に叶つたと見える。宗祇曾て山賊に出あひ、

わが爲に拂子ばかりは許せかし塵の浮世をすてはつるまで
と詠んで危難を免れたことは、人口に膾炙してゐることである。初め和歌を東常縁に學び、後、筑波集をものして連歌の泰斗と仰がれ、なか／＼の旅行家で、足跡天下に遍しといふ風であつた。

季吟は新續犬筑波集などものして、連歌にも指を染めたが、その本色は古書の註釋である。いはゆる拾穂軒ものと云ひて、

百人一首拾穂抄—伊勢物語拾穂抄—萬葉拾穂抄—歌仙拾穂抄—
などの類で、殊に源氏物語湖月抄六〇枕草紙春曙抄一二知漢朗詠集註一〇など珍とすべきものである。是等古書古語の研究は、やがて眞淵の氣に入つたことだらう。

(ロ) 次に注意すべきは、書のよしあしを悟る人は少し、己と辨へ知る人ならねば業なりがたしと諭したことである。この書のよしあしの一句は道義的の価値の有無を指したものでなくて、數ある書籍の眞僞を鑑定するの意味であらう。即ちこれは正本でたしかなもの、あれは贋本で後世似せてものせるものとか、或は半眞半僞で攙入捏造の部分も多いとか、この津涯を見分けるだけの眼識ないものは、業成りがたいと戒めたものだらう。後年彼の群書類従などを編んで、よく百千々の古書の眞贋を拾ひ分けたは眞淵の一言、その素因をなしたものかも知れない。

何しろ以上の二項は、苟くも檢校を傳するものゝ、忽諸に附してはならぬ要件である。然して縣居の大人は誰も知る如く、春滿の後を承けて門人も多く、就中、本居宣長、加藤千蔭、村田春海、荒木田久老、小野古道、伊能魚彦、加藤枝直、加藤美樹等の俊才雲の如く簇り、女性にも進藤茂子、鶴殿餘野子をはじめ、倭文子、紅子等なか／＼侮りがたいものがある。殊に己が師の山岡浚明も同門で、小野古道の如きは己と喜憂を共にする盲目歌人である。彼が入門した後、わづか半年程で、眞淵はあたらこの世を辭

したが、是等俊才の逸話性行を聴くにつれ、彼は肉躍り骨動いたのである。
縣居大人のものせる二三の和歌を擧ぐれば

春のはじめの歌

▲を筑波も遠つあしほも霞む也根ごし山ごし春や來ぬらん

嵐

▲信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷺の翼もたわに吹く嵐かな

夕立をよめる

▲大比叡や小比叡の雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原

花の歌

▲うら／＼と長閑けき春の心よりにほひ出でたる山櫻ばな

春風春水一時來

▲つくば山しつくのつら／＼今日とけて枯生の薄春風を吹く

堇を

▲故郷の野へ見にくれば昔わが妹とすみれの花咲きにけり

秋風

▲松の響き萩のさやぎのさまぐに聞えて絶えぬよはの秋風
磯

▲百くまの荒き箱根路越來ればこよろぎの磯に浪のよる見ゆ

こは單にその片端に過ぎぬが、いかに雄渾沈痛の歌風であつたかは、粗トするに足るであらう。彼れ檢校もこれにまねて、

◎すがるなす腰ばそ未通女得ましかばあさよひさけすなづさはましを

◎宮城野のはぎのつゆはら分けぬ夜もひとりしぬればぬるゝそでかな

などつとめて萬葉風の姿を詠んだが、縣居も斜ならず欣んでいたく愛でかしつてあつた。この許にて記紀等の六國史をも學ばれたが、わづか百八十日許りで、この冬、師翁はかへらぬ死出の旅路へと赴いた。

想ふにわづか半年足らずの日子でも、喬木のもとには鳳雛棲む。縣居大人の惻切なる指導鍛鍊を受けたは、一に師宗固翁の庇陰でないか。師恩に對する第三感想は、これで盡きた。

○一度の誓が一期の誓なり、一度の嗜が一期の嗜なり。その故は、そのまゝ命終れば、一期の誓になるに
よりてなり。……蓮如上人

○本尊は掛けやぶれ、聖教は讀みやぶれ候……同人

第三節 清廉淡泊

余輩は毫をねぶり筆を秃して、雨宮、宗固、はた、縣居の彼に對する恩誼の厚いことを叙べて、今こゝに彼が清廉淡如の一段をものせんとするに臨み、今一條、宗固大人の深切なる始末を附加するを許せ。

顧みるに、縣居に入門したのは丁度廿四才の時であつた。その後、勾當ともなり剩へ天明三年には檢校にも上つた。その欣び果して奈何、その翌年天明四年彼三十九

才の時、宗固また彼を召して云ふやう、

汝、先に、我言に従ひ、歌をすて、讀書に力を盡して、今既に學術なりにけり。むべ
これより又歌をかねつとむ可し。人の拒むをりに、上下つゝかざらん歌よま
んも便なければ也。

と云ひて、彼に一旦とめたる歌を又々すゝめたるのは、一方の學術大に進んだがため、
世の交りをもかねて歌をもつとめよとの意であらう。かねつとむ可し」の一句味ふ
べきである。尙云はく、

われ年老いにたればかなふ可らず、日野資枝卿の門人となる可し。

と、いと懇にさとしたところが、彼も宗固の言に従ひ、これから日野殿の教へを受け
ることゝなつた。

當時宗固は冷泉家にて爲村卿の門人である。ざるを二條家である日野殿の門に
入れよと云はれたのは、宗固もはじめの程は二條家で、鳥丸光永卿の門下であつた
が、令息光種卿事に坐して蟄居してゐた後、爲村卿に従つたのである。で、爲村卿はそ
のもと光永卿に習うたゆかりがあつたから、流派は違うてゐるにも拘らず、斯様に

勧めたものと見える。

資枝卿なくなつてから、閑院宮の教へを受け、又宮もかくれさせたまうてから、
外山光實卿の門に入られたのである。故に和歌の師匠は、

宗¹固—真²淵—資³枝—閑⁴院宮—外⁵山光實

の五人より手をかへ品をかへて教へられたのである。

年譜に依るに、天明三年、卅八才、彼、檢校の官にすゝめると同年に、日野資枝卿に就
學せるやうにあるし、又古學小傳にも、

「天明三年、檢校となる。和歌を日野資枝卿に學ぶ。これ宗固がためなりといふ。」
とありて、彼三十八才にして日野に就けるやうにある。されど信名は天明四年、雨富
死去の後、殊にこのとき。宗固また大人をよびていふやうな。われ年老いにければ
かなふ可らず、日野資枝の門人となる可し、とものしてあるゆゑ、日野卿への入門は
天明四年、卅九才の時と見る方妥當であらうとおもふ。

余輩は、これで、彼を教へた先達のいかばかり惻切丁寧であつたかを畧叙した。更
に一轉して、彼が當時、俗欲一天張の盲人界で、いかに清廉淡如の生涯をおくつたか

を叙して、この章を畢へようとおもふ。

當時の盲人界はなべて俗に流れ、慾に溺れて、いはゆる利己のかたまりとも云ふべき状況なるに、彼は少しもこの汚波濁流に染まず、清廉寡欲にして人を頼まず、自主獨立の精神の熾んであつたことは、我も人も學ぶべきである。

第一證……石川二三造氏の本朝瞽人傳の所載の一節に、

檢校少時鍼術を業とす。隣家に貧婦あり病に臥す。檢校を招き治を請ふ。乃ち往き之を療す。既にして病癒ゆ。婦大に悦び翌日錢を與へ之を謝す。檢校辭して受けず。婦感泣す。檢校嘆じて曰く、予其技を能くするものにあらず、僅に以て責を塞ぐのみ。彼れ若し技の拙なるを知らば、我を視ること猶ほ仇の如くせん。彼れ之を知らず、洵に憫むべきなり。若し之に甘じて其謝を貪らば、豈に仁術となすを得んや云々。

第二證……彼二十四五才まだ衆分の下役に居た頃、豊一の財産を譲られたけれど、斷つた美談も遺つてゐる。信名の描く所によれば、

この頃豊一といふ衆分の盲人あり。金若干を貯へ持たりしが、俄に死にて

ゆづるべき子もなかりければ、或人大人をしてその家を嗣がしめなばよかりなんと、雨富に勸むるものあり。雨富この由を聞ゆ。大人承けずして云へらく、豊一生けりし折、己と心よからず、死にたりとてその家を嗣くべきすちある可らず。且彼が家を嗣がでありとも、去る可き果報のありなんに、はかばかりの財貯へなんこと難かる可らずと答へければ、雨富我もしか思へりとしてこのこと止めてけり。

とあるは、あかしとして確かなものである。その寡にして然かも獨立心の熾盛、看るに足るものがある。されど、勾當にすゝむ料にとて金百兩丈は師よりもらつたやうである。云はく、

雨富もいたくめで、一日大人を招きて諭すやう。當世一坐の様を見るに、序を進むるもの皆金、をむねとして術藝にかゝはらず。斯くてありなば後には一坐うちに藝學ぶもの絶え失せなん。汝か學業はやう人に超えたり。然れども、財も持ちえされば序をすゝむること得べからず。吾これを思ふが故に汝が爲に金百兩を貯へおけり。むべこれをもて序をすゝむる料と

せよとて出したければ、遂に安永四年(三十才)といふ年の元日、階を進めて一坐の勾當となり、塙勾當と稱す。

この時である、従來の保木野一を保己[○]一と改めたのは保己[○]一とは生地にあやかつたは勿論のことだが、文選に保己[○]安百年といふに依つたとのことである。

これよりさき、彼は勾當職に昇らんことを天満宮に祈りて日参し、朝毎に火の物を絶つて心經百卷を讀誦し、千日に滿てんとの願をおこした。して九百日目にととう本意を達した。

この歳、軒の梅が枝、柞のもみち、いくとなく住みなれた雨富の家をはなれて、番町^{ヤウマチ}麻谷^{マヤ}の北坂上にある高井大隅守の宅地に移りすむことゝなつた。

彼、つら／＼おもふには、我れ少しの貯へだになくて、勾當の職にもなつた。こは師恩の深いのにも依るが、そもまた菅神の冥助で、一に心經薰誦の功力であらう。猶二千日の願をおこしたならば、檢校職にもなりおほせないとも限るまい。

それから叢書の編纂などに心をよせてゐる中に、(後章詳述)とう／＼九年目といふ天明三年三月(三十八才)に檢校職に昇ることは出來た。念力岩をも通す、彼れは嬉

涙に咽せんだ、故郷に耕してゐる父の宇兵衛もこの消息を聽いて、さぞかし飛び上つたことだらう。

第三證……は雨富の臨終に於ける遺言である。云はく、

天明四年雨富病みて死なんぞせしをり、大人を呼びて云ひけらく、我れさきに人に貸しおける金若干あり、その中に我世にありてすら返し得ざる人あり、其券契^{ふた}をば皆焼きすてたり。さもとと思ふ券契をば、こゝに残しおけり。譲るべき子もなければ、われ死去^みせん後には、うべとりて汝が用にあてよかしと聞えければ、大人承けすして答へしやうは、やつがれ郷里を出てしをりは、露ばかりの貯へなかりしに、師の惠によりて檢校にさへなりけり。徳これよりあつかるはなし。この外に何をか給はりなんや。その券をば、いまた職にもあつからである。門人に、たびたまへかしとてかへされけり。これをきく人感でざるはなし。

と、師弟の情誼のこまやかなる事、敬す可し、欽す可し、いまだ職にもあづからである。門人にたびたまへかしとの至情、豁然掬すべきものがある。これを聽く人めでざる

はなしの一言、この美しき畛域を描いて遺すくまはない。

彼の欲界に坐し、貧境に交りながら、獨り群を抜いて淨らかな面魂をもてることは、大様この類である。菅神信仰の爲か、師父の教草の美いためか、そも／＼生來の性格か。

今、本章を畢ふるに際し、水母餘音寫本より、總檢、校、略、譜を抄出して添加しよう、これはそのもと視聽草にあるを忠詔のかねて抄録しておいたものである。

總檢校畧譜

一、光孝天皇之御宇、仁和二丙午二月十七日、初而當道座中へ檢校勾當二官を勅許。

一、職明石總檢校覺一、後醍醐天皇之御宇に右檢校へ初而總檢校之宣旨を給る職成之年月不知。

一、杉山檢校和一依上意元祿之申年五月江戸に總檢校被仰付此時より京都にては職何々檢校と斗唱候。

一、三島總檢校安一元祿七戌年六月、杉山跡總檢校被仰付寶永六丑年十一月

迄相勤申候。

一、島浦總檢校益一、寶永六丑年十一月、三島跡總檢校被仰付享保十九寅年十月迄相勤候、此時如元京都に總檢校被仰付候、以後京都職七代之總檢校に御坐候、其節之職は若松總檢校に御坐候。

但、此時より江戸の座上を總錄と相唱候様被仰付候、則其節の坐上は島崎檢校ゆゑ同人總錄相勤申候。

一、白石檢校、元文五申年三月より總錄相勤、同人役中寛保酉年初而總錄屋敷へ役所相立引移候、後代之總錄右役所へ引移相勤申候。

一、總錄藤谷より此後、代々總錄名前左に記す。

雨谷檢校、明和三戌九月より一山 口同四亥三月より一藤 村同年十二月より

一菊 川同九辰正月より一稻 村安永三年十月より一長谷富同四未十月より

一豐 染同六酉九月より一三 澤同年十一月より一古谷津同九子三月より

一栗 原同年六月より一六 浦同年九月より一太 田同十二月より

一重 田天明元丑四月より一溜 川同年七月より一木 村同年十二月より

中	浦同二寅六月より	水	本同三卯三月より	清	澤同年九月より
豊	川同六年十月より	龜	田同七未三月より	福	島同年十一月より
豊	藤同八申三月より	眞	田同年十月より	金	井寛政元酉六月より
野々村	同二戌三月より	伊	藤同年七月より	松	村同四子十月より
加	藤同五丑八月より	小名木	同六寅三月より	菊	崎同年七月より
大	竹同七卯四月より	内	山同八辰三月より	福	田同十年六月より
北	尾同年十二月より	竹	山同十一未十二月より	北	村(享和元酉四月より)
鴨	田同年十二月より	高	松同二戌五月より	島	浪同年十一月より
塙	(同三亥六月より)	芝	原文化二丑六月より	天	津同六巳二月より
大	場同年十二月より	吉	川同九申六月より	司馬崎	同十一戌五月より
山	田同十四丑二月より	野	田同年五月より	豊	高(文政三辰年十月より)
藤	植同四巳正月より	青	木同年九月より	淺	本同五年十一月より
雨	富同九戌七月より	松	黒同年十二月より	當役	

x x x x x x x

終りに臨み、一言琴後集に見えてゐる天の下の寶の王を添へしめよ。云はく、

いでや百千の寶は只しばし生けるがほどの富なり。言の葉と學とは、とこしへになき跡までの富なり。翁寶に貧しくおはせしかど、言の葉と學とに富まれたり。誠に天の下の寶の王とは翁をこそいふべけれ、誰かは羨まざらん、誰かは慕はざらん。

と今、移して以て彼れ檢校を評するの言葉に代へよう。

堺の日向屋は、三十萬貫持ちたれども、死にたるが佛にはなり候まじ。大和の丁妙は帷一ツを着かれ候へども、此度佛になるべきよと仰られさふらふ由に候

……(蓮如上人)

△天地の神のめぐみしなかりせば一日一夜もありえてましや
△事しあれば嬉し悲しと時々動く心ぞ人のま心
△動くこそ人の眞心動かす云ひてほこらふ人は岩木か
△世々の祖の御かげ忘るな代々のおやは己が氏神己が家の神
△父母はわが家の神わが神さ心つくしていつけ人の子

……玉矛百首

第四章 群書類従の出版

塙保己一を知るものは、群書類従を知り、群書類従を知るものは、また塙保己一を知つてゐる。この類従と塙とは、こので、栢の裏表のないやうに、互に相聯鎖抱合して、一を舉ぐれば、必ず他は随伴するものである。群書類従とは、前を空うし後を絶つたと評されるほどの大編纂もので、その名の原據は、たしか三國志魏の應邵傳に「五經群書以類相從」に出たものである。

この鬼膽を寒からしめた大計畫は、安永八年彼が卅四才の時、即やうやく勾當になつてから五年目程に思ひたつたことで、それから、そこらの苦楚を嘗め、とう／＼文政二年彼が七十四才即ち歿年から三年程前に都合四十一年間、で、やうやう版木の功ををさめたことである。その辛抱強いこと、云つたら千古稀に見るの偉才と稱す可きであらう。

寒中の雪水にて墨をすり、來年の土用を越して用ふる時は色宜しいか様にてもにじむとなし。是書家の傳授也と塙檢校の話……………一話一言

第一節 本書編纂の素因

今、本書の内容體裁等を叙べる前に、奈何なる動機に依つて彼が本書を編まれたか、即ちその素因とも見る可きもの三四を列記しよう。

A、古書保存の趨勢……………古書保存は東照公時代より陰に陽に遞傳し來つた一の傾向であるが、この期に至りて一は儒佛に對する反抗心と、一は洋學などの西のほとりにはいり來たその反動とに依りて、我を知る、といふ精神は餘程熾になつて來、従つて古書の古利秘閣にひめおかれたものや、反古同様

に取扱はれたものなどを蒐集して、之を永遠に傳へると共に、いはゆる我、を知るの料に供したのである。

水戸家の大日本史や山陽の日本外史などは、漢文でこそものしてあるが、その參考資料として列擧してあるところを見れば、多くは我邦從來の戰記、古物語、律令の類であるに依りても推想される。

されば、眞淵の萬葉考、宣長の古事記傳は、その毛色や、異れど、江戸に石川雅望、狩野掖齋あり、京都に伴蒿蹊あり、共に有職故實の學に精しく、また大阪にも尾崎雅嘉二四一五―二四八七ありて群書一覽をものし、殊に彼と生國を同うせる伊勢貞丈二三七五―二四四四の如きは、

武器考證(二三) 安齋隨筆(三〇) 貞丈雜記(三二) 安齋小説(二〇)

等をものして成書そのものを採らねど博引傍搜、以て古書の重んずべきを吹聴した。

伴信友に至りては、更に、

武邊叢書(三六) 古文書集(二〇) 續修國史姓名抄(一四)

等を編して、いよゝ古書の貴重なるを知らしめた。

是等の風潮に連れて、或は群書目錄や、畸人傳あらはれ、或は撫古遺文や、採輯風土記など、左ながら春草の萌え出づる如く、ぞくぞくと生ひ出た。是れやがて群書類從の生まれる第一因ではあるまいか。

B、暫人間の刺激……元祿前後よりかけてこの期に同じく盲人で名をなしたものがある。

1、音曲にて名を顯したものの……寛永の頃には柳川、八橋の兩檢校があつて三絃の道を極め、それよりさきには澤住、瀧野の兩檢校は、斯道に巧で、なか／＼巾を利かし、梁塵の塵を舞はせたものだ。その他、數へ立てると濱の眞砂子ほど多くある。

2、鍼治にて名を顯したものの……にはいろ／＼あれど、先づ夫の豪爽にして氣慨のある遠州の杉山檢校でせう。この人、十才失明十七才で江戸に上り、勵精刻苦の末、綱吉將軍を施治した報酬として、汝に一目を與へんとて宅地方一町を賜はつた方で、茶碗の底にまで鍼で孔をあけたと

噂されてゐる鍼醫である。

3、儒學を以て名を顯はしたものの……徂徠門下の高野蘭亭(二三五〇—二四一七)は十七才で明を失つたが尤も漢詩に長け、唐人宋雍に比せられた方で、詩といへば三百篇以下漢魏六朝唐明諸家の集を一わたり暗誦してゐたとのことである。その門下の谷玄圃(二三八〇—二四三八)も六才失明で、文選唐音唐詩品彙正聲古今詩刪李杜全集を背誦し、毎に「子性聲曲に拙く針按に短である、平生學習するところ」として通ずるものがない。然かし詞藻のみは他技に比すれば、耿々線路の明かなものがある」と云つて居つたとのことである。

この他、那波活所は正保五年正月三日五十四才で没した人だが、この人も漢詩は上手で杜鵑の詩とか自處詩二十五韻の如きは名高いものだ。されど眼を患ひてとうとう盲人となつた。

4、和學を以て名を顯はしたものの……本居春庭(二四二三—二四八八)は鈴屋翁の男で、なか／＼の學者であるが、年廿九才の頃より眼疾にかゝ

り、三十三才の時には全く明を失うた人である。すこし後れてゐるが、馬琴(二四二七—二五〇八)の如きも晩年には八犬傳を代筆させた。

是等は皆一わたり知識を吸収してから盲目となつた人であるが、江戸の人で彼檢校と同じく縣居の門人で、小野古道といふ歌人がある。この人は壯年明を失し鍼按を業とし、かたはら和歌に志したが、眞淵の江戸に出るや、はせてその許に至り、贅を執り、江戸に於ける縣居門人の第一着のほまれをとつた。歌集は古道家集で、文化九年二月清水濱臣序(明和中に没した。その寶曆二年夏五月、萬葉集の竟宴せし時、謹んで加茂大人に詠みて上る長歌)の如きは、婉麗にして然かも莊大の氣を失はず、一頭地を抜いて居ることはたしかである。

野遊 (古道歌集)

いざけふはあつま少女に立まじり葛飾野邊に若菜つまばや

春日望山 (同)

花鳥の色をも音をもたちこめて春日かすめるをはつせの山

初 夏 (同)

八六

大舟に小舟ひきそへ隅田川そゝろあそばんなつは來にけり

虫聲近枕 (同)

一人ぬるわが手枕をなぐさめてなくや鈴むし松むしのこゑ

秋 祝 (同)

さとをさが千町八千町つくる田の穂毎に千々の秋は籠れり

霞 (同)

且つ消ゆる物とは知れど玉霞しばしをたにと拾ひてぞ見る

世のなりはひに此處彼處かゝつらひありきて家にかへりて (同)

妹が門出入ることにはやゆきてはやかへりこといひし人はと

以上盲人のなした事業を観じ來れば、聲曲鉞按は更なり、儒にまれ和にまれ、天の一角を闢いて、たしかに秘鑰を捉へたもので、おのがし、銘々特色をそなへてゐる。

盲人なりとていかでたゆむべき、氣のしめやうで名をあげ、家の風を吹かせ、

ることとも出来る、かたじけなくもおのが家は小野篁卿の末の流れである、谷川の源に、ゆかりの色を溶けば、巖根に散り砂土にまじりて、やう／＼もとのいろを見ねども、そのこまやかな色素のある者は里川の布に染まり、衣に纏ひ、乙女子の袖となり裾と化り、やがて人目をひくの錦となるかも知れない。屈する勿れ、悶えるな、聲曲針按は、そのかみ、己に澤住や杉山にその株をとられた。詩や歌は蘭亭、玄圃はた古道はなか／＼すぐれてゐる。ひとり國史律令の學、乃至古書保存の道に至りては、大成した人を聴かないよし／＼人のあまりに脚痕をつけぬ荒田をかへすに若くはないと、彼は極めたのである。

C、「和學大概」の所説……次に類從編纂の動機となつたのは、その時代の學者の所説に往々之に類似したことがあることである。殊にいたく古書保存刊行の必要なることを論へるなどのことがあつたから、彼もその所説に耳傾けなどして、遂に決然思ひ立つたかとも思はれる。彼と同じく享保三年に生れ、彼と同じく眞淵に學んだ門人のうちで、村田春海(二四〇六―二四七)のあつたことは前章にも叙べた通りである。この人は「和學大概」をものされて、そ

の中に次の如く云つてある。こは其時代の風潮を知るにこよない資料であるから、煩を厭はず、その二三節を掲げよう。云はく、

……すべて儒者の業は經世治國の術なれば、吾國にありては、昔よりの建國の大體制度の沿革、人情世態の變遷し來れる有様、萬の事を知らねば如何でか其學問を施すべき様あらんや。されば和學をば必要となすべきなり。今、和學を取立てんには、先づ三科ばかりに分つべきにや。先づ第一に國史、實錄の學を一科とし、次に律令典故の學を一科とし、次に古言を解釋する、學を一科となす可し。和學をなすには、此の古言に暗くては餘の二科も通じがたきこと多し。

と斷して、和學を國史法制、故實解釋の三大部門に分つた。次いで云はく、

……さて古言に通じたる上にては、古の人情世態も格別に明に知らるゝことあり。こゝに暗き時は、徒に國史等を讀めども、誤解して、殊に其事實を取り失ふことある可し。去れば是又一科の專業の學となすべき也。吾國の書、今も傳れるものいと數多あれど、和學を好む人世に、少きまゝに印行に

なりたるものいと少し。斯くの如くにて年月を経ば、漸々に失うて、百年の後には多く亡びぬ可し。これはいと嘆かばしきこと也。有志有力の人之を刊行しおかは永代國の寶ともいふ可し。

と叫んで、百年の後には多く亡びぬ可しと案じ、有志有力の人之を刊行しおかは永代國の寶ともいふ可しといふと懇ろに勧めたのである。一寸の曉鐘、世のねむりを醒まさうとしたに外ならない。尙ほ

その印行に無き書、今委しく舉ぐるに堪へず。只肝要の一二をここに舉ぐ。

類聚國史―日本紀畧―扶桑畧記―本朝世紀―日本後紀―新國史―

以上皆正史にて必ず有用の書也。殊に宇多醍醐の時世の記載いと稀なるを、この日本紀畧、扶桑略記等の幸に存するによりて、ほゞ其の時世を考へ知らるゝことあり。この外に諸家の傳、雜記の類、印行になきものいと多し。又家記の類は李部王、記、九曆等の書を始として百餘部あれども一も印行のものなし。

令集解―律四編―類聚三代格―貞觀儀式―新儀式―內裡儀式―

西宮記―北山抄―政事要略―侍中群要―裁判至要―金玉掌中抄―

以上、皆古の典故を考ふべき書にして、必ず失ふ可らざる書也。此外必用の書の印行になきものいと多し。正史典故にあつかりて、必ず闕くべからざる書の印行の本なきは、昭代の欠典とや云ふべからん。

と結んである。當代の實況を描いて遺すくまはない。印行の本なきは昭代の欠典の一句、たしかに時弊に適中した痛言である。彼檢校も右所掲の書目中、溫古堂にては、

律―令義解―西宮記―日本紀略―扶桑略記―政事要略

などの古書を研究書目として學則に掲げてある。また

律―日本後紀―令義解―扶桑略記

などの本は自ら校訂してある。その他の書冊も類從の中に蒐めてある。

して見れば、彼は春海の和學大概を自ら讀んだかどうかは今から判し難いが、同門の弟子仲間であるから、口より耳へと聽かれたかも知れぬ。殊に春海は彼と同じく財利に淡い人で、林大學頭にも愛され、白川樂翁公からも召された人であるから、その間の消息は大様推測される。要之、和學大概の所説

は、當時の傾向を示してあることはたしかである。

D、從來の傳説……彼の類從編纂を思ひ立つた動機に關し、從來の傳説は、二通りに分かれてゐる。

1、異朝の叢書類を眞似たこと……この事については、信名の筆に、

……異朝には漢魏叢書などよりはじめて、さる叢書ども、聞えたり。皇國にはいまだそのためしなし。さらばこゝにもかしこにならひて、彼處此處に散りほひある一卷二卷の書をと集めて、かた木に彫りおきなば國學する人の能き助けなる可しと思ひとりて、安永八年己亥元日(卅四才)より天滿宮に誓ひ、心經百萬卷願立てし、半よまんほどに、千部の書を集め、讀み畢へなんまでには上木の功なりねかしとて、これより朝々には鹽絶ちし、日毎に寅の時より起き出で百卷つゝの看經怠らず。

とあるは、一のあかしである。寅の刻とは今の午前四時に當る。

2、堀田正敦の激勵に依ること……この事については、水母餘音に一女とせ子の言ひ傳へとしてあるのは證左である。云はく、

今物語(或云、時秋物語)を校正し、之を始めて出版して堀田攝津守へ持て参りければ、攝津守云ふやう、其方は瞽者にして書を読むは名を天下に揚げ功を後世に貽さんとなる可し。然るに今斯の一小冊をものすとは如何にやと。是より大人奮發して大著述の志あり、遂に群書類従上木の擧あるに至れり。

とある、これと能く似かよつた談は、五月雨草紙に伊東氏の話としてある。

廿一二の時か既に著述の書ありしといふ。然るに、其師は是を閱して能く出来たり。然し其許の力にて斯様な瑣事をなすは甚た惜きことなれば必ず爲すまじ。更に思を更へ一際大志を企つべしと云はれたれば、檢校大に其事に感じ、是より群書類従の記念あり。

これ恐くは前のとせ、子の言草をもじつたものでなからうか。廿一二といへば、彼は衆分になつて僅か四五年しかたゝない。殊に廿一才といへば彼は父宇兵衛と京阪地方を二ヶ月程巡禮した時だから、著述などする迄には至らなかつたらう。今物語の校訂とあるは恐くは眞に近いだらう。

今物語は四十一歳の時刻成(年譜)。黒川氏已に之を疑ふ。

以上の四種の中、何れが類従編纂の動機になつたか決めることが出来ないが、要するに、是等の諸因は、根となり幹となり蔓となり鬚となり、抱き合ひ組みかはして、遂に空前の大事業を胚胎したわけであらう。尙前に一寸云ひおいた縣居の彼にさとした一條は遠因になつてをることも忘れてはならぬ。即ち、

……書のよしあしをおのれとさとする人は少なし、おのれと辨へ知るものならねば、業なりがたし……

の訓言は、深く耳底に遺つて居たことであらう。後に述べる下駄屋前川某の嘲弄なども一の刺激、これで近因遠因のかすゝを叙べ盡したから、更に進んで類従の形式内容はた批評等をかいつまんで列記することゝしよう。

本朝世紀藤原通憲撰と仁和寺書目に見えたり。今世に一卷を傳ふ。官庫及水府にも全部なし。近頃土佐より全部三十卷出てたりと堀檢校の物語なり

一話一言

第二節 本書の解題并批評

左に類従の解題、及び從來ものに見えてゐる批評を述べるに當り、便宜のため數項に分つことゝした。

其一、類従の完成年月……

安永八年(三十四才)本書の編纂を思ひ立つてから、文政二年(七十四才)まで通計四十一年間の歲月をかけて初めて上木の功成る。信名も

文政二年群書類従六百七十卷、かたきの功全く成る。この志起して四十一年が間に願望は遂げぬ。

と言つてある。

それから續群書類従の事に關しては、文政五年即ち彼の歿した翌年の三月やうやく目録を献上した位だから、版木になつたのはわづか數卷に止まつてゐる。信名は、

これよりさき續集の企ありて、年を追うて奇書多く集り、すべて一千八百部に至る。前編千二百七十部餘、合せて三千餘部なり。續きて上木の功をおこさ

んとす。

とある。續集の方は明治の今日刊行中である。

因に云ふ岡村増太郎の小學高等讀本などには、四十五年かゝつたとある。又候鯖雜誌(明治十八年三月廿二日刊行)には、三十九年とある。何れもあやまりである。

其二、類従に關する年譜……

▲安永八年(三十四才)……叢書を編集して開板竣功せんことを天滿宮に祈誓す。

▲寛政七年(五十才)十二月……開板の分四十三冊を上りければ白銀十枚を賜ふ。

▲同九年(五十二才)二月……板木藏建築のため敷地の拜借を乞ふ。

▲同十年(五十三才)五月……板木藏敷地御殿山下の地千六十坪餘貸與せらる。尋いて地税を免せらる。

▲文化十一年(六十九才)八月……開板に付拜借金を乞うて金三百五十兩貸

與せらる。

▲文政二年(七十四才)……六百六十卷上木の功全く成る。この志起して四十一年が間に願望遂げぬ。

▲文政五年(死後一年)三月……群書類從献上残り分百六十九冊、並、續群書類從目錄献上。

附言……河田鑑の卷懷年表に、天明二、群書類從成とあれど天明二年は彼の三十七の年で、類從は成らぬ。

其三、卷冊及部門……

原本の群書類從には。

正——總計凡一千二百七十種或合或分爲六百六十五冊。

續——總計凡二千一百三種或合或分爲一千一百八十五冊。

とあるが、尾崎雅嘉の群書一覽には正の方を、

「皇國古今小冊の書、一千二百七十三種、或は合せ或は分ちて六百三十六冊となし目錄一卷を附す」

とあるに依れば、その種と冊とに於て多少の相違がある。普通には正——五百三十卷、續——一千卷としてある。近年經濟雜誌社にて縮冊したのは、正——は洋綴十九冊になつてゐる。

尙續——の方は現に刊行中でおほくは寫本で傳つて居る。それも全國を通じて四五部しかない。其中で刊本目錄に相當してゐる完本は稀で、宮内省、東京帝國大學圖書館、帝國圖書館等にあるものも、何れも數十卷若くは百餘卷を欠いて居る。塙家に傳つてゐた一書、うつりつて岩崎男爵家にあるが、それのみは眞の完本かといふ。群書一覽享和元年著に續——のことを、

この頃、續——彙輯の志ありて再び古今の書をあつむるに、已に一千部の半に過ぎたるよし、其門人某氏ものがたれり。

とあれば、檢校の没年前二十年程に五百部許あつめたことは分る。部類は正續共に左の二十五類に分つてある。便宜のため左に一括しよう。

正——

續——

神祇

一 卷 二 卷

一 卷 八 卷

九八

帝王

二九—四三

八二—八八

補任

四四—五九

八九—一〇五

系譜

六〇—六三

一〇六—一八八

傳

六四—六九

一八九—二四三

官職

七〇—七四

二四四—二四五

律令

七五—七八

二四六—二四七

公事

七九—一一一

二四八—三一〇

裝束

一一二—一二一

三一—三一六

文筆

一二二—一三七

三一七—三五八

消息

一三八—一四五

三五九—三六五

和歌

一四六—三〇二

三六六—四七〇

連歌

三〇三—三〇六

四七一—五〇〇

物語

三〇七—三一九

五〇一—五二一

日記

三二〇—三二六

五二二—五二三

紀行

三二七—三四〇

五二四—五二六

管絃

三四一—三五二

五二七—五三五

蹴鞠

三五三—三五五

五三六—五四〇

鷹

三五六—三五七

五四一—五五〇

遊戲

三五八—三六三

五五一—五六二

飲食

三六四—三六八

五六三—五七〇

合戰

三六九—三九九

五七一—六五四

武家

四〇〇—四二四

六五五—七一五

釋家

四二五—四四五

七一六—八五〇

雜

四四六—五三〇

八五一—一〇〇〇

其四、類從に對する批評……

信名の評 國開けてより後かゝる大部の書上木せしことこれに超ゆるものなし。

候、鯖、雜誌の評——名山古刹に藏する所の異書を搜求め、流布の書といへども、異本あれば之を収め校刻し、名けて群書類従といふ……後生その賜を受けるるもの少からず……吾邦古來より大部の書ありといへども、その右に出づるものあることなし。

尾崎雅嘉の評……按するに、本邦古來書典の大部なるものは、滋野貞主の秘符路千卷のみ。それより降りて藤原の敦基の柱下類林三百六十卷、藤原の通憲の法曹類林二百三十卷等也。其書共早く亡びて世に傳はらずといふ。淳和天皇の天長八年、東宮學士滋師貞主、諸儒と古今の書を撰集す。類を以て相従ふ一千卷あり。秘符略と名つく云々。今塙氏集むる所の書、すでに一千二百七十餘部に及べり。彼天長より後、千歳の今に至りてこの盛舉あることその功亦偉ならずや。

千葉直胤の評……直胤和漢の書を慕ふ事人にこえたれば、此書を（類從）閱る毎に、師のいさをのかたじけなきに、感涙袖を沾さる事なし（門人直胤雜記）南豐の評……天下固多無眼之人、若塙氏則眼在腦中（近世偉人傳）

久保宮司の評……古今に例なき大業にして、千歳朽せぬ功績なるのみかは、萬世の人に大きな利益あること申すも更なりけり。かゝれば世の長人、世の遠人とましまして人皆めで重んぜられぬ。（祭文の一節）

等の諸評を以てこれを見れば、類從編纂の舉は、いはゆる曠古の偉業で、たゞ／＼有りがた涙に咽ぶより外にない。四十一年の長年月、この比較的乾燥なる事業にかゝつらひ、少しのたわみもなく、孜々乾々として、強めたは、また以て凡鱗のよくするところではない。

殊に單に蒐集したのではない、よく眞贋を辨へ、正偽のけじめをつけて、一糸亂れざるの手に至つては、眞に南豐の「眼、腦中に在り」といはざるを得ない。試みに一例をあげんか、かの海道記を鴨長明と思へる人が多いが、彼ははやく其然らざるを知り、源光行の作としてあげたるが如き類である。後世國史、國文、和歌、俳諧のこよなき参考書として重寶がられてゐるのは故あることである。

其五、類從に關する餘話……は随分多い。然かし、こゝには二三の主なるもののみを擧げて彼を忍ぶの便りとしよう。

A、下駄屋前川某の冷語……讀賣紙上に井上博士の直話なりとて左の記事があつた。

……此所の平河天満宮(麴町平河町)を信仰して、毎日々參を致して居りましたが、或雨の降ります日、足駄の鼻緒を切らしましたから、其の頃天神の境内に住んで居りました前川といふ版本師の前へ行つて、何うか鼻緒をたつて呉れと申しますと、如何にも其口吻が尊大でございましたので、前川は卑しい見すばらしい、按摩の癖にといふ氣で、錢のさし——其頃錢をさし貰いたる繩を投げつける様に投げやつてサアこれでたてゝ行けと申しますと、檢校はごう思ひましたか、それを手に持つて足駄を提げた儘、跣足になつて前川の職人等が盲目根性などゝ罵る聲を聞きながら、其所を行つて了ひました。すると後、愈々群書類從を出板する時になつて、前のこの前川といふ版本師を呼びまして、他に幾らも版本師はあるけれども、自分は存じ寄りがあつて、特に前川の處に頼むからと申しますと、何しろ六百卷からの版本でございいますから、前川も三拜九拜して大喜いたします。檢校は一應言ひつけて

おいて、さて改めて御前に御禮をいふことがある。お前はもう忘れて了つたか知らぬが、十幾年前の何月何日、雨の降る日、自分がこの下駄の鼻緒を切つたので、何うか立てゝくれといふと、お前に按摩のくせに何といふ尊大な言ひ分だらうといはれて、私も是非然るべき者にならなければならぬと思ひ立つて、修業の結果、つひ今日此の出版をする事になつた。自分の奮發力を幾分か助けたのであるから、厚く御前に御禮を申さねばならぬと申しますと、前川は固より記憶して居よう筈はございませぬから、今更の如くにおどろいて、後で人に其時位心苦しかつた事はなかつたと申したさうです。

然かし、日本弘道叢誌第六十四號(明治三〇、八月)の伏見氏の筆によれば、平河天神に日參する保巳を、そこの小兒、いつもいたづらする故、版本屋は見かねていつもおひのけたり。其恩に感じて類從の版木を、このものに後に命すといふ意をかいである。

B、妻女の代筆……妻の西たせ子、妾の岡田いよ子、一女とせ子などは、本書の假名の部分は代筆したとのことである。

C、男和三郎の版本通……井上博士は男和三郎について、次の如く云はれた。
「總領に和三郎といふのがありましたが極愚かなもので家を嗣がせるわけにもゆかない……版本を刷ることが妙に上手で他の事はとにかく——中に載つて居ることならば僅か二三行のものでちやんと何巻の何枚目にあるといふ事迄記憶して居りました、」

D、筆記生五六人をおく……伊東宗益の談に、
「常に和漢の書に通じたる書生五六人を置き群書類従の稿本二三葉を寫すを日課とせり……」(五月雨草紙)

E、一錢の貯へもない御負けに四千兩の借財……一女と世子の傳へ草であるとして、水母餘言にある。曰く、

「世の檢校はみな金あり、殊に總録ともなるものは大福有なることは皆人知る所なり。然るに大人は常に一錢のたくはへもなきのみか、數千圓の借財ありき、大阪の鴻の池に二千兩、同所千葉屋安兵衛に二千兩の負財ありしと、是れみな毫厘も他事に費したるはなく、悉く群書類従刊行、其他書籍

の上^に用ひしなり」
F、彼も千慮に一失あり……柵草紙十五に無名歌集に就いて、左の失敗談が載つてある。

「塙保己一類從編輯の時にあたりて、何れよりか、無名歌集を得、稀代の珍書なりと喜び信じて疑はず、將に同書に編入せんとす。曾我藩士佐藤甚右衛門門にあり。塙誇り示すに奇書を得たるを以てす。甚、一見して曰く、これは我藩士澤田名垂の、閑に乗じて戯れに擬作せしものと、塙聞いて大に駭き、實に然りや。嗟妙作哉と嘆美し、終に笑ひて止みしといふ」
この澤田名垂(二四三五—二五〇五)は、文政十年頃、和學仕方の意見書なるものをものしてあるが、今から見ても卓見は多い。そして五家園家集は一寸おもしろい。

G、豫約の濫觴……類從刊行の當時、左の文句を廣告したものである。今の語で云へば、豫約出版とでも云はうか。

上美濃十枚に付かなは六分八厘眞は八分六厘
 群書類從入用 外に表紙裏紙仕立料共一冊に付五分つゝ申受候

但岩城にて八十林に付かなは五分三厘

神祇三十一冊	百三拾六分餘	帝王拾九冊	九拾三分九厘	補任二十八冊	百貳拾七分餘
系譜七冊	三拾四分餘	傳八冊	三拾七分餘	官職五冊	拾八分九分五厘
律令十冊	四拾分餘	公事四拾冊	百七拾八分餘	裝束十四冊	六拾貳分餘
文筆二十冊	八拾貳分貳厘	消息九冊	三拾八分餘	和歌九十冊	八百六拾六分餘
連歌五冊	貳拾三分餘	物語十九冊	八拾九分餘	日記十冊	四拾三分餘
紀行十四冊	六拾四分三分三厘	管絃十三冊	五拾七分餘	蹴鞠三冊	九分五分四厘
鷹二冊	拾壹分七厘	遊戲六冊	貳拾四分五分三厘	飲食五冊	拾九分餘
合戰四十六冊	百九十三分餘	武家三十冊	壹百五十五分六厘	釋家廿三冊	百五十分餘
雜百十三冊	四百七十七分餘	凡二貫九百六拾目餘	但上美濃之積り		

部て學問の道は、譬へ外國のことを學ぶにも致せ、その學ぶ主意は、其善事を取りて、此御國の御用にせんさて學ぶことぢやに依りて、まづ御國の事を本とし學んで、さて外國の學びに及ぶが順道でござる。然れば學問に志しならんに、まづ早く律令格式の御書を拜讀して、御國法を知るが肝要の事ぢや。……

伊吹於呂志 平田篤胤

第五章 和學講談所と温古堂

第一節 檢校時代の修史概観

彼の生れたのは前にも述べた如く延享三年(二四〇六)であるが、双翼已に成りて一搏九天を凌がうとするの勢のあたつのは、寛政文化の頃であつた。殊に寛政時代は尤も國史研究の盛んな時であつたから、その前後の趨勢を述べて、彼の和學講談所を創設し、また史料蒐集の業を起すに至つた徑路は、た影響を知るのは、頗る緊要のことである。

先是、林家には、春齋の本朝通鑑や、國史實錄の如きあり、又水戸家では大日本史の編纂に着手し、光圀はこれが爲に殆んど提封三分の一を捧げた位である。史論としては七武論(春齋本紀論纂(安積覺)の如き、また白石の古史通、讀史餘論の如きがある。修史の風潮は、その勢なか／＼すさまじく、漸次諸侯や又藩の間に弘まるやうになつた。就中、高松藩の如き、歷朝要記、閏朝要記の編纂あり、殊に前者の如き百五十卷の大冊である。是をはじめとして伊達家治家記録、毛利家三代實錄、萩藩閏閱録、薩藩舊

記、島津國史等の如き大部のものぞく／＼編纂された。

夫の難波に、中井積善出て、大阪落城に於ける巷説を正すと叫んだのも、關西の三史の現れたのも、丹波に史徴が出で龜山侯の抱負の世に紹介された如きのも、將又、大阪の神澤杜口は(二三七〇—二四五五)翁草(百一冊)續翁草(百卷)ちりひち(三十卷)をものして、然かも、

「平常のことは随分柔和にて遠慮がちなるがよし、但筆執りては聊も遠慮の心を起すべからず。遠慮して世間に憚りては實を失ふこと多し。翁が著す書には、天子將軍の御事にても、聊遠慮することなく、實事のまゝ直筆に記す。是れまでも親類朋友、毎度諫めて、いかに寫本なればとて如何にして世間に洩出まじきにてもなし、如何なる忌諱の事にか觸れて罪を得まじきものにあらず、高貴の御事は遠慮したまふべしといへど、此時は親類朋友の諫に従ひがたく強ひて申し切て居れり、……翁が實錄は後世にも傳ふべく思へば、善惡ともに侵せしは其人の過なれば、たとひ高貴の御人の事にても少しも枉げて實を覆ふ事を欲せず、此實錄の事について罪を得ば、八十の老翁の白髪

首、勿、ね、ら、る、と、も、恨、な、し、筆記の事に付ては初より一命を差出して録することなり。世間、高貴の惡は憚りてよきに取なし、賤しき人の善事は稱美する人稀にして、遂には世に埋るゝこと歎息すへき至なり。……

との豪語を吐いて、史家の本性を發揮したのも、皆當時代のことである。

又一方、古文書を史料として應用したのは、たしか山鹿素行の武家事記に始まつたものであるが、爾來水戸藩でも佐々宗淳をして五畿内地方の名社舊寺に古文書、記録等を採訪せしめ、また加賀藩主前田綱記も巨賞を投して古書を搜索し、八代將軍吉宗も青木甘薯をして關東八州及駿遠地方を巡回して古文書を採訪せしめたが、白河樂翁公に至りてます。この氣勢を高めた。勿論公には集古十種や集古文書の編纂さへある位だから、たしかに一代の風潮に乗じて、いとど油さしたに違ひない。

第二節 和學講談所の創設并其舊地

寛政前后に於ける修史の状況、古文書の採訪は前節に略述した。林家、水戸家は云ふに及ばず、各地の諸侯、大藩、われ後れじと、この趨勢に奔つたため、蔚然として史學熾盛の時期を劃いた。されど元來修史事業については、漢學者の獨斷的の決論多く、證左なくして、赤と斷し、論據なくして黒と決する如き傾向あり。剩へ國といふ觀念の薄き譏あり。又之に對して國學者の史論は、多くはその原據の又の原據ともいふへき古語、古典の研究に止まり、未だ真味の境域に達せざるの憾あり。彼是相集りて彼檢校は、遂に和學講談所を設けようとの考へをねてした。そして、一は春滿の國學校創設計畫のみのあとをつぎ、國學を研究して、國といふ觀念をつよめ、一は史料を蒐集して、いはゆる修史の事業を完成しようと思つたのである。

◎番町に過ぎたるものは二つあり佐野の櫻に鳩槍投。

◎番町で目あき盲にものをきい。

A、講談所創設の素因……

▲驗者、常照院の勸め……信名の筆に云はく、

「そのをりに(编者云、寛政四年、四十七才、驗者常照院といふものあり、上野國の人、文字の方にも心ありければ、常に大人のかたに來とむらひてけるが、いふやう、今の世は文道開けて經書讀む方は云ふもさら也、神道歌道につきても、その家々皆定まれり、たゞ歴史律令などよむかたのなきがいと惜しきに、あはれ、公に請うてさるへき地所給はりて講談の所定め、がんのくだり、とき教へてんやと。大人もさるべく思はれければ、翌年の春そのあらしを請せしかば……」

とあるに依れば、全く常照院にヒントを與へられたやうである。

△幕府の保護……また講談所の設立は、一に幕府の内意保護に出たやうに云ふものがあるが、それは僻事である。尤も直接間接に、幕府の保護誘掖を受けたは確かであるが、創意は一に彼檢校のためもので、一朝一夕に思ひ立つたことでない。

B、講談所の舊地……

右様に時代の趨勢とか、知己先輩の注意獎勵とか、いろいろの原因はあつて

こゝに講談所の設立を見ることが出來たが、さきに群書類從を思ひ立つてから、已に十餘年間も経過してゐるから、陳篇秘冊をあさるに連れ、講談の場所を設けて國學を研究し、國史律令等の取調をなさうとの觀念のおこるは自然のことわりである。

斯くて、講談所は、彼檢校から次郎并に敬太郎の三代つゞいて、慶應三年廢止することになつたが、明治の四十一年までには、はや半世紀近く隔たつて居るから、今の人はその屋敷跡さへ覚えて居るものはなくなつた。電車や汽車の利器は市區改正を促がし、今日ありて明日なき建物、七十餘年間のながの講談所のあとを、後人のために次に紹介しよう。

初め講談所は裏六番町にあつたが、だん／＼狹隘を告げるに依りて、文化二年(六十才)正月に、表六番町小林權太夫の拜領地八百四十坪餘を借入れることゝした。それから翌年十月同じく二十餘坪増拜借を許されたとある。慶應三年まで繼續した和講の舊地とはこの小林の拜領地のことである。

今、當時の俵を描く爲に、嘉永二年(二五〇九)即ち彼の歿後二十餘年ばかりあ

との出版にかゝる懷中番町繪圖より抄寫しよう。この二面の繪圖にて、その大略をしのぶことは出來ようか。

C、和講に於ける事業……彼が本所を設けたのは、和學研究の目的にあることは云ふまでもないが、本旨は國史律令の講義並に出版事業、また文庫設立にあり、而してかの群書類從の出版、史料、武家名目抄等の編纂の如きも、またこの中に含まつてゐる。

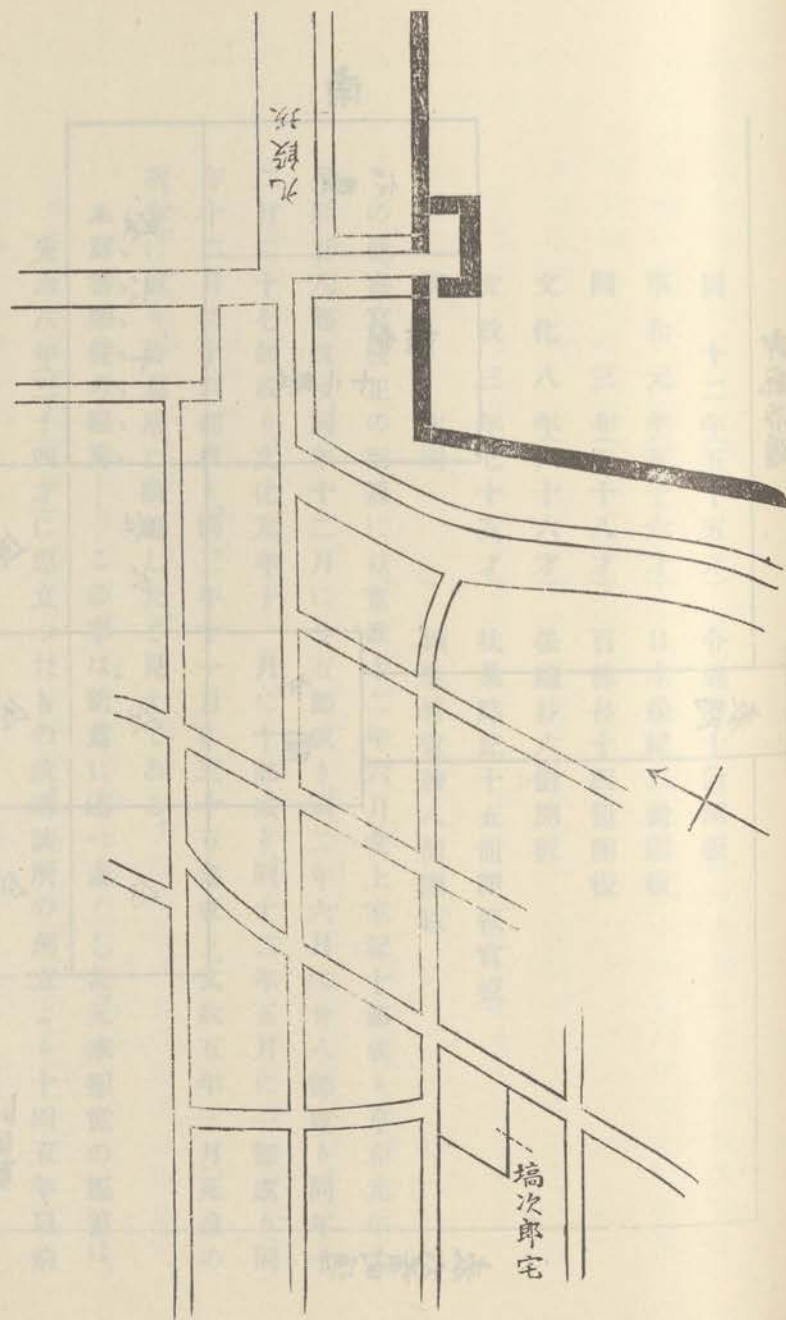
▲國史律令の出版——まづ國史律令の出版はといふに、寛政九年五十二才は、そも／＼のはじまりである。同十年(五十三才)金五百兩を借用したといふことを、幕府に願出許可された。和學所由來(黒川眞道氏の間に忠詔翁の答へんとてそのあらましを記したもの)に云ふ。

「寛政九年十二月國史校正開板、同十年十二月國史律令等開板之儀に付金五百兩拜借」

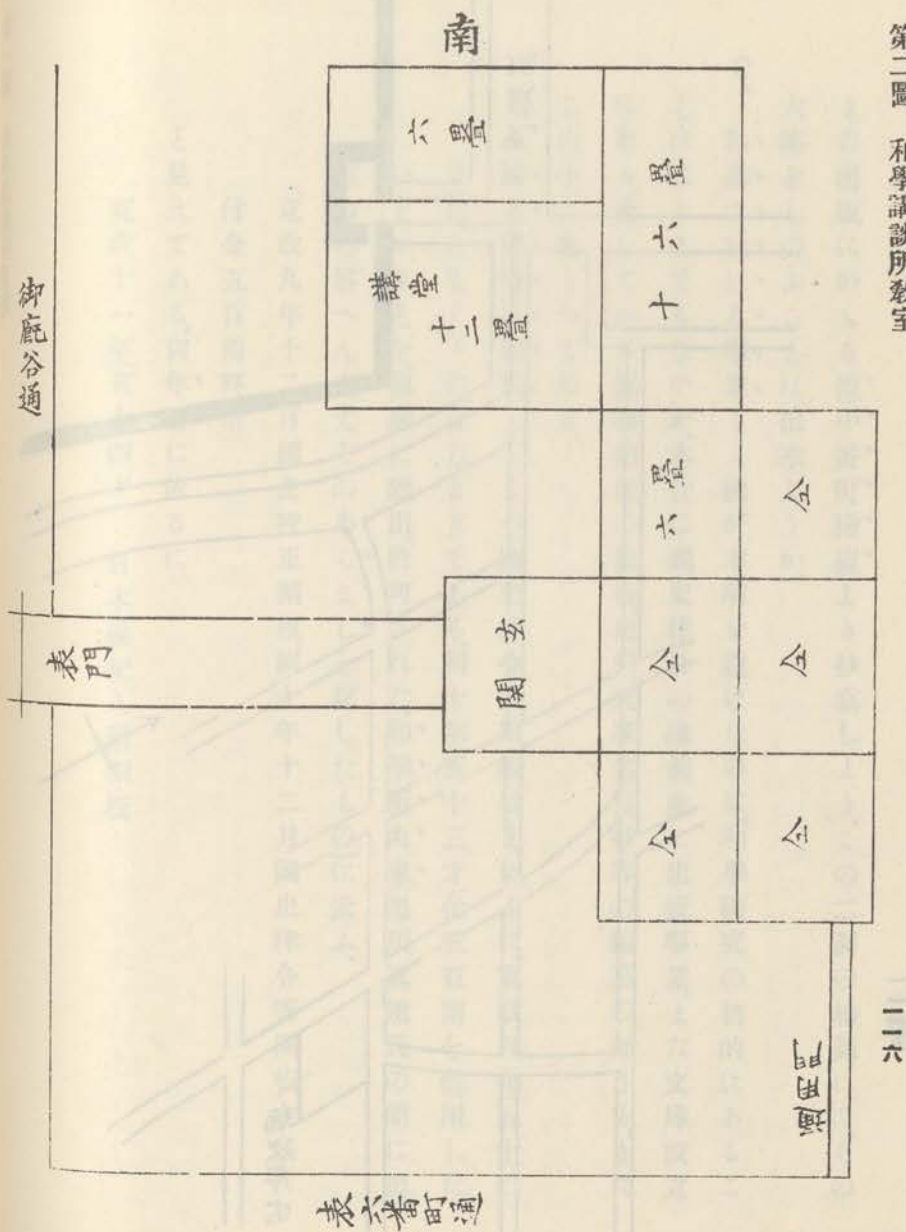
と見えてある。尙年譜に依るに

寛政十一年(五十四才) 日本後紀八冊開板

第一圖 和學講義所舊地



第二圖 和學講談所教室



同 十二年五十五才 令義解十冊開板
 享和元年(五十六才) 日本後紀二冊開板
 同 三年(五十八才) 百練抄十四冊開板
 文化八年(六十六才) 螢蠅抄六冊開板
 文政三年(七十五才) 扶桑略記十五冊開板(官板)
 同 年同 類聚符宣抄八冊開板

この他書寫校正の記録には、寛政十二年六月堂上家記十部成り、享和元年六月同廿八部成り、同年十二月に廿五部成り、同二年六月に廿八部成り、同年十二月に十七部成り、文化元年十一月に十部成り、同十二年五月に一部成り、同年十二月に十六部成り、同三年十一月に三十五部成り、文政五年三月(死没の次年)に成り、皆幕府に調進したと見えてある。

▲群書類従の編纂 この事は、前篇に述べ盡くした。元來類従の編纂は、安永八年(三十四才)に思立つたもの故、講談所の創立より十四五年以前のことであるけれど、類従の事業も、この和講設立以後は、同じくこゝで

やつたものである。

▲史料及武家名目抄の編纂……同じくこの和講でやつたけれど、完成

しなかつたのは口惜しい。詳しくは次篇に述べる積である。

▲文庫設立……このことも輕々に附すことの出来ぬもの故、更に端を改めて叙することゝしよう。

この他、輪講とか、教授とか、會讀とか、いろ／＼の益をなしたが、以上の四ヶ條は和講の主なる事業で、やがて彼の七十六年間の心血を凝いたのはこゝであらう。

第三節 檢校在世中の和學講談所

檢校存命中の和講は、寛政五年(四十八才)より文政四年(七十六才)に至るまで前後通じて二十九年間であるが、その間、よし林家の保護奨励があるにしても、人知れぬ

苦楚艱難を嘗めたことは夥しいものである。今その二十九年間の起伏消長を示すために、左に一括して示さう。

◎講談所に關する年譜、其一(檢校時代の分)

▲寛政四年(四十七才)……上野の人、驗者常照院來り講談所設立の必要を説く(編者云、次郎の編んだ年譜には寛政五年とあれどあやまりならん)

▲同五年(四十八才)二月……設立の件を願出、公も善き事に思ひて、同年七月に裏六番町にある宅地四百坪を借さる。○同十一月、講談所成る、會始あり。の納むる金五十兩を以て雜費にあてらる。○此月和講を以て林大學頭の支配とし、和學御用を便せしめた。

▲同十一年(五十四才)……この年より門人を京都に上せ、諸家秘藏の名記を寫させ、書き改めて紅葉山の文庫に納む。年を追うて數百部に及ぶ、その草稿をば家に納むることを許さる。當時斯くばかり家々の日記を藏しゐるものはなかつた。

▲享和元年(五十六才)……史料取立御入用積、内々林大學頭殿迄差出す。

▲同三年(五十八才)正月……和學講談所勤學場所、手狭になり、御用書寫物等にて講義差支より地所替内願書提出○十一月史料調御取立なる様内願書提出。

▲文化元年(五十九才)十月……和學所替地、場所見立てたるに依り願書提出。

▲同二年(六十才)正月……裏六番町にある敷地を召上られ、その代として表六番町に敷地八百坪を賜はり、講談所をこゝに移した。從來の地所狭いためである。

▲文化三年(六十一才)十月廿九日……史料御取立之儀、先御試仕候様、林大學頭殿被申渡、當分御手當として當節金五十兩御渡被下候旨御同人、是亦被申渡○十一月、武家名目抄、史料取立之節、是又編立候様、林大學頭殿被申渡、同月表六番町拜借地、東之方なだれ之場所二十四坪餘、石垣代として増拜借仕度段奉願候處、十二月廿九日、願之通被仰付候旨、寺社御奉行脇坂中務大輔殿被仰渡。

▲文化五年(六十三才)六月……史料取立(宇多帝仁和三年より正親町帝慶長八年まで)を命せられた。これ即ち史料である(次郎出生の翌年にあたる)その費用として年に五十兩下賜、史料助筆として塾生の内撰舉を命せらる○同月助筆七人に筆墨料をたまはる○同年、序を以て武家の職名文書兵器の名目を類聚せよとの仰あり。

▲文化七年(六十五才)……伊勢林崎豐宮崎文庫書籍の内、史料の参考になるべき類、寫取の下命を請ひ允さる、○同年十二月、史料宇多天皇記廿冊調進。

▲文化八年(六十六才)……和學所別費として明九年より十ヶ年間、金百五十兩づゝ補助さる。

▲同九年(六十七才)十二月……史料醍醐天皇事記五十七冊調進。

▲同十一年(六十九才)五月……淺草報恩寺にて京都本國寺靈寶物開扉中、史料になるべき文書を寫す。

▲同十二年(七十才)十二月……鹿島香取、古文書寫取のため、中山平四郎、中津

金十郎を随へ經歷す。

▲同十三年(七十一才)二月……史料參考の書類取調のため上京、五月かへる。

▲同十四年(七十二才)十一月……和學所開校入費のため金千兩貸與の命あり○十二月朱雀事記三十七冊調進○同月、史料參考書籍取調のため上京、

翌年春歸る。

▲文政元年(七十三才)正月……和學所公用のため、其儘在府すべき命あり。

▲同二年(七十四才)四月……梶井妙法院東寺智積院叡山大原等古文書寫のため上京、此時名古屋に廻り眞福寺古文書寫取。

▲同四年(七十六才)正月……上京(八月十八日俄に臥病、九月十二日没)

以上の年譜を能く／＼噛みわけて見ると、こよない甘味は湧いて来る。いくその教訓を緘黙の間に語つてゐる。されど、單に數字の行列のみでは、面白くもなからうから、一わたりその徑路を示すことゝしよう。

さばれ、寛政五年(四十八才)和講を設立してから文化三年(六十一才)までの十餘年間は、いはゆる準備期とでも云はうか、はか／＼しいことはなかつた。尤もはじめ二

三年間は獨力經營、寛政七年九月から林家の支配に屬したが、とにかく文化三年までは大したことはない。

然るに、この文化三年(六十一才)から更に、史料、編纂を企て、文久元年迄かゝつて其間前後六十六年で、宇多帝から後一條帝に至る一百三十八年間の史料四百三十冊を編成した。今、つき／＼にその事業を語らう。但し彼は文政四年(七十六才)で亡くなつたから、この節では彼れが生前六年間のことを述べて、歿後六十年間の事業は次節に譲ることゝした。後章には忠詔時代のも次を以てあぐ。

はじめ、彼は六國史以下正史の缺けてゐるのを慨し、享和元年(五十六才)四月宇多天皇から正親町天皇まで七百餘年間の史料を編まうとし、その豫算書を幕府に呈し許可を請うた。丁度この時は和講を創立してから九年目である。なせ創立當時に願出ないで、今頃この計畫をされたかと云ふに、其れには一の理由がある。即ち以前からやりかけてゐた仕事は澤山残つて居たし、又一方には和講も整頓しなかつたがためであらう。さるに寛政十一年(五十四才)盲人一座の取締役を辭した頃は、已に群書類従の開板も殆んど成り、孝義錄の校正も終り、國史律令の書も出來て、堂上家

記も亦半功を竣らうとしたから、さてこそ享和元年(五十六才)この事業を企てたのである。

その後三年ばかりの間は、何等の沙汰もないため、享和三年(五十八才)再び時の學職林家に申請して、一日も早く指令を與へてもらひたいとを述べ、若しおくるれば我れ老衰餘命少く、事の完成覺束ないことをもつてした。今次に當時の編纂方法并に豫算のあらましを舉げよう。

彼は第一着に仁和三年宇多帝(五十九代)の即位から慶長八年(後陽成百七代)徳川家康の將軍宣下に至るまで、都合七百十七年間の史料を向う七ヶ年間で編纂完結の目的で、その費目豫算を記して云はく、(六ヶ年目に死歿したから、大概その死期を豫知して居たかのやうである)

▲史料御入用積

總高貳拾貳百拾九匁餘 此金三百三拾六兩三分餘

内譯

助筆 壹萬四千三百四十人 但一日五枚充の積

此代賄料十五貫七百七十七匁

但一人一匁一分充の積

筆

二千三百九十對

但一日一本充の積

此代一貫四百三十四匁

但一對六分充の積

墨

百四十三挺餘

但百日一挺の積

此代百四十三匁

山城紙

十四萬三百四十枚

但草稿二編書の積

此代二貫八百六十六匁

但百枚に付二匁充の積

とある、是を一ヶ年に割りつける時は金、四十八兩餘で、一ヶ年間の事業を平均一百枚に收めようとの豫定である。而してその執務は正月八日にはじまり、十二月廿五日に終り、毎月六齋の休日を立て、朝四つ時午前十時より夕七つ時(午后四時)に至るのきめである。

彼は以上の豫算と方法で、大膽にも七ヶ年間三百兩で、七百餘年間の史料を編まうとした。之をかの水戸侯が提封三分の一を傾けて大日本史に注いたことや、又は

維新後、數十萬金の巨費を投じて編年史料(後、大日本史料と改む)を企だてたことに比すれば、その資財の多少、げに月と鼈である。別に之を林家の通鑑に較するに、たゞたゞおとろくばかりでない、林家の國史館、水戸の彰考館は、其經濟資金の點ではなにか、豊裕なものである。

さはれ、彼の再三の請願もたやすく許可してくれない、二年とすぎ三年とおくり、四年五年もくれば、てゝ六年目の文化三年六十一才九月に至りてやうやく、

「成る可く經費を減じて一二年間その様子を試みる可し」

どの指令が下つたがため、金五十兩を請うて着手した。序に武家の名目をも取調べよとの旨をうけた。丁度その年十一月から稿を起し、翌文化四年正月、宇多帝の事記十二冊を編し、正月より五月まで四ヶ月間に又九十冊、かねて武家名目抄十五冊をものして献上した。是れは史料の體裁を幕府の一覽に供する爲に、特に努力を加へて、かやうに早くまとめたのである。

今その間の仕譯を見るに、

「文化三年十一月七日に起稿、翌年六月十一日脱稿、其間日數二百十二日、出席

人總數千二百六十七人にして、一日平均六人弱の編纂者を用ひ、其費僅かに金四十四兩餘、其十一月更に武家名目抄の仕譯を奉る。是亦同じく一日平均六人弱、八十二日を以て其費金十兩餘」

とある。その金、人、日の少い割りに、事業の多くをなしたは驚嘆に値する。そこで幕府も其の献本の體裁を可也として、その十二月林家をして彼に命し、更に續稿させ、別に金五十兩を下して其費に充てた。文化五年(六十三才)幕府は更に命じて爾后毎年金五十兩、助筆七八人を用ひ、彼をして之に當らせ、以て史料并に武家名目抄の編纂を果さうとした。蓋し此時彼は盲人一坐の職を帶び、又塾生の教授を擔任し、そしてこの繁職を引受けたので、其の忙しさといつたら言語に盡しがたいはごである。

そこで出役、三人、手傳、六人、を塾生中から撰び、その翌年から出役、稽古、各一人づゝ増員した。其等編纂員の給料は一日銀三匁、賄料一匁一分、で年費總計、三十七兩餘である。これをかの水戸の彰考館和漢兼修の碩學林の如きに反し、これはたゞ和學の塾生に過ぎない。彼は二百石以上の厚祿に衣食する學士で、これは一日わづか三匁

の給料を以て、ホニに饑を支へてゐるだけの雇である。かれは一ケ年十萬石を傾注し、然かも年數に期限を加へないのに、これは金四十兩の範圍で、しかも矢の如く林家の督促を受けてゐる。その難易輕重到底同日の論でない。當時四十兩といへば米百俵の價で、水戸學士一人の俸祿の五分一に過ぎないとは、彼檢校の偉大なことをまですく明かにするではない乎。

次いで

(第一回)○文化七年(六十五才)―宇多天皇事記二十二冊

▲宇多天皇記だけは先年、我自刊我叢書の中に印刷成る

(第二回)○文化九年(六十七才)醍醐天皇事記五十七冊

を調進し、成績もなか／＼可かつたが、出役の中、或は他に兼役があり、或は故障ありて出席數甚た少く、これでは期限内に完成することはむづかしいかも知れぬので、編纂人増員の申請をした。けれど許されない。それから三年目に再び定員増加を願出たところが、幕府も之を諒とし、出役五、六人を増すことゝなつた。

(第三回)○文化十四年(七十二才)―朱雀天皇事記三十七冊

を調進することゝなつた。

其後四ケ年程、即ち彼の没年までの史料編纂の有様は、記録の徴すべきものがない。斯くて文政四年九月十二日没した。次郎氏の編まれた年譜には文政五年死没とあれど、一年丈け秘しておいたものである。實は四年である。

彼は七年間で、五十九代の宇多帝から百七代の後陽成帝迄七百十七年間の史料編纂の企圖も彼が生存中には僅か宇多、醍醐、朱雀三代の調進のみで止まつた。まだ残つてゐる分は四十七代、前途うたゝ遼遠である、多望である。

附言……この時實は村上天皇事記五十冊、冷泉花山圓融三天皇事記三十九冊、

一條天皇事記三十五冊の原稿は出來てゐるが、まだ調進しない。

第四節 檢校歿後の和學講談所

檢校生存中にはわづか三代の史料のみしか出來ない。文政五年よりは二代目男

次郎の世である。次郎時に年わづかに十六才である。前に倣うてその後の年譜をあげて一察に供しよう。

◎講談所に關する年譜其二(端次郎時代の分)

▲文政四年(檢校歿年、次郎十五才)……林家は出役飯島平四郎に書狀を與へて怠惰を責め、(一たび)且、武家名目抄に専心從事せよとの命あり。

▲同五年(死後一年)三月……村上事記五十冊、名目抄草稿十八冊、家記八部調進○六月、白銀三十枚賞賜。

▲同九年(死後五年)……冷泉天皇の史料七冊、圓融三十五冊、花山未定八冊、武家名目抄未定七十冊成れる故、まづ冷泉圓融二帝の部を献す(都合、史料二百〇八冊献上一段落着く)

▲同十年(死後六年)……中山信名、人員増加を願出、三人増さる(修史事業漸く衰ふ)

▲天保七年(死後十五年)十月廿九日……花山天皇事記十冊、名目抄職名部三十冊奉る(十一ヶ年間に史料僅々十一冊のみ)林家より怠惰を責めらる(二

たび)

▲天保九(死後十七年)四月……又々怠惰をせめらる(三たび)○十二月史料一條天皇事記十五冊奉る。

▲同十一年(死後十九年)……一條天皇事記の續、六十冊、名目抄の職名儀式の二門五十五冊奉る。實際は五十五冊一時に奉らず)

▲同十二年(死後二十年)……出役山中菅四郎死去以後二十年ほど名目抄をおき、主として史料にかゝる。

▲同十四年(死後二十二年)六月……又々怠惰を責めらる(四たび)此頃は不精勤、宅調にのみ耽る。

▲弘化一年(死後二十三年)十二月……一條天皇事記の中十七冊奉る。

▲弘化三(死後二十五年)十二月……同上十一冊。

▲弘化四年(死後二十六年)十二月……同上十二冊。

▲嘉永元年(死後二十七年)……同上十五冊。

- ▲同 二年(死後二十八年)……同上十一冊。
- ▲同 三年(死後二十九年)……同上十五冊。
- ▲同 四年(死後三十年)十一月……附錄六冊(一條帝事記の分終了)
- ▲同 五年(死後三十一年)……三條天皇事記 十二冊。
- ▲同 六年(死後三十二年)……同 十四冊。
- ▲安政元年(死後三十三年)……同 十二冊(三條帝終了)
- ▲同 三年(死後三十五年)……後一條帝事記 十八冊。
- ▲同 四年(死後三十六年)……同 十五冊。
- ▲同 五年(死後三十七年)……同 十二冊。
- ▲萬延元年(死後三十九年)……同 十二冊。
- ▲文久元年(死後四十一年)……同 十五冊。
- 同年六月出役頭取をおき伊丹光之丞を以て頭取とす
- ▲同 二年(死後四十一年)十二月廿二日……次郎死。
- ▲同 三年(死後四十二年)……忠韶嗣ぐ、此時改めて御勘定格新規二十人扶

持和學所附を命ぜらる。

○同年稽古所を置き口講あり、稽古所は教授を專とし、講談所は取調編纂をむねとす。

▲明治元年(死後四十七年)六月二十日……和講廢さる。
備考……水母餘音に

- 開祖初代 塙保己一 自寛政五年至文政五年、三十年間
- 二代 男 塙次郎 忠實 自文政五年至文久二年、卅六年間
- 三代 孫 塙敬太郎 忠韶 自文久二年至慶應三年、六年間

とあるが、編者の考では、次郎條下の卅六年間とあるは、四十一年の誤りであらうと思ふ。即ち文政五年(二四八二)から文久二年(二五二二)まで、あるから三十六年になる理はない。

以上の項目だけでは、檢校歿後の和講は克く分るまいから、序に煩をいとはず、左にその要を叙述しよう。

第一回の督責……丁度文政四年九月即ち彼の歿された月である、林家は左の書

狀を出役飯島平四郎にくだして編纂事業の怠慢を責めた。是れ第一回の督責である。

二、出役出席の儀是迄逆も怠慢の向も有之哉に相聞候。此節より改めて日々罷出退出の刻限等一々書記し、尤も病氣差合等は申迄も無之、右帳面、毎月晦日限に占上、翌月初可差出候事。

一、史料の儀は事廣候に付、急々可埒明の義無之候間、此節専武家名目抄に取懸、調片付候様可被致候事。

とある、斯くの如く其怠慢を責めると共に、史料をにおいて名目抄に専ら力を注がせようとしたのは、史料事業の豫定に反して歩々遅々たること、其事業の一朝夕の能くする所のものでないことに氣附かれたからであらう。

左に最初から編纂に預かつた人名をあげれば、

飯島平四郎	岡野次郎兵衛	中澤金十郎
吉川熊太郎	櫻井榮次郎	井上愼太郎
石原喜左衛門	玉造平四郎	

の八人で、その後、出役を命ぜられて編纂に預かつた人は、

松下歌二郎	西井源二郎	金田元橋
關口雄助	田中小右衛門	田中伊三郎
太田忠三郎	朝比奈釜太郎	兒山勝之進
忠内榮太郎		

等の面々である。

さて彼れ檢校の臥病中よりかけて、飯島中山の兩氏代りて凡ての事務を處理したが、林家ではこの兩氏に命じ、朱集の分はその儘にし、既集の分の整理を急がせた。されど、其身局にあたればなかく、放棄しがたく、兩氏協議の上左のことを申請した。

史料村上天皇事記の殘部は、和學所に於て編纂する時は、時日を費す事多きを以て私宅に於て日夜之に従事せば、往還の時間及夜間の執務等にて一倍の進歩あるべきを以て猶進みて之を修めたし。

との意味を願出たが、はか／＼しい指令もなかつたらしい。

そこで、更に出役兩三人に史料の殘務を受持たせ、餘は仰の如く力を一に名目抄に注きたいとの意を述べたけれど、林家では、

異日、續群書類從すべて蒐集の時、同じく史料をも差出す可し。特に名目抄は來月中旬内に更に其總目錄及凡例を差出す可し。

と嚴命した。彼れの重體當時よりかけて、死歿前后に史料には蜘蛛の巢を見、ひとり名目抄のみ時めける有様を見ては、いかに齒がゆく思はれたであらう。

そこで止むなく飯島中山の兩氏及出役の人々協議の上、職名稱呼の十六部門に分けて名目抄の總目錄及凡例を調進したのは、文政五年(死後一年)のことである。これと同時に、

△村上天皇事記五十冊

△群書類從百六十九冊

△續群書類從目錄一冊

をも献上した。其後、四年を経て文政九年(歿後五年)に至りて、冷泉天皇七冊、圓融天皇(三十五冊)花山天皇(未定八冊)及び名目抄(未定七十冊)が草按出來上つた故、まづ

△冷泉天皇事記

△圓融天皇事記

を献上した。こゝで献本濟になつたもの、すべて二百〇八冊になつたから、一段落を着けようと、その卷末に左の姓名を列記した。

右……天皇事記……冊奉命編次

諏訪莊右衛門源 賴篤

飯島平四郎源 忠之

小貫彌太郎源 昌固

西井源次郎源 好問

金田 元橘平 正方

石川城之進源 正澄

中山平四郎源 信名

關口 雄助源 行之

太田忠三郎藤原 弘賢

兒山勝之進平 紀成

小野儀左衛門源 忠常

朝比奈釜太郎藤原良眸

田中伊三郎藤原 儀敦

淺井新次郎藤原 時直

文政九年八月 日進呈

總督 林 大學頭藤原衡

林又三郎藤原 就

これで史料に一區劃をつけ、是よりは幕府の方針に従ひ主として名目抄に重きを置いたが、史料も捐てるに忍びないところがある。そこで名目抄の主任は中山信名史料の主任は關口行之と定まり、更に編纂の方法を極めた。即ち大様左の如くである。

- 第一、各編纂員は古記録を抄出し部類し順序し取捨して一冊となす。
- 第二、其一冊となつたものを名目抄は中山より、史料は關口より男次郎の

許におくる。

第三、又、諏訪頼篤の一覽に供す。

第四、斯くて五冊に至る時は再び中山關口をして校合さす。

第五、後、寫字方に送りて中書さす。

第六、それから中山關口は、既成の分を交換し、再考して意見を加ふ。

附言——編纂員をして名目抄、史料を交互にやらせ、以て一人缺席しても

其の爲め差支のおこらぬ様にした。

この方法は以前より備はつて居たものであらうか、又は新規に出来たものか、よくは分らぬが、前々より種々工夫経験の末、こゝに至り、集めてすべ括つたものと見てよからう。

さすが苦情のみ申込める林家もこの方法を可也と思つたことであらう。

「右御書付の趣にて至極可然被存候間、其心得にて此節より御取計ひ一統に

も御相談有之候様存候」

と云はれてある。そして次郎等の精勵をほめ、調進書の卷末には姓名を記入させ、又

彼れ檢校の生前に因みて官庫の圖書閲覧をゆるし、又續群書類從を整備して官庫及び昌平蠻に納めさせた。

さるに、こゝに名目抄の上に一の故障はおこつた。それは同書に文書部を立てるか否やの問題である。初め太田忠三郎(後、稱屋代弘賢)古今要覽稿二百六十餘卷を編んだが、この太田といふ人は、いたく曾我流の書法に巧なところから、曾我家傳の抄を要覽稿中に合編し、名づけて文書體裁といひ、以て名目抄の引用書中に入れないとの一條である。太田の言にいはく、

……右躰裁の儀は、曾我家傳書、座右抄に詳に有之候條、專引用申候曾我家流と申す儀は、公儀御右筆所にて被相用候書法にて、其流傳授の仁ならでは取扱不申事に候。講談所にも所藏御座候へども、是は内證物にて公然とは難被引用筋に可有之候。私儀は其統を續罷在候へば、私著述に引候は勿論に御座候。依之武家名目に座右抄引候處は、屋代弘賢文書躰裁云、座右抄云と被注候て可然と奉存候云々。

と云つて、文書の部を要覽稿に入れようとしたが、林家ではなか／＼賛成しない。云

はく、文書體裁は座右抄にばかり依つたものでない、加之古文書の體裁を引用するのみで、筆法傳授等のことでないから、たとひ要覽稿と名目抄とに齟齬するところあつてもまた止むを得ない。まして座右抄は已に世に流布してゐるもので、秘すべきものでない云々として太田の言を用ひない。

その後、いろ／＼手を盡してさがしたところが、講談所では已に丹州書札抄として採用してあつた故、太田も別に異論を唱へなかつた。

既にして中山信名は官板和書類校、正に人なく、加之事情多端で、業のはかどらぬことを虞り、人員増加を願出でてあつたが、其旨聽届になりて石黒運之進、西田金次郎、野田孫四郎の三人を増した。斯くて文政十年(歿後六年)も暮れた。

檢校の歿後、二年三年はた五年六年と過ぐるに従つて、だんだ／＼衰運の兆候を呈して來たが、門下生や客員に俊秀の士も少くないため、その事業を繼續してゐた。こゝえて天保七年(歿後十五年)十月廿九日には既成の史料中花山天皇事記十冊、名目抄職名部三十冊を献じた。當時出役頭は甲斐庄長三郎といふ人であつたが、さきに文政九年圓融帝事記調進以來こゝに十一年で、わづかに十一冊の史料とはさて／＼

なさない。それさへ已に文化七年に草稿は出来上つて居たものとのことである。如何に幕府は史料に薄くして名目抄に厚くしたとはいへ、その遅緩また甚しいと云ふべきである。

第二回の督責……されば第二回の責めは参込んだ。その條々にいはく、

一、史料調之儀故檢校死後、出役頭取心得候て、文政六年伺書被差出候節に史料凡百冊程草稿出来居候旨被申聞、其後十ヶ年を経、天保七年に至り僅に二十冊調進相成候。右調は末長き事には候へ共、無故延引候儀は有之間敷、可成丈はか行候様可被致、少くも毎年十冊程づゝは必ず調進可有之候事。

一、武家名目抄、前同斷伺書に、百四五十冊程草稿出来居候旨被申聞、其後前同斷職名之部三十冊半淨書にて被差出候。右は史料調とは違ひ猶更手早く片付候様心得、此後引續き中、清書いたし、毎年一部づゝは可被差候事。

一、出役并に手傳等、凡一日の課程を立、其日取調候分、頭取相役帳面へ記し置可被申候事。

一、調所にて互に雜話に時間を移し、或は申合退散同道外行等有之間敷事。
一、我等としても御用逶の節は、臨時に調所へ見廻りとして相趣候儀も可有之候事。

とある。媿々數百言至れり盡せりといふべく、當時取締の嚴なることおしはかられる。

第三回の督責……それから中一年を置いて、天保九年(歿後十七年)に又々その怠慢を責められた。和講も頻々矢の如き督促によりて、十二月に至りて一條天皇事記十五冊を調進したをはじめとし、四五年間は多少献本したが、幕府は又々警戒を下した。

第四回の督責……は天保十四年歿後二十三年六月のことである。其條々殆んと前年の分と同じいが、やゝ異なる迄を列記すれば、

一、出勤日數皆勤に不相成候得ば不勤の様聞え候より、頼合或は宅調等品能取扱候儀など有之間敷精勤不精勤は日數には不拘事に候。

一、先年塙次郎申出、曝書中は隔日宅調致し候儀承届置候處、以來は外調處

の振合も有之候間、日々出勤可有之候事。

(附) 大暑の節、日中おのつから調方取扱兼可申候凡日合三十日程は八

つ時頃から退散之儀品に寄承届可申、其段取調可被申聞候。

想ふに檢校の歿年から二十三年間において、幕府の督責を受けたこと四回目である。この頃に至りては以前の元氣なく、もと定めし編纂方法などはよほど緩んだかのやうに見える。そして夏日は日勤でなくて、めい／＼随意出勤の姿であるやとおもはれる。

それから文久元年次郎の歿前年までに一條、三條、後一條の史料を献じた。想ふに文化三年(檢校六十一才)この編纂事業をおこしてから、文久元年(歿後四十年)まで、こゝに六〇〇年、宇多天皇より後一條天皇に至る十代、一百三十八年間の史料を調進し、以て冊をなすもの四百三十である。而してはじめの豫算の六分の一に及ばないのは惜しいことである。

一寸こゝに名目抄の事を挿入しておく、名目抄は天保十二年第三回の調進以來、幕府のせかれるにも拘らず萬延元年まで殆んど二十ヶ年程放棄されてゐたのは、

和講の罪ではない、それは不幸にも出役山中菅四郎手傳松岡清助の没したがため、其後を嗣ぐものがなく荏苒日をおくつた次第である。然かし名目抄の編纂は刻下の急務であるから、

近來は益々厚く武術の義を御世話も被爲在候御時節故、史料調は取交せ武家名目抄の方をも追々調進云々

として、更にその目録を奉つた。かくて名目抄は、其後いろ／＼の苦難工夫を経て、遂に完成し、明治の今日では手輕に活刷されて居るとは嬉しいことである。

それから次郎歿後、翌文久三年次郎の男忠韶家督をついだ由來に

文久三年十二月、御勘定格新規二十人扶持、和學所附被申付

とある。この年、和講に稽古所を置き、日講があり、且つ午前と午后に分つて輪講、會讀はた武家故實の稽古などあり、その他一ヶ月に一回和歌會とか、文章會とかを催すことゝなつた。斯くて明治維新まで續いて來た。而して稽古所は教授を専とし、講談所は取調編纂を主としたやうである。

黒川氏は稽古所について按するに、和講に稽古所を置かれたるは次郎氏死去し

て後止むことを得ずおかれたるもの、如し」と古蹟第二卷四號にかいてある。そは
大日本教育史料卷七和學所の條を見れば分かることである。云はく、

林式部少輔古賀謹一郎和學所頭取等より和學所手傳出役の義に付上申書
に云ふ「和學所に於て和學稽古の義一昨戌年(文久二年)十二月塙次郎死去仕
候後は重立引立候者無之候に付昨亥年(文久三年)十一月吉田信之助其外之
者共より和學稽古會頭並會頭介之義夫々申上置之趣を以相達爲取扱候處
其後追々稽古人相増前々の姿にては引立方何方行届兼候に付向後日々稽
古相立候様可仕と奉存候。就ては是迄私共手限にて調物御用出役の内より
夫々掛り役相達稽古人取締並取調等の義兼勤取扱來候へども稽古日被相
立候様相成候ては右出役掛りの者兼勤まては取扱向行届兼候間調物御用
の義は除切候もの無之候ては不相成義に御座候。左候ては調物の方御人少
に相成諸事御差支相成候に付書面八人の者は迄申上の趣を以て和學所手
傳出役並相達置候に付右の者共此度和學所手傳出役被仰渡候様仕度奉存
候。尤御手當等の儀は不奉願義に御座候。左候得者調物御用取扱候者の稽古

筋引立候者は夫々掛りを分け爲取扱候へば、夫是御差支も無之諸事行届取
締も可宜奉存候。依之此段申上候。以上。

子二月 (元治元年)

とあるによりて黒川氏の立説はいよゝ明かになるわけである。

而して明治元年六月二十日和講は廢された。即ち閔祖初代檢校の寛政五年(二四
五三)和講創立から明治元年(二五二八)廢止までは、丁度七十六年間である。而してま
た、

和講由來書に依れば、當時の職員數は左の如くである。

出役頭取	一人
見習	一人
同助	二人
出役	三人
同手傳	七人
同並	五人

稽古所手傳出役二人

世話心得 四人

同助 六人

稽古所會頭 一人

同助 三人

武家故實會頭 一人

同助 五人

右惣人員四十一人也

これで和講の梗概を述べた積である。この項については塙忠韶氏の和講由來書、忠實氏の年譜等を基とし、山崎、黒川氏等の所説を參取したところは少くない。

(大重文學士の談)

内閣文庫は紅葉文庫、昌平坂學問所、淺草文庫、木村氏毛利氏獻納、和學講談所等の書籍より成るもの也。明治二十九年頃の調査によれば、和書三十七萬五千、漢書十七萬六千、英書二萬九千、佛書一萬九千、其他五千、總計六十一萬何千冊也。

(木村氏とは幕府儒者金平か。正辭にはあらざるべし。毛利氏とは佐伯毛利を

云ふか。これは維新前、聖堂設置の頃幕府に納めしもの、佐伯獻納目錄別存)

叙し來りて和講の創設時代より明治維新の廢止まで三代七十餘年間の徑路を觀じ來れば、荆棘の横より手を出すあり、焉羅の向うより脚をからむあり、幕府の嚴令、林家の督責など思はぬ困難のよこたはるものがあるのに、資金も空しく助筆も少い爲に、いくその苦楚を嘗めつゝ春風秋雨、とう／＼四百三十卷の史料を編んで六國史以下の史料を整頓したのは、えらいものである。檢校の七十餘才の老體を提げて、史料蒐集の爲、或は京都或は名古屋千葉等に駛せまはつたのは、人を勵まし世を醒ましたのである。明治維新に不幸にして和講の廢止を觀るに至つたが、翌二年、史局の設置あり、同五年九月、正院に歴史地誌の二課を置いたが、其後、こえて二十八年に史料編纂掛を帝國文科大學に設けられ、大日本史料、大日本古文書等の發刊され、かた／＼一面には國史大系、史料大觀、史籍集覽、故實叢書、存探叢書等の、雨後の筍の如く簇生するのは、その源は水母子の國を懷ひ道を慕ふの至情よりてばれ落ちる涙の末の流れであらうか。あゝ偉なる哉。

藤如上人、幼少なる者にはまづ物を讀めと仰られ候。又その後はいかに讀むとも復せず詮あるべからざる由仰られ候。ち心もつき候へば、いかに物を讀み、聲をよく讀み知りたるも、義理を辨へてこそ、仰られ候。その後はいかに文釋を覺えたりとも、信がなくばいたづらごとよと仰られ候。

(藤如上人御一代聽書下卷)

第五節 温古堂の由來并に檢校の成功

温古堂とは彼の堂號である。温古、先、生など、稀にものに見えるのは、この堂號から延いたものである。温故知新、げにふさはしい堂號である。そも温古堂の三字は名主の聞え高い松平定信公の撰ばれたもので、水戸治保公額字をものし、門人屋代弘賢の彫つたものである。單にこの堂號だけを見ても、いかに世の人から、もてなされ

たかは推測される。今、之をあかすがために、樂翁公の退閑雜記から左の一節を抄録しよう。

塙檢校保己一は名高き盲人なりけり。和學をよくし、或は合式物語など講釋し、また類聚もの多く板行し、今は水府へ出て、日本史の校合にあつかる。寛政五年の頃朝に願ひて和學所とりたつべき旨にて地所を下し給ひける。その學校の名を予に乞ふことしきりなり。故に、温古堂とつけよと人をもて云ひやり

とある。又水母餘音にも、

大人の堂號は、白川の少將主松平越中守後に樂翁と稱す。えらばせられ、水戸の文公治保額字か、せ給はりける。時の貴き人達に恩遇さるゝこと計り知る可し。

と見えるので、その由來は分るわけである。

而して温古堂學則といふのも傳はつてゐるから左に摘記しよう。

▲温古堂學則

定

一、古事記—六國史—律—令義解—三代格—内裡式—儀式—延喜式—符
宣抄—西宮記—北山抄—江家次第—日本紀略—扶桑略記—百練抄—帝
王編年記—一代要記—歷代皇記—世繼—水鏡—大鏡—今鏡—増鏡—榮
花物語—東鑑—本朝文粹—本朝續文粹—政事要略—朝野群載—萬葉集
廿一代集—新葉集—源氏物語—

右三拾三部の書中毎月九之日自午中刻至申中刻まで申合會讀校正可致事

一、稽古の道は書として讀むべからざるはなし依之雖爲三十三部之外申

合自申中刻至酉上刻まで可致考訂事。

一、讀書の間は雜談殊に令停止議論校正專一にいたすへき事。

年 月 日

溫 古 堂

とあり、右の中にある午申酉の刻とは今の時間に直せば、午は正午十二時、申は午后四時、酉は午後六時にあたつてゐる。即ち第一研究書目の三十三部は毎月九、十九、廿九の三回あるわけであるし、その他の第二、第三研究書目も申合の上考訂したもの

と見える。稽古の道は書として讀むべからざるはなし、その如き言簡なりといへど其學風も知られて、うたゝ欽慕の情に堪へない。また讀書の間は雜談や議論を禁めたことの如きも、滋味のある言葉である。

次に、文庫設立の事に關して掻いつまんで述べよう。そも文庫の設立は、寛政五年（四十八才）和學講談所並文庫取立之儀申立許可となりて裏六番町に於て三百坪程拜借されたから、此時已に書籍蒐集に着手されて、文庫を設立されたとおもふ。是より類從の材料や又は史料として毎年蒐集されたのは、皆この中に收めたから殆んど數へきれぬほどあつたらう。大日本教育史料卷七に、

通計百三十四箱、三千八百十五種、一萬七千三十八卷、一萬千五百五本

と見えてあるが、惜しいことには調査の年月日は不明である。

而してその文庫の位置については忠詔氏の記載によれば、

文庫は、御厩谷通り、講堂の南三十間程にあり。五間に二間半、高さ九尺、今、六番町四番石、邨貞一の定邸是也。

とあるので明かである。左に印影を示さう。

温故堂文庫

一五四

是れで温古堂のことも一わたり濟んだから、次には彼の成功や榮譽に就いて略述し、以て本節を畢へよう。その前に便宜のため年表を掲げようか。

温古堂本倭名抄
箋註倭名抄參訂諸本日錄云、温古堂本、江戸和學講談所藏本、按那波氏活字本校例云、舊本臆寫之脫誤重複、行無高低、字無細大、蓋其混淆而難見、故考諸書而訂正者不少矣、且其第十六卷末九葉脫失者、乃以別本補之、是那波氏所改居多、而是本以之活字本、雖有少異、至界行字數、其式皆同、第十八卷亦完全、則知是本那波氏所校活字本之原秩也

◎年表

▲寶曆八年(十三才)……江戸に上る(舊名辰之助、千彌と改む)

▲同十三年(十八才)……衆分に進む(保木野一と改む)

▲安永四年(三十才)正月元日……勾當に進む(塙勾當と稱す、保己一と改む)

▲天明三年(三十八才)三月……檢校に進む(昨年初て結婚)

▲同五年(四十才)……水戸文公に見えて盛衰記、日本史校正す。初は月俸五人分、後十人分、たゞ礪川殿にさむらふのみならず、市谷殿、麴町殿にまうで、貴體を拜しまつれり。其外諸侯大夫の家に往來するはわけてもいひがたし……信名

▲寛政六年(四十九才)……盲人一坐取締役を命ぜらる。

▲同十一年(五十四才)五月……盲人一坐取締職を辭す。

▲享和三年(五十八才)六月……一坐惣録職となる(本所一ツ目總録屋敷へ轉居)。

▲文化二年(六十才)十二月……一坐十老となる(一坐惣録をさりて表六番町にかへりすむ)。

▲同三年(六十一才)四月……昨年十老入に付上京。

▲文化六年(六十四才)十一月……大納言御婚禮に付、御祝儀御能、開口文句考へしめらる。

▲同十二年(七十才)四月七日……多年御用向を勤め書物類校正の功を賞したまひて、御序の節、御目見仰せつけらるゝ旨あり。○同月廿八日、初て兩御所を拜し奉る、自是毎年、歳の始の祝を申して拜謁しける、御目見被仰付、○七月、身分の儀、御目見醫師の振合に心得べき仰あり。○此年、日光御神忌に付、御能開口文句考へしめらる。

▲同十四年(七十二才)……大坂町人増本屋安兵衛、和學所開校入用のため差出金千兩を貸付仰らる。

▲文政元年(七十三才)正月……二老にすゝむ、在京すべき所、特別を以て江戸にとゝまる。

▲同四年(七十六才)二月……總檢校となる(金貳枚時服貳、拜領)○八月廿三日病氣のため總檢校の職を辭す○九月十二日病歿。

▲同五年(死后一年)六月……白銀三十枚下さる。

彼の國史國文界に於ける成功の過半は、前數章に於いて已に明かである。故に本節では、むねと盲人界においての立身出世を、叙しかたは、學界の名譽を、極めた顛末を挿入しようとおもふ。

彼の保木野村の一僻村より素麵箱を負うて、數十里の行程を絹商と共に江戸にたどりついたのは、寶曆八年、十三才の時である。それから十八才で衆分にすゝみ、三十才でやうやく勾當となる。その後八年の修業でとうとう檢校になりおほせた。その間の苦心精勵何とも云へない。然かしこの苦難は彼を玉となした。出府以來二十五年目で、年頃の素願を果した。是れ彼の第一回の成功である。こゝえて天明五年(四十才)はじめて水戸文公に見えて盛衰記や日本史の校正に預り、後に十人扶持をいただいた。天明五年といへば類從を思立つてより六年目で、まだ和講創立より八九年前のことである。文公に知られたのは、彼の名を學者間に弘めた主なる原因の一つである。今、どうして彼は文公の眼に止つたかといふに、まづ翠軒との關係を知らねばならぬ。

立原翠軒(二四〇八―二四八三)は有名なる水戸の史官で、彰考館の總裁として大

日本史を監修した翠軒、人となり卓犖不羈、博學文章を以て擢でられて總裁となつた人で、日本史編纂事業のやうやくすたれて來たのを、盛りかへしたのも、翠軒の力である。この人は丁度檢校より二年ばかり後に生れて、二年程後に亡くなられた人だが、たま／＼檢校が國朝典故の學に精しいといふことを聽かれ、やがて推薦して日本史の校正に預からしめたとのことである。尙、くはしく云へば、一日大人は門人屋代弘賢の家を訪うた折、水戸の文學立原翠軒も、をりふし其席にありて、ある願文のことについて論つてから、翠軒は深く大人の博學におどろいた。信名のものしたものに依るに、

初め萬翠軒のと大人の名を聞く、こゝに至りて名と實のかなへる事を知り、日本史の校合をゆだねるの意を起す。然れども同僚のうけざらんことをはかりて、まづ參考盛衰記を校正するにつけて、大人を文公にすゝむ。この故に同じき五年(天明)といふ年始めて文公を拜し、月俸五人の分を給はりて、往來のたすけとす。盛衰記の校合の事はてゝまた日本史の校合にあづかる。其功勞あるをもて月俸をまして十人の分を給はる。

とあるに依りて文公はた翠軒とかれとの關係因縁を知るとは出來る。これよりさき、彼の著花咲松の論旨は、いたく翠軒を動かしたため、いよ／＼臍をかためて、この舉に出たのであるが、同僚の批難攻撃はまた大したものであつた。

……そのをりに萬の同僚みないさめていひけらく、國史はわが先君の修むるところなり。替者をしてその事にあつからしむ、これ我等の耻にあらずや。むべその事をとゝむべしと。萬うけすして云ふやう、その人の盲なるは、病なり、尊卑のいたす所にあらずしかれども、つねに所謂盲人は、世のもてあそび草となることを勤とす。この故にいやしまれざることかたし。塙は文學を業とし人多く師の禮をいたして來り學ぶ、その説もまた取るべきが多し。さらばいかで明不明のへだてあるべきや。もし國史の校正にあづかりて補ふところなくば、萬その罪をかうむり、なんと答へしかば、終に其事なりにけり。是に至りて、大人の名四方にあらはる。

眞に痛快の言ではないか。信任される彼のえらいことは素よりであるが、信任する翠軒もまたえらい。その盲人と尊卑との無關係なるを説き、彼の人物學識の高き

を揚げ、群議喧囂の間に立つて、もし國史の校正にあづかりて補ふ所なくば、萬その罪を被りなん」と責を一身に負うたところなどは、凡骨の出来る仕事ではない。萬の彼を信任せるこの一條で分る。従つて文公との關係もいよく明かになつたわけである。これ彼にとりて第二回の成功であらう。それより盲人一座取締役、一座惣録職となり、次いて十老となつたのは、文化二年六十才の末である。彼の七十才の頃、即ち文化十二年四月七日に、

多年御用向相勤書物類校正差上骨折候に付、御序の節、御目見可被仰付趣、於躰躰間、土井大炊頭守殿被仰渡、

とあるから、いよく多年希望してゐた將軍謁見も出来かゝつて來たと心待にまつてゐたところ、廿日ばかりたつて同月廿八日といふに、左の書狀を受取ることば出来たのである。云はく、

(寫) (現に荻野家にあり)

明廿八日

御目見之御序有之候間

五時

御城え可罷出候以上

四月廿七日

植 駿 河
塙 檢 校

編者云、文化十二年七十才の四月廿七日である

當時の將軍といへば飛ぶ鳥もおとす勢のあつたものである。その謁見と來てゐるから、名譽のきはみである。彼ははじめて兩御所を稱しまつり、御惠みのあつきに老の涙をしぼり、自是御目見醫師の資格で、毎年歳の始めには拜謁仰付られたとのことである。これ第三回の成功である。

その後、文政元年七十三才正月、二老にすゝんだ。從來の例によれば在京せねばならぬのに、幕府の特別の思召で、在府そのまゝのことゝなつた。同四年七十六才盲人の總理、大臣ともいふべき總檢校といふものに榮進し、盲人としての榮譽を極めた。この年金貳枚、時服貳領を拜領した。これ第四回の成功である。

之を娶するに、彼は和講を創立して、類従や史料や名目抄で、一方では幕府の恩顧を受けて、空前の成功、偉大の名誉を博したと共に、又他の一方では立原翠軒の知るところとなりて文公の知遇を受け、樂翁公に温古堂の三字までいたゞいた。彼の榮譽も大したもののである。而して總檢校まで上りて盲人界の天井までのぼりつめ、將軍家にまで見えた。そのはまれといふものは洵に欽仰に堪へんばかりである。彼は成功した、たしかに成功した。享和のむかし素麵箱を負うては、てしない武藏野の露をふみわけて來た田舎小僧は、云はゞ一羽の里鴉である、小雀である。それが六十年の間に見るゝ鳳となり鶴と化つたといふのも、たゞ心掛の如何にあることで、胸の柙のはじき様一つである。世の學にたづさはるもの、兩眼をかねもてるもの、こを見ていかんの感をおこすだらうか。

一 書は學用文
一 學をひは戲示學徒
一 先文よめがたし。少榮の樣なり。と三
足の惡し。置所計學者くさし。こま少と奥浦
の皮はあつきがよし、つらの皮は薄きがよし。
(梅園拾葉卷下)

第六章 檢校の著書

第一節 彼の編著

檢校の著書といへば、讀者は定めて前數章において述べた群書類従、史料、家記等の觀念、むらゝと胸に浮び出ることであらう。是等はもとより彼の事業の大なるもので、編著書の中の大部分であることも争はれないが、この他大小取りませると、まだゝある。

其一、彼の編著にかゝれるもの。

- 1、群書類従——(五百三十八卷)經濟雜誌社で縮刷したのは、十八輯九冊で、解題、索引のついてゐるのは重寶だ。
- 2、續群書類従——(一千卷)未だ全部の出版を見ない。現に刊行中。目錄は經濟雜誌社のに正の方と並んでゐる(委細は第四章參看)
- 3、史料——宇多帝より後一條帝まで一百三十八年間の分、(四百三十八卷)(或は四百五十八卷ともいふ)

宇多帝の史料は先年我自刊我叢書の中に收められてゐる○國書解題には宇多帝より後一條帝までを年月日を逐ひて記し、毎事綱を掲げ、下に諸書を轉載せりとありて、寫本五百三十五冊としてゐる。

4、家記——(百七十八卷)幕命を奉じ、縉紳家所藏の書類を輯めたもの、年譜に見える調進の分は左の如くである。

○寛政十一年(五十四才)……十二月、堂上家記録、校正書寫、調進仕度段、願書差出(伺濟之儀書留無之)。

○同十二年(五十五才)……六月、堂上家記十部調進○同月家記寫取爲入用、寫料之内へ金五十兩、堀田攝津守殿へ御伺濟の趣を以、前拜借被仰付。

○享和元年(五十六才)……六月、家記二十八部調進○十二月、同斷二十五部調進。

○同二年(五十七才)……六月、家記二十八部調進○十二月、家記十七部調進。

○文化元年(五十九才)……十一月、家記十部調進、同月家記御入用、前拜借相願、十二月願之通被仰渡。

○文化二年(六十才)……五月、家記一部調進○十二月、同斷十六部調進

○同三年(六十一才)……十二月、家記三十五部調進

○同四年(六十二才)……家記類調進、寫料之内、金百兩、前拜借奉願候處、願之通被仰渡。

調進の年月日及冊數は右の通りである。して見れば家記は五十四才より六十二才までの間、數回に調進したものと見える。

5、武家名目抄——(凡七百八卷)本書は鎌倉以來武家に稱へ來れる職掌制度、衣服等より、凡百の名目の諸書に顯はれたるものを抄出して類舉したものである、其部類を分つて職名、稱呼、居所、衣服、公事、文書儀式、弓箭、甲冑、刀劍、旗幟、輿馬、術藝、軍陣、歲時雜の十六部門に分ち、繪圖をも添へて叮嚀に説きあかしたものの。

この企は文化三年(六十一才)の時よりはじまり、生存中にはその半にも

達しなかつたが、歿后、門人中山信名主として之が任に當り、やう／＼まとめた。近時吉川弘文館(故實叢書の中)から刊行されたは、喜しいことである

(第五章第四節參看)

6、螢蠅抄(六卷)——開化天皇の十九年壬寅(五二二)より安永十五年戊子(二

〇六八)に至る外寇の事跡に關することを、百三十種の史乘によりて抄出したものである。螢蠅の名については自序中に、

「……これは螢火の輝く神、五日蠅なす惡しき神のあらびにて夷等の此國に寇なすことありとも、やがて神風に吹き破られて遂に憂ひなからん理を世人に知らせんとて」

とあるので分る。六卷中最後の一卷は、古記そのまゝの抄出で、附録としてある。文化八年乙酉(二四八五)二月靜寛堂の序、同年同月五日の自序があるから、彼が六十六才の時にものした者だらう。佐村氏の國書解題に、文政八とあるは、文化八の誤りである。信名の傳ふる所によれば、享和八年螢蠅抄六卷を選びて奉りしかば、白銀五枚をたまはりて賞せられきとある。尙、平田篤胤も、その著玉櫛の蒙古襲來の條分注に、其

賊の軍船を神軍の神風にて吹きくづし塵にしたる趣など、今の世の書等に委く見えたるを、塙保己一檢校が拾ひ抄せしめて螢蠅抄と號けし物のあるを見るべしといへり。史籍集覽纂錄類に收まつてある。

7、雞林拾葉(八卷)——朝鮮國の事跡を國史古事記より摘抄拾集したものである。文政六年林銑大學頭(衡の子、秦鼎の序がついてゐる。而して本書は林大學頭の囑によつたことはその序文でわかる。

……夫修聘者、國家之盛事、昭代之大典也。禮義輕重、解令崇卑、以至瑣事末節、皆國體所係焉。非其明彼此之得失、富古今之成敗者、不能也。於是行也、家君囑、國學館長檢校塙保己、蒐輯國書、凡涉韓國事歷、釐爲八卷。凡二千年間、隆替沿革、反從之迹、與彼得失、古今成敗之故、眉列星陳、使人一開卷、即瞭然、則其在奉時、爲不可闕也。塙氏、門人松本藩野々山義府、嘗與編摩屬者、更加訂正、名曰雞林拾葉、鏤梓行世。請序於余、因略叙兩國隣誼、頗未與斯編所成之由、使覽者有所稽焉。屠維單闕仲秋、樞宇林銑撰

とあるに依れば、野々山義府も補助したものに見える。水母餘音に、十七卷とある

は八卷のあやまりであらう。

8、花咲松(壹卷)——古歌によりて南朝三代のことを論じたもので、南朝後村上帝のつぎに長慶院を立て、南朝四代とするの説の非なるよしを考證辨論したものである。天明八年(檢校、四十三才)太田覃の奥書もついてゐる。本書で水戸の翠軒に知られた。

本書はながく寫本で傳つてゐたが、近年史籍集、覽中の史料叢書卷之三に收められ、又中古叢書の二十三も南朝花咲松である。八頁位の小冊である。覃の奥書は左の通りである。

「右一帖保己一檢校所勘也。其論長慶院事、詳且盡矣。尾張天野信景著南朝紹運圖、以寛成熙成同訓爲一人者亦誤。夫南朝三代之間、皇統所係、不亦重乎。因寫一帖、必秘篋底云爾。天明八年戊申季冬 藤原覃」

とあるので、南朝三代説について意見をもつてゐたことは分る。

9、松山葉(二卷)——彼の歌集である。はじめ總隱集と云つたのは總檢校の隱居の集との意味なさうだ。後には堀田正敦の注意に依り松山集と改

めた。これは卷頭に

△年なみもまだこえなくに、春來ぬとかすみそめぬる末の松山。(年内立春)とあるから名づけたとのことで、論語の學而篇とか、又は兼好の徒然草なども、その例で、昔にはよくあつたことである。

部類は

上卷——春夏秋冬、

下卷——冬戀、雜、

の六類で、歌數は總計六百五十一首である。

春——一四八

夏——一〇五

秋——一五一

冬——七二

戀——五四

雜——一二一

六五一首

余の計算によれば、六百五十一首であるから、水母餘音の五百五十首とあるは、あやまりであるとおもふ。

この歌集は刊本なし、余の見たのは忠詔氏の寫しおいたものである。而して同氏

は先年千代田文庫の本を借りて寫したと斷つてある。この千代田文庫の本は次郎忠實氏の眞筆で、學問所への納本である。

- 10、榮花物語標注——卷數未詳、水母餘音に、某女が古本榮花物語を購求して彼に與へ、そしてそれは彼の書籍所持のはじめとあるから、少時よりこの榮花をよくならつたものと見える。信名も門人の書入本。

「……大人物語てふものも、何ならず、くらからねど、殊に源氏榮花などをむねとせられしなり」

とあるを見れば、榮花は十八番の一つと見える。標注ある、偶然にあらじ。

（榮花物語、四十卷は宇多天皇の寛平年間より堀河天皇の寛治六年壬申（一七五二）に至る、凡そ二百餘年間の雜史なり。架空の史談にあらずして事實史である。かれは史料に趣味をもてるも某女の記念物の影響であるまいか）

- 11、徒然艸拾遺（卷數未詳）——本書中の名目稱呼等を考證したもの（門人の書入本）

（徒然草（二冊）は見聞感想何くれとなく書きつゝつたもので、二百四十三種より成る。孔孟の教、老莊の説、さては佛教の意等を混和して、議論の深奥なる他の隨筆の比ではない。檢校は拾遺をもつする位だから、勿論愛誦したものらしい）

- 12、重の色目（卷數不詳）——木版小本で、井上頼因翁のもとにもある。名の示す如く重ねの色目を抄出したもので、装束などを知るに便である。源忠次などもかさね色目（三四四四）の著あり。又彼の師、眞淵もかさねのいろあひをもつしてある。此等にならつたものだらう。

- 13、皇親譜略（七卷）——皇子皇女の系譜をあつめたもの。寫本、井上翁所藏。

- 14、椒庭譜略（同）——皇妃の系譜をあつめたもの。寫本、井上翁所藏。

- 15、假名曆略註（壹卷）——曆の諺解である。寫本である。

- 16、南朝公卿補任考（寫一卷）——「南朝公卿補任」の偽書であることを辨じたものである。後醍醐帝（一九九七）より後龜山帝（二〇五二）に至る五十六年間、

南朝諸公卿の補任を列記したものである。寛政五年（二四五二）宅今林寫

のよしを末記してある。

尙著述日録などには、彼の著書として耳食勞筆、士氣城再興記などあれど、未だ見ず。水月文藻もあれど、余の見たのは、名は異りてゐる。井上博士は寫本であると云つてゐる、また三國年數閨中抄の如きは、他人の著にかゝるもので、續類從の中に收まつてゐる。

十六部

其二、彼の校正にかゝるもの……

- 1、今物語(壹卷)——初之を校訂上梓したが、後に群書類從卷四百八十三、雜部第三十八に收む。本書は藤原信實(一八三七—一九二五)のものしたもので、虚實の雜話をあつめた和文の隨筆である。文覺上人の歌のこと、紫式部が地獄に落ちたるよし夢に見えたること、小侍從が子の法橋實賢狂歌詠みて法眼になりたる事等を文章に綴つたものである。本書は、もと二十、七冊あつたやうに、仁和寺書目に見えてゐるが、傳存してゐるものは、僅かに一卷のみである。

亦母餘音に彼は今物語を校正し、堀田攝津にもちゆき、輕侮されたのが、動機となり、類從をあんたとあるが疑はし。今物語は四十一才の時上梓したものである。年譜に

天明六(四十一才)今物語刻成淨書は屋代弘賢

- 2、日本後紀(十八卷)——六國史の一である。これも校訂上梓した。信名云はく「……又日本後紀は世のなかに久しく絶えて傳はらざりしを、さきに京都の名家よりもとめ出されて、かた木にゑらしむ。すべて十卷あり。全部の五分が一なりといへども、なほ六國史の員備はることは、今の御代となりてこの時はじめなる……」

とたへてある。次郎のものせる年譜には寛政十一年(五十四才)此年日本後紀八卷刻成るとある。

元來、本書は、藤原冬嗣のあんだもので、續日本紀に次げる本朝の正史である。桓武帝の延暦十一年壬申(一四五二)正月より淳和天皇の天長十年癸丑(一四九三)二月に至る四十二年間の事蹟を記したものである。今は國史大系の第三卷に收めてある

のは重寶だ。彼の上梓せる分は京都より得たもので真本である。卷五、八、十三、十四、十七、二〇、二二、二四の八部で缺本だ。彼序して曰く、

「日本後紀は六國史の一にして閑院贈相國冬嗣公等勅を奉じて撰びたまふ所なり。然れども中古より絶えて世に傳はることを聞かず。今人知る所の日本後紀二十卷は、諸書につきて聊か其文を録し出せるものにして、真の後紀にはあらず。かつて大永に書寫せし類聚國史を考ふるに、後紀のみ全文を寫して、其他はまゝ省略せる所あり。是によりて其頃既に世に行はれざることを知る。然るを殘欠とはいへども、真本を求め得て歴史の缺けたるを補ふ。そも／＼絶えて久しき寶典再び世にあらはれ六國史の數全く備はること、これしかしながら文明の徳化によるものなり。」

3、扶桑略記(卷數未詳)——これは官版上木につき、幕命により校正したものと見える。

本書は十四卷、僧皇圓の著である。もと三十卷あつたが、今傳るものは殘本で、神功皇后の元年におこりて寛治八年(一七五四)に止つてゐる。この他

別本もある。國史大系第六に收む。皇圓は法然上人の師である。

4、令義解(十卷)——年譜に

「寛政十二年(五十五)才此年令義解開板成」

とあり。又信名は、

「令義解、百鍊抄などをも、よくかうがへ正して、ともにかたぎに彫りて世にひろく行はしむ。この外、國史格式などこと／＼く校正してなほ進て上木の功を企てらる。世の國學をいふもの、たはやすく奇書を見ることを得しは、多くは大人のいさを也」

と云へるので、其功績のほごは分る。

令とは官位、職員、僧尼等の三十編より成る。近江令を基としたものである。義解とはこの本文を注釋したもので、左大臣清原夏野等の官撰にかゝる。國史大系の第十二卷に收めてゐるのは、塙保己一、本を基とし、紅葉山文庫本等を以て訂正したものである。

5、百鍊抄(二十八卷)——大治承安文曆十七卷、建長正元十一卷、都合二十八

卷であるこれは大治一七八六——一七九〇頃から正元元年（一九一九）頃に至る雑事を記した記録である。今は國史大系の第十四卷に收む。これは塙保己一本を基としたものである。

6、孝義錄（卷數不詳）——これは太田覃撰の皇朝孝子の記である。幕命によりて校正したものと見える。

年譜に

△寛政十一年（五十四才）十二月孝義錄校正、並淨書被仰渡、

△同十二年（五十五才）九月孝義錄校正之儀、備中守殿御下知之旨、林大學故殿被仰渡。○十月、右板下淨書仕立候様前同斷被仰渡、

信名云はく

△寛政十一年十二月（五十四才）この頃學問所にて撰ばせらるゝ所の孝義錄を校正し假字のつかひさま詞ののべやうなど改むべき仰ことありて、おまねく校へたゞして功なりにたれば、やがて開板なる」

7、類聚符宣抄（八卷）これも幕命により校正したもので、官版である。

水母餘音に七卷とあれど八卷のあやまりである。それは文政三年（七十五才）彼自らの奥書に、

「右符宣抄八卷、京師において之を得たり。缺卷ありといへども、尤も珍書とすべきものなり。仍て校合の次、聊か傍註を加へ了へぬ」とあるにて明かである。

本書は太政官符及び口宣案を類聚したもので、もとは十卷であつたが、いつしか第二、第三を佚して今八卷を存してゐる。國史大系第十六卷に收む。該書は塙保己一本を原とし、三代實錄等の諸書を参考して校訂したものである。

8、大日本史（卷數不詳）——水戸文公に召されて校訂にあづかる。これは立原萬の庇陰であることは前にいつてある。

栗田勤の修史事略（寫本四冊）に云はく、

△天明六年六月十九日、立原萬總裁となる。

△寛政元年立原萬の建言によりて日本史上梓の議復興る（小宮山編修、

立原の廢志論を駁す

△冬、誓、保己、一、瑯、檢、校、日本史を校せり。保己一人と爲り強記能く皇朝の古書を誦し、旁ら典故に通せり。人の紀傳を讀むを聞く毎に、凡そ其事實乖謬、年月錯誤、皆能く歷々之を言ふ。遂に建議して云く、凡そ各條注する所の出典、宜しく悉く原書に就て以て其異同を質す可し。衆初め之を難んず。然れども黽勉之に従ふ。其後賴て以て訂正する所のもの頗る多し。

△寛政九年八月、總裁立原萬を召し、日本史の事を問ふ。文公も亦日課を立て、紀傳を重校し、史臣に命じて侍讀せしむ。

大日本史紀傳——二百四十三卷

大日本史志表——百五十五卷

外總目錄——五卷

△四百三卷編修につとめし人、四十三人

△義公光圀十八才の時より十二世二百五十年にして、圓順時代にはじ

めて完成す。

彼檢校の如きは、たしかに、この十二世二百五十年四百三卷の大樹の幹となり、根となつて居るのである。

9、盛衰記——(卷數不詳) 水戸文公の囑によりて校正したるもの、これに

合格したから大日本史の校正にもあづからしめたのである。信名云はく、……初め萬……日本史の校合をゆだねるの意をおこす。然れども同僚のうけざらんことをはかりて、まづ参考盛衰記を校正するに、ことつて大人を文公にすゝむ……盛衰記の校合の事は、また日本史の校合にあづかる……

とある。

源氏物語四十八卷、二條院の應保年中より安徳天皇の壽永にいたる二十餘年間における源平盛衰の事實を百數十項に分けて詳叙したものである。葉室大納言時長の著とすれど、さだかではない。

10、律……律とは、いはゆる律令の律で、初めこれを校訂上梓し、後に類從に

編入したものである。

ベ十部

これでかれの編著校訂にかゝるもの二十六部を紹介した。この外にもあるとのことであるが、今は見當らないから暫くさしおいて、今度は彼の學殖の方面について稽査して見よう。

第二節 彼の學殖

彼の學殖の深遠にして、然かも牢固拔けざるの概は、或は類從史料の編纂や、榮花徒然の注釋や、重の色目補任考などの考へで、その有職故實より國史國文にかけていかばかり蘊蓄の深かつたかといふことは、はゞ推測は出来るだらう。殊に花咲松において南朝三代說現任は四代說に傾いてゐる學者が多いを主張せるが如き、又は日本後紀などの珍書を校訂して六國史の缺を補うたが如き、史學上に對する識

はた効果は夥しい。明治の今日古書を刊行するのに、多くは塙本を原とするのでも分る。

故に彼の學識修養については、別にくゞしく絮說するの要はないが、讀者の便宜のため左に思ひついた二三の事件を駢記して彼を知るのたつきとしよう。

A、彼の學殖、幕府を動かす……

彼の博識宏才は幕府を動かした。彼の熱誠は林家の知るところとなつた。叢書編纂を思ひたつた頃は、勾當に上つてより間もないためか、學殖の程もあまりに世の評判に上らなかつたが、彼の信仰心の厚いのと、好學の念の深いとは、見る／＼千波萬波をおしのけ踏みのけ、天の一角を新に拓かうとしてゐる。彼が和講をまうけ史料編纂の壯舉を願出た前後より、やゝ名も實も知れわたつて來た。されど幕府はなか／＼色好い返事をしてくれない。おしかへし／＼申請したが容易に允さない。やう／＼六年目で許可になつた。それからといふものは、彼の精勵一通りでない。遂に林家に知られ幕府に知られ、善きにつけ惡しきにつけ、事苟くも有職典故、はた國史律令に關するものは、一々和講に托するといふ風になつた。これ皆彼の學識熱誠の

然らしめるところである。二三の例をあげれば、

- (イ) 孝義録といへばその時代の學者太田蜀山人の撰にかゝるものだが、幕府はその書の假名や言葉の使方を彼に直してもらうたが如き、
 (ロ) 大納言祝儀や日光神忌の時などに開口文句を考へてもらうたが如き、
 (ハ) 昌平坂聖堂釋典に裝束を心得た門人を出してもらうたが如き、
 (ニ) 有用なる珍書の校訂出版を托したが如き、

是等は事その一斑のみであるが、他は之に準じて知ることとは出来るだらう。

B、彼の學殖水戸公を動かす……

彼はたゞに林家を動かしたばかりではない。水戸公をも動かした。樂翁公にも知られた。然かしそのもと、立原萬を駭かしたからである。信名云はく、

大人一日屋代弘賢の家をとむらはれしをり、水戸の文學立原萬(甚五郎と稱す)もその席にありて、某が秘めもてる三年の御願文のことを弘賢と論らひたり。この御願文は奥に太上天皇某とのせられて、御諱まさしくしる

されず、當年は御伏見院花園院ともに太上帝にておはせし時なれば、いづれともわきかねたりしに、大人かたはらにきゝて、その文はいかにかゝせたまふにや、一通りきかせたまへとて讀まするに、帝禁之闕宸居無動姑射之山南樹不虧といふ句に至りて、大人そこにてよくわかれにたり。花帝の御願文なり。いかにといふに、先つ帝禁之闕と書かせたまへるは、後花園帝なり。これは御子ながらも御位におはすればなり。次に姑射之山と書かせたまひしは、父の帝後伏見をさゝせたまへる也。されば花園帝にたがひあるまじといはれつ。萬をはじめて皆感じ合ひたり。

翠軒はこの一事で膽を寒からしめた。それから文公にも知遇されることゝなり、日本史の校正にもあづかることは出來たのである。彼建言していはいはく、

凡各條所注出典宜悉就原書以質其異同出入、修史始末、藤田一正

と衆皆之を難しとしたが、後には頼りて訂正するところ頗る多かつたところとである。是等破天荒のことは學識豊富のものでなければ、なす能はないところである。藤田一正の如きはこれを批難して、

……瑣々異同、何悉究、塙之議算、髮而櫛、數米而炊之類耳、同上

と云つて彼の擧を髮を算して櫛り、米を數へて炊ぐと冷評してある。されど遂には

遂能竟其緒、後人以臆潤意、悖原書者、皆得以加訂正、則塙之功、亦不可沒、同上

とたゞへてある。想ふに修史のことたる、この髮を算し米を數へるといふ位の精緻周到なる決心がないと、到底出来るものでない。獨斷でドシ／＼鹽梅されてはその功を收め得ない。

C、故實典故の學殖……

林家と水戸家に知遇された程の學殖ある彼であるから、故實典故の學に精通してゐることは論をまたない。彼が著書中に散見してゐるのを見る時は、いとゞゆかしく思はれる。されど編著のことは前にしば／＼繰返したから、こゝでは別の方面にある資料より、拾ひあつめることゝしよう。

それは蜀山人の一話一言、寫本七十卷に見えてゐること、で、元來蜀山は狂歌師で、

武藏のはとりに旅寐して

我年も六十餘國むさしの、八百里ほど生きんとぞおもふ

などゝ洒落れて一生を送つた人だが、檢校とは交際もあり、有職故實や故事典故等のことは、教へを受けたと思はれて、この一話一言に「塙檢校語れり」としてあるところは、少くない。蜀山も花咲松に奥書し、檢校も孝義錄を校訂した位だから、互に交際し、しかも和學については檢校よりしば／＼聴いたらしい。それで今、蜀山の一話一言より拾ひあつめたのである。この書は明治十六年七月に出版されたものもある。

(イ) 難語について……隱語とか、又は漢字を吳音や唐音でよんだものには、分りにくい語が多い。それを彼はたやすく解してある。例へば、

▲鐵槌子——蜀山は活板の本朝文粹に鐵槌子の傳あり。而して鐵槌子は毛中の人也。其名曰「ハセ」と見えて居るのを疑つて居たが、彼は之を説いて、鐵槌子は隱語で男の隱所であると云つてある。

▲ごんく——これは一話一言ではなくて、道の幸にあることであるが、序にあげておく。

さて弘賢はごんくについて彼に質したところ、金鼓を吳音でよんだものと答へられた。この事は道の幸(三冊)屋代弘賢著の寛政四年

十一月四日のところにある。云はく、

「さいつ頃、庵主又は和泉式部集などにごんく打ありくとあるごんくは何にやと塙、檢校に問ひければ、順和名抄にひらがねとよみてある金鼓を吳音にて呼びしなりと答へけれど、なほ何ものといふことさだかならざりしが、此鑼口(壬生寺にある正嘉元年の鑼口)に奉鑄、顯金鼓一口と彫てあり、是を以てごんくは今いふ鑼口なりと知られぬる、いとめてたし。」

とあるのはよきあかしである。

(ロ) 難訓について……読み方のむつかしいのも少くない。たとへば、

▲定考——とかいて「ヂヤウカウ」と讀まないで「カウヂヤウ」と倒讀するは「ヂヤウカウ」とよむときは、上皇の音に嫌があるから、それを避けたものであるといつてゐる。

(諸司の輩の藝能、行狀、格勤を選び出すこと、六位以上の加階にあることである、本居宣長の玉勝間にもある)

▲朝所——これは「アイタンドコロ」と讀むべきものである。「アシタドコロ」より来る。太政官式(參議以上、著朝食處、少納言辨、大夫等候之)

▲細男、細馬——細男、春日祭などにあり、才能ある男といふ意也。細馬、よき馬といふこと也。古記に神社へ細馬を献ずること多し。保己一檢校の話也。

(ハ) 器物の稱呼について……いろいろ説きあかしてある。

▲錫のもの——逍遙院殿高野詣の日記に「食籠錫のもの」などもたせたりとあるを疑つてゐたが、檢校の説に「田舎には今も德利といはず錫もの」といふと。

▲箱の角の名稱——に四つある。即ち

折り角

丸角

切り角

入り角

(ニ) 物の結方について……もになむすびあわむすびのことなど、何くれと説いてある。この説をなしたときは未だ勾當の時であると見えて、蜀

山の筆には「塙勾當話二條」としてある。

河貝子(ニナムスビ)蛭結(アワムスビ)といふ結方がある。蛭は今いふあはち結び也と云つてある。

その他、東巡禮歌の巻のことや、千羽鶴のことや、又は光琳乾山のことなど、一話一言中にちらばつてゐることは多いが、左まではとて省いた。

D、狂歌俳句の學殖……

和歌のことは、次章に詳述するから省くこととして、こゝには單に狂歌とか俳句の素養について、一寸叙しておかう。かの蜀山人とは交際もあり、且つ蜀山は和學について、常に檢校の説をきいてをつた位だから、眞面目な歌の外に洒落れた歌なども、自然とやつて見ようとの念をおこしたもののか、又は詩才のこぼれた一涓滴であるか、折にふれ洒落れたこともあるらしい。

今二三の例をあげんに水母餘音に

大人或書畫の席にありし時、影法師の繪を或人の書きたりけるに、蜀山人なんと其席につらなりて、各々歌よみ或は詩などつくりて賛を書か

れければ、大人も古今春上紀友則の歌を本として、一のこの戯歌をよみて、やがて人に賛をかゝせたりと。其歌に、

△君ならでだれにか見せん無目めの花いろをも香をも知る人ぞ知る

一寸よいところをつかまへたものである。又修史局某員の話に檢校の蜻蜒の俳句なりといふを見るに、

△すれあうて紙の音するとんばかな

秋の氣の高く清らかなる風景をしのばせる。

また、京都に上りて、或縉紳家を訪うて、四方山の物語あつた時をりふし南殿の櫻は今を盛りに咲き匂ふと聞いて、とりあへず、

△目に見えずせめてなでんの櫻哉

と口占んで一坐の興をそへたとかいふ。南殿に撫でんを掛けたとこなどとはなかく氣轉のきいた人であつたらしい。

なほ水母餘音に、

一夕客來當時中秋に屬し、月色玲瓏坐間に穿映す、檢校乃ち俳歌を賦していふ。

△花ならば搜りても見ん今日の月
と。其妻即ち之に和して曰く。

△十五夜は座頭の妻の泣く夜かな

と。一時人、口に膾炙したることである。藻思といひ、云ひまはしといひ、片手間の餘業としてはなか／＼見上げたもので、かれが學殖のほども偲ばれる。こゝに妻とあるは安養院であるか義貞院であるか定めがたい。

以上數項に渡りて律令格式から國史國文にかけて、乃至故實典故俳諧狂歌等についで、彼はどの位の修養を積み、どの位の蘊蓄があつたかは明瞭にわかることであらう。

▲ドライデン曰く、書は宇宙を読むの眼鏡なり。
▲シヨツベンハウエル曰く、奮闘せざれば勝利なし。
▲フフエランド曰く、迅速なる成熟は必ずまた迅速なる破滅を來たすもの也。
▲又曰く、最大最強の人は幼年の時、辛苦を経たるもの也。

第七章 檢校の和歌

彼は天才を有せる詩人としてよりも、一個／＼の事實を捉へ、之をたてよこより考證し研究して、その錯誤精粗を批判するは寧ろ得意であらう。従つて空湧抑へかれない感情をこゝに注ぎ盡して大和錦をおりなすよりも、却つて記憶し把住してゐる智力に訴へて、我も人も常に着る綾や紬を染め出す方にとり、わがある。

それで萩原や加茂の主人にも従ひて、三十一文字をもてあそび、續いて日野、閑院宮、外山の諸師にも就いて敷島の道を修め、時には堅苦しいゴツ／＼した風をまねて見たり、又は句やかな、やさしい姿を習うたりしたが、つまるところは、この奇古磊塊の風と濃婉優美の姿とを調化して、こゝに埒一家の特色を發揮してある。然かし彼は天才を有してゐる生れながらの詩人でないから、想像力に乏しい。よし豊富な想像が具はつてゐるにせよ、記性の旺んなるがため、千片萬顚の知識、累々として腦にせめよせ、おのがし、陣取してゐる爲に、勢、瞑黙考以て奇より奇にうつる想像を構成する餘地はない。詩人としては、あまりに實際的である。あまりに理性に富ん

で居つたとおもふ。

斯くいへばとて、彼が歌人としての伎倆を否むわけではない。彼は有職故典とか、史料考證とかの、ナミ／＼では、やりおほせない方面に、手腕をふるひをるかたは、亦片手業にこの敷島の道にも浅くなかつたことはたしかである。

第一節 歌材の上より

先づ彼の家集松山集(上下二巻)を執りて之を見るに、和歌の数は凡六百五十一首ばかりである。今、諷誦のまゝ心に浮べるものを列記して見よう。

第一、至誠の念を歌へるものは多い。

寄神祝

代々かけてわかぬ浦人仰ぐらしひろふ言葉の玉津島ひめ

述懐

定めなき身のいにしへを思ふにもなほ頼まれぬ行末の空

老後歳暮

花鳥のいろ香まつ身は加れる老の數をもしひてなげかじ

寄道祝

年々に茂りそひつゝ言の葉の正しき道を代々にさかえん
そのまゝに神代の姿つたへこし大和言葉のみちぞ正しき

月星の國の教へもつたへ來てわが日の本にしきしまの道

右の數首でも分る如く、彼は敬虔な人である。信念の凝りかたまつて居る人である。白虹天を貫くともいはずか、とにかくまめやかな性である。それで、その詠める歌にも、不知／＼このまことしやかな信念のは見えるものは少くない。一二の例をあぐれば、彼の常に信仰してゐる菅公については、雨につけ、風につけ、北野／＼といひて詠みいだしてゐる。又旅行中などには、いつも子供などのことをしのばれたやうで、親子の情、暖然掬すべきものがある。

都へ上るとて

幼子の門に出でつゝ泣く聲をきくばかりなる夕かなしも

浮島が原にて

肌寒みさこそは我をしたふらめそひねせし子の宵々の床

旅述懷

聲きけばまづ故郷ぞしのばしき兒なき里を旅路ともがな

春鳥

子をおもふ心やおなじ空高くあがる雲雀も野邊の雉子も

夜寒につれてそひねせし子をおもふが如き、あだしわらはべの聲をきけば、やがて故郷のちごを聯想するが如き、はては焼野の雉、夜の鶴、鳥や虫けらの微に至るまで、とりて己が情に比べてゐる。そのまめやかなる情愛のほごばしりて居ることは、げに楮上に溢るといふも誣言ではあるまい。

第二 夢を歌へるものは多い

目が見えぬ、視覚は缺けてゐる、物のあやめも分かぬ人は、瞑想界に精神をあそばせるは自然の數である。よしや、空想に耽り、枝より枝に、奇より奇に、想像をやるの詩

人的の天才に富んで居らぬにしても、たしかに、夢の世界に心をさまよはせ、悠々自適、笑ひも悲しみもしたであらう。例へば、

夢 ——— 小夜枕花も紅葉も一時に見するやゆめのなさけなるらん

故郷夢 ——— これもまた葎やくちて行きやらぬ夢路つゆけき秋の故郷

深夜夢覺 ——— 老いらくのはども知られて更くる夜に幾度覺る夢の手枕

旅宿夢 ——— 草枕むすびかへてもかはらぬや都に通ふゆめ路なるらん

夢中逢戀 ——— よひくの夢の浮橋なかりせば何に命をかけてたのまん

夢後杜鵑 ——— きゝそめし夢まさしくて時鳥さむるまくらになのる一聲

深夜萩 ——— 見しゆめのゆくへをとへば更くる夜の枕に近き萩の上風

冬夜夢 ——— 風さむくねられぬ夜半は夏よりもいと短き手枕のゆめ

等の類である。一官を失うて居る人は、おのづから、むすばほる千々の思ひは、重なりくゝて夢となり、幻となりてあらはれるは左もあるべきとて、時には花も紅葉も盆も正月も一時にながめ、時には老いのねざめに文の卷々をかぞへなどして、己が心を慰めたともあつたらしい。盲人にとりては夢は一の世界である。大きい一の樂

土である。彼に比較的夢の多いのは、この津涯から流れでた紋波であらう。

第三 貴紳學徒の關係を歌へるものは多い

彼は親切で、さうして涙のある人である。一方では記性に富み、理性にも乏しくなかつたが、他の一方では人をあはれみめづるの情のあつた人である。それで、その詠歌中にも、まゝおのれが仕へてゐる公卿諸侯の事や、又は學友門徒のことなど歌ひ出したものは少くない。例へば堅田侯とのゆかりの深かつたことは、次の二首でもわかる。

堅田侯の別莊にて花を見て

入日さすうす花さくらくれなるの紅葉にまさる庭の夕榮

堅田侯麻布別莊稻荷社奉納和歌の内菊

月うとき松の木蔭にさく菊のはなの光やみつのもし火

又、水戸公との關係は、

水戸宰相きみ(紀治卿)の御國へいらせたまふ御はなむけ

に松にぬさ袋をつけて奉りけるに歌

千代經へき君がかへさを諸人の今やとさぞな松の言の葉

水戸武公の御三回忌に寄夢懷舊を

現とは誰かみとせの花のかは月のまとゐも夢のまにして

手枕にありしおもかげ立ちそひて残るや夢の現なるらん

等のたぐひで、いかに追慕して居つたかといふことはほの見える。

また、堀田正敦とは殊にゆかりの深かつたらしい様子は見える。松山集と名づけたのも、そのもと堀田うしのすゝめたのだとのことである。前已に叙べたとほりである。さればにや、

堀田攝津守正敦朝臣の室清光院君の三回忌によみおき

たまへりし歌をかみにおきて

郭 公

かりの世のゆめさませとや郭公夜深く鳴きて西へ行くらん

菖 蒲 (同上)

るりの池にひかばさぞなとあやめ草思ひやるにも薫る朝風

おなじ君の七回忌に草花

いとはやもうつりにけりな七とせの秋はゆめの、月草の花
こと草のさかりを見ても女郎花かれしよ慕ふ野邊の夕きり

清光院君のよみおきたまへりし歌ともをかきあつめた
まへりける末に

ちりしよや更にしのはん言のはの花ももみちも残る木蔭に
月やとる草葉のつゆのさえしより清き光やかたみなるらん

等にて堀田うしの室、清光院との關係の奈何を知ることが出来る。次の庭霜などもその間の消息を知るの資料となるであらう。

堀田若狭守正富朝臣の二十三回忌に正敦朝臣のすゝめ

たまふによりて庭霜を

たらちをの教へもかくや残りけん霜に跡ある庭のまさて地

とあるのを見れば、獨り正敦のみではない。その室は勿論、正富朝臣をも少からず
戀戀して居たらしい。其他、學徒稻山行敬の十三回忌によんだ追悼歌を見ると、師弟

の情誼、溢るゝばかりである。

古文の棟に充ててゐるいさをしも君ならずして誰かなすべき

の如き其一斑を窺ひ知ることとは出来る。

田安の邸に仕へまつる三牧のおもとから短冊ばさみをいたゞき、こをこよなき
寶ものとして愛でゝゐたこともある。

やごとなきおはんかたよりたまはせたりとてあらし山の櫻、高尾山の
楓の木もてつくれる短冊挟といふものに、やがて、そのところの花紅葉
を蒔繪にしたるを、田安の御館に仕へたまふ三牧のおもとえさせたま
ひたりければ、誠に我家の寶として末の世にも傳へ侍るべきものぞと
おもふに、いとも／＼かしこくて、

龜の尾もながき嵐のやまさくら高尾のもみち萬代に見ん

げに萬代までも見る考へであつたらしい。

この他、追悼や祝賀の和歌を輯め、之を研究して見ると、いろ／＼なる階級の人々
に交際もし、愛でられもして居たことは、あり／＼と證左は存してゐる。

第二節 歌體の上より

以上述べた第一、第二、第三の件々はむねと、この歌集にはいかなる事實は潜んであるかといふ方面の研究である。次には其歌體や歌調などについて一言所思を述べておかう。

第一、大^〇き^〇く^〇勁^〇い^〇と^〇ころ^〇の^〇ある^〇もの^〇……

彼の歌は驚のかゝなく山の奥、鰐の怒れる海の底を歌材としたわけでもないが、數の中には瑰麗勁健、毫も平弱の氣のないものがある。

駒 迎——あふ坂の松の下道こえ來ても猶かげ見えぬ霧はらの駒

寒 月——更けぬるか影ふむ道に置霜の碎くる音も月にさむけき

同 ——真砂地はいかに沍ゆらん片敷の袖にも氷る冬のよの月

第二、や^〇さ^〇しく^〇て^〇婉^〇麗^〇なる^〇もの^〇……

また優美にして纖穠なものもある。この種には眉のごと句ひやかに、鏡なす平かなものを云ひ出たのは、多いので、雅びかなものである。然かし、只管衣冠の美をとゝのへ、彫虫の末に奔らない様である。

蟋 蟀——月疎き頃とも知らで艸のそにさせてふ虫の聲しきる也

柳 ——うちなびく姿のみかはすなほなる心もならへ風の青柳

尋 花——とふ蝶をしるべとなして咲花の木蔭尋ねん春の山ぶみ

窓 竹——月のためうゑぬ窓にも吳竹のよその這根の生茂りつゝ

谷 菊——おちつもる花のしづくに谷水の末くむ袖もにはふ白菊

春 人 事——種おろす賤かしらん雨かすむ田中のみちの心細さは

春 鳥——雨かすむ苗代小田の水口に身の毛しをれて立てる白鷺

等の如きである。

第三、あ^〇り^〇の^〇ま^〇い^〇を^〇打^〇出^〇て^〇、^〇韻^〇度^〇の^〇高^〇い^〇もの^〇……

夏 草——あげまきの牛ひく道もこの頃は夏野の草の蔭高くして

窓 螢——草深みふみ見ぬまごに飛ぶ螢あたら光を誰にかすらん

夕 顔——山賤のあれし垣根も青つゝらひまなくかゝる夕顔の花

朝 氷 室——朝まだき都に急ぐ氷室守露のひるまをうしとなるべし

夏 雜 物——短夜の月に聲すむ笛竹は誰がすゝみとるすさひなる覽

第四、實境を描いて生趣あるもの……

川時雨——渡守はや舟いたせ隅田川おくれし雲のしくれ來ぬまに
契戀——僞のある世も知らでかはらじとわが誠より契る言の葉
寄竹戀——笹竹の一よ二よの隔をも葉におく露の亂れてそおもふ
閑居——世を背く心ならねどすなほなる竹の庵は憂ふしもなし

第五、文字を弄んだもの……

俳諧發句まで多少風味し得たほどであるから、稀には、折句やうの手すさびもし
てある例へば、

原の宿といふことを折句に

はぎも咲きらにも句ひてのる駒のすゝ虫しげきくさのなかみち

三牧のおもとより萩の花にそへてあゆのいををたま

へりければやがてその文字をかしらにおきて

あさもよし昨日はつゆと見し花のえだにかすそふ庭の秋萩

ゆふつゆの枝もとをゝにおきそへて月のかけまつ庭の秋萩

のへ近きいへ居ならてもしかの音のそふ心地する庭の秋萩
いつしかと花まちえてもとの葉の色なきつゆの庭の秋萩
をそさとき枝をましへて咲く花のさかりほとある庭の秋萩
其他縁語掛詞の如きも、稀につかつてあるが、人をしていやみの念を催させるほ
ど多くはないやうである。

わ　か　な(若菜——若い)　　な　つ　衣(夏——無い)

ふ　み　見　ぬ(踏み——書)　　よ　す　が　ら(終宵——節)

あ　ふ　こ　と(波——無い)

の類で、あまりに突飛な用法は見出さない。

以上叙去叙來、彼が特長を見るに、渾厚雄大の美は、到底師真淵に及ばない。而して
春容大雅、音節流滑なる亦堂上家に企及する所ではない。彼は歌人としてあまりに
實際的である、理性的である。面して記性の豊富なる代り、想像力に乏しい傾きがあ
る。是等はやがて天才詩人の名を擅にせしめない一の原因であらう。水母餘音にい
はく、

或人の話に、和歌者流にて檢校の歌は調卑し、などいふことを聞いて、檢校のいへらく、調の高きは堂上方にある可し、我輩はたゞ専ら趣向の新しきを主としてよむべきこと也。

これによれば、彼は調よりも趣向をむねと立てゝゐたことは分る。されど、古歌など多く暗誦してゐたが爲か、不知／＼口頭にうつりきて、單に陳套の語句を叙列したに過ぎないものもまゝ見える。最後に余は彼に對し、三つの遺憾がある。

第一、長歌をよまぬこと……彼は世の天才詩人の如く感情一片の人ではない、血もあり涙もあれど、理性もてよくそを調和した人である。如斯きサガを有するものは、己が熱狂してゐる感情を、端的文句に燃やし盡して、それで快とするものではない。又しかく厚く濃く煎じつめることの出来ないものである。故にむしろ己が複雑なる所思を、やゝながくゆつくり述べる必要がある。長くゆつくりとなれば、從つて薄く淡くなるは自然の數であるが、この方はその性によく恰好して居る。この點については彼の如き、長歌に丹精をこめたならば、己が長所を發揮するによかつたかとおもふ。特に師縣居翁は新に長歌の生面を開

いたはとであるから、其傳統から見ても、はやうてゝに眼をつけてほしかつたとおもふ。然かし、景樹曾ていはく、

……長歌は感淺き事、短歌にくらべては萬々に候、さるべきいはれば、大様知れたることか、されば、しか讀みがたき上、感薄き長歌よ、まゝより、口にあひたる短歌をと思ひ取り、たまゝは人の望みにて作り候事も有之候へ共、まづはやめに候。

とある。彼もこの景樹の如く長歌は感薄く且口にあはない爲に詠まなかつたのであらうか、文章も亦序や記の如き五六のものあれど、駭俗超凡の詞章は未だ見出さない。

第二、詠史に心を用ひぬこと……彼れは熱烈なる天才を有してゐる詩人でないことは前已にくりかへした。ゆゑに花鳥風月によせて天地の美妙を歌ひ出すがごときは、特長ではなかつたらう。むしろ己がむねと修めてゐる史的人物や事柄を、おもしろく、をかしくあやなして、これを詠出したならば、從來の歌壇に別に一乾坤を畫するによかつたらう。さるに松山集中、わづか菅公等に對し

崇敬の念をよせたのがあるが、とりたてゝ詠史と見るべきものはない。余は彼が自分の持前の領分をふかくたがやさなかつたことを、うらみとするものである。

第三、盲人和歌集をつくらぬこと……………

或貴紳、彼に勸めていはく、

普通一様の和歌は、古來幾千萬の歌人によりて、歌ひつくされて居る。故に盲人獨得の感想抱負をよんで、他に類のない盲人和歌集をつくらば、一段の面白みはあるたらう。

されど、彼はとう／＼この勸告に従はなかつたのは惜しいことであつた。彼もたま／＼、

△月花はわが身にとりてなくもがな更けゆく夜半に松風の音己が琴の賛
△目は見えすせてなでんの櫻かな(南殿の櫻さかりなりときいて)

等盲人の境涯を歌へるもの數首を數へることが出来るが、多くは普通一般の三十一文字で、盲人界獨得の異彩を放つてゐるものは、殆んどないと言つてもよい。若

しも彼れの伎倆にして、一貴紳の言に従ひ、盲人の見地立場からすべての思想感情をわり出し、偽らず、飾らず、ありのまゝに己が胸にわだかまる磊塊の氣を遣つたならば、超凡駭俗、更に一新生面を拓くによかつたらう。さて／＼口惜しいことである。然かし、この種の詠はむづかしいものと見えて「足なへ」の歌は、古來三首しかない。萬葉一、金槐一、子規一。

以上叙する所によりて見れば、彼の歌の長所は、花とかをり、月と匂ふ手弱女の美しき姿でもない。また猛虎とたけり、飛龍とも荒れん大丈夫武勇の雄壯なる姿でもない。溫藉平靜、ありのまゝを打出したところに、言はれぬ風味が潜んでゐる。故にくしき想像の俛、あやしき熱烈の氣を認めることは出来ぬが、恩波漂渺、太平の民を載せて一帆行くの光景はあり／＼と分る。たゞ調子のふさはしからぬものは稀にあれば、これあまりに古歌諷誦の餘弊、知らず／＼この錦と、あすこの繡とを繼ぎ合はせる様なことがあつたからで、彼の自言した如く趣向の清新を以てむねと立てゝ居つたことも、ほゞ推測することは出来る。

終りに、世に、彼の歌より、いと秀でたものをえりぬいたものはあるから、开を添加

しよう。

視聽草二集四に「塙檢校はもつとも和學に長じ、よみ歌は力を用ひざれども、多く古歌をも諳んじたれば、自然に口調も口に隨うて優也」とありて、左の歌共をかゝげてある。

浮島か原にて——言の葉のおよばぬ身には目に見ぬもなか——よしや雪の

ふじのねこの歌は盲人の身にては實事にて絶調なりと人々相傳へり

元 日——朝からすまた聲たてゝくたかけのつけのこしたる春や告くらん
春 月——たちならふ花のこすゑはかけ晴れてやなきにくもる春の夜の月
落花滿庭——さかりにはまたれし友も雪とふる花ゆゑいとふにはのかよひ路
梅 雨——花に見し梅のこのみのおちそひてしつくも匂ふさみだれのころ
郭 公——人つてにかたりつたへてはとゝきすたゝひと聲もいくさとの聲
夏 旅——旅ひとのいのちなりけりみな月のてる日をよそのならの下かけ
同——たちよらんかけも夏野のたび人のふゝきにこえし峯よりやうき

野 月——はるゝ夜は海かと見えて武藏野の尾はなが波にやとるつきかけ
秋眺望——あき風に尾はながすゑの霧はれてふしの根ちかきむさしのゝ原
夕紅葉——もすのなく梢をとほみさり晴れて夕日にそむるはじのもみち葉
黄 葉——うなゐ子がちゝのみひろふ園の邊に染るはゝその色もめつらし
冬 山——花にもれもみちもよその常磐やま冬やさかりのいろを見すらん
竹 雪——ふるまゝに外面の竹もすゑふしてゆきにはれたるまとの夕くれ
獨述懷——何事もわかさきの世のむくいそとおもへはいはん言の葉もなし
同——身に餘るめくみある世はよむ文の少なきのみそなけきなりける
富 士——山々はまた夜をのこすくものうへにひとり明ゆく雪のふしのね
題しらす——よそにさく老もこゝろののとかさは若菜小松のおそひなりけり
嶺樹霞——春風のこすゑにかよふ音はかりかすみのこせるみねのまつはら
早 蕨——岩ねふみかさなる山のしたわらひめにかけなから折もとられず
行路柳——歸るさもまたこのみちに芝ゐしてしはしやすまん青やきのかけ
題しらす——かりかねの行へやいつこつはくらめ軒の古巢にささらきのそら

夏 獸——ひろふへき木のみもいつとしは栗の花さく峯にましら啼くらん

二一〇

▲家の樂なりな怠りそ雅士みやびなの歌は詠むともふみは讀むとも
▲わけ登る麓の道は多けれど同じ雲井の月をみる
かな
▲麓なる道のちまたの多かれど月見る山の道はひさ道

第八章 檢校の性行

匡廬の山之を左よりせば峯之を右よりせば巒であると同じく、彼も亦一面よりせば學者である。物知りである。歌詠みである。されど一面よりせば事業家である。經綸家であるかとも思はれる。今彼が性行を論評するに際し、まづ明暗長短の二方面より觀察しよう。

第一節 長所より

A、彼は意志の人也……彼が生涯を通觀するに、先づ第一に心に浮ぶは、彼は意志の人であるといふことである。五才失明、十三才江戸に出で、種々の苦心をかさね衆分となり、勾當にうつり、更に總檢校の最高位にまで進んだ、その徑路を査察して見るに、單に一片の天才を以てまろめたものではない。乾々訖々人知れぬ辛楚を

なめつくし、時には深淵に身を投じて、浮世の苦難を免れようと企てたこともあるさうである。

斯くの如き苦境を切り抜けて、いよいよ己が目的地にはひ上り、とうとう類従の刊行を企て、和講の創立に心を砕き、土地の借用、板木の倉庫、職員の排置、統御、豫算の編制等、當時の學者などはゆめにも知らぬ施設經營に身をいたして、克く之を統一整頓し、以て着々その歩武を進めたといふの類は、當時に在りては洵に愛でたいことである。

又信仰心の強くあると、敬虔の念の厚いことなどは、驚くべきほどで、平河天神に日參をなしたが如き、後には邸内に菅廟を作りて、日々夜々奉祀したが如き、敬服に堪へない。唯に日參するばかりでない、心經何千卷、何萬卷よむとの條件で祈誓し、寸毫たがへず之を行つたが如きに至りては、たしかに意志の頑強なことをあかしてゐる。今その證左を示さう、

生家荻野家に「般若心經御卷數帳」といふ、タテ四寸ヨ、コ二寸許の千代紙の表紙打つたる小き横帳面が傳つてある。これは彼が心經讀誦の覺帳であつて、三十四才の

當時より七十六才臨終の際迄の、いかに、彼は心經を讀誦したかといふことは、分る。文字は大凡三人位してかいたものゝやうに見えるから、一人してものしたものでないことは、たしかである。そをよく調査して左の結論を得た。

(イ) 安永八年^{己亥}(三十四才)より文政四年^{辛巳}(七十六才)まで四十三年間のこととある。

(文) 學士藤井宣正氏は安永八年正月より寛政九年七月廿五日迄十九年間としてゐるのは大なるひがごとである。

(ロ) 安永八年は彼が群書類従を編まうとの志願をおこした年で、文政四年とは彼が死歿の年である。

(ハ) 一日に百卷づゝと定めてゐるが、そうすると一ヶ月に三千卷、一年に三萬六千卷、それを四十三年間つゞけると丁度百五十四萬八千卷になる理である。

(ニ) 然るに實際は文政四年正月迄で百九十八萬九千六百卷讀んであるから、五六十萬卷多くなることゝなる。

(ホ) これは閏月などを加へても豫定の一日百卷より多くなるから、時にとりては百卷以上讀めることもあつたらう。

(ヘ) 文政四年正月八日から同年七月廿五日迄、貳萬八千九百卷とあるから、これでさへ一日百卷以上の比例になる。それから七月廿六日から八月廿三日迄、約一ヶ月にわづかに百九十卷とありて最終になつてゐる。(ト) 七月の末より八月にかけて、なせ讀誦は少くなつたかといふに、八月に入りて病床に臥し、九月十三日遂に歿せられたからである。然かも殆んど臨終の際に至るまで心經をはなさない。

この卷數帳の言ふが如くば、彼は四十三年の長い間、日々百卷以上の心經を讀誦し、しかも一日も怠らなかつたといふことは分る。この厚き信念あり、この固い意志ありて、はじめて瓦ともなり銀ともなり、はては黄金の花ともさいたのである。

その他、弟卯右衛門に田畑を買うて與へ、今にいたるまで檢校面といひて残つてゐるが如き、又は他に出講するには、必ず自邸にて門徒をして數回その本を讀ませ、十分ブレバレーションをなしてその席に臨んだが如き、洵に用意周到、注意の行届

いた人であつたらしい。されば晩年に至りても左視右盼、壯者を凌ぐの活力があつたとのことである。信名いはく、

今年、大人、年七十四、そのさかりなること常の人の五十餘ほどの如し。猶この

さきも、いかばかりの榮えかおはすらんといとれたのもし。

とある。彼もと病弱の一眚生なるにも拘らず、斯くまめやかになつたのは、一に身をかため心をしめ、若々事をまじめ任を盡し、身心の攝生を計つたが爲である。

B、彼は活動の人也………ことし七十四才の高齡を重ねても、なほ五十才の壯觀あつたとの事。

その活動力に富んでゐた事は、この一事で分るのである。而して尙閑却してはならぬことは、彼は旅行を嗜んだことである。

彼は一室にとちこもりて三弦を弾じ、端歌を唄うて安心するの人ではない。針をいじくり、按摩の笛に満腔の磊塊を遣るの人でもない。彼は動き、活き、あるき、語り、企つるの人である。故に旅行の數は少くない。

▲旅行調査

- 1、寶曆八年十三才……武州兒玉郡保木野村より江戸に上る。
- 2、明和三年二十一才……父宇兵衛と共に伊勢に詣で終に京攝、須磨、明石、大和、紀伊、高野山などを巡りて東都にかへる、病果して癒ゆ、日數六十日程、
- 3、寛政六年(四十九才)……九月、一座取締用向に付上京。
- 4、文化三年(六十一才)……四月上京七月歸府。
- 5、同五年(六十五才)……伊勢林崎、豐受宮崎、兩文庫見たしとて許さる。
- 6、同十一年(六十九才)……四月京都本國寺靈物寫取。
- 7、同十二年(七十才)……十二月鹿島香取兩社古文書寫取の爲、中山等と行く。

- 8、同十三年(七十一才)……二月上京、五月歸府。
- 9、同十四年(七十二才)……十二月上京、翌年春歸府。
- 10、文政二年(七十四才)……四月上京、六月歸着、梶井妙法院御門跡、並、東寺、智積院、叡山大原等の古文書寫取の爲。
- 11、同四年(七十六才)……正月上京、五月出府。

是れその一斑に過ぎねど、彼はいかに旅行をなし耳聞したかといふとは以上の表で明かである。いふまでもなく公用のため止むを得ず往返したこともあらうが、要するに盲人の不自由を以て、かくまでに史料蒐集の爲、東西に奔走したといふことは、後人をしてうたゝ愧死せしめるの概がある。

彼の活動性に富める、轉居もあまた、びした、これ火災その他のさばりあるより頻々居を移したとはいへ、亦、他方には一處に黙として居ることの出来ない性を示してゐる。

▲轉居調査

- 1、寶曆八年十三才……保木野村より江戸に出で師雨富の家に居る。
- 2、安永四年三十才……番町厩谷高井大隅守の家につる(勾當になる)。
- 3、同八年(三十四才)……四番町、東條信濃守の宅地につる。
- 4、寛政四年(四十七才)……東都火事、四番町の家も灰燼、よりて暫らく御茶水大屋四郎兵衛の居宅に假住す。
- 5、同五年(四十八才)……裏六番町につる。

6、享和三年(五十八才)……六月、一座總錄職になり、本所一ツ目總錄屋敷へ轉居す。

7、文化二年(六十才)……退職表六番町にうつる。

前後七回居を移したわけである。

彼は旅行、轉居の比較的多いばかりではない、己が贅をとつた師匠の數も九人ほどある。而して國學和學をはじめとし、漢學律令醫書はたまた音曲針按となか／＼諸種の道に手を染め、とう／＼類從や史料の如き空前の大事業を成したのは、彼の活動力に富んでゐることを明かして居る。

今、上京の序にものせるもの數首をあげよう。

戸塚といふところにて

草まくらひとつかりねに見るゆめもこゝろ／＼の月花のかげ

大磯

松風におきつしら波吹きよせてとはてもしるさおほいその里

箱根

松の火も木の間に見えて箱根山あけゆく峯そなほはるかなる

沼津

あやめふくぬまつの里は旅人のそでさへかざる露のあさかせ

藤枝

見し春のゆかりの色をいまもなほあを葉にのこす藤枝のさと

小夜の中山にて

鳥かねにおきゆく末もつゆこめてなほ明けやらぬ小夜の中山

碓氷にて

みもちはのうすひのみ坂こえしより尙深からん山路をぞ思ふ

C、彼は寡欲の人也……箴を負うこともしない、カバンや行李も提げない、彼の郷關を出づるや、汚げなる素麵箱を負うて花の御江戸に出たのである。大人、田舎より始めて江戸に出る時、着替の服を素麵箱に入れ、之れを脊負ひて出られた。今にこの箱、家に藏し、御寶箱と稱す。是は林大學頭(衡)の命名せるところであると傳へてある。

斯くいと儉約に身を處して居つたが、本をもとめるとだけは格外である。水母餘音にいはく。

常に美服をかざらず、美食をこのまず、あるに従つて事を辨ず、其外の事、皆斯くの如し。たゞ書籍を求むるに至りては、明日の雜費有無をとはず、底をはらひて金錢ををしむことなし。

とある。書冊購入のためには、左もあるべきことと思はる、又いはく、

世の檢校は、みな金あり。ことに總録ともなるものは大福者なることは皆人知る所なり。然るに大人は恒に一錢の貯蓄もなきのみか、數千圓の借財ありき。大阪の鴻池に二千兩、同處千葉屋安兵衛に二千兩の負債ありしと、これ皆毫厘も他事に費したるはなく、悉く群書類從刊行、其他書籍の上に用ひしなり。

とあるを以て見れば、彼は衣食住には質素儉約を以てし、假にも奢侈安逸の風なきも、己が生命とも頼んでゐる書冊の上には、をしげもなく投資したものである。

殊に前に述べた豊一の財産を受けぬが如き、また師雨富のユヅリをいなみて、他

の志を得ぬ門徒に與へてくれよと望んだ如き、その寡欲淡々の情、掬すべきものがある。(第三章第三節參看)

彼はたゞに財貨に淡きばかりでない。酒色の道にも至つて冷淡で、年三十七才ではじめて紀伊家の醫師東條清民の女を娶つた。即ち檢校の榮職にすゝむ前年に初婚の祝言をあげたのでも、はゞおしはかられる。

D、彼は餘裕ある人也……人の上に立つて采配を振るには、寛宏、人を容るゝの度量がなければならぬ。彼は屑々乎たる短慮の人にあらすして、溫良寛恕の美質をそなへた人である。推量するに、彼は幼時肝のいたづきにかゝり、病羸のうちに長の年月をすごし、従つて神經も鋭くなり、癢もおこり、おこりやすい方であつたが、一旦翻然として悟るところありて、忿怒の念をおさへ、靜平の間に事を執るの要諦を知つた。水母餘音に、

大人年いと若かりし時、思はく、なべて業をなさんとするもの、忿怒の心ありては、なすことを得ずと、即ち心に誓ひ、年をかぎりて、その心を起さざるとをいのる。一日麴町を過ぐ。童部道にありて頻にあざけり笑ひ、又

道を遮るものあり。大人笑を含みて争はず。童部いかにもせんすべなくて、退けりとぞ。業成るに及ぶまではじめの誓を改めず、その器の大なるもの、皆此類也。

とあるのは、克く其間の消息を洩してゐる。年を限りてその心を起さざる事を祈るの文句より見れば、よほどおこりつばいため、事を爲損じ、斯く祈誓するに及んだのであらう。

斯くして己が修養につとめた結果、和講をまうけ、多數の學者を統御し、また一方には、盲人界の總督となりて事をまとめたものである。中山信名の如き、石原正明の如き、酒色をたしなみ、失行も其度を重ねたが、事なくして濟んだは、たしかに彼の寛宏調停に依つたものである。

又、彼は頓才機智に富んでゐる。これ心に餘裕あるから自然に湧き出る一の紋波である。一二の例をあげようか、視聽草四集五に、

塙保己一は近世警者の巨擘たるは、世にも知れる所也。或者三水に吉といふ字を書いて、町の名を尋ねるものありき。そこらこゝらとなく問ひ

つ走りつ尋ねありさしが、誰ありて讀み得る人だにもあらざれば、斯くてはこのまゝに尋ねずしてやみなんことのいと本意なけれど、しばし心をなやましゝが、ふと、かの檢校がう行ききて問ひしに、をりしも客など來り集ひしことなれば、様々と評しけれどもえ知れず。檢校や、案じて居たりしが、是なん油町のことならんと云ひしに、座中の人々、などてしかは讀みたまひしやと言ひしに、是は筆者の町の名書かんとせし時、文字の知れざれば、傍なる人に問ひたらんに、三水に由といふ字なりと言ひしを、由吉同訓なれば、かくはあやまりしならんと答へしにぞ、一座の人々、其頓智のほど兩眼の人にも勝れしなど、ほめそやしつゝ、尋ねる人にも斯くと告げければ、其悦なのめならずして、速に讀み得る人のありけるを、疾く知らざることこそくやしけれなんと、獨ごちして、ねもごろに禮などいいうて歸りしが、早速油町と尋ねしに、用事とゝのひければ、又々來りて厚く禮を述べてぞかへりしと聽けり。

と、事長々と綴りてある。由吉の思付、頓才なかゝゝ利いたものである。字喻法とい

うて一を採りて他を類推したものである。尙彼は俳句狂歌をものして直に人の問に答へたなど、當意即妙の頓智に富んでゐることを證據立てゝゐる。また人の克くいふ例であるが、水母餘音に

保己一曾て源氏物語を某氏に講ず。日暮れて風灯を滅す。座人講を輟めんことを請ふ。保己一曰く、何の故ぞ。曰く風灯を滅す、當に之を點すべし。保己一笑うて曰く、目あるの人何ぞ不自由のものかな。

と悠揚迫らずあせらぬところに、彼の大きい弘い特質は見えて、而して「目あるの人何ぞ不自由のものかな」の一言に、滿坐の荒肝をひしいたが如き、機智の程窺ふに足る。

斯く忙中閑あり閑中忙あるの人であるから、時には晝寐を貪ることもある。伊東宗益の談に、

塙は極不器用にして遊藝種々習せても何一つ覚えず、只晝寐のみして、甚だ懦弱なりしが、唯百人一首を能く覚え、其外書物をよむを好んで、終日倦まず、……

とあるに對し、細註にて之が辨駁保護につとめてゐる。

大人晝寐のみして甚だ懦弱なりしとは、大人午飯の後、凡三十分ほどが間に晝寐せられしこと、中頃より晩年にいたりてかはらざりしとのことなるが、少年の折は懦弱にして、この事ありしとは思はれず。

とあるが、何れにしても悠揚自適心身を養ひ、一旦事に従ふ時の準備をなしたものと見てよからう。宰予は果して朽木であるかどうか今から判じがたい。

余曾て之を史に見る、ナポレオンのオースタリイヅの大捷を得た時、前後二十四時間打通して睡眠したといふ、又平田翁の古史徴をものするや、數週日一睡だにせず、一旦稿了ふるや七日七夜、打寝たるまゝ、鼾聲雷の如きを聞くのみ。水火相救ひ閑忙相濟ふは人間生活の要道である。人たゞ忙時の忙を説いて閑時の閑を忘る。大多忙には大閑暇を要するは、今も古もかはるまい。要するに彼はたしかにこの要諦を悟了したもので、晝寐を以て單に懦弱とのみ斷じがたいわけも、こゝにあるのである。

E、彼は愛さるゝの人也……彼は不具なるがため、世人よりめではやされた

點もあらうが、そはわづかのことで、大なるところは彼のすがくしい心根は、自然と容貌の上にあはれ、人を吸引するの力は、もとより具はつて居つたらしい、脇坂義同が彼の人相を見たことは、信名のかいたものにも遺つてある。いはく、

これよりさき脇坂義同といふものあり、心學を以て名を顯はす。又よく人を相するに巧なり。大人のいまだ大にあらはれざりし程に相していはく、大人の容貌常にすぐれたる大に名をのこすことあらん、殊に貴人のために愛せらるゝの相なり、願ふ所果して其處を得べし、且壽あるべしと。當時の相をいふものゝこと、多くはこの類ひなり。こゝに至りて皆その事の如し。

「貴人のために愛せらるゝの相なり」とあり、獨貴人ばかりでない同僚でも目下のものでも皆彼を敬慕した。按摩に雇はれてゆけば、奥さん方は、いろいろの本をよみかかせてその心をなぐさめ、又料理めくものなぞたまひてもてなすなど、をさく怠りなく、長じて三牧のおもとより、鮎とか短冊挾などたまはりて、こよなく喜べるさまなど、松山集のをちこちにも見えてゐる。

林家や水戸家にかしづかれ、樂翁翠軒に知られ、一世を震撼した頼山陽でさへ參考書目をきゝにくるといふ始末、

頼山陽壯歲志を起して日本外史編述のはじめ、そが引用書類を大人にたづね問ひて、そのきけるがまゝの書目を、やがて外史に掲げしなり（水母餘音）

といふ位だから、四方の貴紳學者に愛でられたとは分る。生前已に斯くの如し、歿後はいともてはやされ追慕繼戀されたことは、左の追悼歌は證してゐる。

塙檢校追悼の和歌

松平 樂翁

散りのこる萩の錦をかたみにて消えにし露の行へしらすも

阿部 正格 備中守

風さそふあきの木葉の散うきてかへらぬ水のあはれ世の中

大久保 忠真 加賀守

暮て行く秋は更なりそれもまたさめてかひなき長き夜の夢

堀田 正敦 攝津守

京極 高備 周防守

消えていま人はなみだの袖にのみしのふ別れの秋の夕つゆ

巨勢 利知 日向守

武藏野に名を得てささし秋萩の花ははかなく散りにける哉

屋代 弘賢 太郎

なき玉はあまりけりてや秋の夜の長き榮をさばまもるらん

植村 家長 駿河守

草むらに聲ふりたつる鈴むしもなからふへしや哀いつまで

植村 蔓子 駿河守室

秋風にこはるゝ露を見ることに常なき世こそ思ひしらるれ

秋無常 袋翁

六十餘りなれぬる秋の袖の露さえぬものとはなに頼みけん

山本 正邦 源八郎

むかしいま此末も亦かゝる人なきよと思へは袖をつゆけき

下、彼は博識強記の人也……彼は生れて記性に富み、人の企及すべからざる瑣末繁冗の事といへども、一聞やがて肝に銘じ、たへて忘れぬ風あり。十三才の時太平記四十卷の暗誦で渡世が出来たなら、わけのないことであるといつて、江戸に出た位のことであるから、幼時より強記の人であつたことは明かである、いふまでもないことであるが二三の例證をあげよう。(門人信名も太平記は一句のこらず暗誦し太平記童子といはる)

第一證……水母餘音にいはく、

會津に佐藤甚右衛門といふものあり。人と爲り、頗る奇なり。性國學を嗜み、常に檢校に就いて其藏書を借る。檢校曰く、子何書何事を閲せんと欲するや。某書の卷數はかくの如く、某の事は某の部門にあり。

第二證……同書にいはく、

大人、晩年のことなりしが、歌會の判者にとて、三浦志摩守(美作國勝山城

主内室某氏は門人也へ至り、添削すべき歌五十首聴きて歸宅の後、うち三首を忘れければ、家人に向ひ、余は斯く物忘るゝやうにては、今年は死ぬるやも知れずとなん語られき。

第三證……井上博士いはく、

私の話は、妾いよ子より直に聴いたことであるが……妾の一番こわいのは和學院様檢校の法名は、何日の何の刻にいかなることがあつたといひて、一々些末なことまでも記憶して居られて、事柄をたゞされるから、こちらでは一言半句もア、イ、マ、イ、なことを言はれず、これには一番困りました云々。

これは、ホシの一毛しか數へないので、全牛をすみから數へ立てたら、その博識強記などは、いよゝ證據立てられるだらうが、前章くりかへし叙べたことに依りて、讀者は歷々指點し得べしと信じ、こゝには單に形式だけに止めておく。

以上の六ヶ條は彼の明所長所であつて、その大をいたし、弘さをまし、深さを加へたのも、一に是等の美點の相寄り相助けて、練りかためた結果に外ならのである。

坂谷朗庵曰、保己一初貧、聘才婦、唯責其爲己讀書、妻縱淫、無忌憚、而保己一不問之、後年大悔、謝罪、保己一曰、君顧不悔、而移共讀書之任。

(近世偉人傳)

第二節 短所より

いかに足りとのうた人でも、必ず長短の兩面を有してゐるものと見えて、古來の偉人賢哲の言行や性格を稽査して見ると、大むね長所もある代り短所も伴うてゐる。彼は前節に詳述した如く、なかゝの長所をもつて居る、美質も具へてゐる。是點については我も人も共に千古の範として仰ぐべきである、山本正邦うしのむかし、今、この末もまたかゝる人なきよと思へば、袖そつゆけき。

と詠まれたのは、單に歌人の形容詞ではない。實も骨もあるまめ言である。されど強ひて其短所を挙げれば、一二は數へ得るであらうが、是皆比較的の言葉であるから、他の長技に比して、わりあひに劣つてゐるかと思はれる節々である。大峯巨巒はた高低大小の評言を下すは、なめげ、なしわざである、とわれとおそれる次第である。

A、彼は耳と手の人にあらじ……彼はきびはな時から肝の病にかされ、従つて身體の發達健康もはかしくなかつた、殊に天性無器用の方で道のあるくにしても曲りかどのところなどでは、いたく困じてゐたところである、亦御飯なんかをたべるにても、その様子といひ恰好といひ、甚だ見苦しかつたと傳へてある。

それで三絃とか琴のやうな、耳より聽いて手ではじくものは、いたりてまづく、按摩や鍼法の如き手わざも、その進歩遅々たる有様であつたさうである。

△大人至りて、かんにぶく、性極めて無器用にて、通常の盲人の業に拙なければ……

△大人性來至りて無器用にて、按摩針術にも拙なかりけり……

琴三絃の藝など三年がほどならへども、かんどこもわからず、調子もあはず。とは水母餘音の傳へるところであるが、多分真相を穿つたものであらう。信名の言ふところによれば、文讀むことに心をひかれ、おのづと音曲針按を疎にせるやうにあれども、己が嗜好にあはぬから、すゝまなかつたといふ點は、多分を占めてをりはせぬかとおもふ。彼は到底耳と手の人にはあらじ、どこまでも記性に訴へ、それから萬事をわり出すといふ、極學者肌の人であつたらしい。

B、彼は獨創の人にあらじ……彼は物知である。物覚えがよいといふことは、争はれぬ事實で、史的考證でも何本の何枚目には、しかのことがある。記には二年とあるが、紀には三年とあるといふ風に、細かなことまでよく諳んじてゐられる。故に人知らぬ歴史上の考證をしたり、思案をめぐらしたりすることはまゝある。大日本史編纂に際し、原據を一々かゝせたとはいふことは、凡人の出来るわざではない。

されど彼は獨創發見の人ではない、勿論獨創もあらう發見もあらうが、彼の

終始を検して長所は獨創發見にあるとは俄かに斷じられない。而して一步退いて考一考するに、彼は當時の學界をうれひて、新案奇説を出すことをむしろ、いさぎよしとしなかつたらう。本居宣長其著玉勝間卷一に「あらたなる説を出す事」と題し、當時の學者を恣に罵詈してある。いはく、

近き世、學問の道開けて……なべての學者、未だ能くも整はぬ程より、我れ劣らじと、よに異なる珍しき説を出して人の耳を駭かすこと、今の世の習ひなり。其なかには隨分に宜しき事も、稀には出で來めれど、大方のまだしき學者の、心はやりて云ひ出づることは、たゞ人に優らん勝たんの心にて、輕々しく前後をも能く考へ合さず、思ひよれるまゝに打出づる故に、多くはなか／＼なるいみじきひがごとのみなり……すべて新なる説を出すはいと大事なり、幾度もかへさひ思ひて、能く確かなるより、どころを捕へ、何處までも行き通りて違ふ所なく、動くまじきにあらすば、たやすくは出すまじきわざ也……

と論ひてある。當時のえせ學者を罵り盡して、またのこすくまはない。彼はま

さしくこの弊資を看破してゐた故に、古書をしらべ舊記をあさつたのは、一により、どころを捕へようとしたからである。彼のみだりに新説奇論を吐かないのは、そも深いことわりのあるのではなからうか。

C、彼は想像に富むの人にあらじ……彼は理性のたしかな人である。故によく事を計劃し人を統御し、着々事業を進めていくの手を以て居る人である。一卉一木の微でも之を銘記し、些事微行といへども之を鏤刻し、決して忘れぬ人である。

故にかすけき室内に單り、潜思默考、人生を疑ひ、宇宙に質すの資質に乏しい。また情火熱烈、頭をたゞ骨を粉塵するの狂氣にも富んでゐない。さればといひて深夜獨座、空想より空想に駛せ、羽なうして空を翔け、葦の葉に青海原をわたるの奇想怪説を構成することも出来ない。よし出來たにしても、長所といふ程度までは達してゐない。

是れ一に記性の強固なことや、あまりに實際的なことなどは、集り大成して想像の力を殺いだのではなからうか、彼の松山集なる種々の歌を見るに、平

静穩健の情をうたへるものは多分を占め、かの深酷とか熱烈とかの情を見
ることの少のいのは、たしか如上の津涯より湧き出た、泉の流であるからで
あらう。

叙去叙來、彼の六長三短をあげた。短といへど本來の短にあらずして、一時思ふと
ころありて然か見せたのかも知れぬ。要するに彼は超世駭俗の偉人で心眼炯々、千
古を洞觀するといふも誣言ではあるまい。鼠といはふか、鳳といはうか？

▲思ふこと歌へば和さぬ言靈の幸ふしるしまさし
かりけり
▲やす國のやすらげき世に生れあひてやすくて
あれば物思ひもなし
▲世の中のあるおもふきは何事も神代のあとを尋
ねてしらゆ
▲神の代の事らことごとく傳へ來てしるせる御書見
ればたふとし……………(玉矛百首)

第九章 檢校の墳墓

檢校の墳墓は、四ッ谷寺町廿二番地愛染院光明寺にある。そのもとは隣りの醫王
山安樂寺にあつたが、いつの間にか廢寺となり、民有地となつたから、石碑のわたり
に貸屋など新にまうけられ、千古の哲學者の靈場としては、ふさはしからぬ故、井上
博士の發企で今の愛染院にうつしたものである。

余のとむらうたのは本年二月二日(日曜)であつた。まづ愛染院にさしかゝると門
側に一基の自然石標を見る。長四尺許、巾一尺四寸許りもありて、正面に、

「此、院、内、に、塙、保、己、一、先、生、の、墓、あ、り、」

との文字を草書をかしく平假名交りで記し、裏面に「明治三十一年五月有志者建
之」とある。やがて寺門をくぐりて本堂のわきにそひ進むと十間餘にして墓地に出
た。墓參并大師詣の外堅く通行を禁ずの制札をあとにして、突當り小高き丘地西南
隅に一圍の石垣がある。表二間奥三間の長方形をなし、左側の垣根やゝ高くして殆
んど六尺もある。隣にある墳墓はやがて柴垣に接してゐる。右側は低くして三尺五

寸程もあらうが、其の奥まりたるところに一基の碑石が立つてゐる、高三尺巾一尺五寸方、臺石三尺方、一尺五寸長のもので、是れ即ち余輩の欽敬してゐる温古先生の永眠されてゐるおくつきである。寺のあるじはすみかはり、隣のぬしはきえうすとも、先生の魂や御志はいくその民草をまもつてゐる。

正面には「前總檢校先生之墓」と楷字で大きくかゝれ、墓前の左右に二本の柳を植ゑてある。この木にはもと「日本弘道會員有志者」とかいた木札を結び付けてあつたことは、佐伯氏の記録に見えるが、今はない。碑前には數枚の敷石あり、香鉢、水壺を据ゑてある。其圍外なる左側には長さ三尺五寸、巾七寸程の標石がありて「塙保己一先生墓所」と刻み裏面に「明治三十一年五月有志者移鑿」と記され、首唱者井上頼園、賛成者久保惠隣、佐伯有義、逸見伸三郎、梁川保嘉、五氏の姓名を刻んである。以前は、前にも一寸云へる如く、この丘の東北隅にあつた地を、一族の墓地とされたが、安樂寺は廢られたが爲に、有志者はこゝにうつしたものである。

なほ舊墓地、即ち安樂寺の跡に安養院や忠實の碑石が存してゐる。表に「塙次郎源忠實墓」と記され、八寸に二尺五寸許のものである。又桃の樹のあるわたりに、

(正面)

(裏面)

○是相院如實智眞童子—寛政九年丁巳四月末日

▲安養院往利淨生大姉—文化元年甲子十二月晦日

○正空院即幻覺夢童子—享和三年癸亥五月十六日

とあるが、安養院とは檢校の二度目の室で西タセ子、是相院とは長男寅之助(安養

院の出で、正空院とは次男道之助(岡田イヨ子の出)のとである。一は八才一は二才で夭したから童子と云つたのであらう。故に塙家の碑石は三ヶ所にちりてゐる。即ち

愛 染 院—塙保己一

舊安樂寺の跡

安養院及二童子…桃樹のわたりにある

次郎及妻……………人家の檐下にある

どうかして、この散らばつてある碑石や墳墓を、一所にまとめたいものとおもつてかへつた。

序であるから先年井上博士等が安樂寺から愛染院に改葬した始末を一寸添加しておくことゝしよう。

この精しい事は「塙檢校改葬始末」といふものを井上博士が書かれてゐるが、今は東京經濟雜誌第三十六卷第九百一號、第卅八卷第三十八號に依りて梗概にとゞめておく。

明治三十年十一月六日刊の同誌に「故塙檢校の墓地改設の事」と題し、

「故塙檢校の我國史に大功あるは喋々を要せずして明かなり。今其墓地荒廢に委し久しく修理を加へずといへり。是れ豈に吾人其利澤を受くるものゝ聞くに忍びざる所ならずや。井上頼因君其遺族と議りて之を改葬せんとし義捐を江湖に募る。是れ眞に美舉なり。我社先に群書類従を出版し、今又之を再版し、將來續群書類従をも出版せんことを期す。故檢校の事業に於ける深縁ありといふ可し。故に井上君の此舉に就て熱心なる賛成を表す。願くは江湖同感の諸君亦義捐を惜むなかれ。我社は將に之を井上君に傳贈するの勞を執るべき也」

とあるからそのキザシは明治三十年十月頃よりおこり、義捐に従事することゝなつた。こゝえて翌三十一年十月十五日刊の同誌上に「故塙檢校移瘞奉告祭」と題し、

「井上頼因、久保惠隣、逸見伸三郎、佐伯有義等の諸氏が發企となり、贅者の偉人塙檢校の墓地を改設せらるゝ由は、曾て本誌に記載したるが、其後江湖同感諸氏の賛助を得て此程愈々落成しければ、去る九日午後一時四ツ谷寺町愛染院に同檢校の孫塙忠韶氏を始め、親族故舊及び賛成諸氏を招集し、新設の墓前に於て伶人樂を奏し、最と靜肅なる祭典を執行し、祭主久保宮司、左の祭詞を奉告し、尋で參拜者交々墓前に額づき式全く終りて一同退散したるは午後三時なりしといふ。

▲故塙檢校移瘞奉告祭の詞

故總檢校塙保己一大人の御墓の前に申さく、大人は武藏國兒玉郡保木野村に生れ給ひ、七歳の時になん瞽となられけるが、絶世なる質性にし座しければ、思寛宏く慮幽遠くして、明者よりも中々に賢く物知り明らめ給ひたり。御年十四にして、これの東都に出て給ひ、内藤安房守また高井山城守といふ賢

者に扶けられ、雨富檢校須賀一につきて、管絃の事を修め、鍼法を學び、また岡部眞淵大人の門に入り、萩原宗固をどにも従ひて、我皇大御國の文學に心を盡し、思を焦し給ひければ、時の將軍も大城内に所聞歎ばせ給ひ、大人が乞のまに、和學講談所を置かれ、幕府よりは出役といふ者して、その便宜からんことを計らせ給ひけり、……それは平田篤胤大人の注意によれる史料の編纂を旨なりける。かくて人を教へ書を編みなどせられたりしが、やがていみじき功勳こそ世に顯れたれ。そは一系なる皇統の狀を知らせんとは、皇親譜略を著し、後宮きさうのみやの上を見しめんとては、椒庭譜略を著し、武道の沿革を明らかにせんとは、武家名目抄を著し、韓國の關係を思しては、雞林拾葉を著し、其他、花咲松、螳螂抄、耳食勞筆、水月文藻、松山集など種々あるが中に、皇國の古書等の散失せんことをいたく嘆き、遠く慮り、廣く集め、類を推し品を定めて、廿五種に分ちものして、群書類従といふ書、五百三十八卷をなん編し給ひける。之に續群書類従を合せたらんには、卷數二千卷計にやなりぬべき。そもわが大皇國に古來卷の數多き書は、滋野朝臣貞主の秘府略一千卷と、藤原朝臣通

憲の法曹類林二百三十卷となりけれど、此等の書は既すでに亡失ちうしうせにしかば、今は此の書に勝れるものぞなき。又日本後紀を訂正出版して、六國史を補ひ、その六國史に續けて、皇國の沿革を知らしめんと、まづ百練鈔を出版し、律令格式の上を見しめんと、令義解類聚符宣抄等を校訂し、櫻木に句はせ、又松平出羽守の囑あづかに依りて、延喜式の卷々を校訂したまひしなど、古今に例なき大業にして、千古朽せぬ功績なるのみかは、萬世の人に大なる利益ある事、申すも更なりけり。かゝれば世の長人、世の遠人、とましませと、人皆愛で重みせられたりしに、いにし文政四年九月十二日、御年七十六にして、甚惜くも現世このよをなん去り給ひぬる。かれ遺言に従ひ、大人が師とまし、雨富檢校の御墓所なる安樂寺に葬奉られしは、あはれ今年明治の卅一年より七十八年の昔となりにけり。かく長き年月をありふる程に、その安樂寺といふ寺は廢れ、その寺跡は民有地と成り變りたれば、大人の墓所すうじよは他人の家と家との間に挟まれ、額突き拜み奉らんにも便あしくはたかゝる有功臣いさををひこの御墓のかくしもあるは、和學ををさめんものゝえしぬびあへぬわざなりとて、井上頼岡、久保惠隣、佐

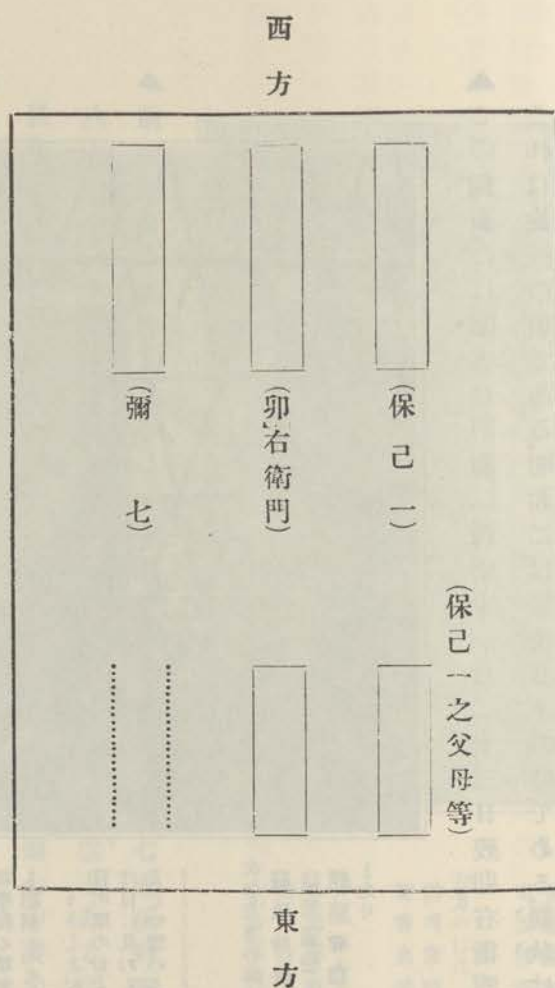
伯有義、梁川保嘉逸見仲三郎等が道を思ふ赤き心の一筋に、相語らひ、相計りて、大人が家の今の主人忠詔ぬしの諾を受け、又世の同志の人々の賛成をも得て、いにし五月廿八日、力丁等を率ゐる参來て、御墓を此の愛染院の堺内に移し奉れりしが、今しも石垣などに至るまで、すべて作り竟へつれば、今日を生日の足日と撰定めて、大人が家の御親族等、また此事に力添へたる人々を此の齋場に招集へて、御祭仕へまつり、其首尾を告げ奉らまくと、献る種々の物を平けく安けく所聞食受け給ひて、此所をも、可美奥所に美しみ愛でたまひて、千世の住所と鎮りませと、恐み拜みも申す」

これで移瘞の由來も分り、かた／＼功績のほども一層しるくなるわけである。この奉告祭のあつたのは明治三十年十月九日であつた。

以上は愛染院にある墓所であるが、この外に彼の生地、即ち埼玉縣兒玉郡保木野村にもおくつきがあるから、一寸附加してこの章をおへよう。

余の訪らうたのは明治四十一年二月二十二日で、昨日高商の講堂で贈位先哲の祭典のあつた日だとおもふ。墓所は生家荻野茂十郎より一丁半程のところにあつ

て、檜、椿、竹など自然の垣をなし、少し隔て、梅林などがある。位置は、

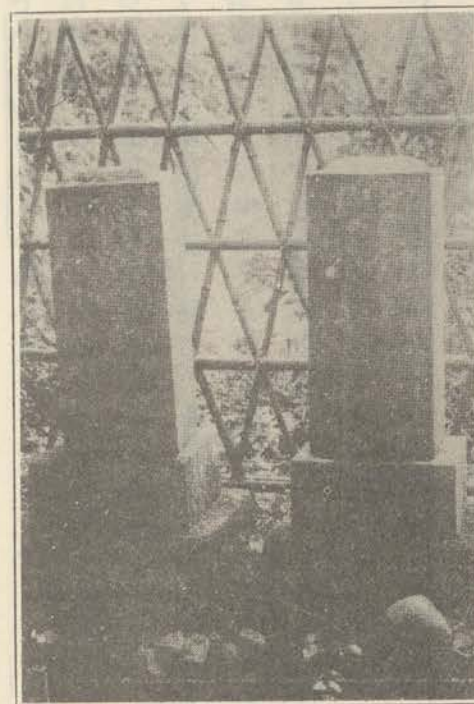


こんな風に並んでゐる。

横一尺五寸

堅四尺一寸

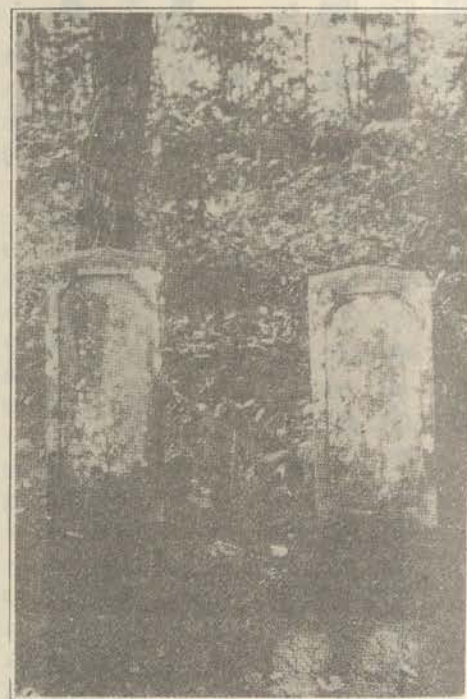
二四六



正面に
和學院心眼智光大居士
と彫刻し、その左傍に
うきしまが原にて
言の葉のおよはぬ身は
目に見ぬもなかく
よしや雪のふしのね
……とあり

次の左方の碑には
観秋妙養信女
臨雲道般大居士位
頼願聲應信女
とあり

▲この側面には、臨雲は明和二酉年十一月二十三日歿卯右衛門とある。これは檢校の弟である。明和二は檢校廿才の時である。観秋は元文三年七月十三日歿、俗名フジとある。頼願は天保十一子年十月十二日俗名ハツとある。



右方のは
寶譽淨光信士位
來雲妙蓮信女

左方のは
辨理常願比丘
智香貞童大姉

他に一基あり
春光喜山居士
清室妙蓮大姉
とあるものもある

▲前の側面に寶譽とあるは、兒玉郡上眞下村片貝莊七産萩野彌七享年八十六、〇十九丙戌年五月十七日歿とあり、又來雲とあるは安政三辰年三月廿二日、享年四十九歿、俗名タニとありて彌七の妻である。▲次の方に辨理とあるは、明〇二年乙酉三月廿九日歿、智香とあるは安永二年癸巳二月十七日歿とある。

二四七

▲又他の方に春光とあるは、寛政七年卯二月初八日歿とあり。おもふに
 檢校の父宇兵衛のことで、寛政七は檢校五十才の時であるから、父二
 十才の時生れたとしても七十才内外で歿したことだらう。
 清室とあるは檢校の母で齋藤理左衛門の女で檢校十二才の時歿し
 た故、十六七才の頃生んだとしても三十才になるかならずで歿した
 ことゝなる。

この他、女の像を彫んだ元祿時代のもあり、かたゝ二三の石碑はあるが文字は
 覚えてさだかでない。なほ一言云つておくのは、明治十八年十月六日刊の繪入自由
 新聞に左の記事がある。

▲塙檢校の碑

今を距ること六十五年前、七十六才にして世を逝りし彼の盲人の博識家塙
 保己一氏は武藏國秩父郡保己村の産にして、後に檢校の位に昇りし人なる
 が、同人の遺族は今尙保己村に残り、今度同地の有志家と計りて檢校の碑を
同村に建てんとす、今計畫中との事也。

また兒玉町保木野村の近所の實相寺は、荻野家の菩提寺で本尊前に飾りてある
 眞鍮の大燭臺には、父母菩提のために塙檢校寄進の由を刻んである。

これで愛染院と保木野村のおくつきのことも分つたらうとおもふ。

人は天が下の神物にして其身に固有の一神おはし
 ます、則ち國常立尊の分神なり、是れ高天原に神留坐
 の心體なり、爰を以て神人唯一の理を辨へ、黒心なく
 赤心を以て大虛元理の聖神を勧請する時は、自己固
 有の神明を感じるなり、これ鏡に向ふに物として影
 を映さずさいふことなきに等しく祈るに従つて感
 應するの心用なり(神學書)

第十章 塙門の諸名家

深い谿のほとりには、華はどの款冬も生えてゐる。茂つてゐる林のおくには、くしき鳥も巢くひてゐる。塙檢校の深く高く、そして茂りはびこつた寛政文化の前後には學者も多いが、その膝下にはひまつはつて居るもの數百、その中、エラ、モノも多い、人各々所長あり、中には師受そのまゝのものもあるが、或はそれ以外に己が特長を發揮して、師のはまれをいよゝ弘めた人もある。或は酒を嗜みや、精勤を欠くのおそれもあつたが、太平記四十卷一句もあやまたずに暗んじたとはいふ奇才もある。就中、輪池翁の如きは一異彩を放つたもので、

凡、和漢をかね古今に通すること容易ならず、限りある人才を以て限りなき書籍を読み盡くすこと能はず、若しよく読み盡くす人ありとも、よく記憶すること能はず、若しよく記憶するものありとも、唯一己の覺悟にして後世に賜することあたはず、(古今要覽凡例)

と主張して、暗記學にのみよるの非をさとす。その他、信名の如き正明の如き濟々た

る塙門の多才、眞に敬すべく、また欽すべきである。

第一節 直接の門人

其一、屋代弘賢

▲屋代弘賢(二四一八—二五〇一)は桃園寶曆八年生、仁孝天保十二年閏正月十八日歿、享年八十四、東京神田明神下に住み、墓は白山妙清寺にある。通稱太郎名は詮虎、詮賢後には弘賢、または詮文と呼んだ、輪池といふは佳號である。

信名の檢校傳に

「屋代弘賢も大人の門人となりて二心なく學びければ、後には世にもきこゆる人となれり」とあり。

▲幕府の士人で拾五俵一人扶持をもらうてゐた、早うもの書くことに妙なる、キ、コ、エ、があつたから天明二年、書役に召出され寛政二年、幕府の博士柴野彦助の手附

となり、同じき四年、同人に従うて京畿に趣き、京師および南都のふるき寺々にある文書等をうつされた。この折道の幸、三卷をものされた。同じき五年、御右筆所詰支配勘定格となり、後表御右筆勘定格に擧られ、祿を増して百俵をたまはり、永く御目見以上となる。文化中、俄羅斯人へ賜はる論書をかくことを命ぜられ、終りに朝廷之一言如此と書いたのは、翁の識見であるさうだ。それから朝鮮通信の國書も命を被りて書いたとかいふ。

▲和歌は冷泉爲村、同爲泰の兩卿を師とされ、成島司直と魂合へる友にて、互にむつびかはしてあつたが、南北正閏の事を論じて議合はす、これよりおのづと遠ざかつた。この時の議論を聴くに、成島氏は京師を去らないのを以て北朝を正統とし、神器を擁してゐても邊土にまします君は、閏位であるといふ趣旨であつたとか云つて居る。

▲また平田篤胤は殊に此翁の知己で、かすかな住居の折より、何くれと庇蔭をうけてゐた。篤胤の赤縣度制考は翁の囑に應じたものであるときいてゐる。

▲書は持明院家の近體より入りて上代にいたり、高野大師の古體を慕はれ、晋唐の

義之より降りて趙子昂の蹟を摸し、この道において近世に二人とはあるまいともてはやされ、又書籍を愛でこのまれ、文庫三所まで作りて、藏書五萬餘卷に及んでゐる。當時都下にて藏書に富んでゐるのは、翁と小山田與清の二人しかなかつた。いづれも布衣の人で、かばかり書を集められたのは珍らしいことである。翁常に書齋にこもり居られ、冬は火桶をおかず、夏は扇子團扇を用ひない。齡八十になつてゐたけれど、朝毎に必ず水をあびることを缺いたことはなかつたのである。

▲次は小杉博士の述べた事に、余の聽いた事をもまじへ、一つ書にしたものである。

○翁は四十才になつて男子がなかつたから、長女に贅養子をなして清通といふを嗣子とし、やがて若年寄堀内攝津守正敦に従うて公務につかされた。○一家儉素を尙び奢ることを知らない。餘りあれば悉く書籍に投ずるを以てこよない樂みとし、おのづから諸國に親友も多く、はた門人も出來て通信するもの殆ど三千に及んだとのことである。そして書庫三字名けて不忍文庫といふ。これは下谷の谷中わたり不忍池畔、宮下といひて、いはゆる

上野東照宮の裏手、今は花園町といふ近傍に轉居し、この邊皆池畔なるかに、輪池の號もこの時以後との事である。この不忍文庫五萬餘冊をひかへて居つたから、古今要覽稿などいふ浩著をなしたわけである。

古今要覽の自序に

▲凡學和漢をかれ、古今に通するにあらざれば、言ふに足らず、或は偏に漢學をつとめ、其熟習にひかれて我制度を誹謗し、或は專和學を講じ、其固陋なるより漢土の法によりて、我邦の制度を立てられし所以を知らず、或は古學と稱し、古書を講究せるのみを以て業とし、中世以來は捨て、論ぜず、或は近世の故實を教ふるを以て口實とし、往昔の典故を窺ふことあたはざる、是等の類は皆我とらざるところなり。

▲近世文運大に開け、享保以來經學紀傳詩文其人世に乏しからず、是然りといへども多くは浮華の學にして實用に薄く、羅山鶴峯二先生及び篤信長胤の和漢をかれ、古今に通ぜしに比すれば及ばざること遠し。特に源筑州傑出の才を以て口を開けば必邦の爲に説き、其著述の如き漢學の末書を作ることかつてなし、實に國に功ありといふべし、僕之を慕ふこと久し、先生歿してより後、此のごさく制度を講究する人あることをきかず、竊に其志を繼がんと欲するに、元來才拙く、しかのみならず晩學にして企望に難し。

○古今要覽稿は文政四年(檢校死)より天保十三年まで二十二年間に通計五百六十三卷調進せり。

神祇、天文、地理、人物、和歌等の十八部門に分ち、はじめは一千卷にて大成の豫定なりし也。中途弘賢歿せる故、現に脱稿調進せるは二十四部卷數五百六十冊なり(先年我自刊我叢書、及存探叢書中に收めたれど國書刊行會のに比してわづか一部にすぎず)。

○柴野栗山はもと讃岐人であつたが、阿波少將治昭侯召し抱へて儒員の列に加へられたのを、後に拔擢されて幕府の儒者となつた。この人、皇室の事を主張し、輔佐定信朝臣に信用されてあつたが、翁もまたこの精神おのづから栗山にかなうて、つねに交誼深かつたが、世子であつた阿波少將齊昌侯、古今の典籍をこのまれ、殊に本邦の故實を調べるを公務の外の業とされたであれば、翁を侯に紹介して平生侯邸に出入し、家士數十を翁の門に入れ、侯の翁を愛重すること大方でない。

○さるに翁の晩年、一男子を儲く。さきに養子清通を以て嗣子としたがため

に實子ながら二男として大に愛惜の情があつた。一日、侯打解けて其二男をもらひて家士としようと云つたところが、翁はいたく欣ばれたところとである。惜い哉この男夭折したがために侯も翁も大に落膽した、それ等の意味を以て翁百才の後、不忍文庫藏書を侯は悉く引受けて阿波國に保存しようとし、金二千兩をおくつたとのことである。

○如蘭社話に載つてある「妻に與ふる書」とか、後言にある「弘法大師屋代輪池翁、弘賢をさとす」とか小林元儒の金剛談とかは、翁の妻に對する考へや、書道臨池に關する意見などを見るには一寸參考になるものである。

○蜀山人の一話一言に「弘賢の和歌」と題して左の如くものしてある。云はく、「文化六年嘉定にはじめて饅頭をたまはりぬれば、まちうといふ事をこめ題にてよめる、今日はいつより涼しかりければ、
殿のうちにすやしきかげをまちうけて又たぐひなき水無月の空
これを長岡侯のきかせたまひて、同じくは、まんぢうと立ち入れよかしと
仰られしと、堅田侯につたへさせたまひつれば、

水無月のてる日いとはす文よまんちうたはた巻手をもはなたで
とよみて奉りぬ」。

○また「烈婦假名略頌」とて翁のものせる長歌がある。下野足利郡川崎の農民逸八が後家のハツを詠んだものである。

○翁の照影は門人、越智、政といふが寫した墨本がある。頭部禿げて後方にいさゝかの毛を残しすがめ、所謂ヤブニラメの顔つきである。上下を着して小刀を佩んでゐる。上部に林家の讃、學專通俗書特溯古、各成一家足爲護矩、天保辛丑歲林衡題とあり、右の上部に短冊がたを寫して、

「わすれ早き老いの身にだに忘れぬは君と親とのめぐみなりけり」弘賢とかいてある。天保辛丑は、即ち十二年にて翁の亡くなつた年である（照影は小杉博士藏）

▲著書の目録は左の如くである。

- | | | | |
|----------|---|------------|---|
| 1、伊勢物語參考 | 二 | 2、和歌入門相見之記 | 一 |
| 3、梅檀瑞像考 | | 4、道之幸 | 四 |

5、	有卦無卦考	6、	加津美考
7、	鴉之巢	8、	道成寺考
9、	通覽花檀抄	10、	琉球狀
11、	高野大師書訣註	12、	不忍池筆抄
13、	輪池雜錄	14、	輪池農考
15、	古今要覽稿	16、	(武家名目抄)
17、	古今會要	18、	古文孝經附錄
19、	歸國の意	20、	駁短歌國字譯
21、	玄猪考	22、	善光寺本尊考
23、	杖考證	24、	伊勢物語難語考
25、	心經異同考	26、	傘の考
27、	銅歩叉考	28、	古今要覽稿抄
29、	輪池翁日記	30、	輪池拾葉
31、	夢想勸進	32、	服制沿革考

33、	龍宮狀	34、	二十四孝繪詞
35、	輪池掌錄	36、	ひひなあそび
37、	麻疹紀原		(以上)

其二、中山信名

▲中山信名は光格天明七年(二四四七)に生れ、仁孝天保七年(二四九六)十一月十日に享年五十才で歿した人である。生地は常陸國久慈郡石名坂村で江戸隅田、東柳島に住んでゐた。墓は下谷常泰寺といふにある。本姓は坂本氏で通稱平四郎、後に勘四郎、柳洲と號し仰日院柳林又空居士はその法號である。

常陸大掾國香六世孫、高幹——經幹——豐廣——勝重——直幹



△信名は檢校のしかも高足弟子で、檢校の傳記までものした人であるから、年譜をも掲げて詳述しよう。

天明七 1^才 常陸久慈郡石名坂村に生る。

享和二 16 江戸に出て塙保己一の門に遊び、服事の暇には、古今を探討し、得失を考索し、苦學五年、廿一才の時一先歸省した。

文化四 21 三月、故郷に歸る序、經過する所の事實を記載す。こは後年、常陸國誌の端緒なるべし。

同 六 23 幕府の士、中山有林本藏の養子となり、中山勘四郎と稱す。

同 七 24 七十俵五人扶持をたまひ、尋いで書物御用出役となる。

同一二 29 命あり鹿島香取に至り兩社所藏の古文書、及諸日記を摸寫す

文政元 32 十一月朔日、出役頭取に轉じ是歲十二月十日、保己一に従つて西上し、遍く舊祠古刹の秘書を搜る。

天保七 50 十一月十日歿す。

信名の檢校傳に……大人に従ひ教をうくる中に術をえたる人少からず……

信名等以上のものは數多かれいふに足らねど、この年比並々ならず教へを、うけしかば、いかでそのうつくしみをも報いんと思ふほごに……とあり。

▲次に古學小傳や比古婆衣を原とし、二三附加しておかう。

▲幼より強記、好んで稗史を讀み、ことに太平記に熟し、背誦一字をもあやまらなかつた位である。それで世間では太平記童と呼び、父兄もいとい之をめでてゐた。されど性酒を好み、得るところの俸祿みな以て酒に換へ、かの名目抄編輯の時などは、しばしば花柳の巷に遊び、職に服しないこともあつたがため、林家の周旋彌縫により、幸に免官のことはなかつたとかいふ。

▲かやうに酒にのみ俸祿を費したるを以つて居るところの一室、蕭然としてたゞ、蠶書數十卷の外、絶えて長物が無い。その著書の稿本は、大抵故紙背をかへし、蠅頭の細字もて書き、まゝ辨じがたいものもある。その寒素貧窶に安んずること、おどろくばかりである。また餘暇あれば、鬻書の商家、いはゆる天道ばしといふ書物をひさぐものをたづね家記、系譜等を搜索し、之を購ひ求められたとかいふ。

甲子夜話三篇にいふ

信名人と爲り豪放にして酒色の癖あり、されども和書の採擷方に於る自餘の

及ばざる所也、然るに酣嘗の過ぎ花柳の遊に幾度か失行ありしが、林子深く其才を惜み、稿も亦密に其失を林子に訴へ又憐を乞ふ、林も已に其才を愛すれば隠顯に出入して遂に發露の罪に罹らず云々。

又同書に云ふ

辭世の歌は死ぬ二三日以前、和學所の同僚におくるものなり、林子これをきいて惻然たり。

▲その辭世の歌を見れば、平素豪放の氣象を覘ふことは出来る。云はく、

「酒ものみ浮れ女も見つ文も見つ家も興しつ世に恨なし」

▲檢校、類從を編纂するに際し、信名の其事に堪ふるを知り、校訂の任に當らしめた。檢校の更に和講の教授となるに及び首として信名をすゝめ、その僚屬となした。が、名山石室の秘藏の大に世に顯はれたのも、興りて力あるわけである。平生好んで著書をもしたが、特に常陸の舊事に於て摺撫最もつとめた。常陸治亂記、常陸編年、新編常陸國誌、東極雜記等數部ある。就中、編年の書尤も精密を極め、上神代より下元和まで二千年間の事、細大となく採拾遺りなく、旁ら二總、二毛、陸奥等に及ぶ。又白河文書に據り關城書考を作り其譌を正した。

▲伴信友の比古婆衣七(風土記考)に左の如き文句がある。

「其頃中山信名は古の制度どもを委しく心得たれば、此事かたらひたるに、其古にあらぬ事どもを明らかに明らめて偽書なるよしを論へるによりて、いよいよ前の考に強説せる誤をさとりて、われながらあさましく背に汗あゆばかり恥かしくてなん……」

▲著書――

南巡逸史	九	南山考	五〇餘	氏族志料	一
守護地頭考	一	庄名考證	一	關城書考	九
鹿島郡圖	一	鹿島編年記		鹿島事跡	二〇
鹿島長曆	一	常陸沿革圖記	一	常陸治亂記	二
常陸稽古錄		新編常陸國誌	六九	筆くまで	一八
常陸遺文	二	水藩事跡	六	參州事跡	六
東極雜記	一一	蝦夷長曆	一	風土記概論	一
墳墓考		(武家名目抄)		(柳洲雜記)	(以上)

其三、石原正明

▲石原正明はもと尾張の生れで、江戸品川や牛込市ヶ谷に住まはれ、仁孝帝文政四年正月七日(二四八二)享年六十才餘で名古屋で歿した。丁度檢校と歿年は同じであるは不思議である。

▲通稱喜左衛門、名は將聰、後に正明、蓬堂と號し、いとかすかにくらしめてゐたらしい。もと久しくならうた漢學をやめて宣長の弟子となり、後に江戸に出て檢校の塾頭をつとめた人である。

▲博覽卓見最も有職の學に精しく、その著冠位通考之をあかしてゐる。また歌を詠まれ、ことに新古今の風體を好まれ、後京極攝政の氣韻を追慕して、

人すまぬ不破のせき屋の板庇、あれにし後はたゝ秋の風

といふ歌を第一義とし、常に之をひねとされたとかいふ。甥正俊の尾張にかへる時にあたへた尾張の家苞新古今評師宣長の「美濃の家つと同上」とうらうへの説を立てられた、比なきめでたい本である。

▲歌はなか／＼の達吟で一萬首に至りなば、人々に評を乞はうなどゝいひてをつ

たが、六千首ばかりの時に、或人に持ち去れたさうであるがをしいことである。人となり豪爽酒落つねに酒を嗜まれ、これでは大伴の酒人もハダシであるといはれて居たが、ふと病にかゝり、ものいひさやかならず、むづかしい細い事などは筆談ならでは、辨じがたきはごになつて、とう／＼亡くなつたとのことである。

▲著書

- | | | |
|----------|-----------|---------|
| 1、制度通考 | 2、名目類賤 | 3、百僚補歴 |
| 4、江戸職人歌合 | 5、臣連二造考 | 6、冠位通考 |
| 7、律解 | 8、百人一首抄 | 9、勢語章句 |
| 10、寄相通考 | 11、尾張の家つと | 12、蓬堂集 |
| 13、拔萃おちぼ | 14、辛酉隨筆 | 15、壬戌隨筆 |

(以上)

其四、長野美波留

▲鑑定便覧に、

「江戸の人、初、大村光枝に學び後、塙保己一の門人となり學問、該博也」

とあるのみで、生死年月は不明である。

▲著書

- | | | | | | |
|-----------|------------|--------|---------|---------|---|
| 1、百人一首抄 | 一 | 2、徴古圖録 | 一 | 3、對照假字格 | 一 |
| 4、縣居雜錄評註六 | 5、縣居雜錄補鈔標註 | 一 | 6、萬葉集類句 | 五 | |
- 其五、塙忠實

▲次郎忠實(二四六七—二五二二享年五十六才)は檢校の男にして、父につぎて和學所の總裁となり、引續き續類從、史料、名目抄等の編訂に従事した。其號を藤門といふたのは、祖母にあたる人の生地、藤木戸村にとつたものとかいうてゐる。家學の餘風をうけ、皇朝の典故に通じ、中年からは和歌にも妙を得て、其名世に傳つてゐる。彼は文久三年十二月廿一日の夜浪士の爲に刺され翌廿二日歿せられたことは、前已に之を叙したから省略する。第二章第二節、第五章第四節參看。

編者云、傳記集成に文化十一年(二四七四)に生れ、享年四十九とあれどあやまり也。文化四年(二四六七)に生れ、享年五十六なり。

▲墓は父檢校と同じく四ッ谷寺町安樂寺にある。紹學院滋興藤門居士とは法號で

ある。男忠韶亦和講をつぎ、父祖代々の遺志をついで、その道に餘年をおくりて居る。

▲著作及校訂して出版した本は、

- | | | | |
|----------------|----------|--------------------------|----|
| 1、續椒庭譜畧(卷數未詳) | 2、螢蠅抄 | 六卷(父翁著、原本を校訂して出版せるもの) | |
| 3、續螢蠅抄(校訂出版七卷) | 4、南朝編年稿 | 四二 | |
| 5、近世武家名目一覽 | 6、近世花押分類 | 一 | |
| 7、集古文書 | 二四 | 8、古簡類纂 | 一二 |
| 9、觸目私抄 | 三 | 10、和學講談所書目二 | |
| 11、現存書目補正考 | 五 | 12、又續考十餘部目錄作る本書も寄せた(井上談) | |

▲氏は小林歌城(二四三八—二五二二)とは、よほど仲はよかつたものと見えて、事毎に三十一文字に感想をうつしておくつたものらしい。歌城は春海及宣長の門人で、桂園一枝選評などをものし、中々詠歌に長けてゐた。今、忠韶氏のあつてゐる「藤門遺芳」中より歌城のをすこしばかり抄出して見よう。忠實の和歌は附録にあ

○塙忠實が家にて月前郭公を

一聲に明くるをしとや郭公月のあとおふいりかたのやま

○塙忠實が家にて菊千秋友といふことを

移し植ゑはわれを友にて菊の花千年の秋の香に匂はなん

○忠實 御目見仰付られたる時歌城より

佛にていは、善導温古堂半金色になれるたふとさ

同じときに川柳

△奥様といひますのかと女房いひ

△焼火の間あたる所と初手おもひ

△その當坐陰をキョロ／＼ふりかへり

歌會の時はいつも豆腐と酒のもてなしあり。社中この豆腐を温古豆腐といふ。或日歌城のもとよりこの頃は歌城歩行なりかね、いつも駕籠にて出席あり

八文の豆腐をくひに貳朱たして駕籠で行くのは馬鹿な歌よみ(豆腐一つ當

時八文、かごは二朱、即ち八百十二文)

是等の和歌、狂歌、川柳等にて見れば、雨につけ風につけ、歌城より氏に何くれと心をあかしてゐたものであることは分かる。その關係の密なることおしはかられる。

▲氏はまた文にも達してゐたらしい。書翰の如きは不用意でスラ／＼ものする故、よくその當時の事情を知り得るのみならず、亦その人の文才の程度も顯はれてゐるものである。左に二三をあげんに、

○蕎麥の馳走に招かれしを斷る文

益御多祥奉賀候然者昇堂候様兼て御示に付是非とも罷出候心得之處俄に調物出來太田、信太などを御頼申候間今朝より急に右に取懸居候仕合に付殘念ながら御斷申上候昨年折惡敷罷出不申候間今日は吳々も縁合申候積に御坐候得共前件之仕合何分暇を得がたく無餘儀前條相願候事に御坐候乍去自然只今頃蕎麥御出來にも相成居候はい少々頂戴相願申度自由なから此重へ奉希候此段申上候早々取込頓首

重へ聊美濃塚之小豆入置申候これは浪華虎屋にて小倉野を製候小豆之由にて甚拂底成品之由或友人よりほりかに到來に付入置候不斗御筈味にも預り候は、大慶と

二月十一日

向々皆様へも今日御不沙汰候御わび御通聲可被下候約束してその客のこぬは亭主も家内もはりあひのぬけ候ものにて返々御免願候は恐入候されども何分難去次第猶拜上萬縷可申上候

堀 次 郎

山 田 尚 介 様

(この手簡は金港堂の小學讀本にのつてゐたのをうつしたのだが山田とあるは山内のあやまりなり山内は和學所出役なり幕府與力をつとむ和學所の休日は一六ゆゑ十一日は休日ゆゑに約束したるもの也太田信太も出役にして本郷森元の大番與力なり太田信太郎(實名弘光)のことなり

—忠詔の説—

一片の書牘にすぎねど文才の雲のぢぎれ／＼に隠顯するのはおもしろい。

其六、山崎知雄

▲知雄は光格帝寛政十年(二四五八)に生れ孝明帝文久元年九月廿三日(二五二一)享年六十四才で歿した通稱彌左衛門武陵と號したが別に蝸牛舎瓢菴の家號ももつてゐる國學は岸本由豆流書は喜多武清を師としたが堀檢校の門に出入して啓發されたところが少くない。

▲知雄生れから江戸の人で傳馬町瓢菴新道に住み家主をつとめかたはら手習の師などされた人である由豆流に従うて國史を學んでゐたが日本紀略を讀んで印本の無さと且傳寫の訛脱居多であるのを嘆き慨然として之を校正しようとおもひ堀檢校に謀る檢校之を慫慂して其功ををさめしめようとした知雄おもへらく紀略の書は光孝天皇以前は六國史等より抄出したものであるからあまり肝要なものではない醍醐天皇以後は全く當時の記載で未だ正史の體を得ないけれども六史に繼ぐものは書より外にないと醍醐帝以後を分つて古寫本十數本を比較し又扶桑略記一代要記公卿補任等の諸書を参考し其同異を上層に

標し、嘉永三年十月上梓した、當時玉山堂といふ書肆があつて、知雄が篤厚をめで書肆の冥利であるといつて、この書を刻したとか傳へてゐる。

▲又、續後紀をも校正し、次いで三代實錄を校したが、安政乙未の歳の火災に、妻子を失ひ、大に力を落したが、又馬伏波の老當益壯の語に奮發し、文久元年の春頃より病にかゝり、是歲九月廿三日歿した。人となり然諾を重んじ、約したことはつゆたがはなかつたそうである、黒川春村、内藤廣前、色川三中など最も知音の友であつた。

▲辭世の歌は

久しく煩ひて心地死ねべく覺えける頃よめる

六十ぢあまりすみしこの世のわかれかとおもへばぬるゝわが袂哉

十月十五日の夜山崎氏の法筵に侍りて 秀 堅

神無月もちの月影さゆれどもしぐるゝものは涙なりけり

▲著書は 校 正 日本紀略 校 正 續 日本後紀

其七、 松岡辰方

▲辰方は後櫻町明和四年(二四二七)に生れ、仁孝天保十四年(二五〇三)五月一日に享年七十七才で歿した、墓は江戸目黒祐天寺にある。

▲姓は丹治氏、通稱平四郎、後に清助と改め、子辨といふのは字で、號は雙松軒、或は梅軒となへた人である。なか／＼有職故實の學に秀いで、これまた塙門の一名物である。

▲系圖は、

家學をつぐ嘉永元年七月晦歿

辰方―行義―明義―典禮故實に長ず―大學にも教鞭をとる

仁孝文政九(二四八六)年六十五才明治二十三年(二五五〇)六月廿二日歿

▲學統は、

塙保己一―辰方―行義―明義

と順序されてゐる。

▲著書

1、裝束織文圖會	一	2、附錄	一
3、女官裝束織文圖會	一	4、裝束圖抄	一
5、續裝束圖會	一	6、十二單着用圖	一
7、小桂着用圖	一	8、張着用用圖	一
9、皇統略圖	二	10、官位相當圈圖	一
11、武田小笠原略系圖	一	12、式傍並化粧略記	一
13、武家裝束皆具略記	一	(以上十三部印刷絶板)	
14、服忌便覽同版官禁	一	15、手綱腹帶圖式	一
16、貞須豹文書色目考	一	17、令式服色圖考	一
18、冠圖	一	19、位階便覽	一
20、親王諸王考	一	21、續諸門跡譜	一
22、涼暗愚抄	一	23、盛化門院御送葬抄	一
24、御火屋之圖	一	25、續々皇胤紹運錄	一

(以上)

其八、千葉直胤

▲直胤は江戸の人で塙門の一人である。この人の「雜記」に、

……大部の書……皇國にては大部のふみ三部、そは滋野貞主朝臣の秘府略千卷、それさへ亡びて世に傳ふるところ僅かに一卷也。又西山公の禮儀類典五百十卷、是等につぐべきもの我師故塙保己一先生の群書類従の一書のみにて六百六十五卷也。直胤和漢の書をしたふ事人にこえたれば、此書を見る毎に師のいさをかたじけなさに感涙袖をうるはさることなし……

といへる位、師を愛慕した人である。

▲うぐひす考 一、

其九、稻山行教

▲信名の塙檢校傳に、

……凡そ大人にしたがひ教へを受くるなかに、術を得たる人すくなからず、屋代弘賢、松岡辰方、稻山行教、石原正明など、ことにその旨をえし人どもなり。とありて、塙門の一異彩であらうけれど、くはしい事は傳つてゐない。檢校もよほ

と愛でゝ居られたことは、十三回忌によんだ歌で分る、

○稻山行教の十三回によめる

をくるまのうしや別れし年の名に又廻りあふ水無月のそら
ふる文の棟にみてるいさをしも君ならすして誰かなすべき

(松山集雜部)

○稻村行教がみまかりての後、志のほごをきゝて

(編者云、稻村は、稻山かさりともし別人か)
古のみよのちぎりのあとゝだにいのはぬ心ぞなほしのばるゝ

(三草集中あさち哀傷 定信)

其十、奈佐勝杲

▲勝杲は檢校とそのもと學友であつたが、後には物語等について彼の教を受けた
ことが多い、それは信名の筆に、

○奈佐勝杲(カサキ)明阿の門人字は久左衛門(横田茂語(シゲツク)などはみな學びの友なりけるが、
物語やうのこと案、大人に問ひきこえけりとあり。

○明和六年三月歌の師宗園(二十四才の時)大人と横田の茂語(字は孫兵衛)とを招
きていへらく、汝等このとし頃讀書詠歌にまめなること餘人にすぎたり、後には
皆樂なりぬべし、然れども人各得る所あり、彼を學び之を習はんぞすれば、人
にすぐれん事かたかりなん、これより後、茂語は歌をむれとし、讀書は之につけ
よ、保木は歌よむことをやめて専ら書よむべし云々。

とあるに依りて明かである。故に半は學友で、半は弟子であるといつてもよから
う。

▲この人は江戸の人で生歿年は不明である、文政年中歿といふこと丈は分る。通稱
久左衛門、隅、東と號し、やはり檢校の師の山岡明阿の門で著書も少くない。

▲弘賢の古今要覽稿なども氏に負ふところは多い、抑僕[○]の學業おほく隅[○]東[○]先生の
啓發によれり」と屋代翁は自らものしてある。隅、東先生とは即ちこの奈佐氏をさ
す。

▲又弘賢の要覽稿自序によると、其關係益々明かになる。云はく、

「凡此書編集のさざし(編者云、寛政十年九月廿一日より十餘年前なり)十餘年

の前にあり、或時隅東先生に此素志をかたる。先生曰、吾師明阿彌彌陀佛平生の筆記三百餘卷あり、あらかじめ冊子を儲け部門を分ち、得るにしたがつて寫し入れ、類聚名物考と名づけて忽忘に備ふ。今は足水軒がところにある。是を得ば纂集の勞を省くべきこと多からんと、僕之を聞きすみやかに足水についで之を借る。寔に明阿師の業つとめたりといふべし。然れども其記するところ野史家乘に專にして正史實錄に及ばず、……僕之を得て雀躍にたへず、悉くとりて此の要覽に入る、……明阿師の此志、僕をまつて成るにこそ。自らこれ偶然ならざるに似たり」

とあるのは、その委曲をつくしてゐる。

其十一、横田茂語

▲横田茂語、俗稱孫兵衛、翻錦亭と號す。御先手與力の隠居で袋町に住んで居つたから袋翁と稱へて居た。檢校の學友で萩原宗固を同じく師匠と仰ぎ、ひたすら和學の道に心をひそめたものである。丁度、檢校の衆分より勾當に上るまで位の學友で、宗固門下では保木と茂語とは俊才のきこえ高かつた。

▲されど、茂語は和歌に長け、一方の保木は讀書に達して居つたと見え、各自所長に腐心し、その特長を發揮せよと、師より勧められた。斯くもとは學友があつたが、後には保木を師として物語やうのものを何くれと聴いたとのことである。

▲袋翁の和歌

遠山霞

山のはにおほふ霞の袖やまづわがたつそまの春を見すらん

十五夜月

君ませばてゝも雲井の名にしおふ東のひえの月やすむらん

第二節 間接の門人

其一、栗山信充

弘賢の門人中でその學統をつぎ、嶄然頭角をあらはしたのは栗原信充である。

▲信充は光格寛政六年(二四五)七月九日生れ、明治三年(二五三)十一月二十八日享年七十七才で歿した人である。生地は江戸駿河臺紅梅坂、墓は京都梶尾山高山寺である。通稱孫之丞、字は伯任、號は柳菴又は柳閣、隱居して樂といふ。

▲漢學を柴野東山に故實を伊勢貞丈の子に學び、後弘賢の門に入り、三十年間、親しく其教へを受く。文化中弘賢古今要覽を編纂するに當り、信充もまた與かる。後脚疾によりて職を辭し、家居著述を事とし、又門生に授く。柳菴雜筆自序に、

又與先生所編古今要覽事……後病脚、去所職、而家居。家之北昌平橋也、西紅梅坂也、占地不盈一畝、爲小圃、爲盆池、老屋數椽、又築土倉二棟、雖無長物、唯書貯萬卷。度置其中、獨座其中、校讀以爲樂、倦則優於圃、植以花草、勞則座於池畔、池水清冽、遊儻洋々、亦可以樂也。夜則與兒輩發經史疑義及歷代之沿革、又取往時所鈔得聞見於名流交遊秘局奇冊、校讐編纂。

によりて家居悠々白適の狀、想見するに足るであらう。

▲こえて元和元年春、島津久光の招聘に應じて薩摩に下り、冬に至りて歸東した。門人は幕士、山岡鐵太郎、薩藩兒玉三平、佐賀藩阪部長照等である。

▲著書は七十年來丹精をこめた、令講義全部をはじめとし、

先進繡像玉石雜誌

一〇

兵家紀聞

五

鞍鎧新書

古器圖編

柳菴雜筆

四

柳菴隨筆

柳菴餘筆

柳菴續筆

柳菴漫筆

等三十四部を數へることは出来る。其博識知るべきである。

其三、安藤野雁

▲安藤野雁(二四七〇—二五二七)も亦、次郎の門人である。文化七年生、慶應三年三月廿四日歿、享年五十八才、奥州半田銀山の役人で、墓所は檢校の生地に近い武州熊谷町熊谷寺である。

▲八町堀同心某の養子となつたが、程なく離縁となり、塙の塾に歸り、後諸國をさまよひ、武州大里郡胃山村根岸秀香氏の家で失せた。

▲次郎の門人中では詠歌に長けた方である。されど不羈質直常に破衣をまとひ、細を帶にし、雨中草履を穿ち、雨にぬれつゝあるくやうな人で、平素酒を嗜むこと甚しく、従つて小説的の歴史を有してゐる。その畢生の事業は萬葉集新考の著作で

旅でさへ筆をおかなかつた。

▲著書

- 1、萬葉集新考 三〇
- 2、野雁集(長短歌二百首續歌學全書第十一編)
- 3、刀禰記
- 4、文集名 一

▲野雁集より二三首を掲げよう。

○山崎知雄が校訂日本紀略の書なりての竟宴に

ふみわくる跡もなかりし古への野中ふるふみあきらむる今日

菅原の神を

くたけちり曇りなきみの白玉はぬり黒むれとくろまさりけり

古寺の雨のこゝろをよめる

瓦ふきくつれて雨のふるてらに空よりたゝくかねのおとかな

山吹の花をよめる

小鳥なくしのゝかき根の朝つゆにひとえたさける山吹のはな

春の歌の中に

武藏野のをけらか花は春こまに踏れなからに咲きにける哉(以上野雁集)

其二、塙忠韶

▲塙次郎門人中で名をなした人は敬太郎忠韶である。この人は檢校の孫に當るから巻頭の略歴にその梗概は盡してある。父次郎に代りて和學講談所を繼ぎ、和歌の道にも心を寄せた。

新年川

こそことしとりかへ川のよとみなくあらたまり行く浪の白ゆふ

霞籠水郷

すみた川堀江やいつこ見えねともかすみにひゝくあさくさの鐘

忠雄の上野韻松亭にて連月の歌會開始の時例によりて兼題社

頭梅を

家の風吹きもつたへよみつかきに千里をかけてさくやこのはな

忠雄返しに

家の風ふきしむかしのいろもなしあはれての花またつほみにて

風月場中観花灯

あきかさに軒の灯籠のほのめくや君におもひの燃ゆるなるらん
桶狭間懷古

かちすさふ丸根鷺津のよろこひをあめとなしたる北のまつはら

淵明の琴を弾するかたに

かきならす琴のしらへのそれよりも撫てしはたかき心なりけり

この他、松岡行義、同明義等もあれど、左まではとて省くことゝした。

以上數十頁にわたって、雲の如き林の如き塙門の諸名家を叙述した。その子、弟子、孫弟子、はた、ひこ弟子たるとを問はず、克く師の所志を規とし、矩とし、或ひは横にひろごり縦に延び深く根ざし、その或ものにおいては、藍よりいで、藍より青かづたのは、たしかなことである。鈴屋は弟子にさとして、何んでも師より大きい人間にならねばならぬ、師説に泥んではいけない、己が創見は必要であるといはれたが、檢校の遺志も恐くはさうであつたらう。

▲水……器にはしたがひながら岩根をもとほすは水の力なりけり

▲田家霜……賤が家の軒端に高くつみあげし新蘂白く霜降りにけり

▲親……ひこり立つ身となりし子を幼しと思ふや親の心なるらし

餘論

本傳も進み／＼て彼が性行を叙し、墳墓を描き、塙門の俊才をも紹介した。言はんと欲するところは、おほやう盡きた。今はたゞ餘材を拾ひあつめて、棟梁をさゝへ、柱石をたもつの一資料に供しよう。

彼は讀書をたしなみ、音曲針按のわざには殊に拙く、三年が間に一曲をも覚え得なかつたことは、前已に之を述べた。即ち、

針治の術を旨と習はせけるに、醫書よむ方は人にすぐれて二度よますれば、其の次の度には一文字もたかへすよむほごなりけれど、術にかくれば人よりは遙に劣れり。

とは、門人中山信名の語るところである。而して彼は不仁を視ること讐敵の如く、門徒といへどやがて破門するに至りた。水母餘音に、

門人なりける或盲人某瞽者のならひとて、高利の金を貸しつけて大に富みけるが、或時其手代が負債家の許に到りて催促の末、其家の小兒疱瘡にて臥

したる夜着を引きはぎて持ちかへりたりとの由を聞きて、早速某盲人を呼びて其非を詰り、遂に破門をなしけると。或は云ふ盲人は姓寺家村と云つて後に檢校になりしものなり。

と記してあるのは、こよないよい證左でないか、又彼はさとの早い、思附のよい、頓智の方にも長けて居る。一例をあぐれば、

檢校嘗て富人の招に應ず、適々人の廊下を過ぐるものあり、檢校之を聴き徐に曰く、足音蹺々尋常にあらず、其人必ず跛者ならん、主人曰く、然らず、檢校肯んせすしていはく、足音洵に奇なり、是れ必ず故あらんと、乃ち主人をして之を觀せしむるに、其人果して西瓜を一袖に收むといふ。(水母餘音)

そのさとの早いこと、大様この類である。

斯くなさけ深い上に超凡脱俗の偉才であるから、贅をとり來り學ぶものななか多く、四方の貴顯紳士よりめであられ、従つて交際もよほど手廣かつたやうである。門人の多くあつまるやうになつたのは、丁度彼が三十四才安永八比からで、叢書を編集して開板成就しようといふことを、天満宮に祈誓した前後からとおもふ。信名

曰く、

安永八年(三十四才)又宅うつりして土手四番町なる東條信濃守の宅地に住む。これより先にも來り學ぶものなきにはあらねど、こゝに至りて門人となるもの數多かり。源氏など講せらるゝにつぎひきく人大方ならず。

とあるので、よく其間の消息は分る。また交際の廣かつたことは暇々するまでもないが、事の序に一二を記せば、

文化のはじめ 三年寅の五月初發足 大人京都に遊び、又難波にいたる。この兩地に於て名を知られし人ども、久しく大人の名をきく。こゝにいたりて來り見ゆるもの甚多し。朝より夕に及ぶまでたゆることなし。或は肖像を寫してもちさるものあるにいたる。これより後、京師また難波にいたるごとにみなかくの如し。又東都にありて諸方の人の來り訪ふことはいふもさらなり(水母餘音)文化三年といへば、彼が六十一才の比である。彼はひとり江戸で名を賣つたばかりでない。こゝえて京阪地方にいたるまで、斯く世人より敬慕され、欽羨されたのである。

難波にて阿部播磨守御城代の時、其宅にて有賀長秋 高旨の弟子長〇よ寺島藤右衛門と歌の會あり長秋來りて 今よりは問ひみ問はれみ言の葉の塙の

松に千代ちぎらまし」(同上)

とたゞへたとかきいてゐる。これはホンの一二に過ぎないが、これでその一斑は窺ひ得ることは出來よう。最後に乗半の彼を評せし言をあげて果して、肯綮を得て居るや否をたしかめよう。いはく、

一日乗半同僚に語りけらく、彼瞽人が人となりを見るに、度量大に常人に越えたり。彼をして明あきたらんには、かへりて法令をもおかし、其身をもそこなひなん。明なきこそ幸にはありけれ、後に必ず業をなしぬべきものなり。かく思ふが故に懇にはすなりとぞいひける(塙檢校傳)

とある。やがて彼は清濁併呑の度量あり、従つて瑣規末則に局促するの人でなかつたと見える。それ故に若し彼をして眼あきたらしめんには、かへりて法令なども犯し、一身をあやまつたかも知れぬと乗半は推測したのである。而してこの松平乗半といふは、雨富の隣りでなか／＼文よむことを好まれた人である。それは、

乗半……大人の學才の人になるをめで、いと懇にして劇務のひまには物よみ教へければ、いと嬉しきことに思ひ、其家に行通ひて契約をたて、あしたの寅の刻より卯の刻にいたりて、一時がほごは文よみならはれけり。乗半は公の務いとまなき人なれば、一日をへだてつゝもかくはせられけり。の語句に依りて見れば、彼と乗半との關係ゆかりをたぐることは出来る。

最後に彼に對する訛傳謬説のあらましをかゝげて一察に供しよう、されどある限りをあぐるは事頗る繁瑣に渡る故、こゝには單にその一二をあぐ。坂谷朗廬曰く、保己一幼穎悟絶倫、而有梁上君子癖、父大憂之、候其睡以熱油澆之、滅其明、然後告其故、深戒之。 (近世偉人傳、蒲生氏)

とあり、梁上君子の癖ありといひ、熱油を注いで其明を滅すといひ、何等妄誕の言ぞ。無稽の説ぞ。されど世には根も葉もない、萍のうき／＼した浮説流言を蒔きちらすものがあるといふ、あかしとしてこゝに記しておく。なほ小野湖山も塙保己一傳の終りに、

和漢古今盲人而名世者多矣、然如保己一之博學洪識、恐無其匹也、余與其子次

郎及其徒相識、聞其逸事者多、他日將欲補此傳也、 (同上)

とことわりであるが、たゞ考へただけであつて、歿くなられたのはをしいことである。其子次郎及其徒と相識るとある故、従つて人の知らぬ資料をもつて居たかとも思はれる。

叙去叙來、彼が面目のあらましを紹介した。かへりみるに、彼が偉業洪著、一に彼が信念より胚胎してゐる。清き信念はやがて厚き自信である。厚き自信は尤も優勢なる勢力に外ならない。かの清き信念は頭腦を靈動せしめて裁斷を明かにす。これ即ち行動に活潑々地たらしめる所以で、靜息の極、時ありて神來子感するは、こゝに基因するのである。

信仰なく、自信なく、たゞそれ知識を雜積して敬虔なる信念に歸因してゐる神來を疑ふものあらば、たゞ／＼疑ふものゝ修養に乏しきを自白するに過ぎないのである。彼は眞に鯤であらうか、鳳であらうか。

附 録

第一 歌 文 集
第二 檢校に關する名家の談話

塙檢校本傳終

常はいかにも平和にして更に常人と異らぬやうに
致し、その大和心をばいかにもく堅く衝立て、物に
惑はず動ぜぬやうに致したい。
(平田篤胤)

附 録

第一 歌文集

▲松山集（檢校の歌集）

春

年内立春

年なみもまたこえなくに春來ぬとかすみそめぬる末の松山
春來ぬと霞みそめけり水無瀬河のこる日數のありて行瀬も
立春

わかたのむ北野の森にひくしめの長き日影の春は來にけり
老樂のわか身こすなみ立ちかへり今年も同じ春は來にけり
みよしの、峰もはるかにかすめるや唐土かけて春は立つ覽

立春のころを

月の入る西の國までゆく春やわか日の本をはしめなるらん

元日に

見し夢はふるとしなから春來ぬと鳥のなく音に明ほのゝ空

初春梅

咲く梅の木の間ほのかに三日月のひかりも匂ふ軒のはる風

早春

梅かをり松の葉かすむのとけさにはや里馴の谷のうくひす
小松ひき若菜つまんともろ人の雪間もとむる春日野のはら

早春川

よしの河春と岩間に音たてゝこほりも今朝は波のはつはな

河早春

氷ぬしそともの小河うちとけて根芹つむへき春は來にけり
かはそひの柳の糸はむすへとも氷とけゆくみつのはるかせ

春生人意中

なへて世にかすめる春の長閑さも人の心やはしめなるらん

風光處々生

筑波山みねのしら雪かつきえてしつくの田井も氷とけけり

瀧音知春

こほりぬし岩根も水の音羽山たきつ瀬よりや春は來ぬらん

雪解氷又解

峰の雪岸のこほりにとちられし朽葉なかるゝはるのやま河

子日

子日してなほ引きうるん小松原見渡す千代の末もはるかに
野を廣みおふる小松の數々は何れを千代と分けて引かまし
人の行く野邊にひかれて松の戸を猶出やらぬ老そかひなき

霞初聳

時しらぬ山ともいはしふしの根の霞も今朝は空にそひえて

霞知春

なへて世におほふ霞や大空のはるよりさきに春を知るらん

濱霞

こほりゐし汀も解けてはる風にかすめる浪のうち出のはま

霞中瀧

春かせに岩浪たかき音はかりかすみのこせる峯のたきつ瀧
世にひくかひこそなけれ春のきて水上かすむ音なしの瀧

河霞

打ちかすむ水上遠くかへりみてくたしもはてぬ春の河ふね

鶯

鶯のこゝろ高くもたゝひとり野なかの松のこすゑにそなく
いと竹にもゝさへつりの名もしるくしらへあはする春の鶯

野鶯

いはちかく誰かきくらん朝なくかすめる野への鶯のこゑ

竹間鶯

日かけさすそとの竹にうつり来てなく音のとけき春の鶯

竹中鶯

ふしなからきくものとし窓ちかき竹をねくらの鶯のこゑ

若菜

老樂の身は七くさの七十もちかき野邊にやわかなつままし
年々に老の数のみつまそへて若菜といふもかひなかりけり

澤若菜

ひかけさす浅澤水のうす氷ひまもとめてやねせりつむらん

春雪

沫雪の風にみたるゝ梅かえはまた見ぬ花の散るかと思ふ

谷春氷

谷風はなほ春さむみこほりゐていつか咲くへき浪のはつ花

梅

咲くやこの言葉の花も代々かけて匂ひのこれる難波津の春
 みる文も南の花の名にかけてひもときそむるまとの梅か枝
 梅の花たかたくみよりくれなるのかたへに雪の色を見す覽
 文このむあるしからにや窓ちかき梅の一本は色香そふらん

梅初開

咲きそむるこの一枝になへてよの春も知られて匂ふ梅か香

曉梅

雪晴れて月も有明の窓のうちにとおろくはかり匂ふ梅か香
 わきも子かそてやふれけんさしくしの曉ふかく匂ふ梅か香

夕梅

うくひすのねくらもとむる羽風にも先匂ひくる軒の梅か香
 夕闇は色こそ見えね咲く梅のありとやこゝにはふはる風

梅薰袖

いかばかり咲きみちぬらん佐保姫の霞の袖にあまる梅か香

里梅

里の名はとはてもしるしよそまでも匂ふ梅津の木々の梢に

故郷梅

植ゑおきし人はのき端の梅の花誰かため匂ふ春のふるさと

紅梅

我妹子か顔の匂ひもそふはかりわかもの色にさける梅か枝
 紅梅遅

柳

夕月のひかりと見しはかつ散りて朝日に匂ふ梅のくれなる
 わか門の五本やなきいまははやともに老木の影そさひしき
 うちなひく姿のみかはすなほなるこゝろもならへ風の青柳

柳露

のきとめし露もさなから玉すたれ軒端にかくる青柳のいと
 水邊柳

立田川はるは柳のうつろひてからあゐくゝる水のしらなみ
 驚のゐるつゝみの柳吹くかたに身の毛もなひく春のかは風

山家柳

浅みとり山櫻戸によりかけてくる人やまつゐをやきのいと

初午

稻荷やま杉の青葉をかさしつゝかへり坂とやいそくもろ人
 里神樂杉の木の間いきこゆなりこゝも稻荷の宮居なるらん
 稻荷山きねかつゝみの音はかり霞みのこせるきさらきの空

若草

秋風のやとりなるへき草葉とも見えぬ雪間の荻のしたもえ

草色青々送馬蹄

うちなひく末のゝちはらふむ駒の跡にみとりに春風をふく

巖

岩ねふみかさなる山の下巖めにかけなから折りもとられす

歸るさに休む妻木の下わらひ思ひもかけす手をりてそこし

早蕨

ちりはかりもゆと見えしは紫の名におふ野邊のはるの早蕨
 ゆひそへて薪やおもき山ひとのいるさいつさにたをる早蕨

春月

立ちならふ花のこすゑは影はれて柳にかすむはるの夜の月
 あけやすきならひを春に恨みてもなほこりすまの驢月夜や

春月幽

秋よりも心つくしの影なれやはなの木の間にかすむ夜の月

山春月

雪なからかすみと見しは山の端の櫻にくもるはるの夜の月

浦春曙

霞たつ浦のめるみもしらむ夜に松かけくらき波のあけほの

都春曙

木の間もる月のみやてもかすむ夜のはなよりしらむ春の曙
おなしくは月をも見はや名にしおふ花の都の春のあけほの

霞中春雨

そことなく霞む夕も杳のおとにやかて雨しる庭のまさこち
くものいに露かゝりてそ霞む日のふるとはしるき軒の春雨

歸雁

咲く花をおのかこしちのめうつしに雪と見つゝや歸る雁金

歸雁幽

峯こゆる翅もはなの雲間よりほのかに見えてかへる雁かね

春駒

友さそふ聲は雲にもいるはかりかすむする野の雲雀毛の駒

野外雉子

狩人のいる野のきゝす草若みかくろへかねて音にやなく覽
若竹のつまやこもれる武藏野の霞かくれにきゝすなくなり

雲雀

みとりそふち原の若葉うちなひき雲雀たつ野に春風を吹く
おきそふる芝生の床の白露をうしとやそらに雲雀なくらん

蝶

花園のさかり知られて舞ふ蝶のつはさもかをる庭のはる風

花

年々になほ植ゑそへてやま櫻こゝもよしのゝ春となさはや

待花

花かつらこゝろにかけて今日幾日むなしき空をみねの白雲
谷川のなみの初花見てしより峯のこするにまたぬ日もなし

尋花

とふ蝶をしるへとなしてさく花の木蔭たつねん春の山ふみ
たつねいる花やま近きみよしのゝ岩のかけ道風かをるなり

櫻

つきてさく花はあれとも春はたゞ櫻にかさる色香なりけり

花未飽

花にあく時もありやとよしの山わけいるそてにはふ春風
けふいくなれてもあかぬ花衣いかにそめます心なるらん

朝花

おもひねの夢まさしくて見し花の朝いのとこにかざる春風

夕花

たつた山こすゑは春もくれなゐの入日や花の色をそへけん

月前花

あひにあひて月も盛りの吉野山花によころを重ねてそみる

月照花

咲く花のうつろふかたや曇るらん月も梢にありあけのころ

近花

たゞ一木みきりのはなになへてよの盛り羨む老をかひなき

山花盛

葛城のよそめはおなし白雲のかざるや花のさかりなるらん

山路花

岩かくれなほたつねはや吹く風の目に見ぬ花も匂ふ山路は

峯上花

雲と見しとはやま櫻さきそひてかさなる峯ににはふはる風

庭花

いやつきに咲きつくやとの庭櫻さかり久しき色香とや見ん

隣家花

中垣のこなたに花の枝たれてうゑぬ我が身そあるし顔なる

池邊花

池水のみきはの櫻咲きしより散らてもよするはなのさゝ波

水上花

吉野川きし根のさくらさきそひて匂ひの淵や花にせくらん

浦花

有明のつきはうしろの山さくらうら波かけて花そしらめる

羈旅花

ふるさとのこすゑいかにと旅衣袖にまちとる花のしたつゆ

花雲

山の端にめなれぬ雲や花ならん松をのこしてかゝる一むら
にははすは花ともいさやしら雲の梢をうつむみよしのゝ山

花浪

山川のそこひも見えすちる花にみなきりおつる瀬々の白浪

花やおそき

このはるは花やおそきと初わらひ妻木にそへてかへる山人
堅田侯の別荘にて花を見て

入日さすうす花さくらくれなるの紅葉にまさる庭の夕はえ

夕落花

かへるさの道吹きわけよ散る花のふまゝくをしき春の夕風

落花滿庭

さかりにはまたれし友も雪とふる花ゆゑいとふにはの通路

寄花神祇

かけそふるしらゆふ花もにはふらし名さへ櫻のみやの春風

野遊

打ちつれてつはなぬかまし老も今心をのへのうなる少女に
つはなぬきすみれつむとや糸遊の亂れてあそぶ野邊の諸人

尋桃花

仙人のすみかやそこと咲く桃の梢はるかにたつねてそいる

春田

ちる花をなはしろ水におく程はうき業としも見えぬ千町田
里遠みつみ残されしたひらこの花さく小田はいつかへす覽

春山田

山賤か種子まくほとや水こえて往來たえぬるあせのはそ道

田家春

此頃は門田のくわぬひろふとや袖つとひくる里のうなゐ子

躑躅

たかために白きもあまた植ゑませて砌の躑躅色をわくらん

山躑躅

歸るさはくれてもよしといはつゝしこりしく山の花の光に

欸冬

それなから手をりて見はや夕露に胡蝶もねたる山吹のはな

欸冬露

ゆくはるを花もしたふか山吹のえたたわむまてむすふ夕露

我妹子か折る手にかゝる露までもころもの色に匂ふ山ふき

堇

一夜ねし名残あかすもあさつゆにぬれて堇の床そまちかき

眞萩原ちりし草葉と見るまでに堇はなさく野邊のはるかせ

牡丹

草の名のはつかにみしも咲く花は白き赤きのませせはき迄

藤

行袖にはひまつはれる藤かつら誰れ引き過きんまつの下道

この程はまた初花の藤かつらさかりを夏にかけてこそ見め
咲きかゝる松は老木の名にも似す若むらさきの春のふち浪

藤花久盛

花のいろはおなし汀の杜若うつろふのちもにはふふちなみ

春風

なへて世の花さかぬまにふきはてよ櫻のこのめはるの山風
雲雀たつ芝生の若葉打ちなひきふくほとみゆる野邊の春風

春晝

幾たひか結ひかへても暮れかたき晝寝の夢に春をしらるゝ

春山

梅にとひ櫻になれて日數ふるわか身やはるの花のやまもり

春海

長閑しなひ潟を遠みある田鶴のつはさもかすむ和歌の浦浪
難波かた入江のあしのわか葉より末もみとりにかすむ海原

春鳥

子をおもふ心やおなし空たかくあかる雲雀も野邊の雉子も
雨かすむなはしろ小田の水口にみの毛しをれて立てる白鷺

春獸

埋火のあたりはなれてはしちかく日影のとかにねふる唐猫

春人事

種おろす賤やしるらん雨かすむ田中の道のこゝろはそさは

暮春

こしかたに春のかへらは東路の空にかすみの關やするまし

ちる花のかたみの雲もあらし山つれなき松に春をくれぬる

暮春雨

村雨のふるすにかへる鳥も今つはさしをれて春やしたはん
雨そゝく櫻か枝のうすみとりま近きなつのいろも見えけり

暮春藤

にはへなほ花のしなひの長き日もひと日二日のはるの藤波

暮春鐘

散る花にいとひし鐘のけふはまた春をもさそふゆふ暮の聲
別路に誰かうらむらん行春もけふはかりなるあかつきの鐘

(百四十八首)

○

夏

首夏

繁りそふ若葉涼しく吹く風も目にこそ見えね夏はきにけり

はしのとにさく紅の花にこそいつしか夏のいろは見えけれ

更衣

いつしかと今朝はかふらん夏衣もとよりうすきひとの心に

首夏更衣

夏きぬと心輕くもぬきかへて世のありさまを袖にみすらし

新樹

今もなほたつことやすき木蔭かは櫻のわかば風かをり來て

山新樹

みし春の花のしをりはそれなから茂る若葉にたとるやま道
夏やまのしけみか中の花なれや秋にさきたつ露のわくらは

谷新樹

初瀬山夏はわかばに吹きのはる谷風すゝし木々のしたかけ

卯花

しけりそふ木の下やみも卯の花の垣根は月の盛りをそ見る

山賤かすみかはかりに降る雪や世をうの花の垣根なるらん

葵

露なからかくる葵の玉すたれそれもみとりの色をそふらし
神山のあふひの二葉ふたかたに君と臣とのさかえをそ思ふ
葵艸二葉なからに千代かけてしけりそふへき色を見えける
松の尾のまつも二葉の葵艸そのかみやまのちきりをそ知る

時鳥

おもひねの夢より馴れて時鳥今もうつゝのあけほのゝこそ

待郭公

蚊の聲はいとふはかりになりにつけり山郭公まつとせしまに
一聲は花も紅葉もよそに聞く我かためもらせ山はとゝきす

尋郭公

はなにこそ枝折もせしか郭公たつぬるやまの道やまとはん
なとほとゝきす

きゝなれし山路にもなと郭公今年はいまたつれなかるらん

曉杜鵑

ほとゝきす八聲のとり初音よりさたかにそきく曉のそら
一聲の行くへも見えて有明のやまほとゝきす月になくなり

暮山郭公

なれも今雲間をいてゝ夕月のほのめく峯になくほとゝきす

郭公頻

ほとゝきす草かる賤かあなかまといはんはかりの此頃の聲

夢後杜鵑

きゝそめし夢まさしくてほとゝきすさむる枕になのる一聲

里時鳥

村雨にさそはれきぬる郭公おのがなく音もさとをわくらし

原時鳥

たつねきて山田かはらの郭公それかときけは杉のむらたち

關時鳥

時鳥たかためとてや名のるらんいまは名のみ朝倉のせき

名所時鳥

須磨のうらの波こゝもとに鳴きすてゝゆくか後のやま時鳥

雨中早苗

五月雨のふるの小山田みつこえてううる早苗もなみの下草

海邊早苗

村あしもほに出てぬへき湊田の秋をたのみにううるわか苗

五月五日

けふふきてあやめそわかぬ朝露の玉のうてなも賤か軒端も
あやめふく今日はよもきの人並にかやか軒端もかをる朝風

古池菖蒲

年ふりし汀のあやめ朝風に根さしもふかくにはふいけみつ

橘

吹く風にあやめの露もかつちりて匂ひ加はる軒のたちはな

橘薫枕

手まくらに見しは昔の夢なからうつゝに今も匂ふたちはな

栲

いつしかとそとの栲花ちりて五月雨はるゝ程も見えけり

五月雨

五月雨にてこなか軒端雲とちて月はいつみしまゝのつき橋

梅雨

花にみし梅の木の實の落ちそひてしつくも匂ふ五月雨の頃

山五月雨

月も日もひさしくなりぬ少女子か袖ふるやまの五月雨の露
日をふるもさのみいとはし月にうき姥捨山の五月雨のころ

橋五月雨

年ふりし朽木もなみになかれきて浮橋わたす五月雨のころ

湖五月雨

鏡やまむかふ心もかきくれぬにほてる海のさみたれのころ

五月雨晴

けふこそは水草拂はめ五月雨の晴れていくかのにはの池水
もりかはる月こそあかね五月雨のふるやの軒の朽ちし板間に
めつらしき雲間の日影待ちえてそ心もはるゝ五月雨のそら

泊水雞

波風のあらいを枕ゆめをたにむすはぬよはに水雞なくなり

海邊水雞

あま人のおとろかされて磯近く波かあかむの水のにはとり

夏月

はしゐして見れば暑さもなつ衣そてにまちとる月の涼しさ

山夏月

雷ひゝく峯の浮雲はれのきて名残すゝしきつきのしたかせ

夏草

あけ卷の牛ひく道もこのころは夏野のくさの蔭たかくして

花かつみ

夏深くしけりにけりな花かつみかつ見し草も埋むはかりに

鵜川

しつむへき我後瀬をもしらすしてこの夕闇に鵜舟さすらし

鵜舟多

山陰も月になるせとみるはかり鵜舟かすそふ波のかへり火

照射

ともしけつ峯のしつくや棹鹿のほかけによるの命なるらん

五月山空にしられぬ星なれや木の間あまたに照すともしは

峯照射

旅人の夜ふかくてゆる光かとみれば高根にともしさすかけ

橋螢

岩橋のたえまも見えて葛城の久米路の谷にほたるとふかけ

橋邊螢

しら玉のをたえの橋に飛ふほたるおのか光も風にみたれて

江螢

月影は入江のあしのうちなひき螢みたる、夜半のはまかせ

さよ風におのか光もみたれあしのつゆの玉江に螢とふなり

澤螢

淺澤の名にもならはて飛ふ螢おもひや深く身をこかすらん

水邊螢

うき草にすかる螢や川水のゆくへもしらぬおもひなるらん

瀧邊螢

飛ふ螢光りをそへてすゝしさは岩根にそゝく瀧のしらたま

窓螢

おく露も光りをそへて窓近き竹のよすからはたる飛ひかふ

草深みふみ見ぬ窓に飛ふはたるあたらしかりを誰にかすらん

田邊螢

秋近みかつしかわせの穂に出てゝはたるとひかふ夕闇の空

晩夏螢

涼しさは夏もすゑはと御祓河あさの立えにほたるとふかけ

夕顔

山かつのあれし垣根も青つゝらひまなくかゝる夕顔のはな

里蚊遣火

烟たつこの人里はとくくれて夜をなかしとや蚊遣たくらん

朝氷室

あさまたき都にいそく氷室守露のひるまをうしとなるへし

ひびろ山朝風さえて水無月もこほるはかりの眞木のした露

夕立雲

雲とちて照日もしはしかくらくのはつせ路遠くきはふ夕立

遠夕立

鳴神の音羽のみねは虹見えて關のこなたにすくるゆふたち

夕立過

みるか中に梢たかはら吹きしをり夕立過くる風のはけしさ

雲こりてたつもこなたに出つるかと思へはよそに鳴神の空

蟬

行きなやむ山路のこまに水かへは松風たかく蟬そなくなる

うへしてそ音をも鳴くらめ空蟬のは山の日影たへぬ暑さに

樹陰蟬

春秋もしらぬいのちや空蟬のはやまの露に音をつくすらん

閨中扇

いかなれは扇はかりにかよひ來てまたき涼しき閨の秋かせ

松下泉

岩かねに清きなかれはむすへとも心涼しきまつのしたかけ

納涼月

かの聲もよそになひきて涼しさははしむにふくる月の下風

納涼風

涼しさはあきといは根の苦むしろつとへる袖に松風そふく

舟納涼

一葉散るやなきの木陰舟とめてしはしまちとる水のゆふ風

樹陰納涼

花やいつあふちの木かけ露散りて村雨すくる風のすゝしさ
圓居してすゝみとらはや茂りそふこの下闇は月おそくとも

泉涓々而始流

見れはまつ心すゝしも苦清水むすふほとなき細きなかれも

夏天象

若葉もる月こそあらめおほそらの星の林もかけそすゝしさ
この頃は五月雨近き程見えてよなく月のくもりかちなる

夏夕

山陰に見せも聞せもすゝしきはやり水近き日くらしのこゑ

夏夜

手枕に軒はのあやめかをりきて夢路すゝしき宵のったゝね

夏野

はなちかふ牛もなつ野にあけ巻か笛の音近き草のなかみち

夏關

我もまた涼しくこゑんゆふたちの名残の雲の足からのせき

夏植物

夕顔のしろさかたへに紅のいり日てりそふなてしこのはな
うゑそへて誰かにしきをしきしまの大和撫子からあゐの花

夏動物

駒なつむ夏の山路にわれもまた水こひ鳥の音をやなかまし

夏鳥

時鳥鳴かて今宵もあけかたの月にからすのこゑのみをする

夏歌

拾ふへき木の實やいつと柴栗の花ちる峯にましらなくらん

夏衣

夏來ては朝夕つゆのたまなしてあつさにしほるせみの羽衣

夏糸

夏引の手ひきよりなほ長き日のよのいとなみや誰も苦しき

夏雜物

みしか夜の月に聲すむ笛竹は誰すすみとるすさひなるらん
あけ易きそら行く月のたか席ふしなから見る夜半の涼しさ

夏旅

立寄らん蔭もなつのゝ旅人はふゝきにこえし峯よりやうき
旅人のいのちなりけり水無月の照日もよそにならの下かけ

六月祓

御祓河あさの立えのうちなひき夕なみよする風はすゝしも

夏のはて

飛鳥川昨日の春もとくすきてけふそ御祓の瀬にかはりゆく
(百五首)

○

秋

初秋

秋來ぬと目にこそ見えね吹く風のまつ音たつるにはの萩原
吹きかへて今朝は身にしむ難波風葎のひとよに秋や來ぬ覽

湖初秋

秋來ぬとうらわの波もこゑそへて松かせたかき志賀の辛崎

早秋

おきあまる夕の露のしのすゝき秋の日數も穗に出てにけり

早涼

立ちなれしならの木蔭に吹き来るも昨日には似ぬ秋の初風

七夕

秋を経てくちぬ其の名の岩木山星のちきりの程や見すらん

乞巧奠

玉琴のしらへも今は引きたえてなにをたむけの星合のそら

二星適逢

織女のまれのあふ瀬や天の河なか／＼たえぬ契りなるらん

七夕雨

天の河みかさそひなは二星の身をしる雨も降りまさるらん

七夕霞

朝またき霞むと見るやねもやらてあかし、星の空めなる覽

七夕山

うこきなき龜の尾山の名にかけて萬代ちきればしあひの秋

七夕川

みなかみは神代の秋の天の河なかれて末のあふ瀬たえめや

七夕宿

雲霧のへたては今宵なくもかな星の宿りをそこと見るへく

七夕機

名にたて、棚機女のおる機やけふまつためのみゆしなる覽

深夜萩

みし夢のゆくへをとへは更くる夜の枕にちかき萩のうは風

秋かせのねさめの床はゆめもなし軒端の萩の何さそふらん

庭萩

むしのねも風になひきて折々にゆめおとろかす軒のした萩

野萩

秋はきの花野の錦たちかへりまた見ぬ人やさそひゆかまし

水邊萩

遣水のみ草をしけみ散りうくもしはしなかれぬ秋萩のはな

三牧のおもとより萩の花にそへてあゆのいへた
まへりければやかてその文字をかしらにおきて

あさもしきのふはつゆと見し花の枝に數そふにはの秋萩
ゆふ露の枝もとをへにおきそへて月のかけまつにはの秋萩
のへちかき家居ならてもしかの音のそふ心地する庭の秋萩
いつしかと花まちえてもことの葉の色なきつゆの庭の秋萩
をそきとき枝をましへて咲く花のさかりほとある庭の秋萩

女郎花

寄添は、浮名やたゝん女郎花尾花をよそに咲くのへもかな

尾花

秋來れはめなれぬ海と武藏野の尾花か末によするしらなみ
天の川近きかたのゝはつ尾花昨日のふ星やまたまねくらん

蒔萱

かち人のわけゆく袖に跡たえてつゆしとろなる野への蒔萱

露なから誰かるかやのつかねをも亂れそひぬる野への秋風

蘭

藤袴ひもとく野へは百くさの花もゆかりの香ににはふらし
花の香のよににはふとも藤袴草のまかきはたれか來てみん

草香

初尾花まねく袖にもそれとなき艸の香うつす野へのあき風

草花露

ぬれぬとも折りてかささんおく露の玉の横野にさける百草
僅

霧はれぬまかきを花のいのちとやさかり久しきつゆの朝顔
たそかれにほの見し花のをりすきて又めつらしき宿の朝顔

小鷹狩

うつらなく方やいつことかり衣ま袖に分くるすゝき高かや
狩ひとのそてや千草の摺衣うつら伏す野をたつねてそゆく

虫

夜を残す霧の籬に鳴くむしの明けてもしはし聲のひまなき

鈴虫

たか人のかへる末野にふり出てなくやをふさのすゝ虫の聲

蟋蟀

月うとき頃ともしらて艸のとにさせてふ虫の聲しきるらし

山鹿

山鳥のをのへたてゝすむ鹿は何のかひよと聲つくすらん

野鹿

秋の野のをしかや妻をおもひ艸をはなか下の露になくらん

駒迎

あふ坂の杉のしたみちこえきても猶かけ見えぬ霧はらの駒

あつま路をいつか立野の駒なへてみやこの秋に逢坂のせき

月

曇りなき月にちきりて老樂のさかえも千五百秋津すのくに

秋月

松かせにのき端のやまの雲はれて千年もすめる秋の夜の月
雪にみかき花にかすめる影もあれと秋を光と月はすむらし

十五夜月

この秋はことさらまさる光かとしくめつる望月のそら

八月十五夜

露時雨そめぬ葉月のかけなからもなかのそらを光ことなる
天の河てよひを秋のなかつせと月も一夜の名にやすむらん
みる人も今宵はさそな望月のくまなき空にこゝろすむらん

不知秋月

山まつの末てすほとや浮雲のはれてもしはしいさよひの月

十三夜月

秋深き程も知られてむかふよりひかり身にしむなか月空

虫の音はやゝうられし籬にも月と菊とのさかりをそ見る
いかばかり宇田野の露にみかゝれて御代長月の影はすむ覽

雲間月

秋風に雲のうき橋とたえしてよわたる月のかけそもれくる

深更月

更行けは夜よしとひし人もはやかへる砌の月そさやけき

山月

初瀬山みねのあらしに雲消えて檜原かおくの月そすみゆく
峯たかくいててもしはしをくらやま松の梢にさはる月かけ
花にうき嵐のやまは秋の夜の月のためにや名つけそめけん

都月

さやけさのいつくはあれと名にしおふ月の都の空高きかけ

古郷月

秋更けて人はよもきのつゆふかみ月をあかしの古郷のには

關月

てりまさるつきの光にはかられて鳥かねいそく逢坂のやま
きよみ瀉波まはるかに霧はれてはやくも明くる關の戸の月

名所月

所から月もあかしのせとかけて浦のみるめのさやかなる影

翫月

月よしれ夕のそらにみしかけの有明までもあかぬこゝろを

月夜待友

よゝしとて契らぬ人もとひやてんなほしきそへよ月のさ薙

月契秋

千々の秋契りおきてもすみぬらんすゑ久方の月のひかりは

砂上月

雲霧のなきさをきよみ月はれてはまの眞砂の数もよまゝし

海上月

和歌のうらや誰も言葉の玉つしまひろへと月の光そふらし

浦月

しほかせに霧晴れのきて明石潟月も浦わの名にやすむらん

野月

秋風に千草そにはふ月きよみひかりを花とちらす野はらは
萩すゝきわくる心のはてもなし月のさかりの武藏野のはら

杜月

霧しけきもりの下道行く袖に木の間の月のかけそあらそふ

松間月

軒ちかき木の間もりくる秋の月千代もすむへき松の下いは

月前露

月やとる露はみなからあはれとも玉とも見はや武藏野の原

月前草

今宵しもくもりなければおもひ草尾花か袖にやとる月かけ

月前松

みきといひよきとかたらん武隈のふた木の松をてらす月影

月前檜

祝子かかさしも月にいとふよを三輪の檜原の何しけるらん
あなしけに雲はれのきて巻もくの檜原か奥も月そさやけき

月前葛

よしさらはかたふく月もふきかへせ葛の葉しろき岡の秋風

月前雁

聲なくは雲とや見まし空たかく月にかゝれるかりの一つら

月前虫

さやけさにいさめる駒のくつわ蟲野中の月を誰かめつらん

月前蛭

くるゝより草のとほそに月影もさせてふ虫の音をやなく覽

月前獸

窓とちて見ぬ月かけやふけぬらん門もる犬の聲のさやけさ

寄月旅行

くるゝより袖の露とふ月なくはひとりやてえん小夜の中山
おく露のひるまを草のかりまくら月のよころをいそぐ驛路

月前旅宿

おなし野に今宵もねなん月をさへかたしくつゆの草のさ蒔

聞秋雁

ふるさこの秋をはいつか立田山よはに越えくる初雁のこゑ

峯初雁

霧こめてすかたは峯のをちちにこゑさたかなる天津初雁

田上雁

小山田のはなみかたよる秋風につはさ亂れて落つるかりかね

旅天雁

なれもまた友なき雁かつゆ時雨ふるさとしたふ夕くれの空

霧

夕日かけさすか尾花の末見えてうすきりなひくのへの秋風
河風に幾瀬の波のすゑはれてたえくのこる水のうきさきり

霧深

百草の花野も今日は見えわかすよるのにしきと霧深くして

川霧

大井川くたすいかたもほの見えて嵐にはるゝ水のうきさきり

水郷霧

山の名の朝日にはれて朝きりのむらゝのこる宇治の川面

里擣衣

遠妻をおもひやりてや秋風のよさむの星にこゝもうつらん
さらてしも老はねさめの里近くしつかさ衣打ちしきること

浦擣衣

ところからうつら衣のそて寒み波かけてうつまのゝ浦ひと

田家秋

かりのこす稻葉のくもや時雨きてもる袖寒き小田のかり庵

田家秋風

守捨てひかぬ鳴子もあきかせにたえす音するしつか小山田

田鳴

月やとる水田のおもに立鳴の羽おとさやけきあけ方のそら
みのうさをひとりかそふる曉に門田のしきの羽音さひしも
かり残す澤田の稻葉ほのみえて鴨立つ暮そいとさひしき

鶉

尾花ちる野風を寒みもろ鶉ひとりはねしと音をや鳴くらん
いつしかと秋も末野の程みえて夕日淋しくうつらなくなり

堅田疾麻布別莊稻荷社奉納

和歌の内菊

月うとき杉の木陰にさく菊の花のひかりやみつのともし火

離菊

句ひをはよそにちらすなしめゆひしまかきの菊の花の朝風
月うときまかきにはほふ星み草花はひかりを名にやてふ覽

谷菊

おちつもる花のしづくに谷水の末くむ袖もにほふしらさく

殘菊白

千代もなほのこれ砌の竹垣に霜をへたてゝにはふしらさく

黄葉

うなぬ子かちゝのみ拾ふ岡のへに染むる柞の色もめつらし

鶉紅葉

千代も猶變らぬ色とあかすみん松より馴れし鶉のもみちは

紅葉

秋は名に立田の紅葉みし春の花のけしきもいかておよはん
里わくる時雨とみしも此頃はなへて千入の四方のもみちは

咲く菊の白きかたへに紅のひと木そあかぬにはのもみちは

露染紅葉

霜おかは花にかへてのくれなゐもまた一入の露のもみちは
秋深きなさけしりてや白露の又くれなゐにそむるもみちは

夕紅葉

霧深きふもとの里はとくくれて入日はとある峯のもみちは

山紅葉

そめかねし枝も交りて山姫の袖のむらことみねのもみちは

杜紅葉

そめのこす色こそなけれどもみちはの露も時雨も杜の下かげ

岡紅葉

しもおそき岡への松の下紅葉ちらて常磐にならふよもかな
折り残すしつえもあらし歩人の往來の岡に染むるもみちは

里紅葉

秋もまたしらぬあるしのはれつゝ紅葉にわくる里の中道
時雨きて笠宿りせし里の名も染むる紅葉にけふこそはとへ

池邊紅葉

色ふかき岸根の紅葉うつろひて波もちしほの庭のいけみつ

紅葉映水

夕日さす岸のそかひのもみち葉は波さへ秋の色に出てけり

秋落葉

木からしの名もあらはれて月影の落葉に晴るゝもりの下道

秋雨

心あれや秋風さむみ降りくるも月にさはらぬ宵のむらさめ

秋水

朝顔のませかき近くせき入りていさこもるりの庭のいけ水

秋夢

秋の夜の夢そたのしき心からすまさらしなもみやき野の月

身の秋をしはしなくさむ夢もかななき夜すから結ふ枕に

秋朝

野邊みれは眞萩もいまた朝寐かみ薄かるかや露おもくして

秋夕

いつのまにおきそはりけん秋來ても日數程なき野への夕露
うきはたゝわか身ひとつと思ふまに袂つゆけき秋の夕くれ

秋野

百草の花のにしきはいつれそとさかの北のゝ露分けてみん

秋木

立ちならふ松の木のもの夕日影紅葉にかきる秋のいろかは

秋鳥

かりのこす賤か門田の稻すゝめむれはむ聲に秋そにきはふ
うつらなく野澤をちかみ立鳴のあはれやいつれ夕あかへき

秋神祇

岩清水月にひれふるいろくつの數も今宵そ見えてさやけき

秋眺望

あき風に尾花か末の霧はれてふしのねちかき武藏野のはら
あきかせになひく尾花か一筋の川水ひろきむさしのゝはら

暮秋

長月の日かすもいつかはつせ寺入相のかねに秋そくれゆく
折残す菊ももみちも明日よりや秋のかたみとみつゝ忍はん

暮秋雲

有明のつきもしくれてゆく秋の名残にかゝる峯のうきくも

暮秋霜

まねくへき尾花か袖もかつくちて夕霜さむき秋のわかれち

暮秋鳥

花ははや移ろふませにとひてなく菊いたゝきも秋をしむ聲
下紅葉かつちる枝にてりうその鳴くね淋しき秋のくれかた

秋のはて

秋深み虫のなくねもうらかれてやゝかけ寒きあさちふの月

(百五十一首)

○

冬

初冬

高砂の時雨はよそにはれすきて松風さむくふゆは來にけり

時雨過

山風にきはふとみしもとくすきて名のみしくれの里の浮雲

岡時雨

浮雲ははれてもしはし木の下にしくるゝ露の岡のへのさと

川時雨

わたしもりはや舟いたせ隅田川後れし雲のしくれこぬまに

里時雨

歩人の笠もとりあへす降りすきてとはちの里や今しくる覽

夢さめて名のみふしみの里なれや山風あらく時雨ふる夜は

落葉深

駒なつむみちの山風吹きわけて蹄も見えすつもるもみちは

河上落葉

ちりはてしのちも心をつくしてやまた染河の波のもみちは

翫殘菊

おくしにもに離の菊の色そひてふたゝひ花のさかりをそみる

殘菊帶霜

紫にうつろふさくも今朝みればみな白妙のしものきせわた

野外霜

有明の月もそなたにかけ見えておく霜白き野邊のあけほの

竹霜

朝なゝ緑もしもの白妙においやまなひのまとのくれたけ

橋霜

おきわたす木曾路のしもの朝はらけさなからはるの花の梯

殘雁

旅のそら日數も雪もふるさとのみのしろ衣かりやきぬらん

寒松

いつはあれといつ葉の松の風さえて霜のはなさく冬枯の庭

庭寒艸

さらにまた秋みし色をおもひ草霜のまかきに残るひとはな
とちられし窓のむくらの霜枯にあさちか庭の廣さをそしる

寒蘆

よるなみも氷にとちて難波瀉あしのかれはにのこる浦かせ
なひきもの緑はなほも深き江に獨りかれたつ風のむらあし
水郷寒蘆

冬來ては浦風さむし難波江のあしのほわたも霜にまかひて

氷

垣根ゆく水のなかれも氷りゐておとつれたえしふゆの山里

氷初結

朝手洗ふたよりに見ればひもかゝみ結ひそめぬる庭の池水

池氷

松高き砌の池のひもかゝみ千とせのかけもうつしてそみん
をし鴨のなくねはかりをのこしおきて玉もの床も氷る池水
日かけさすかたへは解けて中島の松より北にこはる池みつ

池水始氷

浮草の朽葉も底にかつみえてたえ／＼こはる庭のいけみつ

寒月

波にはれ雪にみかきて大井河あらしのやまの月そさむけき
まさこ地はいかにさゆらんかた敷の袖にも氷る冬のよの月
ふけぬるか影ふむ道におく霜のくたくる音も月にさむけき

衾

厚ふすまひき重ねても下さゆる老やうきねの限りなるらん

磯千鳥

とも千鳥とはぬうらみのおは磯や小磯のなみに翅しをれて

水鳥

山河のこぼりの淵を立ちわかれ淺瀬にさわく水とりのこそ

鴨のゐるみきはの蘆は霜枯れておのか羽音そひとり寒けき

ふくる夜にうきねの床や氷るらんくかにまとへる水鳥の聲

筈

風寒み時雨やこぼるおく山の槇の葉つたひみそれ降るなり

雪

うなゐ子かまろはす雪を老人の埋火なからみるもさむけし

初雪

かつらきの雲のよそにも降りそめて今朝珍らしき峯の白雪

庭雪

とひこぬも人のなさけそこの夕雪にあとなき庭のかよひ路

山雪

雪にこそ見るへかりけれ吉野山花にはもるゝ松もありしを

山家雪

山ふかみ雪にとちたる柴の戸の春よりほかに誰かあくへき

杜雪

枝しけみふりつむ雪の白妙にときはの森の名をやかふらん

ねくらとふ翅もしろし夕からす野中のもりの雪のよそめは

海邊雪

波の上は跡なくきえてその名のみつもりの浦にふれる白雪

暮村雪

やとりとるゆつはの村も白妙の少女かそてや雪にきゆらん

松雪積

つもりそふ梢は花のおもかけをさなから見する雪の松かえ

雪作松樹花

むつの花五葉の松に咲初めて千代をとかへりの色や見す覽

竹間雪

たゝひとへさえたの霜とふりそめて靡くもあかぬ雪の村竹

杉雪

深みとりうつもればてゝ白雪のけふもひまなくふるの神杉

古寺雪

埋れぬかねのひゝきの高野山あらしはたえし雪のあけかた

神社雪

神葉の色もさむけしこときまで白ゆふかくる雪のあけはの

名所雪

月にこそなくさまさらめなへてふる姥捨山の雪のあけほの

雪中待春

つもりこし年のさむさに春をのみ心にまつ雪のしたいは

雪中鷹狩

袖に散るけはなも雪にこきませて狩場の小野は眞白ふの鷹

野行幸

宮人のそてふりはへてかり衣きた野の御幸めつらしと見ん
何事も古きにかへる君か代は野邊のきゝすの御幸をやまつ

爐火

かきおこす下の光のふたつみつ夜ふかさねやにのこる埋火

神樂

みやひとの神葉うたふ聲ふけて霜のしらゆふ袖にかくらし

早梅

春のくる道のしをりと白雪のふるとしなからにはふ梅かえ
なへてさく野山の春の花よりも年のこなたにはふ梅か枝

冬天象

山風の雪をもよほす色見えてきはめる雲をみねにかゝれる

冬雲

もみち葉をさそふ時雨のあとにまた入日そめなす峯の浮雲

冬海

さむけしな鹽風あれてけふもまた雪氣もよほすおきつ舟道

冬旅

袖さえて越えうきたひのあさ衣きそ路の雪は花とみるにも

冬夜夢

風さむみねられぬ夜半は夏よりもいとみしかき手枕の夢

冬獸

埋火のあたりにねふる唐猫は花さくはるやゆめに見るらん
さひしさはましらかせきの跡はかり雪にのこれる冬の山里

夕歳暮

新玉の春まつ身にも行くとしの名残はをしき夕くれのそら

歳暮松

いとはやもおいせぬ門に松たてゝ春まつ宿の暮そにきはふ

歳暮梅るの字を頭におきて

ろう近き梅の立えの春またてにほふもうれし年のこなたに

老後歳暮

花鳥の色音まつ身はくはゝれるおいの數をもしひて歎かし
ゆく年の名残もあれど老か身はたへぬ寒さに春をこそ待て
としはくれにき

櫛の火の光はかりを頼みにてまたいたつらに年はくれにき

(七十二首)

○

戀

忍戀

うきも身のよそにもらさし涙河抑ふる袖はよし朽ちぬとも

もらさしと思ひしのふのすり衣袖のみたれも誰かしるへき

忍涙戀

わか袖のしのふ文字すり亂れなはいかにつゝまん露も涙も

見戀

海士のかるみるめ計りを契りにてあふこと波に袖やくたさん
小車のわりなくしたふ下すたれ隙もる影のはのかなりしも

通書戀

玉章の通ふ契りはありなからうき答へのみ見るもわりなし

依戀祈身

つれなさも限りやあるとひきかへて憂身を祈る森のしめ繩

契戀

いつはりのあるよも知らて變らしとわか誠より契る言の葉

不逢戀

とひよりし甲斐こそなけれ空蟬のもぬけの衣薄さちきりは

過不逢戀

とけそめし妹か下紐今はまた何のむくいにむすほゝるらん
さねかつらさねし夢路にひきかへて今さらたとる相坂の山

待戀

まろねして七ふさひしき菅薙今宵もまたやみふにあかさん

初逢戀

なかれての末をそたのむうきなからあひそめ川の波の枕に
思ひねの夢になれこし中も今うつゝとなれははつる言の葉

夢中逢戀

よひゝの夢のうき橋なかりせは何に命をかけてたのまん

別戀

手枕にはつかしと見し月影をいまはかたみのきぬゝの空

歸戀

鳥かねにしらぬあるしのこゝろまでうらみてかへる曉の空

見夢増戀

なかゝれと契りしゆめの鳥かねにさめてみたるゝ床の黒髪

後朝戀

けさはなほ夜半の枕にかきやりしその黒髪の亂れてそ思ふ

稀戀

ともすれはもとのつらさにかへり花稀なる色を何頼みけん

久戀

幾度か袖もなみたに朽ちはてゝたてしかひなきかとの錦木

片思

よし今は憎しともいへそれをたに思ふかひある言のはにせん
言の葉の答へなきたに今ははや世にちらさすは情と思はん

片戀

うこきなきひこの心は石河のかた淵にのみこひわたれとや

思

人はなとあさせなるらん思ひ川思ひせく身の袖をみるにも
あふよしも涙のつゆに袖ぬれて尾花かもとの草の名そうき

被忘戀

ゆゝしとてひろはぬ中の忘貝いつしかそてによする浦なみ
わすれ草わか心にはおひすして頼むかたのになと茂るらん

忍絶戀

忍ひてし庭の通路あとたえぬあさちかつゆは袖にのこりて

春戀

青柳の靡くとみしをいかにしてもとのつらさにかへる雁金
さやかにもやかて扇の三重かさね霞める月を契りにはして
わりなしや花の下ひも解なからかすみの袖に面かくしして

夏戀

逢ふこともいまはなつ野の眞葛原下にや秋の風かよふらん

秋戀

うき中はまたき時雨の降初めてひとり焦るゝ袖のもみちは

秋顯戀

つゝみこし袖の千しほもあらはれぬ人の心のあきの時雨に

冬戀

手すさひにとふ灰うらもむなしくて涙にきゆるねやの埋火

冬逢戀

床のしも袖の氷もなかりけり妹かこゝろのとくるこよひは
つゝみても新手枕のあらはれてねのこの數を人やとひけん

寄七夕久戀

棚機のためぬ契もあるものをつれなくてのみ秋を經にける

寄秋風戀

ふきかはる人のこゝろに言の葉の頼もいまはなかの秋かせ

寄雪戀

跡つけは人もこそしれかへるさの道ふりかくせ今朝の白雪

寄杜戀

終にわか浮名やよそにもりの露包まん袖のくちもはてなは

寄關戀

うきかたにたか關するて心さへかよはぬ中と今はなりけん

寄水戀

よそにまた通ふ行方も知りなから頼む笥のみつからそうき

寄河戀

深くのみ思ひそわたる飛鳥川うきも嬉しき瀬にかはる世を

寄海戀

あふことの涙にしつむ床の海は枕なかれてみるゆめもなし

寄葵戀

小車のめくりあふひを頼みても人の挿頭とみるそかひなき
諸葉草もろ心にはかけすしてわれにうつきの袖のあさつゆ

寄竹戀

笹竹の一よ二たよのへたてをも葉におく露の亂れてを思ふ
わりなしや靡くとみるもなよ竹のさすかをりうき人の心は

寄松戀

あふことはなほかた岸の松よりもうき年波に袖そしをるゝ

寄鳥戀

いかにしてあひ染川の島津鳥うかりし瀬々もありと語らん

寄鏡戀

ひとりのみ見るや契りの朝かたみ共にむひし折もありしを

寄棹戀

杣川やいかたの棹のさしはなれおもふ心のかよふ瀬もかな

(五十四首)

○ 雜

星

とふはたる雲井にきえし光かとやゝ見えそむる夕つゝの影
宮人の雲井にうたふこゑよりも空にさむけきあか星のかけ

夕風

まささちるみやまはさそな都にもゆふへ淋しき松風のこゑ

薄暮烟

宿ことにたつるけふりの色よりや早くもくるゝ山本のさと
里とはくたつる烟のひとすちはなかゝ淋しゆふくれの空

曉

まちわふるおいそ悲しき鐘の聲鳥の鳴音もよそなりし身に

關

秋はまた霧やへたてん東路のかすみかせきの茂きゆきゝも

朝またさいさめる駒の鈴鹿山しるへにたとる關のしたみち

水

春秋とかはるうき瀬もかはらぬや水草清きなかれなるらん
山水のはそきなかれやなか／＼に人の心もすみまざるらん

水石契久

春來ぬといは井の水とけそめてくむ手に契る千代のわか水

名所瀧

松風もひとつにおちて峯たかくひ／＼音羽のたきつ岩なみ

名所河

をり／＼にかきなかしても芥川つもる心のみつからそうき

名所橋

よ／＼ふともなほ朽ちせしな橋柱昔なからにのこるその名は

名所湊

松風に波ふきたちてうきねするよさの湊はゆめもむすはす

海路

かち枕なみの千里のいかにそとおもふ心も八重のはまかせ

海村

浦ちかき松のひまより立つ烟みゆるや海士の家居なるらん

浦波

是れもまた千代の數とやあし田鶴の翅にかゝる和歌の浦波

閑居

世をそむく心ならねとすなはなる竹の庵はうきふしもなし
やり水もはらふ人なみ埋れて音かすかなるむくら生のやと

門

すゑつひに車いるへき松の門木高く千代のいろも見えけり

古寺鐘

しきみつむ曉おきはかねのねもまたほのくらきみねの古寺

水戸宰相きみ紀治卿の御國へいらせたまふ御

はなむけに松にぬさ袋をつけて奉りける歌

千代経へき君かかへさを諸人の今やとさそなまつの言の葉

旅朝

朝けふり木のまにみえて旅人のおきゆく里につゝくまつ原

旅館雨

ふるさとをしのふの露も落ちそひぬ窓うつ雨の夜半の枕に

旅宿夢

草枕むすひかへてもかはらぬや都にかよふゆめ路なるらん

旅泊波

松かせに浦波たかくこゆるきのいはかね枕ゆめもむすはす

見る夢は都にちかの名のみして浦わの波にぬるよはもなし

みやこへのほる道にて

をさな子の門にいてつゝなく聲をきくはかりなる夕悲しも

戸塚といふところにて かくし匿

草まくらひとつかりねにみるゆめも心々のつきはなのかけ

大磯

松風に沖つしらなみ吹きよせてとはてもしるき大磯のさと

箱根

松の火も木の間に見えて箱根山あけゆく峯そなほ遙かなる

沼津

あやめふくぬまつの里は旅人のそてさへかをる露のあさ風

原の宿といふ事を折句に

はるゝとらに匂ひきてのる駒の鈴虫きはふ草のなかみち

うきしまか原にて

言の葉の及はぬ身には目に見ぬも中々よしや雪のふしのね

はた寒みさこそは我をしたふらめそひねせし子の宵々の床

藤枝

見し春のゆかりの色をいまもなほ青葉にのこす藤枝のさと

小夜の中山にて

鳥かねにおきゆく末も霧こめてなほ明けやらぬ小夜の中山
碓氷にて

もみちはの碓氷のみ坂こえしより猶深からん山路をぞ思ふ

山家風

吹きたゆむ程こそあらめなれぬれは今は夢をもみねの松風

山家友

妻木こるたよりに人のおとつれて友うとからぬまつの下庵
のかれてし峯の松かせ猿の聲うきものなから友とこそきけ

苔

山かつの往來やしけきむす苔のみとり少きいはのかけみち

苔露

柴人のかよふはかりの岩かねは露さへふかき苔のほそみち

濱ゆふ

移植ゑて千代を重ねん濱ゆふのためしもこゝにみくまの、浦

窓竹

月のためうゑぬ窓にも吳竹のよそのはひねの生ひ茂るかけ

戶外松風

とひすて、人はかへりし柴の戸に残るゆふへの松風のこゑ
夏ふかき山櫻戸はまつの風ふくともよしやちるはなもなし

浦松

浦かせのこすゑふきこす音までも神さひにけり住吉のまつ

名所松

深みとりかのこまたらの雪ならて時しらぬ色をみはの松原
田鶴のゐる干潟やいつこ白波のこすゑにかゝるわかか浦松

山榊

ますかゝみ神代をかけて榊葉のかけさかえゆく天のかく山
神路山さかゆくほとや宮人のとるさかき葉の色に見ゆらん

鶴馴砌

年月をこゝにかさねてひなをさへあまたみきりの鶴の毛衣

渡舟

いまままた舟をそりてや都鳥すみた河原のむかしこふらん

眺望

さはるへき草の葉山もなかりけり縁につゝく武藏野のはら
入日さす浦の筈やにはす網のめならふ里そやかてくれゆく

望遠帆

船まもる神のこゝろやいさむらん真帆にふきこす沖つ鹽風

仁正寺侯別荘にて樂山樓と名つけたまへるは富士

筑波にむかひて土さへさけてといへる照日も知ら

すかほなるに又池水近う風の涼しく吹きのはりけ

れは

水滄月の暑さもけふはつくは山ふしの高根の雪にけられて

涼しさに池のねぬなはくるゝ日も知らて寄添ふ水のおはしま

臺臨亭趾 占風園十七勝之中

玉椿君のおましのあとゝめて常磐かきはになはあふくらし

枕岸棣棠

岸たかみ下行くみつにかけ見えて波をまくらの山吹のはな

秋田新緑

うゑわたす田面の末に見る山もひとつ緑につゝくわかなへ

苔甃迸水

涼しさは岩井の清水むすひあけて苔道にそゝく夕くれの庭

梅窓殘月

咲く梅の花をすかたの窓のうちに月の光もありあけのかけ

富士秋雪

紅葉をよそに入日のくれなるも雪にはえたるふしの芝やま

筑波晨光

この宿のひかりになして筑波山峯の朝日をのきはにそ見る

むつき 六帖題十二月

よそにきく老も心ののときは若菜小松のあそひなりけり

きさらぎ

雁金の行方やいつこつはくらめ軒のふるすにきさらぎの空

やよひ

彌生山櫻はちりてうすみとり夏にさきたついろそすしき

うつき

これもまたうつきのかすに數へはやかの聲細きねやの手枕

さつき

さつき山峯も麓もをりを得てともし鶺鴒河に夜をあかすらし

みなつき

なへてよのたへぬ暑さにふしのねの雪さへ今はみな月のそら

ふみつき

○

はつき

露時雨そめぬ葉月のうすもみち後の葉月やてりまさるらん

後のはつき

○

なかつき

いく度かねさめし後の鳥かねによを長月のはとそ知らるゝ

神無月

うつろはぬ菊もありけり神無月もみちの外に秋をのこして

霜月

霜しろき加茂のかはらの月更けてかへるさ寒き山あゐの袖

しはす

かきくらし空もすゝけてふる雪にはらひかねたる賤か家々

述懐

定めなき身のいにしへを思ふにもなほたのまれぬ行末の空

獨述懷

何事もわかさきの世の報いそと思へはいはん言のはもなし
身にあまる惠ある世はよむ文の少きのみやなけきなるらん

旅述懷

こゑきけはまつ故郷そしのはしき兒なき里を旅路ともかな

藤丸といふ刀にそへてよめる

岡のへのまつの梢に千代かけてさく藤丸のたちさかえなん

鳩丸といふ刀にそへてよめる

八幡山ゐるはとまるのたちさらて千代よひかはす峯の松風

やことなきおほんかたよりたまはせたりとてあら

し山のさくら高尾山のかへての木もてつくれるた

にさくはさみといふものにやかてそのところの花

もみちをまき繪にしたるを田安のみたちにつかへ

たまふ三牧のおもとえさせたまひたりければまて

とにわか家の實として末の世にもつたへはへるへ

さものそとおもふにいともしかしこくて

龜の尾もなかきあらしの山さくら高尾のもみち萬代に見ん

懷舊 或人追善

うゑおきし千種の花もつゆそふやはや七とせの秋の名殘に

夏懷舊 同上

橘の木陰やさそなよそにさへ消えしよしのふ袖のゆふつゆ

堀田攝津守正敦朝臣の室清光院君の三回忌によみお

きたまへりしうたをかみにおきて郭公

かりの世のゆめさませとや郭公夜深く鳴きて西へゆくらん

菖蒲 同上

るりの池にひかはさそなとあやめ草思ひやるにも薫る朝風

おなし君の七回忌に草花

いとはやもうつりにけりな七とせの秋はゆめの、月草の花
こと草のさかりを見ても女郎花かれしよ慕ふ野邊の夕つゆ

故郷露 或人追善

色まさる小萩か花に消えしよを誰もしのふの露のふるさと

秋水 同上

月もいまみしよの秋や忍ふらんなきかけうかふ庭のまし水
堀田若狭守正富朝臣の二十三回忌に正敦朝臣のすゝ
めたまふによりて庭霜を

たらちをの敷もかくや残りけん霜にあとある庭のまさこ地
寒夜懷舊 或人追善

寄雪懷舊 或人五十回忌

五十とせのあととふ庭にちる雪や御法の花の色をそふらん

水戸武公紀治卿の御三回忌に

寄夢懷舊を

うつゝとは誰かみとせの花の顔月のまごゐも夢のまにして
手枕にありしおも影立ちそひて残るや夢のうつゝなるらん
清光院君のよみおきたまへりし歌ともを

かきあつめたまへりける末に

ちりしよや更にしたはん言のはの花ももみちも残る木陰に
月やとる草葉のつゆのきえしより清き光やかたみなるらん

稻山行教の十三回忌によめる

小くるまのうしや別れし年の名に又めぐりあふ水無月の空
ふる文の棟にみてるいさをしも君ならすして誰かなすへき

夢

小夜枕花ももみちも一時に見するやゆめのなさけなるらん

故郷夢

これもまたむくらやとちて行きやらぬ夢路露けき秋の故郷

深夜夢覺

おいらくの程もしられてふくる夜に幾度さむるゆめの手枕
神祇

すへらきの御代長月のしるしとやたえぬ内外の神のみてくら

社頭鳩

稻葉山杉の木の間になくはとのおりをる枝もみつの神かき

岸本某か下野國にすめるころ消息

つかはしけるおくに

いつしかと民の草葉も打ち靡き君かめくみの露やまつらん

ある人の賀に

玉椿うめにさくらにをりをへて君や八千代の春もかささん

見花延齡 或人八十賀

みつゝへん末や千とせの山さくら八十をおいの初花にして

祝言

松たてる砌を廣みゐる田鶴の雛もあまたに千代よはふこゑ

寄松祝言

千代の波かけてをちされ十返りの花みん後もわかのうら松

冬祝

霜の中にいろそふ松のくらゐやま榮行末は千代もかはらし
冬きては大路も狭しみつきもの運ふよほろのしけき往來に
霜柱あまたの殿をつくるへきしるしにたてる冬のにほかも

寄星祝

くもりなき君か千年もなゝめくり七つの星に契りおかはや
大空にくもらぬほしの光より君かみかけやよゝにあふかん
寄山祝 増上寺大僧正七十賀

はかりなき命たもたんちりひちの浮世をよそにすみの山人

寄道祝

年々に茂りそひつゝ言のはのたゝしき道そ代々にさかえん

そのまゝに神代のすかた傳へこし大和言葉の道そたゝしき
月星の國のをしへもつたへ來てわか日本にしきしまのみち

寄都祝

おほ君の恵を四方にしきしまの都の手ふり千代もかはらし

寄國祝

春の來るあつまのえそかみつきもの年に數そふ秋つすの國

寄竹祝

窓にめてしりへにうゑてこの君の齡かそふるやとは幾千代

寄松祝

契りおく末や幾千代いく本の松にともなふおいのよはひは
十返りの花も今年やさきくさのみつ葉よつはの軒の松かえ

寄鶴祝 或人七十賀

七十はまたひなつるの末遠き千代のよはひやなほ契るらん

寄鏡祝

朝な／＼向ふ鏡のうらにすむ田鶴のよはひや君たもつらん

寄神祝

代々かけてわか浦人あふくらしひろふ言葉の玉津島ひめ
深みとりかはらぬ色に幾とせかたのむ北野の松のことのは

(百二十一首)

△水母文集（檢校の文集）

雲州侯筆塚の記

硯の命は、世を以てかぞへ、墨の壽は、月を以てかぞふとかや。ひさしきはめてたけれど、そのいさをし多きものは、筆にこそありけれ。花のものとかなさけ、月のまへのおもひ、これならではのぶることあたはじかし。こゝに八雲たつ出雲國、知らせたまひし松江の前の君、民をやしなひ、國を治めたまひしことはいふべくもあらず。すべて、萬の道にすぐれさせたまひ、とりわきて、ものかくわざをこのませたまひて、若くおはしませしときは、ことさへく唐さまに、御心よせたまひしが、後には京極黃門の筆の跡をまなばせたまふ。やがてそのさかひに至らせたまひぬれば、たかきもいやしきも、これをたふとみもてあそび、一くだりをも得たらんものは、ひめおきて家の寶に傳ふるとて、近き遠きをも争ひもめしほどに、その用ひさせたまへる水くき、十の瓶にもあまれりとぞ。ざるをこの五月の比、失せさせたまへれば、今の殿の孝の御心深くおはしますあまり、これが空しくすたれんことを惜しませたまひ、智永禪師のむかしに習ひ、御墓の側にこれを埋め、筆塚と名つけて石ぶみをたてさせたまふな

り。そのよししるしてよときこえさせたまふに、おのれも赤坂の御館にたび／＼まうのぼりて、厚き御惠みをかうふりしかば、文政といふはじめのとし神無月はじめの亥の日、檢校保己一これをまうす。

ふるき世のためしを今もみつくきの瓶にあまりしいしふみぞこれ
ひと筆のあとはまつ江のきみか名にちとせの後もなほのこらまし

上總國濱子山建曆寺の記

秦皇の阿房宮、一炬の後終に跡たえ、魏武の銅雀臺、稀にたゞ瓦を存す。昔七堂の淨刹なりしも、天文の兵火にあうて、いまは一個の小院となる。ざるは上總國周准郡濱子村濱子山、そのかみ北條家の崇信にて、執奏せられければ、勅して年號を給はりて寺號とす。今において建曆寺と稱す。これ寺號の由緒にして、草創はいと古し。行基菩薩の開基にて、中頃より眞言密教を傳へ、傳灯ともし火をかくけ、法流ながれをつたふ。むかし清和天皇第三の皇子、貞元親王故ありてこの國に下りたまひ、薨逝します。多田滿仲惠心院の源信僧都に仰せて、親王の御菩提のためこの寺を造立せらる。こ

れを中興とす。僧都六尺有餘の等身の像を彫みて本尊としたまふ。寺を釋迦院といふはこのよしなり。又三尊彌陀の本像、五條の袈裟をこの寺に傳へて重寶とし、木像は今千體堂の本尊とす。天正年中東照宮の御朱印にて十五石の地をたまはり、傳灯再びかゝやき、法流さらにながし、境内に蓮池あり。此あたり親王の宮殿の跡なりといふ。又山門のゆふ銅像の地藏等、石上に跌坐しおはします、誰人の作といふことは知らされとも、忍辱の尊容鑄功きはめてめでたし。又貞元親王の肖像あり、錦のとり、こかねの厨子、穆々乎としておはします。この親王の御墓は、寺をさること十餘町北にあり。古き松五本六もと、緑のいる雲を凌ぐ、此所を貞元村といふ。このみはかのほとりを馬上にてすぐるものあれば必ず落つ。これ千載の後のふしぎなり。この村に親王に扈從して下りたまへる人々の子孫あり。又その地の字、むかしの官名をよぶ。雅樂といひ、掃部といふたぐひなり。又毎年六月晦日、當寺にひとつの法會ありて、親王の冥福に廻向す。その夜老若をいはず、男女を論せず、手をあげ足をふみてをどりつゝ念佛す。これ惠信僧都この國に下りたまひし時、かつは親王の菩提をかさり、かつは凡夫の出離のためなりとて、この事をはじめ行ひたまひしか、今關東諸國に

ひろまりぬれど、尙寺をもてをどり念佛の最初とす。今をもどり念佛の具とて、廿五菩薩のおもて三つ残れり。又千體佛をも安置す、惠信僧都の御作なり。これは僧都末世の衆生、過現未三世の罪を消せんがため、三千佛をきざみたまひて、三處に安置したまふ。一つは伊勢國安藝郡白子の里終南山悟真寺、一つは近江國志賀郡堅田里海門山満月寺、今一つは當寺なり。一千の佛像、今百餘體存せしを、近比補ひて又千佛とす。今按するに貞元親王の事蹟典籍に所見なしといへども、里民の口碑廢しかたきところあり。當山の由緒院主鏝慶師の物語に従ひて、慙に筆記する事しかなり。

年 月 日

保己一

三貨圖彙序

天地の間になりいづるもの、數知らず多かるなかに、水火木金土の五つを何事にもあがいふめるは、これぞ、人の世にもちふることの大なるものなればなるべし。土はもとより天とむかへいひて、天のおほふかぎり、地の載するところなれば、いふも更なり。水よ火よ、これまたいづれのところになからん。木は土より生れて、おほい

にしては宮殿をつくり、うつはものともなして用ふれども、年を経てはやぶれそ
 なひ、やけもしくちもすべし。さればその生ひいづるもまた多し。たゞ金はしたがひ
 あらたまるをもてさかとして、かたちはさまゞにかはれども、年月を経ていまに
 消えうすることなし。されば、その出づるもまた多からず。人のとり用ふるところも
 重しとす。神代よりも鏡劍などを神寶とは定めさせたまひける。人の代となりて
 も和銅と年の號とせさせたまひ、陸奥山にこがね花さくところてはせ給ひて、みて
 くらをさゞげ、神にも告げさせたまひけん。それよりこのかた金銀銅をもて錢を鑄
 させ、民の用ふるにたよりあらしめたまひ、それを寶として別のものを賣り買ふこ
 とゝはなりぬ。その時、そのところによりて、もどむる事のゆるき、せはしき、多き少き
 に従ひ、さまゞに別るめれば、この三つの寶もその宜しきにつき、公よりおきてた
 まひて造りあらため、さゝはりとゝこほることなからしめたまふ。これ金はもとよ
 り従ひあらたまるさかのあればなり。こゝに難波なる草間直方としごろこの三つ
 の貨の昔より今に至るまで造り改められしそのかたをうつし、その時代のしかあ
 りしゆゑよし、ものゝあたひのたかきひき、うつりかはれるさまゝてくはしく考

へあはせ、三貨圖彙と名つけて、三そちあまり五卷の書をあらはせり。古きを温ね新
 しきを知りて、その時、その所の心得、民の賣買の道に便りあらせんとて、おきてたま
 へるひろき御恵みの天地と共にきはまりなきを仰ぎ、三つのたからをおろそかに
 せず、かしこみ奉るべきを思へるなり。この頃遠くよせきて、ところゝあやまりあ
 らんをばたゝし、且つこれがはじめにことくはへよと乞はるゝに、その志のあざか
 らぬをめてゝ、えいなびあへず、つたなき言の葉をそふるになん。

檢校 保己一

三緑山誌の序

むかしより、竹しばとかよふなるわたりに、三緑山とて四つの海のはてまできこゆ
 る御寺は、年の名を應永といひしころに、はじめて傳へられしか、ふたもゝとせばか
 りを歴て、かけまくもかしこきふたらの山にしづまりますみ神の御代をさめたま
 ひし時、とりわきたる仰事ありて、いともたふとき御寺になんありける。しかはあれ
 ど、ことのよしはしくかきしるせるふみなきを、年頃あかぬことに思ひ侍りしに、

こたび攝門法師この山の誌十卷をあらはして、おのれに端書せよと乞はる。近き頃名たゝる寺々の事どもかける書、何くれときこゆれど、あるは御佛のたふとき事のみを解きて、その寺のゆゑよしをば、さたかにいはず、あるはゆゑよしをば解きたれど、うけられぬ事も多かるに、今この法師のものせられつるは、御寺に預るかぎりの事は、かりそめのすぢまでも残るところなくしるされたり。されどおはやけさまのことは、はゞかりてべちに十卷の書ありといへり。かゝれば御寺のたふとさも水莖のあとに流れて、後の世までも傳はりはべらん。これしかしながら御佛のみ心にもかなふべきわざにこそ、おのれも年頃あかす思ひしことたらひて、法師のいたつきをめてよろこべるあまり、つたなき言の葉をくはふるになん。

もしは草かきあつめてぞ四つの海に

三つのみどりの名はのこりける

檢校 保己一

涵徳亭の記

常陸の海、波しづかに、筑波の峯、風をさまれるよは、萬の道昔にかへりていとめてたくなん。彼國しろしめす宰相中將の君の御園に涵徳亭。ときこえさするは、嵯峨の大井のわたりのけしきをうつさせたまへるなれば、山のたゝすまひ、水のながれも、よの常ならず、楓しげく櫻こたかくなどして、をりにあひたる梢の色の夕ばえは、いとゝしく玉のみはしに光をそへ、春のあしたの花のさかりも、今より思ひやられて、いと面白く興あるさまぞかぎりなきや。今年長月中の八日、この殿の秋の色といふことを題にて、人々めして歌よみ、文つくらせ、又琴ひき、笛つかうまつらせて、きこしめし御覽せさせたまふとて、保己一仰ことにてまうのばりたまふ。かの承暦の三つの舟もかくぞありけんかしと覺えて、おいすはけふになどひとりごちつゝ御前に侍ふに、この歌やものはしにいさゝかものせよとのたまはせつるを、しひてかへさひ申さんも中々なるべければ、たゞ承りぬるしるしばかりになん。

もみちはのあかぬわかれにみつの舟うかべし秋をこゝにうつして

檢校 保己一

露重菊花鮮

たわむまで菊の籬におくつゆは花にあまれる千代の數かも

詩仙堂勸進

夏草の露ときえてもつみおきしことはの花そよゝに匂へる

今もその言葉の花をかたみにてきえし世したふ夏草のつゆ

俳諧七部集の序

はいかいはい、たゝごとともてみやびことなす業なり、たゞことなるは、やすきに似たれど、みやびごとなすがかたければすぐれたる人少し。世に七部集とて、もはらもてあそべるさうしは、この道のかゝみとかや。それをときしもの四十餘編あなれど、猶心得かたきこと侍れば、茂呂何九かうかへて、そのかくれたるむねをつたふかの易きごとくして、まことには難きわざをいたすにやすからしめんとなるべし。

この道の末が末まででらすべき鏡と世にやみづくきのあと

螢蠅抄序

わがおほやまとの國は、細戈の千たる國にて、人の心いさをしくたけきみちなん、異國にはまさりたりける。されば、萬の國より來て犯さんこと、かなひがたきわざなめり。しかはあれど、吳竹の世を歷るほどに、片糸のより／＼さる事なきにしもあらざりしかど、やがてうちとりせめほるばされて、生きて歸る人なんまれなりし。異國にはほとりのえみし内つ國をうかゝひて、終に君となり、世にしるたぐひもなくやはあらぬ。かゝればこそ、すぐれたりとはいふなりけれ。此頃、おほやけの仰せごとにて、代々のふることかきあつむるまゝに、自らひろく書見る中より、このすぢによりたること々もをぬきいで、五卷となしつ。名つけて螢蠅抄といふ。こは螢火のかゝやく神、五月蠅なすあしき神のあらびにて、えみしらこの國にあたすることありとも、やがて神風に吹きやぶられて、遂にうれひなからんことわりを世人にしらせんとてなん。

文化八年二月五日

檢校 保己一

▲温古詠艸抄（埒忠實歌集）

これは檢校の男次郎の歌集である、寫本七十貳枚のもので、文字は次郎直筆のものである。四季戀賀と部類しないで、たゞ年代によりて順次に書き入れたものと見える。今その中より數十首をえりぬくことしよう。

夏草滋

つく／＼し摘みつる野邊に春はいつ過ぎて杉葉の生茂り賢

垣夕顔

あれわたる賤かいへ居の垣根とも見えぬさかりの夕顔の花

待空戀

よしさらは後にさふとも門さして人をはいれし今日の恨に

關路雲

旅人のふみならしても足からの關の戸さしとたてるしら雲

短夜月

明やすき夏のならひと思へともさてもみしかき夜半の月影

嶺松年久

神代より根さしかためし大原のをしほのみねの松の木高さ

述懷

こゝろさす道もなくしていたつらに三十餘の年を経にける

雨中紅葉

染のこす色も見えねともみち葉にまなく時なく降時雨かな

月前露

月影のうつらさりせは草の葉にむすふかひなきつゆの白玉

寄月神祇

石清水きよきなかれの秋の月神のこゝろもかくやすむらん

草花露

いろ／＼に心うつりて百草の花にはつゆもおきまよふらん
秋草の花のにしきに一入のいろをそへてもむすふつゆかな

目前虫

くれぬとてやゝ明出つる虫の音をほのかにてらす夕月の影

山花

麓には夜をのこせともほのくと芳野の山を花に明けゆく

藤

松か枝にかゝりて咲ける藤なれば千歳の春も匂へとそ思ふ

夏草

夏草は野かひの駒にまかせてもはみ餘れはや生ひ茂るらん

女郎花

契りけん人や空しき女郎花つゆにしをれてひとり立てるは

旅

きけはまつ故郷こひし小夜きぬた音せぬ方に宿はからまし

述懐

嬉しきもうきに變れる世なりけり身は月花に任せたれとも

祝

長月のなかきなか夜を幾重ねかさねて君か御代にくらへん

落花

吹かせに散りゆく見れば櫻花根にかへるとも思はれぬかな

夏草

夏草のしけれる野邊を人や行く菅の小笠の見えみ見えすみ

稻妻

あたものといふなる露をたつねきて宿るもあやし宵の稻妻

曉露

いかばかりあかつき露のおもるらん軒端の萩の風に音せぬ

時雨

定めなき物とはいへと冬されはまなく時なく空のしくるゝ

深雪

たつねこし人の心も知られけり日數ふりぬる雪のふかさに

逢戀

こひくゝて相見る時は嬉しさにうれしとたにも言れさり覺

紅葉

山めくる時雨の後のもみち葉に今ひとしほと夕日さすなり

深夜雨

かゝけてもひかり小くらき灯に夜深きねやの雨そわひしき

落葉不待風

限りありて終に散りゆく紅葉を風のかとも思ひけるかな

千鳥

あら磯の岩潮たかく立つたひに聲もくたけて千鳥なくなり

眺望

わたのはら八十島遠く行く船に雲と波とのさかひをを見る

馬上郭公

あくやとて駒をかへせは郭公聲はうしろにまたなりにけり

夜萩

きゝなれし軒端の萩の上風に今宵もゆめのおとろかれぬる

暮秋霜

いつしかと霜にかはりて行く秋の形身は露も残らさりけり

嶺時雨

ぬれて散るふもとの里の紅葉はに雲ゐる峯の時雨をを見る

返書戀

そのまゝに返すを見れば玉章をとかぬにとけぬ心知れとや

忍久戀

あはすともうしろ手をたに見せなゝん年経て忍ふ面起しに

旅

都おもふ心はしはしかすめても袂しくるゝたひのそらかな

述懷

身に餘る願ひも知らでねかふこと叶はぬ世とも思ひける哉

庭上松

年高き松のよはひはわか宿の物なりなからしられさりけり

野虫

立ちこむる末野の原の夕霧にいとゝはるけき虫のこゑかな

契戀

かはらしと思ひさためて行末を契らぬもまた契りなりけり

不二の書に

山といふ山はあれともこれやこのふしの高根そ山のおほ君

神儒佛の書に

わか知らぬ道を誇るはなかゝにわかなす道の道しらぬ人

紅葉染深

いろゝにそめし紅葉は定めなき時雨のあめの心なるらん

池月添光

くもりなき池のかゝみに面なれて今宵もやとる月の影かな

幾千代もすまんとおもふ池水におなしこゝろの月宿りけり

山路秋行

さとの子かひろふてり柿さゝ栗に山ふところも道はあり鳧

月

年々の契りかさねてこの秋もこのたかとのゝ月を見るかな

家の譲りを受けてよりことは廿一年になりぬ(天保十三年)

露しもを知らてはやしの下若菜安くも年をつみにけるかな

蚊遣火

朝夕のけふりはほそきしつかやに餘りて立つは烟なりけり

落葉

限りなく散るもみち葉を折々は心すさみにかそへてを見る

月明く侍りける夜人の螢をつゝみてつかはしたりけ

れば雨降に申つかはしける(新古今、詞書、和泉式部)

月あかき影にけたれて見えざりし光をくらき雨夜にそみる

雨の夜のくらきをわひてありなまし見えし螢の光あらずは

朝顔

中垣を中にへたてゝかたおもて日影をよそのあさかほの花

荳蔻

白露の結ふにも猶かるかやのあやしきはかり打ち亂れつゝ

社頭松 (菅廟法樂、天保十五年二月廿五日)

宮居せし年をかそへてわか頼む北野の松のよはひをぞ知る

水雞

うちたえて人の音せぬ我門をせめてはたゞけ水雞なりとも

早苗

こき薄き緑の色にとくおそく植ゑつる小田の早苗をぞ知る

夏祓

思ふことなき身なれともみそき河けふ人並に御祓をそする
おもふことはらひ流してわか心涼しくなりぬ風またすして

夏夢

結ふまもなく明なん夏の夜の夢を水雞のおとろかしつゝ

池上月

池の面にやとれる月のむら雲は風にたゞよふ波のうきくさ

水邊柳

玉しまや柳のいとそ釣たるゝ川瀬のあゆこいまた見えぬを
川つらのこほりをなかつ春風にきしの柳のいともとけゆく

河上落花

しはしたによとめ瀧川早き瀬に岩もとさくら散りて流るゝ
大井川ちるはなくなれす筏士にとはゝや春のゆくへいつくと

瞿麥

夏草の茂みに生ふるなてしこの花のやつれて咲くか哀れさ
やりみつにひと筋かけし橋きはに二もと三もと立てる常夏
起きいてし人の別れのあとゝめてわか床夏にむすふ朝つゆ

大和にはあらぬ種なる撫子のかたへにねふるねこやから猫

夏川

散れはみな花も紅葉もにこりそと青葉にすめる山川のみつ

夏草

夏の日に葉末よられし葛の葉をむかしにかへす夕ぐれの露
夏草にまじるひめゆり撫子にうとみし庭もしたしまれつゝ

寒蘆

あしの業の風に折られて川岸に莖のみのこる色そさひしき

落葉

木からしに軒端の紅葉散りゆくはあらはれいつる遠方の山

残雪

皆人のさくらんころと待花を降りすくめたるはるの泡ゆき
降る雪に春のけしきも挫かれてわか竹の戸は開くともせず

霞中鶯

八重かすみ立ちへたてゝもしかすかにもるゝ末野の鶯の聲

寄神祇

天地の中にまします八百萬の神のかすこそ御代のかすなれ
岸による波も動かぬ御代に逢ひて人住よしはうらやすの神

夏牛

川そひの柳の陰をもとめきてあつさをうしとつなくこや誰
年の名のうしは歩みの遅からて春くれ夏もやかて過ぎぬる

雲雀

夕雲雀おのか田面に落來てやすき返へされし床に鳴くらん

霞中花

山さくらふかく霞のつゝめともありの知られて匂ふはる風

雪待友

いかにせん人まつやとの庭の雪拂ふもつらし拂はぬもうし
わかこつく雪も友待つ心より降りかくすらん庭のくまゝ

叢虫

荻かはな尾花葛花咲く野邊はむしさへこゑを盡してそなく

早春鶯

あたらしき春のよろこひ告げ顔に軒近くなくうくひすの聲

初春竹

一夜明けて今日にしなれば吳竹の靡く様まで春のものなる

新柳垂糸

露かゝるやなきのいと玉すたれてや佐保姫の春の新との

野早蕨

紫のゆかりもとめてこの春もねはふ横野のわらひをるらん
春雨の晴れなは人もむれこんとぬれつゝ手折る野邊の早蕨

寄久戀

すりなかつ硯の墨の海つらに落つるなみたや戀のさししほ

軒菖蒲

五月雨にふりぬる軒も今日といへは菖蒲葺れて時めきに梟

庭瞿麥

まきすてし心もとめすありしかといま庭見れば撫子のはな

朝草花

にけなしと人や見るらん朝露をわくる野守か花すりのそて

野苧萱

秋風のたえまを露のいのちとも知らてやとかす野邊の苧萱

暮秋月

秋なから冬に間近くなりぬれは月も時雨にかきくもりつゝ

江寒蘆

堀江こく船もあらはに見ゆはかり難波のあしの霜枯にけり

十月はかり山里によるとまりて

嵐吹くこの山里は見るとなきゆめも木葉にむすほゝれつゝ
山繞る時雨のあめの足とくもあけよこの夜はぬれと淋しき

水初結

池水の氷り初めぬる状を見よいさや子供ら日のたけぬまに

五十六才の春をむかへて(安政七年正月)

金澤の五十を過ぎて六浦かたすみよきはるの海邊をそ見る

梅有喜色

今よりはわか世の春とうれしさを色に出てもにほふ梅かな

佃島漁火

安房上總山みえそむる明方につくたのかゝり影そきえゆく

殘鶯鳴老柳

青柳のみとりさひたるえたどめてはるはむかしと鶯のなく

蚊遣火

端居して涼まんとすれば家刀自か烟くゆらし蚊遣たくなり

夏旅

夏あつきなすのゝ原を分けわひてこゝろにいそく白川の秋

關こえてみやこいそけと松坂のしみつにとまるなつの旅人

炭竈

ぬりてめて今はと歸る里人のあとよりけふる峯のすみかま

屋代弘賢先生發會の日に

小車の牛はをととしとらは去年わの卯の春も廻り來にけり

辛酉元日 文久元年

たまはりし昨日の御衣を重ねきて袖ゆたかなる春にあふ哉

(百十五首抄録)

第二 檢校に關する名家の談話

檢校歿してはや八十餘年、年舊り莓苔おくつきを辨せずといふ程でもないが、殘帙遺卷あるは池魚の災にかゝりて失せはて、あるはをちこちの書あきびとに涉り、轉々めぐりめぐりて惜いかな、亦收む可らざるにいたり、遂には、かれ檢校の如き偉人の傳記史料もやうやくおぼろになり、明らけき光を眺めることの出来ぬやうになるのは、かへすゝも斯道のため、うれたきことである。されば明治の御代に名だゝる故老先輩のもとをたづねて、同檢校に關する感想談話を聴き、之を卷尾に附して彼を研究する人の資料に供するは、亦旨あることゝおもふ。

余の歴訪して意見を聴ける、たゞに二三にとゞまらない。あるは年老け眉白く、よくその時代を見聞した老博士もある、亦はその流れを酌みて、いまに崇敬欽慕してゐる故老もある、あるは年いまだたけたといふにあらねど、頭腦明晰古を温ねて新さを知り、燃犀の史眼よく千里を洞察するの士もある。その他文學はた教育の方面から、彼を論評稽査して、其眞髓を發揮した篤學者もある。今左に二三を拔萃してそ

のかくれたる事實を明らかにすると共に、その後世の文教に及した影響の少小でないことを紹介しよう。

▲文學博士井上頼圀氏の談

編者一日、博士を麴町の自邸に訪ふ。市區改正といふので博士の屋敷も轉じたので、大工などは、門前にガタ／＼してゐる。丁度乃木大將というちがひに門をはいる……………

△この間は御手紙ありがたうございました。つひ御無沙汰バカリいたしました——
○かねての書冊のことも、今少し早目に差上げようと思ひつゝ、轉居に引續き普請修繕のため、書卷もこと／＼く他にあづけ、三つほどの藏に入れておいたため、と
う／＼おそなはりました。

△かねて檢校の改葬については、先生は一方ならぬ御骨折のやうに聴いて居ますが、その始末を詳細に承りたい。

○ウ……改葬のことに就いては、そも／＼事の發端は斯うである——川田剛の門

人で津輕藩のものであるが外崎覺といふものがある。なか／＼の歴史すきで當時宮内省殉難取調掛を勤めてゐたが、ヒマがあればあちこちの墓所を訪ふを一の道樂としてゐた。或時この男がやつて來てはいはく、

近頃おどろいたことがあるといふのは、あの塙檢校の墓所四ッ谷安樂寺から二尺ほどのまぢかに雪隠は建ち、墓所の裏は井のナガシで、汚水はかゝつてくる、われ／＼の性分として見てをられんから、どうかして改葬したい。

と斯ういふから、私もはじめて外崎の談でこの事あるを知り、いたくおどろいたわけである。元來安樂寺は明治六年の布達で廢寺となつたものである。この時、永續する見込のないものは悉く廢寺とした。

そこで私も廢寺になつて、民有地になつてゐるものを、雪隠をたてゝはならんとか、汚水をかけてはいかぬとか、咎めだてすることも出來ぬから、早速改葬したいとおもひ、孫忠韶ぬしより一切萬事井上にまかせるといふ委任狀をとり、いよいよ改葬に取りかゝることゝした。

然して愚按では、とにかく集まつた丈の義捐金でそれ丈けのことをする、なにも

贅をやるとか、見えをかざるといふ様なことは、たえて爲ないといふ考へであつた。

それから發企人といはうか、同志といはうか、四五の人を語らひ、久保は四ッ谷でも勢力があるし萬事案内だから、區役所と愛染院に掛合つてもらうた。この時は改葬するには、火葬したものでなければ都合がわるい、土葬は駄目とのことであつたが、いろ／＼交渉を重ねた末、上局でも同情を寄せてくれ、火葬した、積で遂に改葬することに極つたのである。

斯くて私は書物取調のため大阪に出張したが、其のあとで頓でもないことが起つた、それは、

「塙の親類一同から檢校一人だけ改葬し、他はそのまゝにしておいてもらひたいと申込んだので、他の同志はこの議を容れ一人だけ改葬することに取極めた」

といふことである。これは私、大阪から歸つて後にはじめて知つたことで大に叱言を云つたが、はや極めてしまつた後だから止むを得ない、そのまゝに一人丈け

にしたわけである。然かし私の生前中に是非他の人々をも檢校の前后に並べう
つしたいものと思うてゐる。

△義捐金はいくら集り、且つ墓所保存法はどんな風になつてゐますか、承りたい。

○ハイ……義捐金は總體で三百圓内外、勿論殘金もわづかある、これは傳記をもの
して寄附した人々におくりたい素志であるが、色々の事情のためにのび／＼し
てゐる。又保存法としては私は毎年舊盆に一圓づゝ掃除料として愛染院にわたし、
永代續くようにしてある。この一圓は私はいくらか塙にたむけたのを銀行にあ
づけおき、それから生れくる利子であるから改葬のとはちがふ。

△墓所を堀つた時、どんな遺物はのこつてゐましたか。

○なにしろ七八十年の長い月日を歴てゐるから、別にこれぞといふものはのこつ
てゐない。たゞ骨と中啓といつて檢校のもつてゐるカネの扇子があつたばかり
である。また古い墓碑は屋代のかいたものであるが、改葬の時之を土中に埋めた。
その時唐紙にすりとり一枚だけ保存してある。

△改葬等のことについては、他にも先生の御金になつたものがありますか。

○いや、別にない、たゞ檢校ばかりである。しかし先年品川東海寺にある眞淵翁の墓
のすたれた時、之を修理するために發企人になつたことがある。丁度この時、長谷
川貴族院議員(寺内大臣や柴田家門などはこの人の婿である)などの發議で、木の
こまよせをつくつた、當時私は木よりか金の方は保存によいと云つて頑張つた。
が、朽ちたなら又々とりかへるといふ反對で、とう／＼私の説は破れてしまつた。
熱がさめるとあそこは駄目なもので、その後やがて木はくされる、誰もとりかへる
人はない。前のイキホヒはごこへやら……そこで私はいたく苦心して神宮奉
齋會に掛合ひ保存費として五百圓をもらひ、その利子で長く掃除や修繕をする
ことゝし、また前の木も石とした。

こんな風ですから、私の考へはいつも／＼ハデにして、一時の御祭騒ぎするより
かも、ジミにして長くその人の傳はるやう祈りてゐるので、塙の改葬もまたいた
りてジミな方で、一向人の目にはたゞない。

△先生は藏書家のきこえのある方ですから、この數萬卷の書冊中、秘本珍帙も少く
なからう、それを永く傳へるにはいかなる方法をとりますか、例をとるもおかし

いですが、温古堂文庫とか、和學講談所といふ藏書印のおされてある書卷の、をちこちに散在してゐるのを見ると心外でたまらんです。

○さうぢや、私もさう思つてゐる。温古堂文庫の書冊の散らばつたのは、かへすゝも惜しい……私の忤はやはり國學の方に身をゆだね、いま伊勢に居るが、孫の代になりても必ず家學を嗣ぐともいへぬから、藏書保存法としては、法人組織にするつもりです。

△塙大人の男次郎忠實といふ方とは、先生は御知合のことゝおもふから刺殺された原因、その當時の模様等逐條承りたい。元來次郎といふ方は非常に氣慨のあるあらゝしい性質でしたらうか。

○次郎は刺殺されるやうな非常な氣慨のある人ではない。全く冤罪です、極風流人で常に凝つた料理をして、人々を馳走するとか、または茶の湯をたてるとか、河東節をよんで語らせ、それを道樂としてゐるといふ様な、至りてみやびやかな方でした、手かくわざはなかゝ達者なもので、歌は小林歌城から直してもらうてゐた、小林は次郎を呼捨にしてゐたものである。

まづ浪士から狙はれたといふのは斯うである、——小梅の鈴木重胤は其著日本書紀傳に「塙某、前田某に命じて廢帝の故事を調べしむ」といふ意味をかけた、それからこの鈴木故居と田圃一つ隔てゝ住つてゐる大橋訥庵などいふ漢學者は、この事をまじめに早合點し騒ぎ出し、をりふし堀織部正はかきおきして自刃し、その中に安藤閣老と衝突したのは、そもゝのおこりであるやうにあり、その安藤の關係より、それに依囑されて、いろゝの事を調べた次郎までも憎んだものである。

丁度次郎の刺殺される三日前のことである。河内全節七十五才、本年六月歿は次郎と共に麴町五丁目丹波屋といふ鰻屋に行き、歸途二人連れでをゐるあるきし次郎の門前で袂を分ち、河内はすこし向うに往つて後をふりかへり見ると、書生體のものは次郎のあとをつけていつた、さて不思議なことであると思つたが、大して氣にも止めなかつたと河内の直談である。

これよりさき、次郎の邸宅に長州人と稱して、和文の碑をものしてもらひたいと云つて來たものがある、次郎の殺される當日、その男はまたゝ來ていふのには、

◎先生はどこに行きましたか——中坊にゆきました

◎おそくなりますか——おそくなります

◎提灯の紋はなんですか——丸にもつこうです

やがて次郎のやしきを辭して中坊にゆき、

◎塙先生は御出ですか——をる

◎夜になりて御歸になりますか——さうぢや

◎歸路はどこを御通りになりますか——かようく

と、事細かにたゞしてやがて辭しかへつたが、自宅でも中坊でも別に怪しみもしなかつた。

さて次郎は中坊から出ると加藤一周も同行することゝなつた、この加藤といふ人は新宿の女郎屋に門人が多く、明日そこで歌の納會をやるとして次郎の家に泊し、やがて新宿に出馬するといふ下構へであつた外に同行者とはなない、たゞ峯尾岩太郎(十六才)といふ小僧は、提灯を持つてしるべした。やがて九段を上り門前にさしかゝると、後から肩さきかけて一刀あびせかけら

れた、居合はす加藤もやられる、提灯持ははふく家にとざりつき青息吐息……いま先生は……先生はどうしたのか……いま先生は……キ……切られました……

敬太郎以下、曲物ござんなれと、いきまき駆け出たが陰も形も見えない。

前田夏蔭も刺客にあはや一命をとられるところであつたが、をりふし入浴するところを家人の注意によりて裏口から逃げ危難を免れた、しかし鈴木重胤はやはり刺客にたふれた。

△わけもなくドン／＼人を殺して、それで警察はあまりやかましくなかつたですか、浪士とか刺客などに對し如何な態度をとつたのですか。

○當時は今と異なり、國事犯に對しては警察はあまりやかましく云はない、奥人目附の如きは

本居學（オキガク）をやる人に國事犯が多いといふことだが、一體ホンキヨガクとはどんなものですか。

など、云つて、本居流（オキガク）の國學さへ知らなんだものである。

されど火事とか窃盗については、きびしいもので、一例をあげれば、

とくせんしの金庫を焼いて、黄金をぬすめる林の龜といふものがあつた、この搜索探偵の時などは、なか／＼御念の入つたもので、たつた一つ附木の落ちてゐるのを拾ひあげ、江戸中の附木屋からこと／＼く附木をあつめ、それに似てゐるものを比べあはせ、い／＼この店の賣れる附木であるといふことは、はゞ鑑定附くと、犯人も必ずこの店の近所に住ひするものだといふをすゑ、さがしにさがして、とう／＼おさへつけた。

といふ類で、なみ大抵ならぬ煩苛なものであつた。

△次郎忠實の實はトミかモトか。

○實は瑤ともかく、たゞもとと訓む方がたゞしい。

△和學講談所のことに、何なりとも御心附の件々を承りたい。

○(イ)國學所、講談所どちらをよんでもよいと幕府から許されて居つた。

(ロ)和講は講談の所と取調編纂の所と二通りに分れてゐた、講談を聴く人の席次は、身分家柄によりて、各自、上下等級をつけたものである。

(ハ)和講に來て講義を聴くと第一、練兵や訓練に出なくとも可い、それで老人な

どは、この難澁なる練兵を避ける爲に、わざ／＼聴講に來たものが多い。握飯で練兵も年の上には、あまり氣のきいた方でないから……………

(ニ)和講の出役を希望する向も段々と多い、俸給はわづかに銀二枚、即今の一圓半位の安手間、續々希望するものゝあつたのは、

(一) 小普請金を出さぬともよい (二) 訓練に出ぬともよい

との恩典があつたからであらう、當時辨當出役と冷評してゐたものである。

(ホ)温古堂も和講時代からはじまつたものらしい。

(ヘ)温古堂文庫の書冊は公私混淆である。

(ト)御問ひの五月五日檢校生は、古いものには見えぬやうである。

(チ)類從の版本は宮内省、内閣といろ／＼まはりて、今はどこにあるか、はきぞ知らぬ、文部省の所管になつてゐないだらうか。

△螢蠅抄の序文をかけた聖寛堂とは誰の事でせうか。

○本名ははつきり調べはつきません。

△いやどうも長坐をいたしまして……………

○何の御かまへもありませんでした、あの本は四五日中にとりそろへておくことにしますから、どうぞ今少し御待ち下さい。

▲埴忠韶氏の談

一日、編者下谷入谷町三三二にすまひしてゐる檢校の孫君にあたる忠韶氏を訪うたが、をりふし不在にて會はなかつた、超えて翌朝、同氏余の寓居をわざ／＼訪はれ、やがて對談數刻、疑をはらしたことも少くない。

△檢校の生れた月日は古書に見えず、蒲生氏の偉人傳などには五月五日生るとある、何故に諸書に月日を書せぬのでせうか。

○私の父なる次郎は、別本檢校傳に書入して五月五日としてあるから、たしかないとである、然して諸書に載せないのは、世俗五月五日に生れた子は、男は父を害し

女は母を害すといふから、それらを忌んだのであらう、又京に上る時川支へのため滞在してゐる中に算術を學んだといふことも書入してある、多分大井川の川支へとおぼえてゐる。

△保木野村の石碑には檢校の弟を知[○]右衛門としてあるが、系圖によれば宇[○]の字の方よいやうにおもふ、きかまはし。

○それは宇[○]右衛門でせう、田舎では宇[○]知[○]の區別など、あまりきびしくしなかつたでせう、故に石碑に知と刻んであつてもあやまりでせう。

△或書に檢校はじめ荻原玄慶の養女上田を娶りて一女を生むとありますが、この一女とは東條氏の女の産めるとせ子のことでないですか、且つ上田とは地名ですか、將又姓でせうか。

○上田といふは信州上田のことで地名です、荻原玄慶の養女といふは、實は祖父の初めの妾ですが、一女とせ子を産んだ後、故ありて離縁になりました、大層美人のやうに聽いて居ます、系圖などにとせ子を東條氏の女の産める様に書いてゐるのは、表面上のことです、實は妾腹です。

△荻原家は今も信州上田にありますか。

○先年私番町に住んでゐる比荻原姓を名乗りて乞食のやうな老婆が尋ねて来たことがありましたが、そこへにして歸りました。

△長女とせ子は中津金十郎を養子にもらひ何年比同棲しましたか、且生死年月を承りたいものです。

○三四年間しか一處になりて居りません、法號貞芳院、安永五年三月十八日生、嘉永四年三月七十六才で、ウチで歿しました、洵に尼同様の生涯をおくりました。

△貴台の祖母上にあたる岡田いよ子は、何藩の何んといふ人の女ですか。

○山形藩の人、岡田惣次郎の女で、つまり檢校の後の妾です、もとの名はイシ、祖父の妾となつてからイヨと改名しました。

△檢校の江戸に上る時、負ひ來れる素麵箱は、今は何處にありますか。

○手許にあります、御寶箱となへて大切に保存してをります。

△檢校は五才失明、十三才江戸に上るといふのは正説と心得てゐるが、他書には種々の異説ありて、迷ふこともあるが貴説承りたし。

○御説の通りにてよろしい、他書七才の説は寅年を辰年にかへたるよりあやまれるものなるべし、十五才出府の説も同上。

△檢校は文字を書くことを知つて居りましたか、又板木を手にてさぐりて讀めりとの説もあるが、然るか、貴説承りたし。

○祖父、文字を書くことなし、世人より時々問はれることだが、決して書いたことはありません、名家全書に塙保己一として出してあるが、あれは門人石原正明の代筆したものである、板木を手でさぐり、文字を讀んだといふこともないことである、近世盲啞教育の上では、いろ／＼手でさぐり、つゝ讀むことも發達してゐるが、寶暦明和頃などには、なかつたことのやうにおもふ、たゞ毎夜人をして讀ませ、それを聽いて記憶したに止つてゐます、勿論木偏とか人偏とかといふ位は、知つて居つたとのことである。

△父上の忠實をタットミと訓する方よいやうに思つて居ましたが、井上博士はタットミと直されました、どんなものでせうか。

○タットミの方は正しいです、もと大學頭林衡のつけてくれたもので、論語に忠臣

以孝實とあるより出でたものことです、私しの名はタバツグと訓みます、初め父の忠と祖父の保を取りて忠保といひましたが後に改めました、私には一女五男ありましたが二人丈け歿して、今は四人しか生きていません。

△和講は一半は編纂取調所のやうなもので、一半は學校のやうに聽いて居ましたが果して然るか或書によれば三代目、即ち貴台の時に至りて、はじめて稽古所をおいた、半、學校のやうな風になつたやうにも見えます、かたゞ迷うてゐます。

○御説の通り私時代になりてから稽古所をおいて、午前と午後と一日二回づゝ講義をしました、その以前は編纂取調の方は主眼です。

△類從の板木は、今どこにあるか。

○山田に新に一の藏を作り、そこに入れてある、數萬ある。

△溫古堂といふ額面は今、何處にありますか。

○先年内閣書記官、三輪醇氏の所望に應じ同氏にゆづりました、今はどこにあるか同氏の手にもないやうです、巾四尺位ありますから手狭なウチにはおくところもないやうな次第でした、この額は門人屋代は上下を着して彫つたものです。

△御書拜觀抄觀書畧といふ本を見ましたが、中の文字は貴臺の書かれたものゝやうであるが、觀書した方は貴臺ですか、將又父上ですか。

○この本は、こんなところに廻つて來て居る筈はありませんが、……これは重野博士の注意もあり、かたゞ父上の又續群書類從のあとを繼がうとの素志よりつくりはじめたもので、都合四冊ありますが、ウチには三冊しかありません、一冊は貸し失つて洵に困つてゐましたところ、こゝで再びめぐりあはふとは……

△和講の建物は残つて居ますか。

○六番町のたしか一番地と思ひました、そこに六間だけ残つて居ます、尾州よりもちうた總檜木細工です、平河天神の像は私の宅に今もあります、但し其境内にあつた宮田六左衛門と云つた版木師は死んでしまつたが、其家屋丈は今も残つて居ます、見ると何くれと懷舊の情に堪へんです。

△女郎の釵をあつめたといふことを聽いて居ますが、くはしく承りたい。

○いや、それは當時にはよくあることで、祖父は檢校なものですから、女郎衆は功德の爲とて、いろ／＼カンザシを寄附したのを、祖父はあつめて銀の觀音像をつく

り、保木野の南に祭つたとのことで、別に不思議なことでもなんでもないことです。

△父君は幼時より和歌を學ばれましたか。

○四十以上になつてから主として歌城について學びました、若い時にはあまりやりもしませんが、その代り上達もしなかつたやうにさいてゐます、この温故、詠草は父の歌集です、文字も父の直筆、元來屋代の手を學んだ故なか、上手のやうでした。

△貴台の詠まれた和歌を二三十首承りたいものです。

○イヤどうして歌らしいものは一首もないです、いづれ其中えりぬいておいて御目にかけますが、拙老も本年七十七才になつたから、さき頃、徒らに年をくれ竹よろこびの

文字書きいはふことぞおかし喜⁺

と腰折をやつて見たが、土台モノになりて居ません、七十七のものは吹竹で吹くと禍難を免るといふことがあるから、一寸ひねつて見たのです、アハ……

△いやどうもいろ／＼有益な御話を承りてありがたうございます、殊に御遠方の

ところわざわざ御尊來をいたゞいて恐入ります……サア御茶でも……

○マアこれで御いとまをしませう、何れ其中……

▲松井簡治氏の談

一日、編者氏を小石川關口駒井町二に訪ひ、温古堂文庫に關する書籍談を聞いた。

△吉田氏の談によれば、塙檢校の用ひた本箱が貴家に秘藏され居るとのことであるが、御差支なくば見せていたゞきたいものです。

○ハイ私の手許にあるのは、檢校の用ひた型に倣つて作つたもので、原物ではありません、これもそのもと萩野文學博士は原物を見て作つたのをまねたものです、縦一尺九寸五分、横一尺四寸七分位のものです、その頃この本箱のみをこしらへて

居た大工があつた位だ、一つ壹圓四五十錢と覚えて居る。

△その本箱といふのはこれでございますが、特長はどんなところにあるのですか。

○特長の二三を挙げれば、左の如きものであらう。

- 1、中に隔てのなきこと
 - 2、上に溝なく下にのみあること
 - 3、側面に手かけをほりつくれること
 - 4、縦にてつくること
 - 5、脚は無し疊きれぬこと
 - 6、いかなる大本もはいる
 - 7、三段に積み重ねてもギシ／＼せぬこと
 - 8、火事の時、運搬によきこと
- こんなものだらう、但し錠は原物とあはないから忠韶大人へでも問へば分るでせう。

△檢校にかゝはる關係書類を示されたい。

○私のもとには和學講談所本にて、先年、内藤恥叟氏から引受けたものは少々あるとて、左の書冊共を出さる。

1、群書類從目錄一冊

(イ)表紙には古板目錄の四字あり。

(ロ)裏面には左の書入あり、之は次郎の書いたものらしい。

新目六と違之分

十	五	十	九	廿	八	五	十	二	六	十	一
六	十	二	七	十	五	九	十	一	九	十	三
九	十	八	百	八	百	九	百	十	一	百	十
百	十	八	百	廿	百	廿	一	百	四	十	百
百	六	十	四	百	八	十	六	百	八	十	七
百	九	十	七	百	九	十	七	百	九	十	七
二	百	五	十	二	百	八	十	九	二	三	百
三	百	十	一	三	百	十	三	三	百	十	四
三	百	十	九	三	百	五	十	三	百	五	十
三	百	八	十	四	三	百	八	十	六	三	百
四	百	三	十	一	四	百	四	十	四	四	百
四	百	九	十	九	五	百	五	百	廿	一	五
五	百	廿	七								

以上

(ハ) 除くとかたはらに書入してゐるところもある。例へば、

卷 十 五 — 賀茂雜記 卷五十二 — 熊野山別當次第

卷百十五 — 唯心院殿裝束抄 卷百廿一 — 諸鞍日記 等

(ニ) 入れ替へたのもある。例へば、

卷百十一 — 傳宣草江家次第抄、消

卷百十八 — 蓮阿口傳抄(永綱裝束抄、消)

卷三百十三 — 源氏願文物語十二番女合、消

(ホ) 新に加へたものもある。

卷九十一 — 後光嚴院御踐祚記

卷九十三 — 大嘗會御禊記事

卷百廿一 — 曇華院殿裝束抄

(ヘ) 多少、文字を直せるものもある。

卷百四十 — (遊學) 往來 卷百四十五 — (今川) 丁俊書札抄

雜事

細家

卷 百 九 — 除(秘抄)

2、續群書類従目録壹冊

(イ) 表紙には學問所改の印あり、また門外不出の四字もある。

(ロ) 裏面には次郎の手にて左の書入がある。

可補入分

日本紀私記

天書黒川藏

弘長二年歌合黒川

重之女集

朗詠要集

朗詠要抄

伎樂譜

嘉吉傳記黒川藏

南朝士侯畧傳

武田分限帳黒川

新韻集萬里作と云ふ黒川他阿上人集

阿波國戸籍

尾張國解文

(ハ) 印は史料見出し出來の分、見出しは忠瑤の手元にありなどともある。

(ニ) 朱書にいはく、

諸祖行實

龍寶山住持記

元道之行業記

諸祖傳

門跡傳

右五種古寫本へ入

(ホ) 書冊の「アリカ」を目錄について、細かに調査したものである。偽作として除けるも見ゆ。例へば、

卷百六十五——阿蘇大宮司系圖……の上には阿蘇奈固贗作也可除、これは

中山の説にあらず、外人の説などの書入あり。

卷百六十四——楠系圖……の下には偽作なりといふことを書いて入れよと朱書してある。

(ヘ) 彫直したものである。

卷二百十四——光景阿闍梨傳の傍に、光景は皇慶のあやまり、上に皇慶彫直しとある類。

(ト) 紙數少いものは合冊にすといひて上、中、下の三字を消しておいたものもある。例へば卷六百四十四の三好記の如きものである。

(チ) 正篇にあるものもある。例へば卷六百六十二の「大永二年祇園會御見物御成

記」の如きは下に「正篇四百九にあり可除歟、されど別本ある歟」と朱書してある。

(リ) 最後に、

「明治九年十月調、二百九十九卷不足」とある。

(ヌ) 其次に左の書入あり。

可除分

第 九	——	正中御飾	五 十 七	——	廿二社本地
三百六十	——	庭訓往來	三百六十四	——	類聚往來
三百六十六	——	金葉	四百四十	——	信實朝臣集
四百四十九	——	源重之女集	五百四十二	——	小倉問答
五百四十一	——	鷹經辨疑抄	五百七十三	——	竹崎五郎繪詞
五百九十	——	朝鮮物語	六 百 六	——	武田勝頼滅亡記
五百九十八	——	勢州軍記			

(水谷幡龍記、善惡二本あり、善本を入れる可し)

八百九十九——醫家千字文

八百九十七——醫略抄

九百六——蘆簫内傳

九百三十——口遊

四百四——日本紀竟宴和歌等

3、書籍目録(九卷中四卷丈)

慶應改正とあり、終りに左の文を見る。

「右書籍目録九卷者慶應元三月中依△△伊丹桃之丞殿御口達改正同年閏五月十日書寫落成御同氏え差出但學問所御用之旨

源忠韶 花押

但、淨書美濃紙板認差出候處御用濟御下相成」

また、左の文もある。

通計 百三十四箱 三千八百十五種

一萬七千三十八卷 一萬千五百五本

4、和學講談所藏書目録 上下合(前後集目録原本)

(載録部一冊添)

神祇 國史 御記録 補任 系圖

傳紀 官職 律令 公事 裝束

文筆 往來 語録 文書

合三千百八部 一萬七千九百九十四卷

(朱にて補ひ入れたのもある、又卷數を直したり、消したりしたところもある)

5、溫古堂記録目録

元本調方の凡例

元本と中書二通りあるものは、中書を別箱へ入れて元本を元箱へ入る、元本兩部あるものは一部元本へ入れて一部は別箱へ入る。

6、吾妻鏡見出

これは、吾妻鏡中より重要な事のみ拾ひおき、名目抄の臺帳にしたものである。例へば、

第四十一、

碗飯初十 進物役人上同 御劔前右馬權頭上同
 若君御前初同 御行始上同

(拾ひ上げた分には——印をつく)
 7、武家名目抄考證見出

(一冊)

旗幟部

幡 倭名抄○日本紀○續日本紀○風土記 幡幢 下學集

霞旗 日本紀○釋日本紀

矛戟部

矛 倭名抄○日本紀○古事記○舊事記○令義解○古語拾遺

天瓊矛 日本紀・神皇正統記○舊事本紀

天沼矛 古事記

の如き體裁のものである。

8、武家名目抄稿

卷三、十三、廿一あるのみ欠本である。

9、東遷基業見出

同じ體裁にて一冊例へば、

卷第一

鎮守府將軍	補佐	氏族	オー	城主	將軍	墓目
						ウニ

——印を附したのは、拾ひ上げたのである。

10、古今著聞集目安

(一冊)

神祇第一

天地開闢神祇祭祀事

内侍所鏡事

北野宰相安樂守塔婆建立聖廟訖宣事業.....

11、史料目錄

後一條天皇事記の分である、全本でない。

12、温古堂藏書伊呂波分稿

これも欠本である。

13、書目抄出

上下合綴

本の解題にして分類精細、なか／＼丁寧にものしたものである。

14、御書拜觀抄觀書略

全四冊、中、一冊だけ(殘三冊は忠韶のもとにある)

これは重野博士の注意にて、孫忠韶のものしたものである。例せば、

○三代實錄

五十卷廿五本

第五十の卷末

奉納

大成殿文庫三代實錄五十卷行世印本文字訛謬傳寫錯脫今以中原家藏本參考群書以補以正新寫之其疑者細書鼇頭以爲將來之左券(參考書目をかゝげ且印などもあ

○弊帚錄

一冊

栗山潜峯遺稿

卷首に前田の序あり、享保辛卯九月平安前田時棟書于備之中州松山官舎云々跋文

に潜峯先生の小傳を記載す(水府の人徳澤藤咲正方書)

目次 賦、序、記、議、辨、說等を一々かゝぐ。

○春秋左傳

二十七卷

韓本

○泰西農學

二冊

(英國農用離質化學家ゾーマス、レ、フレッチュル氏撰、千八百六十七年刊行
緒方中助教儀一譯)

○禁裏政要

○軍神問答

一冊

○甲冑錄

二卷

○三體詩注

明應板(一のみありて二三なし)

○標題音注朝鮮史略

十二卷

○東海談平維章

中程より左の如く分類し、解題してある。

天文附歲時、算法

地理紀行

儒家

農事附物産

工藝附宮室

音樂

兵法

器財

醫書

物語

15、續群書類從解題

(一冊)

一例をあげれば、

矢代記

續類從六百七十一の内

この書は圖的の射儀に矢代としての向ひ矢を振事あり、其振方の心得、且
的并矢の置様をあまた記せり。

兵具雜記

續類從七百五

この書卷首に兵具雜記并幕星咒と題して目六あり。

一、鉢卷

一、梨打烏帽子(引立烏帽子折るばし)

一、甲之後

一、袖注

一、笠注

一、鎧直垂仕立

一、幕

一、幔幕

一、扇

一、團子

一、太刀刀寸尺

右毎條悉く圖を出してさとしたるものなり、作者年歷未考。

(松井氏の談に群書類從編纂日誌といふものがある、これは先年内藤恥叟家
にて澁澤男爵にゆづる)

▲文部省視學官槇山榮次氏の談

教育といふ立場から塙檢校の生涯を観察すると、種々面白い考へが胸に浮んで
来る、今其思付いたまゝのことを茲に述べて見やうと思ふ。

塙檢校は僅に五歳の時、全くの盲人と成つたにも拘らず、古今稀なる大學者と成
るに至つたのは、實に珍らしき現象である、是は勿論天與の材幹が土臺と成て居る
とは云ひながら、降りかゝつて來た困難不幸と戰つて、尋常人のこらへ得ざる所を
こらへ通した堅忍不拔の志は、實に其主なる原因をなしてをるので、學校に於け
る修身教授に對し、好個の資料を供するのである。

「十九世紀に於て大に驚嘆すべきものは、ナポレオンとヘレン・ケルラー女史である」といふは、マーク・ツヴェーインの揚言した所であるが、ケルラー女史の啞者で聾者で盲者で、然かも高等の教育を受け得たのは、確に天下の偉觀である、然しながらケルラーは完全なる學校で、十分なる指導の下に良好なる教育を受け、それで以て目明きの學者にも匹敵すべきえら者と成たのである、之に反して塙檢校は不幸の境遇に人と成り、兩富檢校の懇切なる指導を受けたとは云ひながら、當時のことであるから盲者の教育に對しては勿論、普通の人の教育に對してすら固より何等の研究も無かつたのである、それであるから檢校は殆ど全く自家の努力、即ち自己教育に依てあれほどの大家に成つたのである、即ち目明きの學者に匹敵すると云ふ程度を飛び超して、目明きの學者を指導すべき大學者と成つたのである、又嘗に一世の思想を支配すべき學者と成つたばかりではなく、永く後世に傳へらるべき大家と成つたのである、盲啞聾の三を兼ねながら、あれ程に發達したケルラー女史を驚嘆すると同様に、幼年よりの盲者であつて艱難困苦に堪へながら、あれ程の大家に成つた檢校の生涯にも亦驚嘆せざるを得ない、マーク・ツヴェーインをして塙檢校の傳記

を知らしめてあつたならば、ナポレオンやケルラーと同様に十九世紀に於ける驚嘆すべきものの一として檢校をも挙げたであらうと思はれる、ケルラーに就ての記述は、盲啞教育法のどれ位まで効果があるかと云ふことを示してゐるが、塙檢校に就ての記述は、自己教育のどの位まで効果があるかといふことを示してゐる。

視覚が智識の教育に重要な基礎と成ると云ふことは、固より疑を容れないことであるが、然しながら今の教育者が多く爲してゐるやうに、何も彼も視覚をたよりにするといふことは、必ずしも正當なる方法であるとは稱し難い、近頃は視覚ばかりでなく、聴覚ばかりでなく、觸覺筋覺も亦智識の教育に重要な働をなすと云ふことが主張せらるゝやうに成て來て、視覚萬能主義が追々と非認せらるゝの傾向があるやうに思はれる、塙檢校の傳記を讀んで見ると、心意の發達に對する視覚の價值と云ふものは、必ずしも從來考へられたるほど、大なるものであるまいと云ふ疑が生じて來る、視覚がなくてあれほどのえらい大家と成ることが出来るものなら、視覚にばかり學問知識の專賣權を與ふるといふことの正當でないことが分る、勿論異常の人物の生活を以て尋常普通の人の生活を律することは出来ないが、

然し心意の法則には別に違ひがないのであるから、之を以て心意發達の研究に對する參考とするには差支がない。

盲目の檢校をしてあの通のえらい大家と成らしめたのは其耳であらうか、換言すれば其聴覺が異常なためであらうか、傳記が示してをる通、檢校の耳は非常に勝れた耳であるとは稱することが出来ない、三年間音曲を習つたけれども少しの進歩をすら顯はさない、調子でさへ合はすことが出来なかつたと云ふほどである、是には勿論檢校の志が音曲に冷淡であつたと云ふことも原因したのであらうが、生來の耳が音樂的に出來てをらないといふことも確かに其原因をなしてをる、然るに此無器用なる耳を智識の入り口として、あのやうなえらい學者と成つたのは、實に注目すべき點である、覺官は知識の門であるから其大切であることは固より云ふまでもないことであるが、然し今の教育は此覺官に對して門番以上の價值を付してをるではあるまいか、若しさうであるとすれば、塙檢校の傳記の如きは、左様な考へに對して一の警戒と成るであらうと思ふ。

盲啞教育の必要なることは、今更云ふまでもないことであるが、今日の有様では

猶微々たるものであると云はねばならぬ、是には種々の原因もあらうが世人が盲啞教育を以て、單に盲者啞者に對する慈善的の事業に過ぎないと見做してをることも、其一因と成てをるだらうと思ふ、盲啞教育が決してそれだけの意味のものでないと云ふことは、塙檢校の傳記が之を明示してをり、ケルラー女子の生活は之を證明してをる、盲者啞者の中にも箇様な人物があるとすれば、其天才に發揚の機會を與へないで、空しく埋没せしむるといふことは、社會國家のためでない、縱し檢校やケルラーのやうなえら者が容易に出ないにせよ、兎も角盲啞者の中から社會の役に立つ人間を作り得ることは明かなる事實である、それであるから盲啞教育は世の不幸者に對する慈善的の事業であるばかりでなく、社會國家のために有益なる人物を作り上げる教育であるといふことを忘れてはならぬ。

以上は塙檢校の傳記を讀んで我輩の念頭に浮びたる事柄であるが、此通り教育上より見て深き意味を持つてをる塙檢校の傳記を其出生地たる埼玉縣の教育會に於て編纂せられるのは、實に其會に適應したる美舉である。

「善を行ふ力を得るまで終つべし」といふは吾人の同
 する能はざる所なり。人の善事を行ふは決して財産
 地位に依るべきものにあらす、何人にとて今日直ち
 に善を行ふ力を有するか、然らずば之が準備を爲す
 の力を有せざるもの無ければなり。

サー、アーサー、ヘルプス

徳育資料
 第壹編
 埤檢校詳傳終

明治四十一年十月二十日印刷
 明治四十一年十月廿五日發行

徳育資料 第一編埤檢校詳傳
 正價金壹圓五十錢

編纂者 發行兼者 埼玉縣教育會

右代表者

長谷川正徳

埼玉縣北足立郡浦和町百二番地

印刷者 石田道三郎

東京市京橋區本港町一番地

印刷所 中央印刷所

東京市京橋區本港町一番地



發行所

埼玉縣廳内

埼玉縣教育會事務所

資料選

第五編 資料

埼玉縣教育會事務報告

昭和五十四年十二月一日発行

中央印刷所

中央印刷所

正四張三張

谷川五郎

谷川五郎

埼玉縣教育會

昭和四十一年十月廿五日發行

五冊分装四五十冊

埼玉縣教育會事務報告

德育資料
第一編 埼檢校詳伝 (埼玉県立図書館複刻叢書)

昭和五十四年十二月二十日印刷
昭和五十四年十二月一日発行

編者 埼玉県教育会

発行者 埼玉県立浦和図書館長
石川正明

発行所 埼玉県立浦和図書館
浦和市高砂三一一二二
電話 〇四八八―二九一二八二二

印刷 望月印刷株式会社 製本 大宮製本

書庫

埼玉県立図書館



3 10 125 91

